
メダロット2 ～クワガタversion～

鞍馬山のカブトムシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メダロット2 〜クワガタversion〜

【Nコード】

N5680V

【作者名】

鞍馬山のカブトムシ

【あらすじ】

僕は天領イッキ、小学三年生。

一学期が始まって間もないある日、ママにレトルトカレーを買ってくるよう一万円を手渡されて、コンビニに行くと、ヒカル兄ちゃんが叱られていた。僕はヒカル兄ちゃんの横、インスタント食品のコーナーを人差し指で指した。すると、何を勘違いしたのかヒカル兄ちゃんは…。

ひよんな勘違いから、メダロッターとなった少年イッキとメダロットたちの笑いと涙(?)と友情の物語、ここに始動！

「メダロットとは？」（前書き）

概ねカブトバージョンと展開は同じですが、入手メダル・パーツ、一部のストーリー展開が異なります。

【メダロットとは？】

【メダロットとは？】

2001年度に発売されてから、2022年度まで広く世界の市場を席卷する日本独自の完全オリジナルロボット技術の最高峰、それがメダロット。

メダロットはコンピューターの頭脳ではなく、「メダル」を頭脳として動く、これまでのロボット学の常識を打ち破ったロボット。

メダルで動くロボット、だから略して「メダロット」

メダロットは「ティンペット」と呼ばれる骨組みをベースとして、様々なパーツを組み合わせるにより、無限の力を引き出すことができる。

メダロットの利用範囲は子供の遊び相手に止まらず、医療、果ては軍事利用にまでメダロットは普及している。

また、一部「レアメダル」という物があり、現在メダロット社（株）から発売されているメダルの殆どは、この幾枚かの「レアメダル」をコピーして製造されている。と、インターネットではこのような情報が流れている。

ブローグ きっかけは勘違い

キーン、コーン、カーン、コーン！

おみくじまち

御神籤町ギンジョウ小学校始業式の終了を告げるチャイムが鳴る。形式ばった校長先生の長い挨拶に、生徒一同はやや疲労気味。

三年生の列にいるちゃんまげ頭の少年も、周りの生徒と同じく校長の挨拶が終わったことに、ほっと胸を撫で下ろしていた。

僕は天領イッキ、小学三年生。歳は九歳。自分でいうのも何だけど、チョンマゲ頭を除いて、これといった特徴が無い。更にメダロットを持ってないという点が、僕の存在の薄さに拍車をかけている。まあ、それというもの…。

イッキ少年の自己紹介はまだまだ続きそうなので、ここで打ち切る。それに、自己紹介は最初の一行部分だけであり、後半はメダロットに対する願望と、メダロットを持ってない愚痴と決まっているから。

教室で暑苦しいオトコヤマ先生のホームルームも済むと、イッキはいつも通り靴箱に向かい、下履きから上履きに履き替えて、帰宅しようとしたら、

「イッキ！」

と、元気一杯な女の子がイッキの名前を高々と叫んだ。

イッキは声の主のほうを振り向くと、パシャ！という音と共に眩しい閃光が目を襲ったので、イッキは立ちくらんだ。

「何するんだよ、アリカ」

イッキは閃光を放った少女に文句を言った。イッキにそう文句を言われても、アリカと呼ばれた少女は悪びれる装い全く見せず、ただ、ニコニコと屈託ない笑みを浮かべている。

肩辺りでボーイッシュに切り揃えた茶色がかった髪、ぱつちりくりくりとした二重の瞼に、意外にも整った目鼻立ち。少女は純白のワンピースやドレスなどがとても似合いそうだが、白シャツの上に着込む機能重視の紫のオーバーオールと、屈託ない笑みの裏で相手を抜け目なく観察しているような目が、無言で周囲に少女が「女の子らしい」服装を拒んでいるかのような印象を与える。

アリカは見せつけるように、イツキの眼前にカメラを突き出したので、イツキは思わず顔だけ一歩退いた。

「イツキ！ねえ、これ見て！貯めた小遣いで変えたのよ」

この子はアリカ、僕の幼馴染。六歳の頃、父親にカメラを貸してもらい、撮った写真を両親に褒められたことがきっかけで、ジャーナリストを志すようになった。初めはジャーナリストという響きがかっこいいから憧れていただけのようだったが、去年、偶然にもスリ師の犯行の瞬間を撮るといふ、正に決定的なジャーナリズムな場面を撮ったことにより、単なる憧れから、本格的にジャーナリストを目指すようになった。

男っぽく姉御肌のアリカ、そのアリカにイツキはよく引つ張り回される。

「何を変えたんだよ？」

「んもう！わかんないの？ほら、レンズよ、レ・ン・ズ！」

「レンズが変わって、どうしたっていうの？」

「はあー。あんたねえ、メダロット以外のこともちよつとは興味持ちなさいよ。前のレンズは古くて、写りに何かしら不調があったけど、今度のは違うわよ。望遠・広角の二種類対応、微妙な光量調節も可能で、状況に応じて撮影が可能。まあ、瞬間的なところを撮るのが難しいけど、そこはジャーナリストの感と腕でカバーするわ」

「つまり、何が言いたいわけ？」

「だから！バージョンアップした私のニューカメラ被写体第一号として、あんたを撮ってあげたのよ。ちよつと嬉しいとか思わない？」

そう言われても、素直に喜べない。不意打ちな状況で撮られたの

で、間の抜けたポーズに顔が写っていることが容易に想像できるからだ。

「じゃ、これで…」

この適当にあしらう感じの言葉が良くなかった。背後のアリカが不快のオーラを発していることを感じたイツキは、まるで地雷原を歩くかのようにそそくさと学校から出た。

イツキが去った後、アリカはぼやいた。

「…せっかく、記念として撮ってあげたのに…」

イツキの家は、ベッドタウンである御神籤町にはよくある二階建ての家に住んでいる。周囲の家と異なる点は、屋根が赤く塗られているぐらい。

イツキは帰宅すると、早速、母親のチドリから、今晚のお献立レトルトカレーを買ってくるよう言いつけられた。ママの手には、はたきが握られていた。

「ママ。僕、今帰ったばかりなんだけど」

イツキは両親のことをママ、パパと呼ぶ。

「そんなこと言わずに行ってきたてちょうだい。私はお掃除で忙しいの。ちようどお金も崩したいところだったし。今回は大サービスとして、お釣りの二百円をあげるから」

イツキママことチドリは、髪型からして何となくアリカに似ている。だが、アリカと違ってこちらは女性を意識しており、髪の毛も緩やかにウェーブがかかっている。

イツキママはご近所でも美人な良妻として評判である。大概の子供は親が褒められるのを聞いても、「何で、あんなおばさんやおじさんが褒められるの？」と思うが、いざ、自分の親の良い噂を聞くと、やはり嬉しいものである。

帰ったばかりで面倒臭いが、二百円の餌に釣られて、イツキはママの一万円を半分に折って短パンのポケットに突っ込むと、近所の

コンビニへと出かけた。

歩いて十分程度のところ、そこにセブントウエルブのコンビニがある。因みにメダロットは大型デパートばかりではなく、イッキが産まれる少し前から、コンビニでも売られるようになった。

普通、コンビニといえば、入店したら店員が笑顔で「いらっしゃいませ」と挨拶するものだが、イッキが入店すると、挨拶ではなく怒号が叫ばれていた。

「バツカもーん！給料ドロボー！間抜け！消費税三十パーセント人間！」

店長の口から叫ばれる大量のお叱りの罵声が、若い店員を襲う。若い店員はロン毛で、額のところで髪を大きく左右に分けている。

店長にこっぴどく叱られている彼の名は、アガタ・ヒカル、大学生。彼はどうかやらあまり真面目に勤務するほうではないらしい。彼のシフトは週三日分のようなのだが、三日に最低でも一度は店長から厳しくお小言をもらっている様子を目撃される。

店長は温厚な人柄だが、ヒカル店員の仕事ぶりには目に余るものがあるようだ。

今日は特に激しい。

いつもなら、店長は耳打ちでお小言を言うのだが、客が入っても気にせず怒号を叫ぶのは珍しいことだ。カウンターの店員も手をこまねいている。

「誰が！だ・れ・が！こんな高いおニューパーツを仕入れると言った！これの旧式型番を一体注文しろと、三度も言ったぞ」

「店長、それも三度め」

ああ、どうやらヒカル青年は雰囲気や状況を読み取れないタイプの人間のようなのだ。自らの手で油を注いだヒカル青年、店長のお説教もいつもより長く、イッキも呆然とそれを見つめるだけ。

「一か月の間、お前の時給は九百五十円から八百五十円だ！それと、何としてもこれを片付けろよ」

反省しているように見えて、内心どこ吹く風だったヒカル青年だが、最期の台詞はズシンときたようだ。店長はそれに気づいたのか、鼻を鳴らすと、レジのお姉さんに「済まんが、今日は君とあいつで頑張ってくれ」と言い残して、店から出た。

横目でちらとイツキを見て、片手できまり悪げに頭を掻くヒカル。彼の右手には、KWG型ヘッドシザーズのパーツ一式が入った箱が抱えられていた。イツキは週刊メダロットを毎週欠かさず見ているので、メダロットの知識だけなら、誰にも負けないつもりだ。

ヒカルが持つているヘッドシザーズは、現在市場で出回っているヘッドシザーズとは異なる。旧型のヘッドシザーズの配色は主に白色なのに対し、新型のヘッドシザーズは薄紫の配色が占める。旧型と異なるのは配色だけでなく、装甲全般に両腕の攻撃力などが改良された。

シアンドッグに並ぶ、メダロットの最有力候補の商品にこのヘッドシザーズが名を連ねている。

「まいったな……。試しにあいつに着けてやろうと思ったのに……」
誤魔化すように頭を掻くをヒカルをよそに、イツキはヒカルの横、インスタント食品コーナーの棚を指した。

「あの、その……」

もしも、イツキがこのとき叱られたばかりのヒカルを全く気遣うことなく「そのレトルトカレーを買いたいです」とでも言えば、イツキは無事にカレーを手に入れることができたはず。

ヒカルはイツキ少年を見た。イツキ少年が指指す方向は自分の右手に抱えられている物、片手には、一万円札が一枚握られていた。ヒカルは目を輝かせて、イツキの元に近寄った。

「はいはい、わかりました！これですね、これ！いやー、これに目を付けるとは、以前から思っていたけど、君は本当に目の付け所がいいね」

目の付け所がいいねと言われたが、メダロットはまだ一度も購入したことは無い。

「いや、だから、その…」

「分かっている、分かっている。初めからこんな高いパーツを扱えるかどうか不安なんだろう？大丈夫、人間その気になれば、何でもできる」

「えーとですね…僕は…」

「よし、今なら出血大サービスとして、ティンペットもお付けしちゃおう！今、こんなイケメンメダロットを近所に持っているのは君だけになる。きつと、目立つよー？」

断ることもできた。しかし、今この機会を逃したら、意志の弱い僕ではしばらくどころか一生をメダロットを持てそうに無い。

何より、ヘッドシザースは男の子の憧れであるクワガタムシをモチーフとしたメダロット。イッキはクワガタムシが大好きであり、一号機目は絶対にヘッドシザースと決めていた。

そして、おまけにティンペットも付けられると聞いて、イッキの心の善が悪に押されてしまった。

ヒカル青年の押しにやられた面もあるが、一番の原因はメダロットに対する欲求を抑えられなかった自分の心。

コンビニから出たイッキ少年の腕には、レトルトカレーの代わりに新型ヘッドシザースのパーツ一式とティンペットが抱えられていた。

コンビニを出る前は心は天にも昇らんばかりの気持ちだったが、コンビニを出た途端、その気持ちは雲散霧消した。

後には、やってしまったという後悔ばかり。ママにどうやって言い訳しよう。今更、「やっぱり要らないです」とは言い辛い。それ以上に、抱えている物を手放したくない気持ちがまさっていた。

家に帰りたくないと思ったが、帰る場所はそこしかないの、やはり自宅に帰るしかない。

溜め息をつくと、何となくヘッドシザースのパーツをじっと眺めた。まるで、それが起動して、ママから叱られる自分をかばってくれるように期待するような目付き。

ある程度歩き、溜め息をつき、パーツを眺める。そんな動作をすれば帰る時間も遅くなり、ママの堪忍袋の尾をますます切らせてしまふことを、イッキは気付いているのだろうか。

1・私の名前：

暗い、ここはどこだ？私は誰なのだ？

たまに目が覚めると、こんなことを自問自答した。目が覚めると言っても、私には目を含む五感機能など存在しないが…。

ここは確かに暗いが、居心地は悪く無い。

ある日、動きを感じた。ざくざく、ざくざく、土を掘る音。彼には五感機能どころか体すら無いので何も感じないが、何かが起きる兆しを感じていた。

ざく、かつ！

スコップが金属物に当たったので、掘る手つきが慎重になる。両手の刷毛とスコップで少しずつ土をどかし、まだ、僅かに泥を被るそれが無事なことを喜ぶ。

掘った者の手の中には、金色の六角形状のコインのような物がある。コインの表には、何らかの幼虫と思しきものが描かれていた。

やれやれ、あの人の気紛れも困ったものだ。こんな貴重な物を、まだ年端もいかぬ子供たちに託すとは。

あの人は、あの子供に何かを感じると言った。それを突っ込むとはぐらかすような笑みで「何かは何かじゃ！」と答えた。この返答には呆れてしまったが、どこか憎めない。

それはひとえに、私があの人を尊敬しているからだろっ。

メダロットを愛し、メダロットに並みならぬ情熱を注ぐあの人。知的で大胆、それでいて、決して驕り高ぶる態度は一切見せず、ときに今日のような突拍子も無いことを思い付き、子供のようににはしゃぐあの人。そして、火急のときには何をすべきか行動できるあの人。

そんな人だからこそ、私は慕っている。

今から約三十分後にここを通るとある男性に、二つの物を渡す手はずになっている。

あの人は少年にこれらの品を託す理由をもう一つ付け加えた、「可能性」と。

可能性か。果たして、彼らが一体どのような行動見せてくれるのか。私も見届けさせてもらおう。

家に帰ると言い訳する暇もなく、イッキは母親のチドリに叱られて、しばらく二階の自室で反省するよう言い渡された。

部屋に入ると、イッキを慰めるようにフォックステリアの愛犬「ソルティ」が「くーん」と甘えるように鳴いて、イッキの足元にすり寄ってきた。

「慰めてくれるのかい？ソルティ」

足元にすり寄るソルティの頭を撫でると、ソルティは尻尾を大きくふりふりした。

イッキは自室に入ったときあることに気がついた。メダロットの頭脳であるメダル、それと、メダロットを操作するメダロットが無いことに。

とりあえず組み立ててみたが、肝心のメダルが無いので動くわけも無い。母親にきつく叱られた後でのこの事実、イッキは今日一番の深い嘆きの溜め息を吐いた。

二時間の間、ソルティをかまうなり漫画を見るなりして、時間を潰した。

「ただいまー！」

玄関から間延びした男性の声、パパだ。

イッキのパパの名前はジョウゾウ、歳は今年で三六歳。だが、薄く無精髭をはやした顔と黒縁丸眼鏡のせいで、実年齢以上に見られ

ることがよくある。つい最近では、五十歳と間違われたほどだ。

十分後、パパが部屋に入ってきた。

「イツキ、母さんから話は聞いたぞ」

イツキはぎくりと背筋を伸ばした。叱られる。息子の気持ちを察したのか、ジヨウゾウはイツキの気を落ち着かせるために、優しく微笑んだ。

「まあ、そう固くなるな。パパだって、子供のときは一回や二回ぐらい、お使いのお金を使ったことがある。しかし、今回は少々規模がでかかったな」

少々どころではない。百円や二百円ならいざ知らず、一万円ともなれば、家計にダメージを与える金額だと分かる。

「反省したか？」

「うん…二重の意味でね」

イツキは今日起きたことを簡潔にパパに話した。

「はっはっ！そうか、あの青年か。それにしても、興奮と後悔のあまり、肝心な物を二つも忘れるとは間抜けな話だな」

がつくりと肩を落とすイツキ。ジヨウゾウは、元気出せとぼんぼんと肩を叩き、息子の目を覗いた。

「反省したか？」

「うん」

「もうしないか？」

「うん、こんな馬鹿なことは二度としないよ」

「じゃあ、テストで必ず良い点取ってくるか？」

最後の問いに、それはちよつとイツキは首を捻った。

「最後のは冗談だ。というわけで、お前にスペシャルビッグボーナスをやるう」

父親のスペシャルビックボーナスとやらを見せつけられた瞬間、イツキはあんぐりと口を開けて、絶句した。パパの右手にはメダル、左手にはメダロッチがあるからだ。

「ば…パパ、これは!？」

「いやー、実はな。いつも通りの道を歩いていると、突然、空から笑い声がしてな。上を見上げたが、特に怪しい物は見当たらない。で、顔を下げると、道路に光る物があって近づいて見ると、この二つがあった。恐る恐る拾ったら、また、笑い声が聞こえた。それでな、『な、何だ？強盗か？だとしたら、盗む相手を間違えているぞ』と言うと、その正体不明の奴は『ご安心なされ、今宵はご子息に贈り物を届けに参った。プレゼントキャンペーンで、ご子息はヘッドシザース購入者千人目となり、その祝いとして弊社からプレゼントを持って馳せ参じ参りました。好きな方法でその二つの品をご子息にお渡しなされ。あと、これからもメダロット社の製品購入をよろしくと伝えてくだされ』と。そうして、正体不明の奴は姿を見せずに消えた」

正直、パパが嘘をついているのではないかと疑った。しかし、パパが持っているメダルは間違いなくクワガタメダル。カブトメダルとは違い、クワガタメダルは幼虫が左のほうを向いている。

パパが息子のプレゼントとして、イッキがメダロットをする上で不足していたメダルとメダロットの両方を買ってきた。更にそのメダルは、ヘッドシザースと相性ばっちりのクワガタメダル。偶然にしては出来すぎている。

因みにメダロットとは、メダロットに指示を送る時計のような形をした機械のことである。

こんなことを知っている人物は一人しか思い浮かばないが、その考えは捨てた。その人物の普段の行動や姿勢を考えると、こんなことをするとは到底考えられない。

後でママにも聞いてみたが、ママは今日、パパに一度たりとも電話はしなかったと答えた。

「怪しいとは思ったが、もう疲れているし、一旦、帰宅してから確認しようと思ったら、ママからお前がメダロットを購入をしたことを聞いてな。大丈夫だろうという結論に至った。というわけだ、イッキ。ほら、試しにメダルを装着してみなさい」

イッキはパパからメダルとメダロッチを受け取った。軽いはずなのに、ずしりとした重みが伝わってくる。

深呼吸を一回、二回。ばくばく、ばくばく、胸の鼓動が抑えられない。

ついにきた…。ついにきたんだ。僕が、メダロッターになる日ってきたんだ。

まずはメダロッチを腕に装着し、次にヘッドシザースの背後に回る。メダル装着部を押さえるピンを外し、いざ、メダルを窪みに装着。メダルは装着すると同時に、自動的に外れないよう固定された。イッキはじつとヘッドシザースを見守り、パパも何故か緊張な面持ち、ソルティは呑気にあくび。

三十秒後。メダロッチから、全身稼働可能。エネルギー充填マックス。メダロッチを始動しますか？というアナウンスが流れた。メダロッチの画像には、「YES/NO」の表示がある。

イッキは迷わず「YES」を押した。また因みに、押さずとも、声で「YES」と言っても動く。

ぷしゅー。僅かな煙が排出され、ヘッドシザースの目に光りが宿る。

眩しい！眩しい光が私を襲う！

それはほんの一瞬のこと。すぐに目は光に慣れた。手を動かす。

手…？手など無かったはずなのに、何故、手を動かせるのだろう。しかし、現に私は手…。いや、手だけでなく、頭や足も動かせる。

「やつ…たあぁー！！！！」

誰かが叫ぶ。私はその叫びが、歓喜のあまりのものと理解した。

「ここは…どこだ？」

ヘッドシザースの声は、凜と涼しげ。それでいて、どこか芯の強さを感じさせた。少年はヘッドシザースが声を発したことに驚いた

が、本人もそのことに驚いていた。

「ここ？ここは僕の家」

少年がそう言っと、すかさず隣の大きい者が、

「イツキ、お前が建てたわけじゃないだろ。正確には、パパとママとイツキとソルティの家だ」

ワン！と、四つん這いに寝そべる生物が同意するように吠えた。

大きい者は、今度は私を見て申した。

「あと、今日から君が住まう家でもある」

私は無言で頷いた。

「ところで、イツキ。名前は決めているのか？それとも、機体名称で呼ぶのか？」

「名前はもう決めてあるんだ。伝説のメダロットと呼ばれる人の愛機の名前」

私より少しばかり大きな小さい者は、私を見て、満面の笑みでこう呼ぶ。

「ロクシヨウ！今日からお前の名前は、ロクシヨウだ。よろしくな！ロクシヨウ！」

……ロクシヨウ……

私の現状理解が追いついてないせいかもしれないが、「ロクシヨウ」という呼び名は妙にしっくりする。

「……ロクシヨウ……それが、私の名前^{わたし}……」

少年は私に左手を差し出した。

三つ、はつきりと分かることがある。私はこの「体」にとっても馴染んでいること。二つ目は、次々と情報が流れて、私は瞬間的に一定の物事を理解できることを「理解」したこと。そして、三つ目は、私はこの少年とこれから「絆」を結んでいくことになること。

私は少年が差し出した手を握り返した。

2・ファーストロボトル

起動してから二日、ロクシヨウはそれなりに家族の一員として馴染み始めていた。

念願のメダロットを手に入れてご満悦のイツキ君。ただ、一つ不満を述べれば、ロクシヨウは少々大人しすぎるような気がする。あまりにも暑すぎる性格はどうかと思うが、できれば、もうちょっとくだけたところが欲しかった。

まだ、たった二日しか経ってない。そんなすぐに、全く見も知らぬ者たちと暮らす環境に馴染める者はそういない。

時間が経てば、ヘッドシザースことロクシヨウの別の一面が垣間見られるはず。

今日、イツキはロクシヨウを連れて、毎週足繁く通っているメダロット研究所に行く。メダロット研究所所長、アキハバラ・アトムことメダロット博士に自分のメダロットをお披露目するためだ。

今日、イツキは私をとあるところに連れて行くと言った。

とあるところとは何ですか？と聞いても、イツキは答えをはぐらかした。着いてからのお楽しみというわけか。

道中、イツキは若い女性と出会い、親しげに話していた。傍目から見ても、イツキの友人だということは理解できる。女性の横には、女学生のような姿をしたメダロットが付き従っていた。自分以外のメダロットは初めて見た。私の視線に気付いたのか、彼女は私を見てお辞儀をしたので、私もお辞儀を返した。

「あつ！イツキもメダロットを買ったんだ」

少女は初めて私の存在に気が付いた。イツキは鼻高々に、
「うん、そう。名前はロクシヨウっていうんだ。かっこいいだろ」

「ロクシヨウ！？あんだ、大胆な名前を付けるわね」

少女は私を見て微笑み、自らと、自らが所持するメダロットの名を告げた。

「私は甘酒アリカ、ジャーナリスト志望の小学三年生。で、こっちはSLR型メダロット・セーラーマルチことプラス」

「よろしくね、ロクシヨウさん」

「こちらこそ、イツキのご友人とは知らずに、挨拶を忘れていたことを申し訳ございません。では、改めて自己紹介を。天領家に居候の身のロクシヨウです」

へえーと呟いて、アリカという少女は私とイツキを見比べた。

「随分礼儀正しいわね。イツキ、あなたにや相応しくないわね」

「な、何だよ。人がどういうメダロットを持とうが、人の自由だろうが」

「それもそうね。ところであんだ？メダロット研究所に行くんでしょ？」

イツキは慌ててアリカ少女の口を塞ごうとしたが、もう遅い。

「メダロット研究所？」と私は呟いた。

アリカ少女は口を塞ごうとしたイツキの手を払うと、私にメダロット研究所の説明をしてくれた。

簡潔にまとめれば、メダロット研究所はメダロットの生みの親である「メダロット博士」と呼ばれる人がいるとのこと。イツキ君が目的地の名を告げなかった訳は、メダロット研究所とメダロット博士なる人物を紹介したとき、私がどのような反応を見せるかという期待。そして、そのことを説明できる一種の優越感に浸れる自分。つまり、これら二つの目的があるから、イツキ君は私に目的地を告げなかったのだらうと予測する。

当のイツキは舌打ちしていた。

「ちえっ。ロクシヨウを驚かそうと思ったのに」

「ねえ、イツキ。私も付いて行つていいでしょ？博士から、何かネタになるような話が聞けるかもしれないし」

「別に、どっちでもいいんじゃない？」

こうして、メダロット研究所へ向かう道中の連れに、アリカ少女とプラスが加わった。

小高い丘の上に、メダロット研究所は建っていた。真っ白な六階建ての建物で、メダロット研究所と書かれた看板に、正門にある男性ティンペットと女性ティンペットの銅像以外には飾り気は見当たらず。別段、特徴の無い形のビルだった。

イツキたちが顔馴染みなのもあるが、メダロット研究所は一部の研究棟を除き、一般にも開放されている。

受付のコンパニオンガールをモチーフとしたCMP型メダロットのティンクルことキティちゃんが、四人を博士が居る個人研究室まで案内してくれた。

先だって、イツキが博士の研究室のインターホンを押した。

「はい、アキハバラ・アトムですが」

インターホンの向こうから、元気の良いおじいさんが話しかけてきた。

「こんにちわ、博士。天領イツキです。今日は友達も連れてきました。入っても構いませんか？」

「おお、イツキ君か。よろしい、友達と一緒に入りなさい」

個人研究室の扉が自動的に開いた。

メダロット界の権威でもあるメダロット博士の部屋。外見から考えるに、きつと、訳のわからない機械に、沢山のケーブルやら変な液体が入った瓶が所狭しに置かれていると思いきや、案外そうでもない。

博士の研究室は小ざっぱりとしており、立派な文机が二つにコンピュータが二台、研究用に置かれているメダロットが眠る三台のカプセルに、他は天井ほどの高さがある書棚が東西南北に一つずつ

配置されているだけ。大量の機械やらビーカーなどは見当たらない。何故、実際に博士の部屋を訪れたことが無い人がそういう想像をするかといえば、最初に述べた博士の外見にある。

常になんまりと笑っている口元、大きな黒いサングラスにつるぴかの頭頂部、後頭部周囲の髪をヤンキー風に逆立たせて、一見してマッドサイエンティストを彷彿させる。

でも、本当はメダロットに情熱を注ぐ、子供心を持ち合わせた優しい茶目っ気のあるおじいさんだ。

イツキ、アリカ、プラス、ロクシヨウと、順にメダロット博士と挨拶を交わした。

メダロット博士は早速ロクシヨウに目を付けた。

「イツキ君、今日わしのところへ来た目的はこれだな？」

「あの、迷惑でしたか？」

メダロット博士はにかつと、子供っぽく微笑んだ。

「迷惑どころが大歓迎じゃ。我が社の製品を持った子供の生の意見を聞けるチャンスが増えた」

この寛容深い性格とちよつとしたことをアイデアに結び付けるところが、博士を現在の地位に就けた

のかもしれない。もっとも、メダロット博士は地位とかには固執しない人だが。

「ところでヘッドシザース君、君の名前は？それとも、機体名称のままかね？」

いきなり話をふられてロクシヨウは戸惑ったが、すぐに落ち着きを取り戻すと、

「私はヘッドシザースことロクシヨウと申します。この名は、マスターであるイツキ少年から受け賜りました」

ロクシヨウはいつも以上に礼儀正しかった。どうやら、メダロット博士なる老人がただ者ではないことが分かり、彼なりに緊張して、少々しゃちほこばった挨拶をさせたようだ。

「がっはっはっは！こら、また随分躰がなっているな」

「うっん。ロクシヨウの奴、初めからこんな調子なんだ」

「一つ一つのメダルには、それぞれ個性がある。その個性と上手く付き合うことも、メダロッターに求められるものじゃぞ」

何度も聞いたアドバイスだが、イツキは真面目に「はい」と応えた。次に博士は、アリカとブラスを尋ねた。

「アリカ君、それと、ブラス君だったね」

「覚えていてくれてありがとうございます」とブラス。

博士は先んじてアリカの話題を喋った。

「目的は記事のネタだね。もしも、わしの条件を聞いてくれるなら、イツキ君たちと一緒にある物を見せてもよいぞ」

「条件って…まさか」

アリカは無い胸を両腕で抱いた。

「これこれ！わしが変態スケベ親父的な言動を話すような奴に見えるか？」

博士はまずそんなことを言う人ではないが、変態っぽさを感じる頭をしている。

「イツキ君、君はロボトルの経験はまだか？」

「はい」

「アリカ君、条件とはイツキ君とロボトルをすることじゃ」

この条件に、アリカとイツキの兩人は面食らった。ロボトルとは、ロボットバトルの略称である。イツキはためらいがちだが、アリカは乗り気になったようだ。目が、獲物を追い求める記者の目になった。

二人は肩を突き合わせて、怪しい笑みで密談した。

一分以内に密談は終了した。

「イツキ君、ロクシヨウ君、ブラス君、付いて来たまえ。今から、ロボトルテスト試験場へ行くぞ」

ロボットテスト試験場はメダロット研究所の地下にある、新開発されたメダロットの性能をテストする場所。

今、この場所に二体のメダロットがいる。

右はアリカの愛機、セーラーマルチのプラス。左はイツキの愛機、ヘッドシザースことロクショウ。

試験場は真四角の正方形の部屋で、直径は五十メートル、天井の高さ十メートル。周りは分厚い防弾ガラスに囲われていて、どの角度からも戦いの様子を眺められるように設計されている。

アリカは自信满满、対するイツキは自信無さげだ。イツキは今日が初めてのロボット。ロボットをすることは考えていたが、今ではなく、一週間ほど様子を見てからロボットするつもりだった。

とはいえ、後には引き下がれない。ここまで来たら、もうやってやれという気持ちになった。

それでも、緊張で体が震える。初ロボットがこんな整った設備、しかも、自分よりロボット歴一年先輩のアリカと戦おうなんて、夢にも思わなかった。

「イツキ君、そう固くなるな。勝っても負けてもこの試合ではパーツの取り合い無しだし、壊れたところはわしが責任持って治す。何よりも、今日は君の記念すべき初ロボット、悔いが無いよう全力でぶつかってみたまえ」

アキハバラが固くなったイツキを宥める。メダロット越しから、ロクショウもイツキに声をかけた。

「イツキ、緊張しているのは私も同じだ。博士と同じことを言ってしまうが、イツキ、今日は思考を捨ててがむしゃらになれ」

アリカがとつととおっぱじめるわよ、と叫ぶ。

固くなっているかもしれない。やれるだけのことをやるだけ。イツキは挑むように一歩前進した。

満足したように博士は頷くと、博士は試験場のマイクを握った。

「合意と見てよろしいか？」

「はい！」とイツキ。

「いつでもオツケーよ」とアリカ。

博士は一拍置いて、

「それでは、ロボトルファイター！」

ロクシヨウが切りかかるうとしたら、プラスはすかさず撃って攻撃の勢いを削ぐ。この動作を五回繰り返した。

両者、中々決めてとなる攻撃ができない。距離さえあれば、素早いロクシヨウにプラスの弾丸は当たらないが、接近戦タイプのロクシヨウでは遠距離攻撃ができない。セーラーマルチは若干、装甲が薄いので、ロクシヨウの必殺武器である左腕の「ピコペコハンマー」の一撃でも食らわしたら、ロクシヨウの勝ちだ。

初めはロクシヨウがやや有利に思えたが、徐々にプラスの弾丸がロクシヨウのボディを掠る。

セーラーマルチの頭部には、「索敵」という能力がある。「隠蔽」によって姿を消した敵を発見するときに使われるが、こうした攻撃が当たらない、当たりにくい状況にある敵に対し、特殊なレーダーとコンピューターが動作や角度を素早く計算し、機体の攻撃命中率を上昇させる能力が索敵。

華麗なステップで易々とマシンガンとライフルの攻撃を避けていたロクシヨウだが、今は避けるのに必死な状態。このままでは、いつ蜂の巣になるか知れたものではない。

作戦もなくそも無い。こうなれば、特攻あるのみ。

「ロクシヨウ！セーラーマルチの攻撃力はそんなに高くない。多少、弾丸を食らっても、突っ込んで左腕のハンマー攻撃で決めるんだ」「ラジャ、マスター！」

ロクシヨウはプラスに向かって突っ込む。弾丸を食らうが、セーラーマルチの攻撃力では、改良型ヘッドシザースの装甲を簡単には落とせない。

弾丸の雨を耐えて、必殺のハンマーの一撃。勝った。

「甘いわね」アリカが口端を釣り上げた。

空振りして、ロクシヨウの態勢は大きく崩れた。危ういところで攻撃を避けたブラスは、左腕のライフル攻撃・ショートショットを撃ち込んだ。

ぼがん！

鈍い音と共に、無防備な状態のロクシヨウの左腕が吹っ飛ぶ。

「私のほうがロボット歴は長いんだからね！その程度の戦法なんて通用しないわよ！ブラス、もう一発お見舞いしなさい」

自分が勝利したかのように、アリカはブラスにライフルを撃つよう指示を出す。

しかし、アリカはイツキの戦法に引つかかっていた。

ブラスがショートショットを撃つ直前、ロクシヨウは跳躍して弾丸を避けた。呆気にとられるブラスに、ロクシヨウは天井を蹴って右腕の「チャンバラソード」でブラスの胸部を貫いた。

ピン、と。ブラスの背中から装着したメダルが外れた。

「勝者、天領イツキ&ロクシヨウ！」

メダロット博士が高らかに勝利を少年と一機に告げる。

信じられないという表情のままアリカがイツキに近づき、自問のような口調でイツキに話しかけた。

「どうして？何で？」

「アリカは玄人、僕は素人、そこが狙い目だと思ったんだ。僕が素人丸出しの指示で、ロクシヨウに全力で攻撃しているように見せかけたら、アリカとブラスに隙ができるんじゃないかな？と、考えたんだ」

アリカは合点^{がてん}した。

ピコペコハンマーなど、格闘系メダロットは人間でいうところの必殺のストリートを放った後、対象に当たらずとも、攻撃による反動のため、一瞬、無防備な状態となる。

イツキはその危険を逆手に取り、全力に見せかけて、跳躍や左腕

で防御する余力を残しておいたのだ。

「あーあ。まさか、イツキに負けるとは…。でも、次は上手くないわよ」

「うん、分かっている。こんな戦法、初戦の相手ぐらいにしか通用しないよ」

アリカとイツキは、研究員さんたちに協力してもらって二機を試験場から運び出した。

アリカがプラスのメダルをメダロツチに装着して、申し訳無さそうに呟いた。

「プラス、ごめんね。私が気付かなかったばかりに、痛い目合わせちゃって」

「うっん、私も見抜けなかったしお相手よ。お疲れ、アリカちゃん」
謝るアリカを逆に、プラスがメダロツチ越しから労わった。

メダロツトは本体に装着せずとも、メダロツチに装着すれば意志疎通が可能である。因みに、現在市販されているメダロツチでは、最大三つのメダルを収容可能。

イツキもロクショウに一声かけた。

「ロクショウ、お疲れさま。左腕、痛くないか？」

「ピリリとした感覚はしたが、痛いとは感じなかった。ただ、自分の左腕が無くなる感覚をはっきりと感じるのは、良い気持ちとは言えなかった」

「痛覚があるなんて、メダロツトには損な話じゃぞ」

メダロツト博士が会話に割って入った。

「四人とも、ご苦労さまじゃった。素晴らしいファイトじゃったぞ。それでは約束通り、君たちに良い物をお見せしよう」

「博士！」と、イツキがメダロツト博士を呼び止めた。

「あの、ロクショウとプラスは？」

「案ずるな、イツキ君。この程度の損傷なら、目をつむっても修復できる」

「僕が言いたいのはそうじゃなくて…」

「行ってくるんだ、イツキ」とロクシヨウ。

「でも……」

「私はイツキの気遣う気持ちだけで十分だ。それに、この方は信用できる。だから、イツキは良い物とやらを見に行つてこい」

イツキはためらいがちに分かつたと言つた。

「決まりじゃな。おい、白玉くん。この子たちをあそこまで案内してくれんか」

すつくと、眼鏡をかけて、頭を七三に分けた長身痩軀で色白肌の男が立つた。

イツキは試験場から去る際、二度、三度振り返つて、ロクシヨウのこと見た。

「まだ未熟じゃが、良き相棒を持ったものじゃな」

ロクシヨウは博士に返事をしなかつた。恥ずかしいからだ。

白玉という研究員に案内されてきたのは、「アキハバラ・ナエ個人研究室」という表札が掲げられた部屋だつた。

「いいか、ナエさんの邪魔をするんじゃないぞ。絶対にだ！」

ドスの利いた声音で脅し文句を言つて、白玉は元来た道に戻つた。アキハバラ・ナエは、アキハバラ・アトムの子孫。年齢は十九歳だが、その歳にして、既にメダロット界の権威である。祖父であるアトムと違い、穏やかで、緩やかにカーブがかかった黒い長髪が魅力的な女性だ。子供であるイツキから見ても、ナエは美人だとわかる。

インターホンを押すと、「祖父から話は聞いております。イツキさん、アリカさん、どうぞ入ってください」と、大人びた女性の声。それでいて、まだ子供っぽさも残る声、そこがまた可愛い。イツキはもちろん、博士には馴れ馴れしい態度だつたアリカも、ナエに対してはかしこまった面で挨拶した。

たおやかに二重の瞳を細め、ナエは二人に品良く微笑み返した。初見のとき、イツキはナエがメダロット博士の孫娘とは到底信じられなかった。今もそうだが。

「さ、これが祖父があなたたちに見せると約束したものです」

ナエは、イツキとアリカに、カプセルに収納された四体のメダロットをそれぞれ紹介した。

一時間後、ロクショウ・プラスの修復が完了したと、博士からナエさんの研究室に連絡がきた。

その頃には、ちょうど三人交えての談笑も終わっていた。

博士とナエさんは正門で僕らを見送ってくれた。

イツキ、ロクショウ、アリカ、プラスの四人は、肩を並べて歩いた。

それにしても、二日間で僕の世界が大きく広がったように思えた。初のメダロット、初のロボット。そのロボットによって感じた、今までに無い高揚した気分、その後の反省。たったこれだけのことで、とにかく驚きと新しい発見の連続が続いて、それが楽しくてしょうがない。

どのくらい楽しいかって？家族皆で旅行や遊びに行ったとき何かとは比べ物にならないや。

発見といえば、ナエさんが紹介した「エレメンタルシリーズ」という四体の女性型メダロット。まだ、マスコミにも完全極秘なメダロットを見られるなんて。二度目だけど、ほんと、驚きの連続だよ。因みにアリカが博士と交わした約束とは。例のエレメンタルシリーズの発売発表日 cameたら、どこよりも早く、アリカの「甘酒新聞」に載せて公表していいとのことだった。

「うっふっふ。熟成した情報を見たとき、大衆が一体どのような反応を見せるか気になるわ」

僕とのロボットに負けて落ち込んでいたアリカもすっかり元気になって、来るべき特ダネをどう書くか思案していた。

まだ、始まったばかり。これから、数多の艱難辛苦があの子を襲うだろう。

大丈夫、彼には家族もいて、メダロットもいる。今すぐ無理だろうが、時が経てば、必ず何か成し遂げるはず、あの子は。

今回のわしの勘は当たりそうだ。仮に外れたら、そのときはそのときだ。

2・ファーストロボット（後書き）

戦闘結果がカブトバージョンとは異なります。

3・一人の日常（前書き）

閑話休題。メダロット「ロクショウ」メインの回、ゲームには無い完全オリジナル。

3・一人の日常

私という存在が起動してから、今日で一週間。

お母上は遠方まで買物、お父上はお仕事、主人であるイツキは小学校で勉学に励んでいる。

アリカ嬢とのロボット後、イツキと私は他三名の方と戦い、辛くも勝利を得ることができた。まだまだ、互いに成長段階。これから、絶え間ない精進を重ねるのみ。

今日の私は留守役。片付けに我が家の愛犬ソルティの餌やりも済まし、やることが無くなった私は読書をした。速読は可能だが、あえて一ページずつ読むことにしている。そうすることにより、物語上の人物の心理、本を書いた筆者の気持ちなどをゆっくりと推測することができるからだ。

残り十ページ、犯人の動機には疑問を抱かざるを得ないが、主役の補完的説明台詞を読んで、何となく納得した。

おかしな話だ。機械であるはずの私が、「何となく」などという曖昧模糊な言葉に納得するとは。

わん、わん！

ソルティが散歩をしてくれて催促する。私は母上から自宅の鍵を預かっている。

「ロクちゃん。ソルティを散歩するときだけは、外出してもいいわよ」

母上はこう言っていた。私は思案した。ニュースなどを見ても、今の世の中は物騒。いくらこの辺一帯の治安が安定しているとはいえ、万が一という場合もある。しかし、ソルティと散歩をして、一人で歩く世界とはどのような感じものかという知的好奇心も湧いてくる。

二分思案したのち、結局、私はソルティの催促に応じることにした。

時期的にそんなに暑くないので、家中の窓を閉めても熱気が籠もることはないだろう。

念には念を入れて、火元などもチェックした。問題無し。

最後はしっかりと施錠。ドアが閉まったかどうか確認すると、地面に打ち込まれた太い釘に巻かれた綱を解き、私はソルティと外の世界へ出かけた。

外へ出ると、始めは隣人であるアリカ少女の母親が話しかけてきた。

「あら、あなたはイツキ君のメダロットで、名前は確か…」

「ロクシヨウと申します」

「そう、確かそんな名前だったわね。犬のお散歩、よね。どう見ても」

「はい。イツキの母上からは留守を頼まれましたが、ソルティが散歩を催促したら、そのときに限り外出をしてもよろしい許可を貰いましたので」

「ロクちゃんってば、作法がなっているわね。うちのアリカも見習って欲しいわ」

「では、甘酒さん。私はこれにて」

ロクシヨウは近所からロクちゃんの愛称で通っている。チドリが家でもロクシヨウのことをロクちゃんと呼び、ご近所さんたちにロクシヨウのことを話するときもロクちゃんと言っているのです、この界限でロクシヨウのことをロクシヨウと呼ぶのはイツキ、イツキパパ、アリカ、プラスの四人しかいない。

親しみを込めての呼び名なので特に嫌とは思わないが、イツキと同じ小学生から「よっ！ロクちゃん」と小馬鹿にされたときは、さすがに溜め息をついてしまった。

呼び名を気に病んでも仕方ない。私はソルティを連れての外界を

堪能することに気持ちを切り替えた。

国道に出て、信号に差し掛かる。赤ランプが点灯しているので、しばし待つ。車道側の信号が赤に切り替わる直前、一メートル離れた横に立つ者が歩き出した。安全と法規を考慮すれば、歩道の信号が青になってから渡るのが普通。イツキにそのことを問うたが、イツキは無視するに限ると答えた。僕とロクシヨウが注意したところで、ああいう大人は無視するか、生意気なガキとガラクタだと逆切れる。この二つのパターンが専らであり、素直に聞く者は稀だと言う。

その人物たちには、何かそう至る事情があったのかもしれない。だが、私がそれらの人物に話を伺っても取り合ってくれそうにないし、私がそこまで首を突っ込む資格と必要性も無い。

御神籤町おみくじには、広々とした河原に面した歩道がある。

私は遊歩道の中でも、ここが一番好きだ。涼やかな風がそよぎ、風によって揺らぐ揺れ茂る樹や草花を見ているだけで、心が安らぐ。いつまで眺めていても、飽きない。ソルティはそうでもないようだが。

緩慢な歩行にソルティは退屈してきたようだ。私は名残惜しみつつ、足早に河原道を通った。

帰り道、セブントウエルブが視界に入った。

このコンビニには、イツキに半ば強制的に私の体売りつけた店員がいる。その店員は、外でのんびりと体を伸ばしていた。店内で店番をしなくて大丈夫なのだろうか。

私が前を通ると、気の抜けた声で「ん、どうも」と挨拶した。店内を見たら、雑誌コーナーで立ち読みしている男が目に入った。表紙には、艶めかしい恰好の女が写っている。俗的な言い方をすれば、いわゆる「エロ本」であろう。

雌雄がある生物が、異性に興味を持つのは普遍的なこと。あの手合いの本を読む者は出来る状況ではないので、その欲求を解消するために読むのだろう。

さつき河原を通ったときの和やかな気持ち吹き飛んでしまった。余計な雑念を考えてしまったためだな。

私は更に足早に歩いた。

家から歩いて五分ほどのところには公園がある。園内には、二人の幼児と一体のメダロットが砂場で遊んでいた。彼はカメレオンのような姿形をしている。そのメダロットは私に片目を向けた。

「よう、確か『ロクちゃん』と呼ばれているんだっけ？」

ふむ、見も知らぬメダロットにすらロクちゃんと呼ばれるようになるとは、主婦の噂話の伝達速度は恐ろしい。

園児の一人が私に人差し指を向けて、「あ！ロクちゃんだ」と呼んだ。

あの子は知っている。確か、萩野香織という近所の幼稚園児だ。ソルティが少女のほうに行こうとする。ソルティは人懐っこく、見知っている人間を見たら、遊んでもらおうとする。まだ、時間はある。私は綱だけはしっかりと握ったまま、ソルティを園児二人と遊ばせた。

一つ気になる。それは、この子たちと遊んでいる彼だ。近所では見たことが無い。

「俺、ナチュラルカラーっていうメダロット。見てのとおり、カメレオン型メダロットさ。俺の主人は爬虫類とかが好きなんだ。ついでに、俺は機体名称がそのまま名前になっている」

私が聞くよりも早く、彼は自ら自己紹介した。

「何故、ここでこの子たちと」

「何故って？俺の主人はメダロットに関しては放任主義者でな。俺が勝手に出歩いて遊んでも、特に咎められたりはしない。名誉のために言っておくが、山彦は決していい加減な奴じゃないぞ。ちよつと、マイペース過ぎる一面はあるが」

私と彼の間に、香織ちゃんが間に入ってきた。

「ねえ、ロクちゃん。ナツちゃんと一緒に砂山作ろう？それで、トンネル開けよう」

人間の子供のこの無意味とも思える行動は、将来創造性を育む上で重要なものとなる。とはいえ、後十五分ほどで母上も帰宅するので、申し訳ないが、香織ちゃんには事情を言って断った。

「じゃあ、今度時間があるときは遊ぼうね」

「良からう」

公園から去る前、私は彼に一つ物を尋ねた。

「もう一度聞くが。君は、何でこの子たちの遊び相手になってあげたのだ？」

「何って、決まっているじゃん。楽しそうだったから遊んだだけだなあ」

彼は同意するように二人を見た。二人は邪気の無い笑顔でうんと頷いた。

彼のきさくな一面は、私に欠けているところだな。私は公園から去った。

私はイツキのことが好きだ。イツキだけではない、母上に父上、ソルティ也喜欢だ。

一週間しか経っていないが、私は彼らのことを好いている。ただ、四六時中付き合いたいかと聞かれたら、首を振る。イツキも首を振るだろう。人間もメダロットも、時には適度に誰かと離れられる時間が必要。だが、彼が助けを求めるようならば、私は四六時中どこるかずっと付き合うことも厭わない。

ソルティの綱を釘に巻き付け、私が家の鍵を開けたら、聞き慣れた車のエンジン音が近づく。ちょうど、母上が遠方の買い物から戻ってきたようだ。

3・一人の日常（後書き）

CMO型カメレオンメダロット・ナチュラルカラー

カメレオンらしく、隠蔽の能力で景色に同調して敵の攻撃から身を守る機体。オリジナルメダロットではない。

後、萩野香織という子の名前は、「はぎのかおり」という名称のお米が由来です。

4・校内ロボット大会【前編】（前書き）

スクリーンズ初登場。ちょっと子悪党な感じです。

戦闘と台詞以外は全く同じなので、両バージヨンのどちらかを先に読めば、片方の最初の文章は飛ばしても構いません。

4・校内ロボット大会【前編】

四月中旬。ギンジヨウ小学校最大の行事、ギンジヨウ小学校校内ロボット大会が行われる。

イツキとロクシヨウは、このロボット大会に向けて四人の人間にロボットを挑んだ。実力はまだまだ未熟。ロクシヨウの実力と性能に頼って勝っている面が大きい。イツキは何となくロボットにおける戦略、ここぞというときの勘と勢いの乗り方が分かってきたよう気がした。

アリカは、イツキのロボットの嵌り具合に呆れた表情をしてみせた。

「そりゃ、私だってロボットはするけど。去年から今年にかけてのロボット回数は、通算十八回ぐらいのものよ」

イツキは自分が中途半端な人間と知っている。その自分が、こんなにも熱く物事に取り組めるのは初めてかもしれない。だが、イツキがロボットに熱中するのはそれだけではない。

それにはまず、ロボット以外についても詳しい説明をしなければならぬ。

メダロットを持つ者が、必ずしもロボットをするとは限らない。精々十人に一人ぐらいの割り合いであり、それも、あくまでメダロットの体を動かしてやろうというのが大半。

ロボットには二種類ある。

一つはスポーツとして、自分の手持ちのメダロットの体を動かす目的で行われるもの。前のイツキとアリカのロボットはこの部類に入る。

二つ目は、真剣ロボット。これは、互いのメダロットの頭部・脚部・右腕・左腕のどれかパーツを賭けて行われるロボット。イツキは一万円でティンペットとパーツ一式を揃えたが、あれは例外中の例外。本来、男性型ティンペットは二万円、女性型ティンペット

は倍の四万円もする。

パーツも安くない。現在市場で出回っている一番安いメダロットは、サル型メダロットのモンキーゴングというメダロットだが、パーツ一式全価格六千円もする。

イツキの新型ヘッドシザーズのパーツは現在の市場価格では一式六万円、高額の種類に入る。

後で配送先の勘違いも判明したが、ヒカルはわざとらしく知らぬふりをした。事情はどうあれ、仕入れる側にとっても決して安くはない買い物。こんな高い物を勝手に仕入れてしまったのだから、平常から勤務態度に問題あるヒカルが店長に大目玉を食らうのも致し方ない。

真剣ロボットは、子供が持つにとってはお高い物を賭けて戦うのである。なけなしの小遣い貯めた。あるいは、一、二年分の誕生日とクリスマスプレゼントを我慢するのを条件に買ってもらった物。それが、奪われてしまうのである。

そして、負けることは即ち、自分の友達や相棒と呼べる存在が無残な姿になるのを見ることになる。朽ち果てた状態の自分の愛機から、パーツをもぎ取り他人の手には渡すのは、正に苦痛と屈辱の二重苦だ。

イツキはママから罰として、一年間お小遣い抜きとなった。

自分が真剣に取り組めて、尚且つ、お小遣いを稼げる。この二つの条件に当て嵌まるのが、真剣ロボットだった。イツキはこれまでの間、三人と真剣ロボットをした。

一人目は銀行勤めの若い女性。こちらは、すんなりと蝶型メダロット・レッドスカーレスの右腕を渡してくれた。

二人目は男子高生。いかにも不良っぽく、ハリネズミ型メダロット・ソニックタンクの頭部を受け取る際、舌打ちされたのは怖かった。

三人目は同じ小学三年生の男子。泣きながら蛇型メダロット・マックスネイクの左腕パーツを渡されたときは、自分がいじめっ子と

勘違いされないか冷や冷やした。

余談だが、メダロットにはスラフシステムという自己修復機能がある。これも語ると長いので、また別の機会に語ろう。

イツキはレッドスカーレスの右腕をコンビ二で下取りに出して、千五百円を手に入れた。メダロット社の規定により、コンビ二やデパートではメダロットのパーツ単品買い取りシステム導入がされている。

千五百円。たった僅かな金額だが、自分とロクショウの力で本気で取り組み手に入れたお金。

いけないことで手に入れたメダロットだったが、イツキに本気で物事に取り組む苦労、そして、その楽しさを気付かせた。

今日と明日の休日の二日、校内ロボット大会が開催される。優勝は期待してないが、僕とロクショウの実力を試す絶好の機会。仮に優勝すれば、賞状と男性型ティンペット一台が授与される。

学校開催のイベントだが、参加費用には千五百円取られる。見物だけでも、一般・保護者は五百円。児童も二百円支払らなければならない。学校はロボット大会の行事に本腰だ。

参加には、クラス担任の教師に参加する旨を告げる。^{むね}イツキは大会参加募集締切日の水曜日に担任のオトコヤマ先生に参加表明を申し出て、千五百円の参加費用を入れた封筒を提出した。

大会参加募集人数は七十人。今年は六九人と、中々の盛況ぶり。

大会は午前の部で第一回戦。一回戦が済むと、一時間のお昼休み。午後の部で第二回戦が行われ、三十分の休憩をはさんだのち、第三回戦が行われる。続く日曜日。午前の部第四回戦、二十分の休憩をはさみ、そのまま準決勝戦。昼食摂取の時間も兼ねて一時間半の休憩のあと、決勝戦が行われる。

準決勝と決勝になると応援の生徒の親が減る代わりに、一般の見

物客が詰めかけてくる割合が高い。学校側は自治体と協力して、休憩時間の間に校内と周辺の見物客・交通整備を行う。

イツキパパは仕事の都合で今日は来れない。明日は休めるから、今日勝ち残ったら応援に行くとパパは言っていたが、それは無さそうだ。

イツキの一回戦の相手は、スクリューズの一番手であるカガミヤマが対戦相手だからだ。

スクリューズは三人いて、一番手カガミヤマ、二番手イワノイ、そして、キクヒメという女の子がリーダーを務める。イツキと同じ三年生でクラスが隣り合っている。イツキが羨ましそうにロボトルの光景を眺めていると、いつも決まってこの三人はイツキのことをからかった。

三人は三年生の番格であり、イツキを含むメダロットを持つ学校の生徒は、できる限りこの三人とは目を合わせないようにしている。

スクリューズは常に三人がかりで対戦し、パーツを奪っては荒稼ぎをしているという噂がある。噂の真偽はともかく、この三人は個々の実力も高い。学校で、この三人の誰かと一対一でやりあって勝てるような生徒はあまりいない。

「ご臨終だねえ、イツキ」

声にドスを利かせて、スクリューズのリーダーキクヒメが声をかけてきた。少女ながら、声には一種の威圧感があつた。茶髪に顔立ちからして、キクヒメはどこか日本人離れしていて、両親のどちらかは外国人だと聞く。

キクヒメの右側に控える腕白い細めの少年が、半笑いな目付きで小馬鹿にしたようにイツキを見やる。

「いやー。メダロットを初めて一か月も経たない初心者ごときが大

会に出るなんて。ほんと、身に余る行為っすよね姉御」

焦げ茶色のジーパン、肩のラインに沿って白筋が入った深青色のティーシャツ、僅かに垂れた^{まぶた}瞼と斜め上に逆立つ黒髪が目立つ彼は、スクリーユーズの二番手イワノイ。

キクヒメの左側に控える少年がイワノイの意見に同意する。任天堂の某RPGの主人公を連想させる赤帽子を被り、日焼けがかった浅黒い肌に丸みを帯びた体型、閉じているのか開いているのか分からない糸目をした少年だ。

「うん、ほんとほんと。家事炊事洗濯に慣れていない奴が、適量も分からず洗濯機に洗濯剤をぶち込んで、洗濯物を駄目にするみたい」意味不明な例えを話す彼は、スクリーユーズの三番手カガミヤマ。

近くに三人のメダロットが見当たらない。スクリーユーズは試合直前に自身の愛機を呼び出すつもりだ。

メダロットとメダロットの本体には、「転送機能」がある。電波を受信することにより、何千メートルと離れたところにあるメダロットの本体を、メダロットを通して瞬時に目の前まで送ることができるシステム。メダロットのこの「転送機能」も各分野における利用が試みられている。

「あんたがどの程度抗えるか見物だねえ。カガミヤマ、たつぷりと可愛がつてやりな」

キクヒメはそう言うのと、近くの売店へと足を向けた。イワノイ、カガミヤマも後に続く。

これまでのところ全く負け無しで自信もついていたが、イツキは自信を無くした。今まで無言だったロクショウが、メダロット越しからイツキに喝を入れる。

「イツキ、前と同じアドバイスを送ろう。がむしゃらになれ、イツキ。それに、この大会が始まるまでの間、私とお前は決して遊び呆けていたわけじゃない。勝つにせよ、負けるにせよ。あの三人には我々と対峙したらどうなるか、目に物を見せてやろうではないか！」

常日頃は知的で落ち着きがあるロクショウ。だが、ロボットとな

ると秘めたる魂が目を覚ます。

ロクシヨウの言うとおりでな。今は勝敗を気にせず、全力で物事にぶつかろう。

「イツキ」

チドリとアリカの二人がイツキを呼ぶ。

ママとアリカとアリカの母親、三人は伴って校門を潜った。アリカの横にブラスがいないのを見て、イツキはママの横まで来ると、アリカにそれとなくブラスがどこにいるか聞いてみた。

「ブラス？先に行ってもらって、見物の場所取りをしてもらっておいたの？」

「アリカちゃん！」

遠目から、ブラスが跳ねてアリカに手を振っていた。

「イツキ、あんた何よその自信無さげな顔は」

ロクシヨウの喝で元気になったつもりだが、アリカや他から見ると、どうもそうではないらしい。本音を漏らせば、実はまだ怖い。

「あんた、一回戦の相手は確かカガミヤマだったわね。スクリューズがなによ！あんさんとロクシヨウなら、カガミヤマ程度なら一発ノックダウンや」

アリカが大阪弁も交えた男っぽい声でイツキを激励するのを聞いて、アリカの母親が注意した。

「こら、アリカ。せめて口調ぐらい女の子っぽくしたらどうなの」

「別にいいじゃん、お母さん。じゃ、イツキ。三回戦で会いましょうね」

アリカは元気良くブラスの元に駆け寄った。アリカの母親は、やれやれと首を振った。

「ほんと、あの子ときたら…」

「いえいえ、子供はあれぐらい元気のほうがいいですわ。うちのイツキに見習わせたいくらいですよ」

ママは僕の頭を撫で回した。イツキは撫で回すママの手を煩わしそうに払い除けた。

「…ママ！こんな人前で」

「あら、いいじゃない？もしかして、これぐらいで禿げちゃうと心配しているの」

チドリがもう一度イツキの頭を撫でようとしたら、イツキは逃げるようにアリカとプラスが座るシートに向かった。

「逃げられちゃいましたね」

アリカの母親が笑顔で言う。

「ええ」

今は撫で回せる高さにあの子の頭も、そのうち、自分の頭に手を伸ばすぐらいの大きさになるんでしょね。ふとして過る感慨を消すように、大会開始十分前の放送が流れる。

イツキとアリカが二人に早くくるよう促す。

「さて、あの子たち二人がどこまで頑張れるか。見届けさせてもらいましょうか」

チドリの言葉に、アリカの母親は小さく相槌を打った。

試合台は警戒網を張ったグラウンド内部の中央。そこを、相撲の土俵のように土で盛り上げただけだった。

一分で一回戦は終了した。飛行系パーツの脚部を装着した機体に、相手はランドモーターの対空攻撃パーツでこれを撃墜した。

続く一回戦第二試合、天領イツキ&ロクシヨウ対力ガミヤマ。力ガミヤマは既にメダロットの本体を自宅から転送こうだゆうしていた。

カメ型メダロットのキースタートルこと鋼太夫。カメ型だけあつて移動速度は鈍いが、その分装甲が厚い。また、両腕と頭部から発射されるレーザーはかなりの威力と速度を誇る。

東はイツキとロクシヨウ、西は力ガミヤマと鋼太夫。

黒い紳士ズボン、白い半そでの紳士ティーシャツに蝶ネクタイという出で立ちで、鼻と口の間に立派に生やした髭を蓄えた初老の男

性が、試合台中央で両者を交互に見やる。

「先ほども申し上げましたが。私、ロボトル協会公認レフェリーのミスター・うるちと申します。メダロットが機能停止、あるいはマスターがギブアップの意を表明した場合、一方の勝利とします。それでは、このロボトル合意と見てよろしいですか？」

イツキとカガミヤマは一つ首を縦に振った。ロクシヨウと鋼太夫は睨み合っている。

「ロボトルファイトー！」

開戦合図と同時に鋼太夫はいきなり左腕のレーザーを発射した。不安でしうがなかったが、この試合は自分とロクシヨウが優位だと分かった。何故なら、周りは観客だらけで、格闘タイプのロクシヨウの攻撃は余程のことが無ければ安全だが、レーザーだとそうもいかない。人に当たっても死には至らないだろうが、何らかの被害は確実に出る。

カガミヤマは威力を速度を高めた左腕の極細のレーザー一発で決めたたかったようだが、そうは問屋が卸さない。ロクシヨウの脚部の一部であるスカート状のものを一部焦がただけであり、ロクシヨウは全くの無傷で済んだ。

「ロクシヨウ、もう下手な作戦は要らない。正攻法で攻めろ」

「御意！」

近づいては、チャンバラソードで一番装甲が厚い脚部を攻撃した。鋼太夫は腕を振るうなりして抵抗を試みるが、元来射撃タイプのキースタートルのパンチが当たるわけも無い。四回右腕のソードで攻撃して、ロクシヨウは鋼太夫の四本ある足を全て切断した。

レーザーやビーム系の攻撃は、次の一発を撃つのに時間を要する。更に観客は高い壁から見下ろして観戦ではないので、思い切った攻撃ができない。

やけくそといわんばかりに三門レーザー一斉発射。ロクシヨウはこれも難なく避かず。試合台に三つの風穴が開いた。無茶な攻撃で身動きが取れなくなつた鋼太夫の頭部を、ロクシヨウは左腕の必殺

武器・ピコペコハンマーで叩いた。鋼太夫の頭頂部がひしゃげ、メダルらしき物体が弧を描いて飛ぶ様が見えた。

「鋼太夫機能停止！勝者、天領イッキとロクショウ」

マイクも使わず、ミスター・うるちの勝利者宣言は観客全員の耳に届いた。

その後も消化試合は行われて、お昼の十二時五十分頃には一回戦が終了した。

「イッキ、ロクちゃん。二人とも意外とやるじゃない」

「アリカ、プラスおめでとう。けどね、アリカ。あんな風にかなり声で叫ぶのは、できれば控えてちょうだい」

イッキ、甘酒の両母親が自分の子供たちとその相棒の戦いぶりを褒めた。

四人はピクニック用のシートに座り込み、昼食を取っていた。今日は特別に、チドリはイッキの好物の一つであるトンカツを持ってきた。ここにカレーも加われば、イッキにとっては最高の食事である。

アリカはパセリに野菜サラダなど、意外にも青野菜系の料理を好む。

食べて、出す物も出してリラックスしたあとは二回戦へと突入。

二回戦の相手は五年生。一回戦で使用したパーツを全て別のに替えていた。

脚部がラビウオンバット、右腕は付けた機体の行動速度を高めるチャージドシーズのパーツで、残る左腕と頭部は何とソニックタンのクのパーツだった。

ソニックタンクとなら、一度手合わせたことがある。だが、この前と違ってこちらはソニックタンク一式で組み立てず、スピードがあるパーツを二つも装着している。

イッキはまずロクショウに索敵するよう指示を出した。記述していなかったが、実はロクショウにもセーラーマルチと同じ索敵の機能が備わっている。

相手の左腕から放たれるナパームを避けつつ、ロクシヨウは相手の行動速度とパターンを分析した。二分経過、ソニクタンクが後ろに飛んだのを見計らい、ロクシヨウはダッシュした。頭部からのナパームを頭上ギリギリのところで回避し、ロクシヨウは相手を切り伏せて勝利した。

この試合では全くの無傷とはいかず。一発、左腕にナパームを食らってしまった。

運営委員会のメダロット、ホーリーナースとムーンドラゴンの二体がロクシヨウの腕を治療した。スラムシステムを異常促進させてパーツの自己修復機能を高めさせる、いわゆる回復系のパーツを二体は備えている。損傷具合が浅かったため、五分後にはロクシヨウの左腕はすっかり元通り。

第三回戦、これで前半戦は終了する。

対戦相手はスクリューズの二番手イワノイ。使用する機体はシアンドッグの後続機、DOG型イヌメダロットのブルースドッグ。イワノイは名前を付けず、機体名称を名前としている。

「イッキ、仇を討とうなんて思わないで。ただ、滅多切りにしてくれるだけでいいから」

「イッキ、アリカちゃんの仇を討つのよ」

「イッキ君、適度に頑張ってね」

アリカ、ママ、アリカの母親の三人の応援はバラバラだ。

「イワノイ！あたいらの力を今度こそ見せつけてやりな」

「合点承知の助だ姉御」

キクヒメの啖呵に、イワノイはガッツポーズで応えた。前の第二試合で、ブラスはイワノイのブルースドッグに敗北を喫した。

治療を施されたが、体中の弾痕跡が消えるには時間がかかりそうだ。

痛ましいブラスの姿を見て、ロクシヨウに、イツキも珍しく燃え上がった。

ロクシヨウがポーズを取る。クラウチングスタートの姿勢だ。

「何だあ？まさか、真正面から突っ込む気か？」

二人は答えない。

「あんま調子に乗るんじゃないぜイツキ。おいらのブルースドッグの実力は、そこの同機種なんかとは比べ物になんねえぜ」

イツキはイワノイの挑発に全く乗らなかった。

思えば、ことあるごとにメダロットを持ってないことだからかわれてきた。だけど、もうそうじゃない。今は、ロクシヨウというお堅いが最高の相棒がいる。

イツキは一回戦でカガミヤマがとった戦法と全く同じことをやるうとしていた。試合開始合図と共に、全力の一撃をぶちかます。男のガチンコアタック。失敗すれば、待つのは蜂の巣。

ミスター・うるちのロボトルファイトの叫びと同時に、ロクシヨウはブルースドッグに向かって疾風の如く駆ける。

右腕を撃たれ、更に脚部に三発を食らって素っ転ぶロクシヨウ。

観客の誰もが駄目だと思ったとき、ロクシヨウは勢い殺さず撃たれた右手を地面に叩きつけると、宙返りしてブルースドッグの顔面をぶん殴った。

ぼっがん！

ブルースドッグは観客席まで吹っ飛んだ。審判がカウントを取る。「エイト、ナイン、テン！ブルースドッグ機能停止！勝者、天領イツキ&ロクシヨウ」

試合開始から十五秒で決着。今大会最速勝利。

今度は数人だけでなく、イツキとロクシヨウは多くの観客から拍手と称賛が贈られた。決着の速さに何が起きたか分からず、イワノイは呆けた表情とぼをしていた。

4・校内ロボット大会【前編】（後書き）

都合上、何型が記載されないメダロットがいるのはお許しください。
因みに、ラビウオンバットはウサギ型。チャージドシーズは花型で
す。

キースタートルの名前は小説オリジナル。ブルースドッグはアニメ
版を参考にしていきます。

4・校内ロボット大会【後編】（前書き）

数日ぶりの更新。やっぱ、前編だけで何日も待たすのはあまりにも決まりが悪い。

4・校内ロボット大会【後編】

尿意をもよおしたイツキは、四人に先に帰るよう言った。

「寄り道せずに帰ってくるのよ」

「分かったよ、ママ！」

イツキは一目散にトイレへと向かった。

思ったとおり、トイレはこの階も混雑していた。股で股間にある物を抑えつけて、イツキは数分間トイレを我慢した。

カシャ、カシャと、機械的な歩調。尻尾と手足が電気コードの接続部のような形をしており、真っ赤なぶかぶかなスカートと服を着たような体、頭に猫耳を付けたネコ型メダロットのペッパーキヤットが男子トイレにやってきた。主人である女の子でも探しているのだろうと、気にかける者はいなかった。

「ブルースドッグと鋼太夫倒したぐらいでいい気になるにや。私はあいつらとは比べ物にならない。あんたはあのクワガタムシの命日でも待つておくことだにや」

イツキにさり気無く近寄ったペッパーキヤットは、イツキを小声で脅した。そのペッパーキヤットの脅しを聞いて、イツキは青ざめ辛そうな表情をした。だが、それは限界まで近づいている辛さであり、そのメダロットの脅しの台詞はとんと聞こえてなかった。

そのメダロットはそのことに気が付かず、自分の台詞で相手がびびっていると勘違いして、満足した様子で去って行った。

正門を出てすぐのところに、スクリーンズの三人が立っていた。

キクヒメが例のペッパーキヤットに話しかけた。

「セリーニヤ、イツキとあの虫の様子はどうだった？」

「クワガタの奴はいなかったけど、イツキにはバツチリ。青ざめた顔で身を震わせていたにや」

このペッパーキヤットはキクヒメの愛機で、名前はセリーニヤ。

「へっ！イツキの奴、明日、自分がどうい目に遭うか分かっている」

るらしいな」とイワノイ。

「ああ。泥塗れにしてやるう」とカガミヤマ。

「あたいらを舐めたらどういう目に遭うか。あいつの虫の体にしっかりと刻んでやりな、セリーニャ」

そして、スクリューズは既に勝利したかのように高笑いした。

その頃、用を済ましたイツキは児童玄関で待つロクシヨウと会った。

「気分は？」

「死ぬかと思ったけど、何とか間に合ったよ。でも、辛かったな。人を押し倒してでも行こうとしたら、僕の心を読んだのかな？赤いボデイのメダロットが『待っておくことだにや』と注意したんだ。おかげで、間違いを犯さずに済んだよ」

「…赤いボデイのメダロットといえば、先ほどここを通りましたな。猫のような姿をした」

「猫…ペッパークャットか。まあ、あのメダロットを持っているのは他にもいるし。僕の間違いを押し止めてくれるような心優しいメダロットが、まかり間違ってもあいつらのメダロットということは無いな」

イツキとロクシヨウは人混みに揉まれながら、ゆっくりと歩いてくれていた四人を見つけて合流した。スクリューズはほくそ笑み、イツキの気持ち爽やか。双方、互いの思惑に全く気付かず。知らぬが仏とはこのこと。

帰宅すると、ちょうどパパも帰ってきた。

夕食の時間帯、イツキとチドリママはパパに試合模様をこと細かく話した。特に、イワノイと対戦したときの心境と戦い方を伝えると、ジヨウゾウはいたく感心した。

「男のガチンコアタックってか。まさか、イツキからそんな言葉を

聞く日がくるとは夢には思わなかったな」

父親にも褒められて鼻が高くなったイツキを、チドリは諫めた。
「勝手に一万円も使って購入した物なんだし、一回戦で負けていちやしゃれにならないわ。それに、明日の

対戦相手の子はあなたより経験が豊富らしいじゃない。褒めという何だけど、そうやってすぐ鼻を伸ばしちゃうのがイツキのわるいところよ」

ママに諫められて、イツキは明日の対戦相手が誰か思い直した。
第四回戦第二試合の相手は、スクリューズのリーダーキクヒメ。僕より一年半も早くロボットを初めて、通算ロボット数はイツキとは比べ物にならない。

ママに諫められてイツキは身を引き締めたが、本音は違っていた。
未熟者の僕がカガミヤマ、イワノイも倒せた。キクヒメが強いことには間違いないだろうが、何、僕とロクショウならまず勝てる。

この思考を無理に抑えていたが、ともすると、つい本音が頭をよぎってしまう。

居間のフローリングの床で正座するロクショウも、ついそう考えてしまったりしていたが。精神統一することにより、その思考を自重していた。

日曜日、校内ロボット大会後半戦。三回戦で人数が絞られて、応援席には保護者や参加生徒の友人の代わりに一般の客が詰めかけていた。それでも、昨日より幾分か空いていた。

第一試合が終わり、イツキとキクヒメの第二試合が行われようとしていた。

だが、昨日までの調子はどこへいったのやら、イツキはすっかり固くなっていた。キクヒメと相方のペッパークャットのセリーニヤは、もう慣れているという感じ。

企業参加の一大ロボットイベントと比べれば、小規模な大会。とはいえ、メダロットを持って一か月も経たない自分が、小規模ながらよく勝ち抜いたな。

やるだけやってみるか。そう思って足を踏み出そうとしたら、思うように進まない。アリカときのほどではないが、また緊張しているようだ。見かねたロクシヨウが一声かけようしたら、イツキはそれを制止した。

「大丈夫……。何時間とはかけられないけど、ちゃんと前進だけはあるから」

イツキは綱を渡るようにそつとメダロッター立ち位置についた。

「じゃ、ロクシヨウ。頑張るか！」

どこかまだ引きずっているが、イツキは多くの人がいる前で澆刺とした調子で喋った。

ロクシヨウは「うむ」とだけ言って、試合台に上^{あが}った。

ロクシヨウが跳躍したセリーニヤに切りかかる。空中で動きが取れない状態、勝った。

と、思いきや、セリーニヤは猫のように大きく背を反らしてロクシヨウの一刀を避け、右腕の電流を帯びたジャブをロクシヨウに浴びせた。

セリーニヤは着地するとバック宙反転、今度も右腕の電流ジャブをロクシヨウに浴びせた。ロクシヨウもやられっぱなしではなかった。セリーニヤの右腕を掴むと、針状の形をしたマックスネイクの左腕で殴り掛かった。致命傷には至らなかったが、ペッパーキャットのをバランスを支える尻尾と、右腕の接続コードの形をした指二本を貫いた。

セリーニヤはロクシヨウを蹴飛ばし、離れて態勢を整えた。

思っていた以上に、キクヒメとその愛機セリーニヤは手強い。イ

ツキはロクシヨウに索敵の支持を出した。さあ、これで攻撃が当たるようになる。

しかし、相手は当然それを読んでた。セリーニヤは逃げの一手に集中したので、索敵でセリーニヤの行動を読んでいるはずのロクシヨウの攻撃は悉く空振りした。

ロクシヨウの攻撃は当たらず、セリーニヤが逃げるだけの光景が二分間続いた。このままでは埒があかない。少々危険だけど、相手から攻撃してくるのを待つて、カウンターでソードの一撃を食らわせる。

「ロクシヨウ、後二回ぐらい切りかかったら、相手の出方を待つてカウンターだ」

「了解」

試合台の隅に逃げたセリーニヤに一刀、セリーニヤは転がって回避。最後の一刀を振ろうとしたら、立ち上がったセリーニヤが事を急いてバランスを崩した。チャンスだ。

「ロクシヨウ！そのまま攻撃」

イツキは勝利を確信した。だが、バランスを崩したのはセリーニヤの巧みなフエイントだった。

セリーニヤはブリッジで難なくソードの一撃を避け、ロクシヨウの無防備な体に左腕からの電流を浴びせた。

「ぐわああああ！」

ロクシヨウが悲鳴を上げる。

バランスを崩したのはセリーニヤのフエイントだったと、イツキは気が付いたがもう遅かった。ロクシヨウはセリーニヤの左腕と尻尾でがつちりと挟まれていた。

「セリーニヤ、頭部ライトサーキットで止めだよ」

キクヒメは余裕を浮かべた酷な笑みで指示を伝える。

「はいにゃ！」

セリーニヤの頭部の両耳から、一本の針が生えた。ぼしゅしゅ！と、ワイヤー付きの両耳が音を立てて飛び出し、右耳がロクシヨウ

の左腕肩部、左耳が太腿上部に刺さる。

ばちばちばち！

人の目から見ても、ロクショウの体に電流が流れ込んでいるのが分かる。

イワノイ、カガミヤマが密かに野次を飛ばす。

このままでは不味い。どうすれば打開できる。焦るイツキを尻目に、キクヒメはどうだ言わんばかりに顔突き出し腕を組む。

やっぱり、僕らではまだ力量不足だったんだ。既に諦めかけたイツキに、悶えるロクショウがメダロットから発声する。

「諦めるな、イツキ！」

「…ロクショウ！でも、もう」

「確かに今のままでは勝てんだろうが。まだ、私は全ての武器。それと、戦う意欲も……失っていない。勝利には……至らずとも……何か方法があるはず」

そうして、メダロットからのロクショウの通信が途絶えた。

全く考えが無いわけでも無い。でも、あれは元々武器用として設計されたわけではない。威力は知れており、攻撃したこっちのほうがダメージは大きいかもしれない。これで倒せなければ、こっちの負けは確実。それでも、これしか方法が無い。

「ロクショウ！アンテナ！」

これを聞いたキクヒメ、イワノイ、カガミヤマは、何を今更と鼻で笑った。

だが、次の瞬間三人組は目を丸くした。何と、相手のヘッドシザースがあくまで索敵レーダーの補助の役割をする両角で、セリーニヤに頭突きをかましたからだ。

セリーニヤの顔面と胸部がへこみ、ロクショウの両角が根元から折れる。薄れゆく意識の中、セリーニヤはロクショウの顔面を蹴っ飛ばした。

ピン！ロクショウの背面からメダルが外れるのが見えた。初めて見る、自分のメダロットが機能停止する様。シヨックのあまり、イ

ツキの思考は停滞した。続け様、また、ピン！と、セリーニヤのメダルが外れる音が聞こえた。

引き分け？ 見ている誰もがそう思ったが、審判の下した判断は違っていた。

「勝者、キクヒメ&セリーニヤ」

呆然としているイツキの代わりに、アリカがミスター・うるちの判断に抗議した。

「ちよつと！ どう見ても引き分けじゃない！」

「いえ、セリーニヤ選手はロクシヨウ選手より遅くメダルが外れました。あなたも見ましたよね？」

そう言われればそうだった。確かに、セリーニヤのメダルが外れるのはロクシヨウより僅かに遅かった。

審判にそのことを指摘されて、アリカは悔しげに口をつぐんだ。

今だ呆然とするイツキに、キクヒメが手を差し出す。

「おー！ 何とスポーツマンシップ精神に乗っ取った行動」と、ミスター・うるちが歓喜した。

そうではない。イツキを含む生徒は裏に何かがあると読み取った。イツキが手を握り返すと、キクヒメがぼそりと呟く。

「形はどうあれ、あたいらの勝ち。これに懲りて、今度はでしゃばるんじゃないよ」

ある程度思ったとおりのことを言ってきたので、イツキはさしてシヨックを受けなかった。イワノイ、カガミヤマがセリーニヤのメダルとパーツを拾うのを手伝い。イツキがロクシヨウの本体を抱えると、アリカがメダルを拾ってイツキに差し出した。

「ナイスファイト、イツキ」

いつもと違い、アリカの声音は優しかった。

イツキとロクちゃん、負けちゃったのね。負けたら、こんな高い

物を買っておきながら負けるなんて。と、きつい一言を言おうと思
っていたけど止めておこう。試合台からアリカちゃんと一緒に戻っ
てきたイツキの顔は悔しさと悲しさで一杯に溢れていて、メダロッ
チにいるロクちゃんに謝っていた。その態度を見たら、言えるわけ
が無い。

イツキは優しい子だけど、どこか中途半端というか事無かれ主義
で、どんな物事に対しても、それなりにやればいいだろうという感
じだった。

そのイツキが、今は一つの物事に真剣全力に考えぶつかっている。
言わなくても、顔も見れば分かる。今のイツキの表情は、物事に全
力に取り組んだ物しかできない者の顔をしている。

戻ってきたイツキの肩を抱こうとしたら、ジヨウゾウさんが先に
イツキの肩に手を置いて、「負けてしまったが、今のイツキとロク
シヨウは本当にかっこう良かったぞ」と我が子の健闘を称えた。

私が言おうとしていたのに。この人、本当こういうところは抜け
目なく思える。イツキはまだ立ち直れていないようだ。しょうがな
い、この単語なら少しでも現実に引き戻せるかもしれない。

「イツキ、今晚は大好物のカツカレーよ」

「…カツカレー…」

カツカレーという言葉に一番反応したイツキを見て、やっぱりま
だ子供だなとチドリは思った。

5 おどろ山探索記 (打ち捨てられた者) (前書き)

ゲームの順序からすれば、本来はスカートめくり事件が来るべきであり、あの二組が登場する話でもありましたが、必要性を感じなかったなのでカットしました。

5・おどろ山探索記（打ち捨てられた者）

校内ロボット大会は六年生の男子生徒が優勝を飾った。キクヒメのセリーニャはイツキとの試合での負傷がたたり、惜しくも優勝を逃した。

そのイツキとロクシヨウだが、校内ロボット大会以降、挑戦者が増えた。負けはしたがスクリューズの子分二人に打ち勝ち、あのキクヒメとも善戦した光景は主に小学生の見物客の口から伝わった。ゴールデンウィークまでの間、イツキは十二人とロボットを繰り広げた。

まだまだ未熟な二人だが、十三戦して十一勝二敗した。一敗目は、学校の校長先生の愛機である侍型メダロットのナンテツとの対戦。伊達に歳は取っておらず、イツキとロクシヨウはコテンパンにされた。

二敗目は潜水系メダロットを持つ中学生が相手。相手の有利な川での戦闘だったから、徐々に装甲を削られて敗れてしまい、ロクシヨウの右腕を取られてしまった。

後日、アリカが男性型アンチシーパーツを持っていたので、イツキはアリカからカップロードの右腕を借りてリベンジを果たし、ロクシヨウの右腕を取り返した。

アリカは心地よくパーツを貸してくれたが、絶対裏に何かあるとイツキは直観した。ゴールデンウィーク前日の金曜日、学校が終わったあと、イツキはアリカに自宅へ来るよう言われた。

「ねえ、イツキ。今度のゴールデンウィークさあ、おどろ山に行かない？」

甘えた声を出しながら、アリカは部屋にいるイツキを逃がさないよう詰めていた。

「何で？」

「何でって？あんだ、私に貸しがあるでしょ。だからさあ、おどろ

山の幽霊の正体を見抜く取材に同行してくれない？お父さんとお母さん、今回のゴールデンウィークはどこにも連れて行ってくれそうにないから」

イツキは迷った。

僕のパパも今回は忙しくて、夏休みにメダロット島へ連れて行ってくれると約束した代わりに、今回のゴールデンウィークは我慢してくれと言った。どこへ行けそうにもない。といって、ずっと日がな一日ごろごろするのもどうだろう。イツキはゴールデンウィークの間、アリカと共におどろ山の幽霊調査に出かけることにした。

「やっぱり！そうこなくっちゃ」

期待どおりの返事が聞けて、アリカは喜んだ。

ロボトルにおける借りを返すためでもあるが、イツキも俄然、ここ最近のおどろ山幽霊騒動の正体は何なのか知りたかった。

おどろ山は御神籤町の数少ない観光スポットの一つ。のっぺりとした山群の連なりで、登山には向かないが、豊かな自然があふれていて、休日での家族や友人を連れての気軽なハイキングになら持つてこいの場所。

事は今年の二月に起きた。小学生の男の子がメダロットを連れて山に入り、越冬中の昆虫を採集しようとしたら、「……置いてけ……森を汚す機械を置いてけ……。……さもなくば……。……お前の魂をいただく……」と、不気味な声が森に響いた。

怯えた少年は、自身のメダロットを使って周囲に声の主がいないか探させた。すると、メダロットの悲鳴が上がった。少年が駆け寄ると、自身の愛機が無残な姿で樹の根本に倒れていた。

「……出ていけ……。さもなくば……。今度はお前を喰う……」

すっかり恐怖した少年は、千切るようにティンペットからメダルだけを掴み、必死の思いで下山した。その日のうちに管理事務所から青年団に連絡が入り、少年の証言を下に、五名が少年のメダロットの本体を搜索したが、一切そのような痕跡は見当たらなかった。そのメダロットは旧式であり、少年がメダロット社の保険を利用し

て、パーツやティンペットを貰うための一芝居を打ったのではないかと、あらぬ疑いもかけられた。

三月、大学生のグループが四名入山した。内二名はメダロットを連れていた。大学生グループがおどろ山にあるおどろ池の近くを通ると、また、あの声が四人を脅した。

四人と二体のメダロットは鼻で笑い、二人一組に分かれて声の主を探した。そしたら、徐々に辺りに霧が立ち込めてきた。その霧に包まれているうちに、四人は気を失った。目が覚めると、二体のメダロットは忽然と姿を消していた。

同月。最初の被害者である少年のクラスメイト十人が、夜、全員メダロットを連れて山に入った。

一時間後、十人は恐怖に顔を歪めて山の管理事務所に助けを求めた。

十人の話を整理すると、何でも二本の黄色い角を生やした鬼が一匹に、宙に浮かぶ白い幽霊がわらわらと姿を現し、例の脅迫台詞を言った。子供たちは果敢にメダロットを使って攻撃したが、何と全てすり抜けた。攻撃は当たらず、徐々に狭まる幽霊たち。仕方なく子供たちはメダルだけでも持って、本体を置いて下山した。これを聞いた役所も、ようやく重い腰を上げることにした。

青年団に自治体と協力して、町は一日に一回は山の巡回をさせた。また、子供一人の入山に夕方以降の入山も一時規制した。

四月。今度はその巡回者が被害に遭った。二人一組でメダロットを連れていたが、おどろ池の近くを通るとあの声がした。二人とメダロットは固まって行動した。その日は雨が降り、山は霧が立ち込めていた。二人は警戒して歩いてしたが、何故か頭が重くなり、気付くと眠っていた。目覚めると、後には何も残っていなかった。

そして、このことは「おみくじ新聞」だけでなく、ついには全国紙とニュースにも取り上げられてしまい、インターネットでも話題を読んだ。おかげで、ゴールデンウィーク前日だというのに、ハイキング客を相手にした宿泊業やお土産による売り上げが昨年より落

ち込むことが予想された。悪い噂が広まり、町の安全のために買ったメダロットも一体奪われて、役所は椅子に座って頭を悩ますばかり。

一体の汚れたメダロットがおどろ池近くに横たわっていた。そのメダロットは騒動が起きる前からそこにあり、とある者たちはあまりの汚れ具合から、それを見つけても触るのを躊躇っていた。

男性型ティンペットとパーツ一式を付けたそのメダロットは機能停止しているが、メダルは装着されたままなので、まだ生きていた。それは、ちょうどおどろ山のごみが集積しているところにあり、山狩りの者たちも朽ち果てたその存在を無視した。

ふう。エネルギーはすつからかんでも、一応、思考能力とかは失われないみたいやな。それにしても、人間って酷いもんやほんまに爺さんが死んだら、エネルギーを抜いて山にぽいやもんな。そんな、憎み切れへんのは、爺さんというお人の存在があるからやろうな。けけけ！まつ、このまま残り一生、しょうもないこと考えながら朽ちるのもええかも。

にしても、あーあ……。何や、じゃりでもいいから興味持つて拾ってくれる人はおらんかな。無理やろな。見えるわけじゃないけど、多分、こんなに朽ち果てたもん拾うような物好きおらんやろ。

そのメダロットは一旦、思考世界での言動を打ち切り、心を無にした。

ママにアリカとおどろ山に行くことを話すと、ママは陽が落ちないうちに帰ってくるよう言い渡し、お弁当を渡してくれた。お弁当を渡すときのママの目が、変というか、妙に浮いているような気が

したけど、何でかな？ イツキが家から出たあとも、チドリはちょっと嬉しげに浮ついた顔をしていた。

「ふふ。イツキがアリカちゃんとデートねえ」

このとき、イツキは何故かくしゃみをした。

歩いて三十分後、イツキたち四人はおどろ山前に到着した。去年のゴールデンウィークでは、ある程度の人数が見受けられたが、今年は物寂しい。イツキたち四人以外に、敬老会の人たちが八人と、山伏が数人ほど。おどろ山は意外なことに歴史が古く、何とかの高名な和尚さんが眠るというお岩さんがあり、たまに修験者などが訪れたりする。

入山する前、管理事務所のおじさんが注意を呼びかけた。

「もう知っているかもしれないが。危険だから、夕刻までには必ず降りてくるんだよ」

四人は小さく会釈して、入山した。

「幽霊といっても、こんなまっぴるまから出るわけもないわね」

最初はジャーナリストとして身構えていたアリカも、すぐに足取りが軽くなり、プラスと手を組んで楽しげに山中の眺めを見渡していた。イツキはロクシヨウと手を組まなかったが、のんびりとした気持ちで歩んだ。

「幽霊騒動で騒がしいと聞いていたが。いざ現地に来てみると、とてもそうには思えませんか」

イツキはロクシヨウの言ったことに同意した。山は日当たりが良く、木漏れ日がまた風情を醸し出していた。幽霊はもちろんのこと、とても鬼とか人魂が出そうな気配はしない。陽が落ちれば、このどこかな景色も違った物に見えるかもしれないが。

先に行くアリカが振り返った。

「イツキ、おどろ池に行ってみましょ。幽霊の目撃情報が一番はっきりしているのはそこだから」

おどろ山にあるおどろ池は、山の中腹地点で曲がってずっと七百メートル登った先にある。池は大よそで直径四十メートルほどあり、

真ん中は土が盛っていて小島のように見える。湧水が出る池で、真夏日においても涼しさを感じるおどろ山名所の一つ。だが、今は幽霊騒動とは別の問題を抱えている。池を見たイツキは顔をしかめた。

「話には聞いていたけど…。ちよつと、酷いな」

綺麗な湧水の池には、ぶかぶかと空き缶にビニール袋などのゴミが目立つ。おどろ山は牧歌的な山道とこの池が見所。そのせいか、こうして心無い観光客がゴミを捨てていくときがある。町もこの山ばかりに金を回すわけにはいかず、ボランティアを募集して秋に年に一回の大掃除でゴミを集める。それでも、こうした不法投棄が跡を絶たない。

イツキたちはここで一休みした。少しゴミが気にかかるが、冷えた山頂の空気がちょうど火照った体を冷やしてくれて、心地よい。イツキとロクショウは池の周囲を徘徊した。

池を半週したところは急峻。樹が懸命に張り付いているようだ。

その下を見下ろすと、薄汚れた物が樹の根元にもたれかかっていた。イツキとロクショウは互いに見合った。

「あれって、メダロットかな？」

「泥で汚れ、あちこち苔やキノコが生えていますが、恐らく」

イツキたちの様子に気付き、アリカとプラスも半週地点まで行き、下を覗いた。イツキはペンライトの光を当てた。酷い有様だが、間違いなくメダロットだ。近寄らないと分からないが、脚部の形からして飛行タイプと思われる。

「こんなところにポイするなんて！あんまりよ！」

アリカが怒り心頭のためり吠えた。メダロットが捨てられることは今年が初めてではない。去年も、三体のメダロットが山に捨てられていた。大抵の場合、動けないようエネルギーを抜かれて捨てられるので、可哀想なことにメダロットたちは何もすることができなくなる。

そして、今イツキたちが見ているメダロットのような末路を迎える。

「まだ、あいつ動けるかな？」

「イツキ、気持ちは分かるけど、それは止めといたほうがいいわ」
アリカはイツキが助けることに反対した。

「絶対とは言い切れない。けど、エネルギーを抜かれても微かに意識はあるらしいわ。それで、自分たちが捨てられたことも何となく分かるみたいよ。だから、仮に彼、彼女を助けたとしても、人を攻撃するかもしれないって」

メダロットの頭脳であるメダルは謎が多い。機械のボディが無ければ動けないはずなのに、メダロットはその状態でも思考による生体活動を続けられることが最近、判明した。イツキとアリカも週間メダロットの視聴者なので、そのことはよく知っているつもりだ。

イツキはアリカの言うことを理解していた。ただ、あの朽ち果てた存在を一度見た以上、手を差し伸べずにはいられなかった。

「危険かもしれない。…それでも、頼むよアリカ。今回だけ！今回だけは、見逃してくれないか？」

「見逃すって…。助けたあと、あんたあの子をどうするつもり？まさか、里親でも募集するの」

イツキはしばし考えたのち、おもむろに顔を上げた。

「僕が…引き取るよ」

「でも、あんたのお父さんは許しても、お母さんは厳しいから駄目なんじゃ」

「何日かかっても説得してみせるよ」

イツキは真っすぐにアリカを見据えた。いつものイツキらしからぬ真剣な眼差しに、アリカはなかば自嘲気味に首を振った。

「じゃあない。協力してあげる。もしかしたら、幽霊騒動の犠牲者の線もありうるし」

「ありがとう、アリカ」

そうと決まったら、次にどう救出するかだった。取っ掛りは多いが、所々ぬかるんでいるので安全ではない。

「アリカ殿、イツキ。その役目、私とプラスに任せてくれないか？」

仮に全員で降りているところを見られたら、あらぬ疑いをかけられるかもしれない」

今すぐ来ないだろうが、他の観光客が訪れない保障はない。ロクシヨウの言うとおり、全員で降りるところを目撃されたら、言い訳に時間がかかる。というわけで、ロクシヨウとプラスの二体であるメダロットを引っ張り上げることにした。

「ねえ、皆さん。あの櫟かしに絡みつく蔓は使えるかもしれないわ」

プラスの見る方角には太めの櫟があり、ちょうどイツキの小指ぐらいの太さの蔓が絡まっていた。ロクシヨウは櫟を傷付けぬよう、チャンバラソードで慎重に蔓を切り落とした。ロクシヨウは肩に蔓を巻いて、まるで軽業師のごとき軽快な動きで急峻を下り、あのメダロットの体に蔓を巻き付けた。イツキ、アリカ、プラスが例のメダロットを引き上げ、ロクシヨウが朽ちた体を後ろから押し上げて、樹などにぶつからぬよう補正した。

「皆、ありがとう」

イツキは心を込めて礼を述べた。

イツキ、アリカは生えた植物を手で払いのけ、池で濡らしたタオルでメダロットの体を拭いた。大体検討は付いていたが、そのメダロットは間違いなくトンボ型メダロットのドラゴンビートルだった。ドラゴンビートルは重力系攻撃のメダロット。重力攻撃を得意分野とするメダルは「クマ」だから、普通に考えたらクマメダルが装着されているかもしれない。

イツキは背部の歪な形になったメダル装着部のハッチを開き、メダルが装着されているか確認した。想像どおり、クマメダルが装着されていた。しかも、メダルは一段階進化していた。

イツキたちは下山した。途中、他の人や管理事務所のおじさんにとがめられたら、調子に乗ってはしゃいでいたら、樹などに体を打ち付けて機能停止したと誤魔化した。

5 おどろ山探索記 (打ち捨てられた者) (後書き)

ティンペットとメダル入手方法に、入手メダルが原作と異なります。次回から、ゲーム本編でも活躍するあの二人と二機が初登場します。また、スカートめくり事件は何らかの形で挿入したいと考えています。

6・おどろ山探索記二（少年と少女）

イツキたちが下山してから一時間経ったあとのこと。

管理人の男性が山の様子を見に行こうとしたら、女の子が助けを求めて事務所に駆け寄ってくる。

「君、どうしたのかね！？君？」

管理人は少女に声をかけた。少女は涙ぐんで管理人の傍まで寄り、いじらしげに顔を上げた。管理人の男性は目を見張った。ピンクの洋服シャツを着た少女は一言で表せば、美しい。程よく丸みを帯びた顔立ちに、ふんわりと柔らかいオレンジがかったツインテールの金髪、少女漫画のように澄んで潤んだエメラルド色の瞳。そして、全身から漂う儂げな雰囲気、管理人に少女を守ってあげなければという気持ちを湧き起こさせた。管理人はガラス細工でも持つような手付きで、少女の肩に優しく手をかけた。

「もう大丈夫。ここは安全だ」

「本当ですか？」

両手を握り締め、ゆっくりと潤んだ瞳で見上げる動作がまた可愛らしい。

「ああ、おじさんは嘘をつかない。ところで、君の名前は？そして、一体何があって助けを叫んだのかい？」

「…ナースちゃんか…。ナースちゃんが…連れ去られちゃったんです」

「ナースちゃん？」

管理人がオウム返しに聞くと、少女はメダロットですと答えた。

「君はそのとき、謎の声とか変な物を目撃したかい？」

「いえ、変な物は見当たりませんでした。変な声なら…。少し、落ち着きを取り戻したましたから、詳しくお話ができそうです」

「そうか。では一旦、中で座って落ち着いてからにしよう」

管理人は事務所の中に少女を招き、椅子を差し出した。事務所内

は小型の液晶テレビや小型冷蔵庫、他、里山のパンフレットに本など幾つか細々とした物が置かれていた。

「さ、あまり綺麗なところではないが。ひとまず、座りなさい」

「ありがとうございます」

少女は丁寧に謝辞を述べて着席した。その座る動作からして、管理人に少女が深窓生まれの者と悟らせた。

少女は順を追って、自己紹介とここに駆け付けた経緯を話した。

「私の性は純米、名はカリンと申します。御神籤町のお隣のメダロポリスに暮らしています。ここにきたのは、以前から一人で山に登るといのはどんなものか知りたくて、この近隣のおどろ山に來ました。山の中腹地点近くまで下山したとき、がさごそと、茂みから物音が聞こえました。ナースちゃんが茂みの裏に様子を見に行くと、ナースちゃんが悲鳴を上げたんです！私、急いでナースちゃんの身を確認しようとしたら、突然、この世の物とは思えない声で『置いてけ…。森を汚す機械を置いてかなければ…。お前の魂を喰らう…。』と言われました。…。でも、ナースちゃんは私の友達です。私は勇気を出して茂みの裏を覗くと、そこにはナースちゃんの姿がありませんでした。そしたら、今度は同じ声で不気味な笑い声が出たもので…。私…。」

カリンという少女はまた涙ぐんだ。管理人はせかさず、少女が自ら話を再開するのを待った。少女は震える手でハンカチで涙を拭くと、小さく咳払いした。

「…こほん。すみません。…私、怖くてナースちゃんを置いて逃げてしまったのです…」

カリン少女はそこで言葉を切った。色々詳しく聞きたいが、一と言えることは、幽霊騒動における新たな被害者が出た。

今日もまた、イツキ、アリカ、ロクシヨウ、プラスの四人はおど

る山に向かった。拾ったメダロットは昨日、帰りにメダロット研究所に立ち寄り、事情を話すと、メダロット博士はあのメダロットの修復を快諾してくれた。

「ティンペットまで傷ついておるのう。わしも忙しいからな…。そんな不安そうな顔するな。今日の夜にはちゃんと終わらせておくから、日を改めて迎えにきなさい」

明日か。今になってイツキは少々不安になった。両親の前に、あのメダロットが僕を受け入れてくれるかどうかが問題だ。だが、引き下がる気はない。こうなった以上、何としてでも彼、彼女を迎え入れたい。ただの偽善かもしれないけど…。

「イツキ、どうして落ち込んでいるの？」

アリカが心配そうに僕の顔を覗いていた。自分でも気付かないうちに、顔を下に向けていたようだ。

「何でもないよ」

「あのメダロットのことでしょう」

イツキは思わず背筋を伸ばした。それを見て、アリカはやっぱりと言った。

「今更、悩んだところでしょうがないでしょう。あんた一人で説得が無理なら、私も拾うのを協力したちゃったし。いざというときは、それなりに手伝ってあげる」

アリカのこういう積極的な面はときとして疎ましくも思うが、こういうときには頼り甲斐がある。ただ、今回のことは自分が撒いた火種。イツキは出来る限りアリカの手を借りないよう心がけた。

四人はおどろ山まで来て、いざ入山しようとしたら、管理事務所のおじさんに止められた。

「駄目駄目。せめて、大人の人も連れてきなさい」

「昨日までは入って良かったのに、どうして!？」

アリカがおじさんに聞いた。

「いやな。実は昨日、小学生ぐらいの女の子が被害に遭ったんだ。昼間から幽霊なんて出やしないだろうが、安全の為、ゴールデンウ

イクいつぱいまでは高校生以下は保護者同伴じゃなきゃ入れないことになった。というわけで、今度から保護者と一緒に来てくれ」

イッキはアリカが噛み付くと思ったが、意外にもアリカは大人しく引き下がった。おじさん一安心していたが、イッキは絶対にアリカはこの程度のことじゃ諦めないことが分かっていた。イッキはアリカに連れていかれるまま、おどろ山周囲を歩いた。アリカが足を止めた。入山口から二キロ離れたところ、見回りの人もいなくて、辺りに人家もなく人氣が無い。フェンスはよく見かける緑色のもので、上に沢山の棘が付いた鉄条網も巻かれていない。

イッキはアリカにおずおずと尋ねた。

「アリカ、まさかだけど、ここから入山する気？」

アリカは満面の笑みで答えた。

「ええ、そうよ」

「アリカちゃん、それはしていけないことじゃ……」

ブラスはアリカを止めようとしたが、アリカはもうブラスの言葉にすら耳を傾けなかった。

「ジャーナリストたる者、この程度のことでは根を上げてちゃやってられないわ。仮に見つかっても、まだ子供だから、小一時間お説教されるだけで済むわ」

「……僕は根を上げてほしい……」

「イッキとロクシヨウは来なくていいわ。これは、私一人の問題だから」

アリカはそう言つて、フェンスを越えた。

「しょうがないわね」

ブラスはまるでわがままな妹に手を焼くお姉さんのようだ。ブラスも遅れてアリカの後を追った。

「どうする、イッキ？アリカとブラスの二人を追うのか？」

「……うん、行こうと思う。アリカには昨日の恩があるし、それにブラスだけだと、幽霊たちに襲われたとき対処できそうにないし」

イッキとロクシヨウも、仕方なしにフェンスを越えての入山をし

た。しばらく山を登ると、何とスクリューズと出くわした。スクリューズの三人は血相を変えていた。スクリューズが口を開く前に、アリカがいち早く喋った。

「ちよつと！あんたたちが何で山にいるわけ！」

「それはあたいらの台詞だよ」

キクヒメはポケットから櫛を出して乱れた髪を整えた。スクリューズとそのメダロットの様子はおかしかった。イワノイ、カガミヤマは自身の愛機のブルースドッグと鋼太夫を背に抱き、キクヒメの愛機、セリーニヤはぼろぼろだった。

「一体何があつたの。ていうか、あんたら何の目的があつてここに来たの」

「だから、それはあたいらの台詞だって言ってるでしょ」

イワノイが口を挟んだ。

「姉御、無駄話している暇ありません。あいつが来るかもしれない」

「あいつ？」

「お前らー！」

そのあいつが高らかに叫んでスクリューズを追いかけてきた。キラリとしたきつく歪められた意志の強そうな二重の瞳と、端正な顔立ちにヒカルとよく似た髪型をしたイッキたちと同じ年ぐらいのその少年は、怒りも露わにスクリューズを睨んだ。少年の後ろには、メダロットが控えていた。

「あれは……！」

イッキ、アリカは目を奪われた。名も知らぬ少年のメダロットは、ライオン型メダロットのウォーバニットだった。昨年、改良型ヘッドシザースと同時期に発売された射撃タイプのメダロット。装甲、戦闘能力のバランスが取れており、パーツ一式だけでも現在の最低市場価格で十三万円もする。セレブご用達と言っても過言ではない超高級品。その分、扱いが難しく、玄人向けのメダロットでもある。イッキは思い切って少年に聞いてみた。

「その、まさか。それ一体だけでこの三人を……？」

「何だお前は」

高飛車な物言いにむかつときたが、イツキは名乗り上げた。

「僕、天領イツキ。ギンジヨウ小学校の三年生。で、隣にいるのはヘッドシザースのロクシヨウ。……えっと、それで君……は、こいつらに何をされて怒ったの？」

「イツキといったな。ひょっとして、こいつらの関係者が親玉か？」
「僕がこいつらの親玉？」

「お前ら！さつきから、俺らのことをこいつら、こいつら呼ばわりしやがって！俺ら、泣く子も黙るスクリューズっていうんだぞ」

イワノイが呼び捨てに耐えられず、横槍を入れた。二人とも、イワノイは無視して話を進めた。

「で、君はスクリューズに何かされたの？」

謎の少年は、じつとスクリューズとイツキたちの様子を見た。そして、少なくともイツキたちとスクリューズとやらは、そこまでの仲ではないことだけは理解した。

「コウジさん！」

また、誰かがこちらに来た。

「またくるの？」

アリカはいい加減にしろという感じで言った。イツキもまたかと思ったが、その誰かが視界に入った途端、その思考は彼方へと消えた。ピンク色のシルクの洋シャツを着た、オレンジがかつた金髪ツインテールの美少女が、謎の少年のものと思わしき名を呼びながら、一触即発のこの場に来た。

「カリン！しまった。頭に熱が上って、君を置いて行ってしまうなんて……何たる失態！」

コウジという少年は自分の失敗を悔やむように拳を握った。少年の後ろに控えるメダロットが、初めて口を開いた。

「コウジ、俺もカリンのことをすっかり忘れてたから、お互い様だ。次からは、互いに注意しよう」

「アーチェ」

若干、わざとらしさを感じると展開と会話のおかげで、四人は少年がコウジという名前、彼の愛機の名がアーチェ、そして、カリンという美少女がコウジという少年の関係者だということを知った。

アリカは問い詰めるようにキクヒメに視線を据えた。

「キクヒメ。ひょっとして、あんたたちあの女の子にまた卑怯な勝負を挑んで、彼を怒らせたんでしょう」

「やっぱりそうなのか！」

荒ぶるコウジ少年。コウジ少年に同調するように、アーチェというウォーバニットも二つの長い銃口が付いた右腕をスクリューズに向けた。キクヒメは観念して、両手を上げてぶらぶらと動かし、降参の意を示した。

「わーった、わーった。こっちの負け。理由も話すから、それで勘弁」

コウジは荒ぶる気持ちを抑え、ウォーバニットも銃口を下げた。だが、姿勢はいつでも発射しやすいよう崩さなかった。

スクリューズの話搔い摘むと、三人は幽霊騒動におけるパーツの隠し場所を探しにきた。正義のためとかではなく、あくまで自分たちの物にするためである。そして、コウジとカリンの二人に出会った。互いに何があってここに来たか聞きあい、だんまりを決めて行こうとしたら、コウジが聞こえよがしに下らないと言ったのが癪に障り、勝負を挑んだら返り討ちに遭った。

イツキもそうだが、アリカにコウジも心底呆れかえっていた。

「挑まれた勝負は受けて立つ！それ以上に、俺はそいつらの火事場泥棒のような行為が許せねえ」

「そんなに叫ばないでよ。もう懲りたから、これで勘弁」

「待て。そのリーダー機のペッパーカーヤットはまだ機能停止してないぞ」

キクヒメは困ったように頬を掻いた。そして、イツキを見て怪しげにほくそ笑み、イワノイ、カガミヤマに視線を送り、二人は無言

で了解した。

「あーっ！！！！後ろー！！！！」

三人は同時に叫び、コウジとカリンの後ろを指した。思わず、スクリューズ以外の者は振り返ってしまった。気付いたときには遅し、スクリューズの三人はメダロットのパーツを自宅へメダロットに収納にし、とんずらをこいていた。

「じゃ、後は任せたぜいイツキ」

キクヒメの捨て台詞が虚空に響く。イツキ、アリカ、ブラスは肩を落としたが、コウジとアーチェはその気のようにうだ。二人はイツキとロクシヨウににじり寄る。

「俺はどっちでも構わない。イツキといったな。お前がやる気なら、俺は受けて立つぜ。安心しろ。さっきの奴らには援護役としてもう一機も戦わせたが、お前との戦いでは、このアーチェ一体だけだ」
「君がその気なら、私もその気になろう」

イツキが断ろうとしたら、今度はロクシヨウが自ら戦いを申し出た。前にも述べたが、常日頃は冷静なロクシヨウも戦いとなると人が変わる。それも、援護役を付けたとはいえ、スクリューズ三人三機を二機で追いついたほどの相手だ。やる気を見せるロクシヨウに対し、アーチェはどこか涼しげな感じがした。

今日は何となく嫌な予感がしていたが、その予感は当たっていた。しょうがない。一度乗りかかった船だ。やるだけやってみるか……。

「コウジさん」

展開についていけないカリン少女はコウジを止めようとしたが、コウジは「カリン、大丈夫。俺は負ける気はないから」とカリンの制止を先に止めた。

「はいはい！私、審判やる」

審判役を買って出たアリカは、いきなりロボットファイトと言った。イツキは吹っ切れた。

ええい、ままよ！もう、やけくそだあ！矢でも幽霊でもなんでもこい！

ばばぁん！ばばぁん！

ウォーバニットの右腕から、高出力の弾丸が二発発射される。ロクショウは避けるのに必死だ。三対二とはいえ、あのスクリューズを相手に優勢に立ち回っていたのだ。手強い。連続した鋭利なライフル攻撃に、あのロクショウが反撃に転じられないでいる。

コウジが指示を出し、ウォーバニットのアーチェは左腕のマシガンも撃ち始めた。二発、右足首と右腕上腕部に食らったしまった。威力の低いマシンガンだったので、幸い、腕と脚はまだ壊れていない。右腕のライフルなら、一発でおじやんになっていた。やはり、コウジはただの物頼りではない。扱いが難しいウォーバニットのパーツを使いこなさせているのだから、腕前は本物だ。

「アーチェ！チャージ準備」

アーチェの動きが止まり、ロクショウが攻撃に出る。

「一、二。ゴォー！」

ロクショウのソードがアーチェを襲う。しかし、アーチェは常識では考えられないほどのスピードで、ロクショウの一刀を避けた。いや、ウォーバニットの雄ライオンの鬣たてがみを模した部分が二箇所、枯葉に落ちた。

コウジが感心そうに呟く。

「へえ。二秒の隙があつたとはいえ、よく当てられたな。だが、次はそうはいかんぞ」

ウォーバニットの頭部の能力は自身のスピードを急上昇させる。

その分、エネルギー充填にタイムロスがあり、その隙に決定打を浴びせられなかったのが惜しい。

ウォーバニットの掃射は益々激しさを増し、ロクショウは確実に弾が当たっていた。スピードか。でも、そこに隙ができるといいんだけどな。イッキはロクショウに逃げの一手を選ぶよう、命令した。

ロクショウはとにかく逃げ回ったが、スピードアップしたアーチェからは逃げられない。ロクショウが迫るアーチェに小石を投げた。

ウォーバニットは小石を撃った。小石は大破した。もう、駄目だ。そのとき、奇跡が起きた。何と、小枝がウォーバニットのカメラアイにぶち当たった。右腕ライフルの弾丸は小石を大破し、樹の小枝を折った。その衝撃で、小枝はアーチェのほうに飛んできたのだ。アーチェの動きが止まる。今しかない！

イツキの号令と、ロクショウの動きはほぼ同時だった。ロクショウのハンマーがアーチェの右側頭部を襲う。アーチェは横ざまに倒れ、背中からメダルが飛んだ。

「そんな馬鹿な！」

コウジよりも、そう叫びたいのはイツキだった。実力的には、自分たちより上のはずのコウジとアーチェに運で勝ってしまったのだから。イツキはどう感情を表現すれば分からなくなった。

口を開けっ放しの二人にお構いなく、アリカはイツキとロクショウの勝利を告げる。

「イツキ、ロクショウおめでとう！勝負は時の運というし。運も実力の一つと考えれば、あなたたちのほうが強かったということよ」「ふっ…。そのとおりだな」

アリカの言動に納得したように、コウジは冷静さを取り戻した。

「例え小さくても、あのスピードで対象物に当たるのはまずい。だから、石や枝を投げつけてきたら、すぐに撃ち落とすよう指示を出しておいた。だが、それによって後方の物まで飛んでくる計算をしていなかったのは、僕のミスだ。…というわけで、俺の負けだ。イツキ…？だっけ？君にアーチェの右腕を進呈しよう」

「えっ？いいの？今の別に真剣口ボトルしたと決めたわけでもないし」

「いいんだ。この分だと、君らはあの三人と無関係のようだし。迷惑料も兼ねてだ。さあ、受け取ってくれたまえ」

直接戦ったのはロクショウのほうだし、やると言い出したのも口

クシヨウ。つまり、ロクシヨウの取り分である物を自分が断るのは、コウジにもロクシヨウに対しても失礼だと思い、イッキはパーツを受け取ることにした。

アリカがコウジ、カリンに聞こえるよう耳打ちする。

「熱い友情の中悪いけど。人がきそうよ」

全員、耳をそばだてた。

「ここいらだな？銃の音とかが聞こえた場所は」

「ああ。多分、どっかの馬鹿がロボットでもしているのかもしれない」
四人は顔を見合わせて、イッキとアリカはロクシヨウを。コウジとカリンはアーチエを抱え、二手に別れた。

「コウジ君と言ったわね。機会があれば、合流しましょ。私、修復系パーツを一つ持っているから」

「何故？」

「あなたたちの目的も幽霊でしょ。だから、情報交換も兼ねて、ね」

コウジとカリンはその場から去った。何も言わなかったが、アリカは親指と人差し指で丸を作り、「片目瞑ってオーケーって返事した。おきざなこと」と言った。そういえば、慌てていたので、まだウォーバニットのパーツを貰っていなかったな。

6 おどろ山探索記二（少年と少女）（後書き）

ようやく、カリンとコウジの二組登場。バージョンが違うので、スミロドナッドの出番はなし。話の都合上、カリンの愛機であるセントナースの出番も無しです。

次回でおどろ山回の決着をつけるよう頑張ります。

7 おどろ山探索記三（謎の集団）（前書き）

一話でまとめるため、とんでもない文字数になってしまいました。
先にカブトバージョンを完成させたので推敲作業がはかどり、カブ
トバージョンの誤字脱字の訂正にも役立てた。

7・おどろ山探索記三（謎の集団）

イツキたちはどうにか山頂まで着いた。おどろ山は緩やかな傾斜だから、子供の足でも普通に登る分にはあまりきつくない。だが、見つかると面倒なので、急ぎ足で登ったイツキたちは汗だくで肩で息をしていた。少し遅れて、コウジ、カリンも到着した。

全員、人に見えず、尚且つシートが無くて座れる木陰がある場所を選んだ。コウジが腰のベルトに付けたストラップ型の水筒入れに入れたペットボトルを取り出し、一口飲んでから、用件を切り出した。

「アリカと言ったな。さっきの約束どおり、情報交換だ。あと、イツキ」

「うん？」

見ると、コウジがアーチェの右腕を差し出した。

「さっき渡せなかったから、今この場で受け取ってくれ」

イツキはこくりと頷き、ありたかくアーチェの右腕を戴いた。陽光の下で座禅するロクショウが微かに

反応した。喜びをかみしめているのかもしれない。

「ねえ、コウジくんと言ったわね？修復はしないでいいの？」

アリカがさっきの約束の件を聞くと、コウジはウォーバニットのアーチェを転送した。アーチェは、ほぼ無傷な形でそこに立っていた。

「回復パーツ…じゃなくて、予備のパーツも持っているとかな？」

「ああ、そのとおりだ。二セット予備がある」

「じゃ、計三セット！」

イツキとアリカはずっこけそうになった。超高価なウォーバニットのパーツを持っている時点でコウジが金持ちだということは分かったが、予備の一式が二セットもあるとはかなりのぼんぼんと考えられる。

カリンは以前から一人で野山に出かけてみたかった。愛機の看護婦型メダロットのセントナースをお供に近郊のおどろ山に向かい、例の幽霊と思しき者にナースが連れ去られた。コウジは連れ去られたナースの心配もしたが、それ以上にカリンを怖がらせた者に怒り、カリンもナースを連れ戻したい一心で山に向かった。しかし、子供だけの入山は事務所のおじさんに止められてしまい、仕方なく裏側のフェンスを越えて入山した。そして、ことは前回起きた顛末にまで繋がる。

一方、イツキとアリカから話せることは特になく。ニユースなどで既に語られているようなものばかりで、コウジはやや不満気だった。

「お前たちの情報はそれだけか。それなら、昨日、ネットで調べた情報とあんまり変わらないな」

「ごめんね。一方的に話させちゃっただけみたいね」

アリカが珍しく詫びた。

探索は振り出しに戻り、一同、落胆したとき。機械じみた声が聞こえた。

「ヤナギー！ヤナギー！ドコにイルのー？いるなら、カンちゃんもイルからお返事してちょーだい！」

四人と三機は隠れて様子を窺った。色んなパーツを付け合せた飛行メダロットが、「ヤナギ」という人物へ懸命に呼びかけていた。そのメダロットの近くには、「カンちゃん」と思しき腰の曲がった老婆がいた。

四人と二機は小声で会話した。

「お子様でしょうか？お孫様でしょうか？」とカリン。

「男にも聞こえるけど、女に聞こえないこともない」とイツキ。

「試しに聞いてみる？」とアリカ。

「子供だけで来ていること突っ込まれるかもしれないから、もう少し様子を見てからのほうがいい」とコウジ。

「誰かしらねえ？」

プラスにいきなり話を振られて、アーチエは首を捻るしかなかった。

「私が行こう」

ロクシヨウが自らあの一組に話しかけることにした。

「失礼。そちらのご老体と、その空を飛んでいる方。誰をお探しかな？」

「君は誰？」空を飛ぶメダロットが尋ねる。

「ロクシヨウと申す」

「ロクシヨウ。中々カツコイイ名前だね。僕、タロウ。カンちゃんと一緒にヤナギを捜しにきたんだ」

今がその機会と、イツキたちは白日の下に身をさらした。

おばあさんとタロウと名乗るメダロットは驚いた。

「あれまあ！お前さんたち、今は子供だけで山に入っちゃあかんぞ」
コウジの言ったとおり、おばあさんそのことを指摘した。

「おばあさん。私、友達を連れ戻しにきたんです」

「何！？どういうことぞな」

イツキ、アリカがどう言い訳しようか思考していたら、カリンが正直に事を話した。

「ふむふむ。なるほど、なるほど。お友達のメダロットを助けるために来たとな」

「一つ聞いてもよろしいでしょうか？おばあさん」

「娘さんや。私を呼ぶときは、できればカンちゃんと呼んでおくれ」

「分かりました。では、カンちゃんさん。先ほど、そちらのタロウさんがヤナギという方を捜しておられました、ヤナギとはどなたですか？」

カリンの質問に、カンちゃんというおばあさんにタロウも押し黙った。

「すみません…。聞き入ったことをお尋ねしまつて」

「…いや…いいんさ。どうやら、娘さんとそのお友達がここに来た動機と私の動機は同じようだし。役に立つどうか分からんが、お前さんたち、一つこの老婆の話を聞いてくれないかい？」

カリン以外の者は顔を見合わせて同意し、このカンちゃんという人の話を聞くことにした。カンちゃんばあさんはビニール製のシートを敷き、座るよう促した。

「あ、どうも」と、人もメダロットも一礼を述べてからシートに座った。正座をすると、カンちゃんは「あー、かめへん、かめへん。足伸ばすなり、股広げるなりかまへん」と、自ら正座を崩した。それに倣ってカリン以外の者は皆、楽な姿勢を取った。

「ほれ、飲みなさい」

カンちゃんは今全員に冷たい麦茶を配った。冷たい麦茶は不安と一緒に喉の奥まで流れ込んだ。子供たちの気持ちが落ち着いていた頃を見計らい、カンちゃんは語り出した。

ここでは、カンちゃんの語りを要約する。カンちゃんはメダロットたちと一緒に暮らしているが、どこかで孤独を感じている。だから、偶然とはいえ久しぶりにじつくりと人と話せることが嬉しくて、本題とは無関係なことまで話してしまう。正直で純なカリンは喜んで耳を傾けたが、それ以外の者は、ためらいがちに語りを本題へ戻すように言った。

カンちゃんにはナツコという孫娘がいる。ナツコは高校生のときに両親が他界し、祖母であるカンちゃんが引き取った。

多感な時期に両親を亡くし、ナツコは度々苛立ちを周囲にぶつけ、よくトラブルを起こした。そんなナツコを支えたのがカンちゃん以外にもう一人いた。それが、機体名称がミスティゴーストという幽霊型メダロットのヤナギ。カンちゃんとヤナギの支えもあり、ナツコは頑張って大学に進学し、一流のキャリアウーマンとして成長した。

そのナツコが長期海外転勤して二日経った日のこと。ヤナギが忽

然と姿を消した。それから程なくして、巷で話題の幽霊騒動を耳にした。カンちゃんが悪い予感がして、毎日拾った野良メダロットたちに搜索させて、自身も週に三日、おどろ山へと足を運んだ。

「ヤナギは間違ってもこんなことをする子じゃないよ。ヤナギもきつと、どっかの幽霊だかを使った奴らに去らわれたに違いない」

カンちゃんはヤナギも被害に遭ったに違いないと言っていたが、反面、ヤナギが一枚絡んでいるのではないかという不安も読み取れた。

イツキたちは小半時ほど雑談したのち、カンちゃんたちと別れた。意外なところで有力な情報を得た。最初の被害者、あるいは、ヤナギというメダロットが加害者の可能性がある。

おばあさんが警察に連絡しないのは、どちらか判別しかねているからだろう。

「あれほどの高齢だと、山に登るだけでも一苦勞だろうし、心労も大きいだろうな」

ロクシヨウが今日初めて会ったばかりのカンちゃんを心配しているようだ。

「はい、注目！」

アリカが先頭に躍り出た。

「何だよ、アリカ？」

イツキがアリカの意図を聞いた。

「あのさあ、私の推測を聞いてほしいんだけど」

「時間の無駄にならないか」

情報交換の件を気にしているのか。コウジの腕を組んだ態度から、アリカの推測を拒んでいることが知れた。

「そう言わないでコウジくん。拝聴の価値はあると思うわ」

イツキやコウジに有無を言わず、アリカはまくしたてるように

推測を並べた。

「いい、第一の犯行から昨日の犯行まで、全ておどろ池とそこに通じる道でおきたわ」

「だから、そこに行こうと…」

「イツキは黙ってて。あと、コウジくんも。そこで、私思っただけど、もうおどろ池とその周辺では幽霊は出ないと思うの」

「何故ですか？」

カリンの質問に、アリカはグッドタイミングな突っ込みと言わんばかりににやついた。

「単純なこと。犯行現場として、おどろ池は目立ち過ぎるからよ。

本当の幽霊ならどうしようもないけど、人が関わっていたとしたら、話は別。私が犯人なら、昨日のカリンちゃんを目途に移動するわ」

「じゃあ、ナースちゃんは…もう…」

「気を落とさないで。おどろ池周辺での犯行はカリンちゃんが最後であつて、おどろ山での犯行は後一回か二回ぐらいする可能性がある。考えられる場所はおどろ沼よ。山頂もありうるけど、あそこだとあまりにも人の出入りが多い上に、見晴らしもいいから実行するにはリスクが大きい場所。でも、湿地帯であまり人が寄り付かないおどろ沼は別。あの周辺で犯行はまだ起きていないし、それに、来るとしたら物好きな子供や昆虫採集とかを目的にした人だけだと思う。あくまで推論だけど、犯人は後一回か二回、おどろ沼の周辺で犯行に及ぶかもしれない。あと、市場で強奪されたメダロットが出回っていないところを見ると、犯人はある程度まとまってからどこかに売りさばくつもりかも」

名探偵気取りのジャーナリストアリカの推論に、イツキ、コウジ、カリンは納得した。

「あくまで推測の域を出ていないが、理に適っているな。それにしても、よくそこまで考えられるもんだ」

「そりゃー、こう見えてもジャーナリストの端くれよ。良い記事を書くには、一定の想像力も必要よ」

コウジの言葉にアリカはちょっと得意気だ。

「では、これからどうするのですか？」

「ええと、まずはおどろ池に行つて軽く証拠探し。そのあと、夕方までおどろ沼に張り込みましょう」

「その流れだと、我々が囷になるといふことが。当然といえば当然だが……」

ロクショウは躊躇っているようだ。それもそうだ。囷になれと言われて、喜んではいそひそかと言う者などいやしない。それでもロクショウ、プラス、アーチェは渋々同意した。

「まあまあ、危険な目に遭うのは私たちも同じなんだし」

コウジも不安を隠せない。

「これで奪われたりでもしたら、ご近所どころか末代までの恥だな」
「イツキも同じことを言いたかった。子供だけで上手くいくどうか丸つきり自信が無いし、仮にパーツとティンペットを奪われて、しかも子供禁制のときに勝手に入山したことがばれたら、どんな大目玉を食らうか予想できない。」

人目を避けておどろ池へ行き、その後、おどろ沼へと向かった。

おどろ池は山の中腹地点の右のほう。おどろ沼は、中腹地点より百米ートル登り、左に曲がつて少し登り、まっすぐにきつめの傾斜を降りたところにおどろ沼がある。おどろ沼へ向かおうとした途中、山伏一行のメダロットにあやうく姿を見られそうになったときは、生きた心地がしなかった。

おどろ池と違い、おどろ沼は整備が行き届いていない。あっちこっちに草が生えて、手付かずな自然の状態。そのおかげで、おどろ沼と周辺の湿地帯にはトンボにカエル、ゲンゴロウ、タガメなど、数を減らした水生生物が生息しているから、たまに訪れる人がいる。アリカの推測を頼りにここで張ったが、夕方の五時以降になって

も現れない。皆、早く出ないかと待ちくたびれていた。

これなら、家でのんびりゲームでもしていたほうが良かったかな。イツキは陽が沈む西の方角を見た。見たところで何も起きないが、他にやることがないから見た。うん、今日も夕陽は綺麗だな。そう思つて夕陽を眺めていたら、黒い一点が夕陽に浮かんだ。鳥か目の錯覚かなと思つたが、黒い点は明らかにこちらのほうへとやってくる。

だんだんと距離が縮まり、黒い物体の正体が判明した。

メダロットだった。イツキはそれに見覚えがあるような気がした。イツキの異変に気付き、近くのロクショウ、アリカも西の方角を見上げた。

「あれは、昼間会つたご老体のメダロットではないか！」

そうだった。樹上の枝葉が邪魔をして見えにくいのが、あのメダロットは昼間会つたカンちゃんというおばあさんのメダロット、タロウだ。ヤナギというメダロットを捜しにきたのかな？その割りには、様子がおかしいようにも思える。

「人のこと言えないけど、何でこんな時間帯に飛んでいるのかな？ちよつと、一声かけてみようか」

イツキ、アリカ、ロクショウは、あらん限りの大声で叫んだ。声はタロウの耳に届き、彼はすーっと、沼の近くまで降りてきた。

「何でこんなところまで飛んできたの！？ヤナギとかいうメダロット捜しにきたの？」

イツキがタロウに尋ねると、タロウは首を振り、子供のような涙声で危機を伝えた。

「うっ……。あのね……幽霊が……幽霊がね……僕ら……僕らというのは、僕と同じカンちゃんに拾われた仲間のこと……」

「それで、君の仲間がどうしたの！？」

イツキは先を話すよう促した。

「……うん。それでね……幽霊たちがね、僕らとカンちゃんを襲つて、仲間を連れ去つちやつたんだ……。僕は何とか助かつて、急いで助け

を求めただけだ。君たちに声をかけられて、方向を間違ったことに気が付いたんだ……」

わーん！と、彼は堰を切ったように泣き出した。

「落ち着いて！君の来た方向は西だよね！じゃあ、ここを真っ直ぐ降りれば、カンちゃんの居るところに行けるの」

「ひつく、ひつく……。うん、そうだよ。……でも、酷い悪路だから人の足だと最低三十分もかかるし、僕一人じゃ、とてもじゃないけど君ら全員を運べないよ」

三十分。とてもじゃないが、間に合わない。かといって、このまま見捨てることもできない。コウジ、カリン、ブラス、ラムタムが彼らのとこまで寄り、コウジが良い提案があると言った。

「イツキ、アリカ。飛行パーツは持っているか？」

アリカは女性型の一つあると答え、イツキは無いと答えた。

「そうか。なら、イツキには俺の飛行パーツを貸してやる。それで、タロウ。俺ぐらいの重さなら運べるか？」

タロウは「うん」と首肯した。

「よし、そうと決まりや善は急げ！まず、カリンはアーチェに乗る。それで、アリカはブラスにイツキはロクショウに乗って、俺はタロウに乗る。ちょうどメダロットが四体もいるわけだし、その四体で一人ずつ運べばすぐに着ける」

そうして、彼らは細かいことは一切言わず。すぐに準備を整えた。怖いと言っている暇はない、イツキは覚悟してロクショウの背に乗った。

案内人として最初にコウジとタロウが飛び立ち、次にアリカとブラス、イツキとロクショウ、最後にカリンとアーチェが飛び立った。カリンが最後なのは、スカートを履いているためだから。

三十分もかかるところを、五分程度で目的地に到着した。タロウがおどろ沼に来るまでの時間、会話と準備時間によるロスタイムを差し引いても、十三分。犯人がいる場合、まだそんなに遠くには行っていないはず。

樹に囲まれた平らな土地に立つ二階建ての古風な民家に降り立ち、四人と四体はカンちゃんの名を呼んだが、返事が無い。

「もしかしたら、連れ去られたメダロットたちを追いかけたのかも！」

アリカはすぐにプラスの背に飛び乗った。

再び、彼らは上空に行く。

「カンちゃんの声が聞こえる！」

先頭を飛ぶタロウが下降した。森の中を、カンちゃんらしき人がさらわれたメダロットたちの名前を懸命に呼んでいた。四体は乗った人間が枝で傷付かぬよう降り立ち、四人と四体はカンちゃんの後を追った。

時を同じくして、イツキたちとはまた別に、連れ去られたメダロットの救出を試みる者がいた。その者は現在では使われなくなった廃工場にメダロットが保管されていることを知った。廃工場の中をこそこそと怪しげな者たちが出入りし、メダロット運搬の準備を計っていた。

物陰から、謎の集団の動きを観察するその者のメダロットに文章が送信された。

K少年とその友達たちが、集団と交戦する可能性有。

その者は困った。自分はこの持ち場を担当するだけで手一杯。しかし、監視役メダロット一体だけではどうにもならない。そこでその者は、ある人物に連絡した。

「ほい、もしもし。わしじゃ」

陽気なしわがれ声を聴くだけで、その者の緊張感がほぐれた。その者は手短に監視役メダロットの電文を伝えた。

「分かった。お前さんはそのまま任務にあたれ。わしは、彼が拾ったあやつを救援にあてる」

電話先の人物は極秘の特別回線を切り、早速、隣部屋にいるメダロットを訪ねた。

「ご機嫌はいかがじゃ？」

「んー…。まっ、ぼちぼちなところすな。メダロット博士」

彼はメダロット博士に会釈した。そのメダロットは昨日、イッキがおどろ池周辺で拾ったトンボ型メダロットのドラゴンビートルごと、光太郎。という光太郎名は、修復中に彼自らがその名を告げた。今は故人となった前マスターから授けられた名前らしい。

彼は誰かに拾われることを望んだ。だが、こうして再び起動してみると、心は喜びよりも、喉に物が詰まったような正体不明のえも言われぬものが覆った。ほんま、また人間を投げ所にしてええんやろか。それよか、上手くやっていけるのやろか。

そんな彼の気持ちなどお構いなしに、メダロット博士は至急、光太郎に地図で示した地点へ行くよう指示した。光太郎は訳を尋ねたが、肝心のところははぐらかされてしまう。

「わしが何故知っているかよりも、君の新たな友達となる少年が窮地に陥るかもしれんのじゃ。君自身の整理がついてないときに悪いが、今は黙って彼とその友達を救うほうが先決じゃ」

光太郎はいざというときには明白をつけられる性格だった。引っ掛かるところはあるが、光太郎は新たなマスターとなりうるイッキ少年を救いに行く決めた。

飛び立つ直前、メダロット博士はある物を光太郎に渡した。

「こんな物を使って、お上が見逃してくれますか？」という光太郎の問いに、メダロット博士は笑顔で返した。「大丈夫！しかるべきところには話を通しておる。きっと、これが役に立つはずじゃ。さあ、行ってきたまえ！」

ええい、ままよ！

首にある物を巻くと、光太郎は迷い振り切るように夕暮れへと向かってひとっ飛びした。

イツキたちはすぐにカンちゃんに追いつき、タロウにカンちゃんを任せて、イツキたちは前に行く者たちを追いかけた。

「あれって、どうみても幽霊じゃないじゃん！」

前に行くのは、白い金魚鉢のような形をしたヘルメットを被り、同色のスーツを着込む四人組と、黒いゴムスーツを着た二本の黄色い角を生やした大柄な者が、メダロットたちと一緒にカンちゃんのメダロットを抱えて走っていた。

「こらー！あんらた待ちなさい！」

アリカの叫びに謎の集団は振り返り、金魚鉢頭の一人が声を出した。

「ロボ！？ババアが若返ったロボ！？」

「くおらあ！誰がババアよ！！」

「ひえっ！おっかないロボよ」

「ていうか、お前ら何者なんだ！？」

コウジの指摘に、二本の角を生やした黒いゴムスーツを着た大柄な者が立ち止った。

「全く…何故にわしの嫌いな子供がこんなにおるのだ」

金魚鉢四人も立ち止り、イツキたちと対峙した。大柄な男が口を開いた。

「ふん、どうせ今日でこんな寂れた場所とおさらばするし。最後の手土産にガキ共のメダロットを奪うのもよかるう」

アリカは集団のリーダーらしき男に食ってかかった。

「あんたらが幽霊騒動の犯人なの！」

「ふおふお。威勢のいい小娘じゃ。そのとおりといえばそのとおりであるが、実行犯はほれ、こいつじゃ」

大柄な男は肩に抱えたボロボロのメダロットを指した。そのメダロットはミスティゴーストだった。ミスティゴースト…？まさか！「ヤナギ！君はひよっとして、ヤナギなのかい！」

イツキは男に抱えられたメダロットに呼びかけた。ミステイゴーストは酷い損傷をしており、機能停止しているかもしれない。だが、ミステイゴーストはゆっくりと反応した。

「誰……？ 僕の名前を呼ぶのは……？ カンちゃん？」

やはり、このミステイゴーストは例の「ヤナギ」であつた。アーチエが大柄の男の足元を撃ち、ロクシヨウがヤナギをキャッチした。ヤナギは体を震わせながら、独り言のように謝罪した。

「皆……カンちゃん……ごめんね。……ごめんね。皆とカンちゃんを酷い目に遭わせて……ごめんね」

「ヤナギといったな。一体何があつた？」

そつとヤナギを地面に置き、ロクシヨウがヤナギに聞くと、邪魔するかのよう到大柄の男が叫ぶ。

「こらー！ そいつを放さんか！ そいつは、ちよいとわしらの仕事を知りすぎた」

「もう、さつきからあんたたちは何者なのよ！」

大男は不敵な笑い声を上げ、金魚鉢たちも怪しく笑った。

「知らないなら教えてやろう。聞いて驚け！ そして、恐怖するがい！ 我らは、悪の秘密結社ロボロボ団。わしは、そこで幹部を務める者だ」

「ロボロボ団！」

ロクシヨウ、ブラス、アーチエ。メダロット以外の者は驚愕した。ロボロボ団といえば、十年前。メダロット史上最悪ともいわれる「魔の十日間事件」を引き起こした組織。単なる悪戯集団かと思われていただけに、この事件は世間をおおいに揺るがした。しかし、事件の幕引きと同時に組織は忽然と姿を消した。

以来、組織は自然解体したと考えられたが。よもや、まさかこんな形で幻となりつつあるロボロボ団と出くわすとは、イツキたちの予想を遥かに上回っており、四人は思考を停止した。

「ふおおおお！ 腰が抜けてしもつたか」

幹部と名乗る男はイツキたちの態度に満足したようだ。

人間と違って、三機のメダロットには特に驚きが見られなかった。ロクショウが幹部の男に話しかける。

「ふむ。それで、そのロボロボ団がこんな山奥でコソ泥する訳は何故だ？」

「な、何だとうロボ！」

金魚鉢の一人がコソ泥という言葉に反応した。

「反応しているところを見ると、自覚しているようですね」

プラスが無愛想に突っ込む。地団駄を踏む金魚鉢を押さえ、幹部の男が返した。

「ふん。秘密結社が毎回派手なことやるとは限らない。大願を果たすには、こうした人材を集めるための地道な活動もしなければならぬ」

「大願だと？」

アーチエが口走った疑問に、大男は先ほどより更に不気味に微笑んだ。

「我らの大願：それは、世界征服だ！！」

一同、しーんと静まった。大男に金魚鉢たちは、心底震えあがっているなど内心とても喜んでいた。だが、そうではなかった。アリカは吹き出しそうになる口を強く押さえた。

「ア：アリカ、こんなき、緊迫したときに寄せって」

そういうイッキもこみ上げる感情を抑えるのに必死だ。この緊迫した場でいきなり世界征服と言われては、笑わずにいられなかった。どうせなら、普通に資金源調達とか言われたほうが良かった。

ロクショウ、プラス、アーチエも肩を震わしていた。

笑いを堪えるアリカ、イッキをよそに、カリンはぷつと吹き出していた。

「お、お前ら何が可笑しい」

これが返答だと、コウジがわざとらしく高笑いした。

「あーはっはっはっは！どんな動機かなと思いきや。まさか、世界征服とはね」

今度は幹部の男が地団駄を踏んだ。

「おのれい。だから、子供は嫌いなんじゃ！えーい！お前たちメダロットを転送せい」

ロボロボ団五人はメダロットからメダロットを転送した。計十五体のメダロットがイツキたちの眼前に出現した。すつとんきよんな雰囲気は去り、シリアスな空気が再び漂う。

ロクシヨウ、ブラス、アーチエはさつき全速力で空を飛んだことにより、エネルギーを消耗していた。飛行系パーツはエネルギーの消費率が他の脚部より高い。その上、相手は数だけでもこちらの五倍以上。

「不味い状況になったわね」

あのアリカが弱音を吐いた。

自分たちを逃がさぬよう、ロボロボ団は囲いを広げ、徐々に締めてきた。

ピピィ。

イツキのメダロットに電文が送信された。こんな状況に誰だ。イツキは素早くメダロットの電文を黙読した。

スタングレネード（閃光弾）を上空から落とす。至急、地面に伏せて、目と耳をきつく塞げや。by・修復完了のクマメダル

閃光弾！？クマメダル！？瞬時にして沢山の疑問が浮かんだが、イツキはこの電文の送信者を信用することにした。

「皆、地面に伏せて目と耳をきつく塞ぐんだ」

どうしてという質問も意に介さず、イツキはとにかくそうしてくれと頼んだ。

「どうなっても知らないぞ！」

文句を言いながら、コウジは率先して目と耳を塞いだ。イツキ、アリカ、カリンも地面に伏せた。メダロットたちには、一時的に視覚・聴覚機能をシャットアウトさせた。

「それは降参という合図か？今更遅いわ。やってしまえ、者共！」
時代劇のような掛け声を上げて、ロボロボ団が襲ってくる。その

とき、強烈な閃光と音が辺りを覆った。続いて、熱風を肌感じて、イッキは飛び上がって目を開いた。五人のロボロボ団員が駆けまわり、二体のロボロボ団メダロットの全身がひしゃげていた。

イッキやんと、真上からドラゴンビートルがイッキの名前を呼んだ。

「あんさんがイッキですか？」

イッキは頷いた。

「わての名は光太郎と申します。以後、お見知りおきを。新しいマスターのイッキやんのピンチやと聞いて、居ても立ってもいられなくなっただんですわ」

礼儀正しいロクショウとは逆の、ちゃきちゃきの関西弁を話すくだけた性格のメダロットだ。

「金衛門か。こんな状況でなんだけど、よろしくな。それで、ありがとうな」

「どういたしまして。それよりも、他のメダロットも動かしてえな。今のうちに一機でも多くはったおしたといたほうがええ」

イッキが起こす前に、コウジ、アリカは行動していた。アーチェは五感機能が麻痺した近くのメダロットを狙撃。もう一体、ブラックメイルの左腕を付けたアーマーパラインが援護し、プラスが空を飛ぶゴーフバレットを撃墜。イッキもロクショウを起動した。ロクショウも負けじとソードで敵を切りまくり、ハンマーで頭をかち割った。光太郎は樹を傷付けぬよう、精巧な重力波射撃で相手を攻撃した。

ばったばったと、ロボロボ団メダロットが薙ぎ倒されていく。

態勢を立ち直す頃には、五対五の同数になっていた。それなのに、幹部の男はまだ余裕そうだ。

「ふおおお……。閃光弾とな！こりや、たまげたわい！だがのう、雑魚をいくらやったところで、わし自慢の三体を倒せなかったのは惜しいな」

その三体とは恐らく、大王イカ型メダロットのアビスグレーター

二体、スペクター型メダロットのデーヴのことであろう。一体に付き、各自一体をぶつけあう正攻法での戦いとなる。

相手は横一列に並んだ。何かしてくる。コウジがいち早く察した。「火薬系をぶっ放してくるぞ！」

二体のアビスグレーター、マジカルピエロの右腕を付けたデーヴ、セキゾーが大量のミサイルを放った。コウジのアーマーパラディンが盾となり、背後のアーチエ、プラスが数発のミサイルを破壊した。「わぁー」

後ろから、タロウが悲鳴を上げた。タロウの横には息を切らしたカンちゃんもいる。二発のミサイルがタロウとカンちゃんに飛ぶ。助けられそうにない。

誰もがそう思ったとき、ヤナギが最後の力を振り絞って宙に浮いた。

「カンちゃんー！！！！」

どどおおーん…！

爆音のあと、ぼろ屑となったものが叢に落ちた。

「カンちゃんとタロウは！？ヤナギは？」

身を縮こませたカンちゃんとタロウは無事だった。だが、身を挺して二人を守ったヤナギは、パーツとティンペットまでも爆発の影響は及んでいた。がくがくと震えながら手を伸ばすヤナギ。その手がティンペットごとにもげた。

「ヤナギー！！」

イツキとカンちゃんの悲痛な叫びが重なる。アリカとカリンは目を逸らし、コウジはイツキたち会ったときよりも激しい怒気を含む目でロボロボ団を睨む。

「お前ら何を悲しんでおる？メダロットはメダルさえ無事なら動ける。たかが、パーツとティンペットが壊れたぐらいで何を嘆いておる」

かちん。ロクシヨウの何かが切れた。ここ最近の幾多の戦闘を経て、ロクシヨウメダルは確実に成長していた。ロボロボ団の目的と

か、ヤナギを唆した方法など知らない。ただ、今、ヤナギの取った行動とその姿。そして、そのヤナギに対するロボロボ団の発言がもう一步で成長するロクシヨウのメダルを進化させた。

できる。今の私に何かができる。

夢遊病者のような足取りでロボロボ団に近寄るロクシヨウを見て、コウジ、アーチェが止めに入った。

「何を考えている？一人で勝てるわけないだろう」

ロクシヨウは乱暴に二人の手を払った。あのロクシヨウらしからぬ態度だ。イツキも止めにかかったが、ロクシヨウは優しくイツキの手を止めた。

「私に任せてくれ。何故だか分らぬが。今なら、私一人であの愚か者たちをやれる」

ロクシヨウの雰囲気がいつもと異なる。口調こそそのままだけど、猛獣のように燃えたぎる戦闘意欲と標的を見据えた殺し屋の冷徹性が同居したようだ。

ロボロボ団もロクシヨウの異変を感じ取っていた。幹部の者が命令する。

「…お前たち、何をぼさつとしておる。いい的ではないか。次はあのクワガタムシを片付ける！」

ロボロボ団メダロットがミサイルを発射しようとする。ロクシヨウはゆらりと刃を上に向けた。

「ふおおおお…。せめて、一体でも多く道連れにしようという腹積もりか。甘いぞい。ヘッドシザースの格闘攻撃がいくら強力でも、わしの特別チューンナップ仕様のメダロットたちはそんな生半可な戦法じゃ破れんぞ」

幹部の男の号令と同時に、ロクシヨウの体が輝いた。

「な、何だ？」

双方が同じように驚いている次の瞬間、網膜を焦がさんばかりの光が薄暗い森を照らし出した。凄まじいまでの光に、イツキたちは目を閉じるしかなかった。

どのくらい経ったのだろう。眩すぎる光をまともに直視し、少々頭が頭痛を起こしていた。感覚が正常になると、イッキは眼前の状況を見て啞然とした。

五体のロボロボ団メダロットは首、あるいは上下半身がぼっそり切り落とされていた。ロクシヨウは、どういわけか体があちこち溶けていた。

部下に支えられて立った幹部の者も、これには驚きを隠せずにいられなかった。

「な、な、何だ！何だ！何だぁー！？何が起こった！」
支える部下が答えた。

「よ、よく分かりませんが。光った次の瞬間、細い糸状の物があのメダロットの腕から伸びたロボ……」
「本当か！」

訳の分からぬうちに味方メダロットを大量に失い、謎の光と力、更に幹部の大男に凄まれて、部下のロボロボ団は怯えきった声で「ほ、本当ですロボよー」と言った。

慌てふためくロボロボ団に、コウジが居丈高々に出た。

「さあ、どうする？お望みとあらば、まだ戦っていいぞ」

アーチェ、ブラスがロボロボ団に銃口を向ける。ロボロボ団は一歩ずつ後ずさり、幹部の男が懷から何か取り出した。

「覚えておれよー！」

ぼん！もうもうと黒い煙がわきたつ。

「煙幕か」

コウジがアーチェに攻撃命令を出させたが、ロボロボ団はとつくのとうに森の奥へと姿をくらましていた。イッキが土下座姿勢のロクシヨウに駆け寄る。

「ロクシヨウ、どうしたんだよ一体？何をしたんだお前？」

イッキが所々溶けたロクシヨウの体を抱きかかえる。ダメージを受けていないのに、パーツから洩れた装甲下の配線が目につく。ロクシヨウは掠れた声を絞り出した。

「分からぬ。今から機能停止するが、安心しろ。…ただの…エネルギー切れだ」

ロクシヨウのカメラアイから光が失われた。

「ロクシヨウー！」

イツキの二度目の悲痛な叫びが木霊する。こたま

ロボロボ団との交戦後の始末は大変だった。僕たちはカンちゃん、タロウを家まで送り、すぐに旧式の黒電話で警察へと繋いだ。同時に警察へ匿名の電話が入り、おどろ山近辺の閉鎖された廃工場に強奪されたメダロットたちが保管されていたようだ。

廃工場内では、何とロボロボ団が既に何者かに捕えられていた。セレクト隊も事情聴取に関わり、ロボロボ団の話から、廃工場のロボロボ団を捕縛したのは怪盗レトルトだと判明した。

怪盗レトルトはメダロットを主に盗みの対象とした神出鬼没の大泥棒。その大泥棒がどのような事情があつてロボロボ団と戦い、しかも、保管されていたメダロットたちを奪わなかったのか。警察とセレクト隊は共同で捜査を行っているらしい。

僕たちといえば、もうそりゃ、大目玉を食らった。警察の人の長々とした事情聴取、その警察の人たちからのお説教に、両親からの雷をおおいに貰った。ママはもちろん、パパの静かに怒りが籠もった声音は一生に耳に残りそうだ。罰として、ゴールデンウィーク中は許可が無い限り絶対外出禁止。そして、もう二度と自分たちだけでは山に登らない、ちゃんと親に話せという誓約書まで書かされた。最後にメダロットたちについて。

ロクシヨウはセレクト隊の看護メダロットの介護もあつて、翌日には自宅に届けられた。

次にカリンちゃんのメダロット。

カリンちゃんのメダロットも廃工場に保管されていたようだ。修

復と聴取が済んだ次の日には、自宅に届けられた。ゴールデンウィーク五日目、土砂降りの雨の日に真っ白なベンツが僕とアリカの家の中間に止まった。カリンちゃんとセントナース、それと、礼装服の男性がお礼に訪ねてきた。

突然の大金持ちの訪問にママに僕もびつくりした。カリンちゃんと執事の人を見て、ママに僕もかしこばった挨拶を送るしかなかった。カリンちゃんの愛機、セントナースのナースは主人と似て物腰柔らかく。

「イツキさん、メタビーさん。このご恩はお忘れしません」

人間でいうところの可愛子ちゃんにこう言われて、ロクシヨウはぎこちなく。光太郎は調子良さげに返事した。

次にヤナギについて。

ヤナギはあまりにも損傷が深く、介護メダロットはこの傷は治せないと言った。肩落とす僕たちに、トックリという眼鏡をかけたセレクト隊の人に「大丈夫ですよ。彼はメダロット博士のところに送りますから」と聞かされて、僕らは一安心した。

もう一つ、ヤナギがロボロボ団に協力した理由。

無垢なヤナギはロボロボ団に騙されたのだ。カンちゃんの孫娘のナツコさんが海外に転勤してから二日経った日、ヤナギはロボロボ団とばったりと出会い、捕まった。捕えられたロボロボ団の話によると、リーダーの男。本名かどうか分からないが、シオカラというあの大男がヤナギを使った幽霊騒動を思いついた。

ナツコは海外転勤ではなく、会社での失敗を拭うために、否応に海外へ飛ばされた。シオカラはこんな嘘をヤナギについた。

ヤナギとて、少しは疑ったりした。だが、シオカラは何らかの脅しも加えてヤナギを納得させて、ヤナギを幽霊として仕立て上げた付け加えれば、ヤナギ自体は脅迫の声に捕えたメダロットの運搬を手伝っただけで、メダロットを直接攻撃したのは専らロボロボ団のようだ。

ついでにスクリューズ。警察に話すと、当然奴らも呼び出されて、

親から然るべき処罰を与えられたとのこと。

ゴールデンウィーク最終日。

僕は両親に許可を貰い、ママが運転してあるところへ連れて行った。
「時間がきたら、電話しなさいよ」

ママと車を見送ってから、お土産を持ってロクシヨウ、光太郎と歩いた。おどろ山の登山口から離れて西側。そこをずっと歩いた先に、目的の古風な民家が見えた。

声をかけても返事がない。イツキは横開き式のドアを開けて、中を覗こうとしたら、

「ひーひっひっひっひ。…勝手に入るのは誰だあ…」

と、この世の者とは思えない声だ。イツキ、光太郎はやれやれと首を振り、「勝手に入って申し訳ありません。さようなら」と帰ろうとしたら、声の主は慌ててイツキたちを押し止めた。

「ごめん、ごめん！ちよつと、悪ふざけが過ぎちゃった」

家屋から、新品と見紛うほど綺麗になったミステイゴーストのヤナギが現れた。

「おふざけも大概にな」

ロクシヨウに注意されて、ヤナギは何度も謝った。

「ところで、カンちゃんは？」とイツキ。

「カンちゃんなら、アリカちゃんと皆と一緒に山菜取りに行ったの。それで、僕はお留守番しているの」

イツキ、ロクシヨウ、光太郎もヤナギのお留守番に付き合うことにした。小一時間後、元気一杯にアリカがただいまと帰ってきた。アリカの長靴は泥だらけだった。

「イツキたちも来ていたのね。ほら、楽しんでたんだからあんたらも外に出て、山菜洗うの手伝いなさい。これから、お昼にするから。あと、ヤナギ。カンちゃんがヤナギに見せたい物があるんだって」

外に出ると、ブラスの他に五体のメダロットたちがそこにいた。

カンちゃんの手には手紙が握られていた。カンちゃんが嬉しそうに手招きして、ヤナギに手紙を見せると……。ヤナギは喜びのあまり、天に召されんばかりの勢いで高く宙に浮いた。

手紙には、ナツコさんが七月の下旬には日本へ帰ってくる事が直筆で書かれていた。

その日、イッキはママが迎えに来るまでの間、カンちゃんにカンちゃんのメダロットたちと楽しい時を過ごした。

7 おどろ山探索記三（謎の集団）（後書き）

おどろ山編は終了。

次回は二、三話ほど本編（原作）には無い話を盛り込み。そのあと、また本編のストーリーに入りたいと思います。

8・異国からの転校生

ゴールデンウィークの事件を当事者視点から執筆した三部構成の記事「おどろ山探索記」は、ギンジョウ小学校の歴代新聞記事で最も高い評価を受けた。

実際の評判もあり、お陰でアリカ、イツキは一躍学校で有名人。二週間。アリカ、イツキの話題もそろそろ薄れる頃、校内はまた別の噂でもちきりになった。

「ねえ、イツキ」

隣の席のアリカが話しかけてきた。

「海外からの転校生の話だけだよ。何でも、ナイジェリアの出身らしいわ」

「ナイジェリアって…。アフリカあたりだっけ？」

「私も詳しくは知らないけど、確か石油が掘れて。イスラムやキリストとかの宗教が混ざっているらしいわね」

「それで、そのナイジェリアの人がどうしたの？」

「んもう！ちょっとはメダロット以外のことも興味持ちなさいよ！そのナイジェリアの人はね。私たちと同じ年で、転入先のクラスは私たちの三年一組だって」

イツキは適当に相槌を打つといた。メダロットのことしか考えてないと言われて否定はしない。ただ、好きな物に熱中する類ではなく、この場合は考えるざるをえないと言ったほうが正しい。

メダロポリスから来たというカリンちゃんとコウジ。突如、活動を再開したロボロボ団。そして、そのロボロボ団を謎の力で瞬殺したロクシヨウ。一つ目と二つ目は理解できるが、三つ目はどう考えても分からない。インターネットで検索しても分からない。メダロ

ツト博士にも聞いてみたが、あの博士すら、ロクシヨウの発した力については分からないと答えた。

「メダロットのメダルの謎は説明されておらん。君のメダロットが発したその力を説明すれば、メダルに隠された数々の秘密を解き明かすことができるかもしれん。イツキ君、その当時の状況を詳しく教えてもらえんか」

そう言われても、あの慌ただしい状況では何が起こったか当事者にも判別しかねた。イツキは光ったことと、ロボロボ団の一人が言ったことを博士に伝えた。

イツキの空想を打ち破るように、朝のホームルーム開始を告げる、筋骨隆々なジャージ姿のオトコヤマ先生が野太いバリトン声でおはようと挨拶した。

「既に知っている者もいると思うが、ナイジェリアの子がギンジョウ学校に転校してくる。そして、転入先のクラスは我が三年一組だ。因みにその子は男の子らしい。今週金曜日の終わりのホームルームに来るから、皆、歓迎の準備をしておくように」

その後、簡単な連絡事項と挨拶でホームルームは終了した。

イツキは特に準備はしなかった。どうせ、挨拶は先生にクラス委員長が代表として言うし、来たばかりの彼に深く尋ねるのもどうか。イツキは簡単な挨拶だけを考えた。

オトコヤマ先生は、歓迎の時のみ自分のメダロットをメダロットチから出していいと言っていた。

当日、三年一組のクラスはホームルーム前だというのに、二つ離れた教室に賑わいが届くほど盛り上がっていた。それもそのはず。元気一杯の子供たちに加えて、今日は皆のご自慢のメダロットたちまでいるのだから、はしゃがないほうがおかしい。

ロクシヨウ、光太郎は他の生徒の愛機と混じっていた。エネルギー

ーの消費が激しく日常においては支障をきたすから、普段、光太郎は飛行系パーツ以外の脚部を付けて生活している。

両親についてだが、意外にもすんなり光太郎の存在を受け入れてくれた。光太郎の性格も関係しているだろうが、イッキを助けにきたという点が一番の理由だそう。

オトコヤマ先生が教室の扉を開けた。

「こら、お前たち！メダロットを連れてきてはいいいと言ったが、二つ先の教室に届くほどうるさく騒いでいいとは言っておらんぞ！」

オトコヤマ先生の一喝で教室は静まり返った。

「よろしい…。ゴホン！それでは、どうぞ入ってきてください」

オトコヤマは外で待機する人に入ってくるよう促した。そろそろと、天然パーマ頭の薄紫のスーツを着た真っ黒な肌の黒人女性が、クラスの皆に会釈して、かしこまった姿勢で小さな手を握りながら教室に入った。女性に手を繋がれて入った男の子は、短パンに、横並びの黄と新緑の組み合わせ縞模様のＴシャツを着た、これまたニユースなどでよく見かける真っ黒い肌をした典型的なアフリカ人の男の子だった。頭も、坊主に剃っている。

男の子と母親。クラスメイトに担任、メダロットも、皆一様に押し黙った。学校側の配慮と向こう側の都合で、まずは金曜の終了ホームルームに顔出しし、来週月曜日の朝礼で初めて彼を全校生徒に紹介する手筈になっている。

同じで人間であることは間違いない。が、国籍に雰囲気、そもそも外見からして違う人種に生徒一同はどう応じれば内心、戸惑い気味だ。このままではまずいと、オトコヤマ先生がまたわざとらしく咳払いした。

「エッホン！えー…では、ウチエボさんたち自らにご紹介をしてもらいましょう」

ウチエボと呼ばれた女性は機転を利かし、すぐに愛想ある笑顔を浮かべた。

「みなさん、こんにちわ。私、スージ・ウチエボと言います。ドウ

ゾ、息子のことよろしくお願いします」

片言ながら、スージという人は聞き取れる日本語で自己紹介した。委員長がよろしくごじいますと挨拶して、他の生徒も委員長に続いて挨拶した。

スージは男の子の耳元で囁いた。生徒に担任にも聞いたことがないような言語だ。恐らく、母国語で息子に早く挨拶しなさい、とも言っているのだろう。

男の子はぎくしゃくと黒板に向かい、白墨で文字を書き始めた。お世辞にも綺麗とは言えない。本人もそれを理解しており、小さな手で懸命に文字を大きく書いた。

オニエカチ・ウチエボ。黒板にはそう書かれた。

男の子が前を向いて、片言な日本語で挨拶を述べた。

「エツト……。ボク、コクバに書いた文字のトオリ。オニエカチ・ウチエボという名前です。みなさん、短い間ですが、お願いします」

後半の挨拶が流暢だったのは、日常用語に関してオニエカチはある程度習得しているらしい。委員長の短い代表挨拶をし、クラスメイトは歓迎の拍手をオニエカチ君に贈った。オニエカチ君はイッキの後部座席に着席した。そして、今日は終了のホームルームの間だけ学校にいて、終わると母親と共に下校した。

後で聞いたところによると、オニエカチ君の父親はIT関連の大企業に勤めていて、二年前の四月から日本に滞在している。何でも引越しはこれで三度目のようで、今年の八月の初旬にはアメリカに本籍を構える。父親的には色んな文化を経験させたほうが良いと考えているようだが、子供にはそうではないようだ。

オニエカチ君が来てから六日。クラスで誰彼隔てなく話を取れる奴に、イッキもそれとなく話しかけたが、表面的な社交辞令で終わってしまう。イッキに他のクラスメイトもオニエカチ君と仲良くしたいとは思っているが、オニエカチ君自身が周囲に近寄らせないバリアーのような物を作り、日本人とかけ離れた外見も相まって、オニエカチ君はまだクラスで友達と呼べるような者は一人もいない。

ママとパパにそのことを話すと、パパが発泡酒を一口含んでから、当然だろうと言った。

「そのオニエカチ君も本当は話したいんだ。ただ、来たばかりで不安でしょうがないんだ。それに、日本にいる間だけで三度も引越して、八月にはアメリカへ本格的に移住するのだろう。ひよつとしたら、親しくなったときの別れを思うと、怖くて寂しいから、そのせいで上手く付き合えんのもかもしれない」

パパの言ったことは最もかもしれない。国内であれ、年に何度も引越してはあまり落ち着いていられないだろう。そう理解しても、イツキは後部座席のオニエカチと上手く話せないまま、あつという間に一週間経った。

その日の午後、帰りがけの途中、イツキは宿題のプリントを学校に置き忘れたことを思い出した。引き返そうとしたところ、親切にも光太郎が取ってくると言った。

「まかせてえなあ。軽く飛んで、すぐに戻ってくるさかい。イツキやんは、家でロクシヨウと待っててな」

「ありがとう、光太郎」

イツキは光太郎の脚部パーツを元のドラゴンビートルに戻し、光太郎は学校へ向かって飛んだ。

光太郎は迂回して、三年生の教室がある校舎裏側まで飛んだ。教室内を見ると、オニエカチ君が一人、ぼつんと教室に座っていた。光太郎は窓際まで近寄り、オニエカチに一声かけた。

「なあ、ボン。ちよいと用事があるんやけど、ここ開けてくれへんかな？」

窓の外から、いきなり大阪弁の飛行メダロットに話しかけられてオニエカチは動揺していた。

「ごめん、ごめん、驚かして。わいのこと覚えておらん？ほら、君の前の座席に座っているイツキやんのメダロットや」

オニエカチは机に蹲った。そして、どうやら思い出してくれたようだ。オニエカチは窓を開けて、光太郎を教室に入れてやった。

「おおきに。イツキやんが宿題のプリント忘れてなあ。しゃあないから、代わりに取りにきたんや」

光太郎はイツキの机を探り、プリントを両手で挟むと、器用に胸部のハッチでプリントを挿んだ。そんな光太郎のことをいつこう気にせず、オニエカチはただ、時計を見つめていた。家庭での会話でオニエカチの事情を何となく知った光太郎は、一つ、物は試しにオニエカチとの対話を試みた。

余計なお節介かもしれないけど。

「オニエカチ君。教室に居るんは、お母さんを待つてるからか？」
オニエカチはおもむろに振り返って光太郎を見やり、小さくうなずき返した。

「そうか。そんなに遠いん？」

少し間を空けてから、オニエカチははにかみながら口を開いた。

「歩いて…につじゅぶんぐらいのところ。歩いて帰ると、他の人が変な目で見ているような気がして…。それが嫌だから、ママにお願いして、迎えにきてもらっている…」

につじゅぶんとは、「二十分」のことやな。

「ふーん。まあ、確かに肌の色からして皆と違うけど。でも、毎日そんなに楽しい？短い期間でも、皆と帰ったほうが楽しいと思えるで」

「君、コータロウだっけ？イツキのメダロットだよな？」

「そうやけど、それが何か？」

「イツキ、ボクに声をかけてくれる。だけど、ボク、八月にはアメリカで永住することになる。ホントは皆と話たい。けど、何だか分からないけど、話そうとしても話せないし。話しかけられても、何故か返せないんだ…」

光太郎はオニエカチ君のような子供を何人か見たことがある。生前のマスターといるとき、周囲と合わせようとせず、こちらから話しかけても、それを拒むような子供がいた。そういう子供はやはり、地道に付き合う努力が必要。

あまり悪口は言いたくないが。おじいさんはできた人だったのに、親族の人たちは最後までメダロットのことを理解してくれなかったな。一人、魔の十日間事件で死にそうな目に遭ったのは同情するが、まさかそれで自分を捨ててしまふとは。おじいさんと同様、虫好きな人がおればなあ……。いかん、いかん。今更、気に病んでもしょうがない。今は今、昔は昔。しばらくイツキやんのところで住まわせてもらおう。光太郎は意識をオニエカチ君に戻した。

「オニエカチ君。絶対とは言わへんが、今度、うちのイツキやんに一緒に帰ると誘ってみいへん？無理にとは言わんから」

「どうして？」

要らぬお節介は不要だと、オニエカチは光太郎を厳しく問い詰める口調だ。

「どうして、ボクにかまうの？」

「これは例え話やけど。近くで人が転びそうになつて、ちょうどその人を支えられたり体を掴める位置にいたら、自分ならどうする？」

「…手を伸ばす…」

「それやそれ！言うつくけど、わいかて毎回こんなちやうで。偶然とはいえ一度君という存在に手を伸ばした以上、そのまま放してこけさす真似なんて出来へんやろ。ただ、その手を振り払うのは君の自由や。わいかて、これはお節介と自覚しとるし」

頃合いだな。光太郎はそろそろと、教室の開放された窓へ向かった。太陽熱の残りか、校舎の周りで吹く風はほんのり熱気が宿っている。オニエカチは光太郎を見上げながら、窓を閉めた。どう転ぶか知れた物だが。二日の休みもあれば、落ち着いて考える時間は十分にあるはず。予定外のことと遅くなり、イツキが心配するかもしれないので、光太郎は真っ直ぐ天領家の方角を目指した。

オニエカチはただ一人、教室で母を待つ。

夕食を済ませた夜、オニエカチは母親と会話した。ただし、使用言語はナイジェリア言語の一種、ハウサ語。ここでは、ハウサ語を訳した形で記す。

「ねえ、母さん。僕が友達と帰ってきたら、母さんどう思う？」

母親のスージは瞬きして息子の質問に目を丸くするも、白い調度品に囲まれ、色合いからして浮いている赤茶けたソファに座る愛しいオニエカチに、スージは微笑む。

「私としては嬉しいわ。だって、あなたが進んでお友達を連れてくるのは、ナイジェリアにいた時以来……」

スージはしまったと手で口を塞いだが、遅かった。足をじっと覗く息子の顔付きが険しくなった。この子がこういう性格になった原因、今は決して触れてはいけない。

「と、とにかくあなたにもようやくジャポンで親しい友達ができたのね」

話を逸らしたが、息子は心非ずと上の空な表情。

思えば、この子には苦勞をさせたものだ。ナイジェリアにいたときはあんなことがあり、これはチャンスと安全な日本に逃げ込む形で移転した。しかし、現実はそう甘くなかった。二年前は苛めに遭い、半年で転校。二校目ではそれなりに上手くやっていけたが、夫の都合で転勤。この終わりが無いと思えた長い転勤生活も今年の八月、アメリカに本籍を構えることにより、やっと腰を落ち着けられる。

それでも、折角二年間も海外に滞在したのに、子供が良い想い出もなく日本を去るのは親としては少々悲しい。母や姉には考えすぎと言われたが、このままオニエカチが俯いたままアメリカに籍を構えても、移住先でこの子が自ら人と付き合えるか不安だ。

「それで、その子は何て名前なの？」

「まだ、連れてくると決めたわけじゃないよ」

オニエカチは宿題をすと言い、二階の自室に籠もった。スージがソファに座り込むと、アメリカに行ったとき、自宅や子供の警備用として買ったカミキリムシ型メダロットのエイシイストことアルコが紅茶を運んできた。アルコは去年の暮れに買ったメダロット。初めは口ボットだなんて思ったけど、今では一家の一員となって

いる。

スージは紅茶を受け取り、僅かに啜るとガラス張りのテーブルにティーカップを置いた。一人で自室にいるオニエカチ。オニエカチは、友達ができない自分を母親が心配していることを当然知っていた。

並大抵のことでは自分を変えられない。その自分に、イツキのメダロットはチャンスくれた。悩むオニエカチの背をアルコが呼んだ。

「坊ちゃん。そんな風に腰を曲げていたら、早くから腰だけお年寄りになってしまいますよ」

オニエカチは窓の外に顔を向けたまま喋った。

「アルコ。迷っているときに誰かが手を差し伸べたら、お前ならどうする？」

「そうですね…。世の中色んな考えの奴がおりますから、人によっては手を振り払ったほうがいいかもしれません。信用できるとお思いなら、相手が待っていてくれる間に手を伸ばしたほうがいいですね」

アルコはお菓子を置いて部屋を出た。オニエカチはすぐに手を付かず、外の景色を眺めた。

二日間、オニエカチは深海で空気を求めて彷徨うように悩んだ。そのオニエカチを、スージ、父親、アルコは見守った。

月曜日。終礼が済んでとっと家へ帰ろうとしたら、イツキはアリカに呼び止められた。

「イツキ。今日、暇？」

「…特に予定はないけど」

「良かった！あのね、今から取材に同行してくれない？」

「ここ最近、周辺で事件性があるものとかはないけど」

「ジャーナリストが必ずしも事件を追うとは限らない。ときには、地域や身近な物を題材に取材したら、意外な事実が見えてくることもあるし、己が視野を広げることにも繋がる。というわけで、鞆を置いたら商店街に行きましょう」

迷うイツキに、オニエカチが細く声をかけた。

「あの、イツキ君。今日、一緒に帰れる？」

イツキ、アリカは目を剥いた。今の今までクラスから浮いていたあのオニエカチ君が。話しかけてもお世辞めいた返事しかなかったオニエカチ君が、自ら話しかけてきたからだ。イツキが良いよと言う前に、アリカが身を乗り出した。

「オニエカチ君は、今日予定とかある？」

「無いよ」

「そう！じゃ、良い機会だから、私たちと一緒に商店街の取材に行ってみない！？オニエカチ君は行ったことある」

「車で何度か通ったことあるだけで、ボク、行ったことない。でも、前から一度行ってみたいと思っていた」

「決まりね！」

三人で待ち合わせ場所を決め、イツキ、アリカ。それと、オニエカチはまだちょっと引きずる感じで肩を並べて校門を出た。光太郎からオニエカチについての事を打ち明けられていたロクシヨウであるが、あえて口を出さず、メダロツチ越しから成り行きを黙って見ている。

オニエカチ君の家から一番近い場所、広いグラウンドがある五丁目公園が集合場所。

オニエカチは何故か光太郎も連れてきてほしいと頼んだので、イツキはロクシヨウ、光太郎のメダルをメダロツチに挿入した。商店街を取材し回るから、イツキ、アリカは自転車に乗って五丁目公園に向かった。六分もして、植林樹と高いフェンスネットに覆われた五丁目公園が視野に入る。入って右奥のベンチ、オニエカチ君が座

っていた。二人はオニエカチに手を振り、気付いたオニエカチも同じく手を振った。

イッキがオニエカチの手前で自転車を止めた。

「お待たせ！」

「オウツ！バイクで行くんだ。ちよつと待ってて、すぐに取りに戻るから」

オニエカチが自転車に乗って公園に戻ると、アリカを先頭に取材陣は出発した。

これまで、この五丁目公園に周辺を散歩しただけのオニエカチにとって、アリカの取材同行は正に未知の世界への切符を手にしたみたいだ。アリカは学校に許可を貰い、毎週商店街の店一件を取材し、記事にしている。イッキもしばし同行させられているから、イッキ、アリカは商店街の顔馴染みとなっている。今回は裏角のお団子屋さんの取材。待っている間、三人はみたらし団子を一本貰った。三人はそれぞれ礼を言ってから、ありがたきお団子を食した。スーパーで売っている物とは違い、出来立てはやはやで、砂糖醤油の葛飴に、お店の秘密の調味料を加えた団子はほっぺが落ちそうだ。

オニエカチ君も、おずおずと一口、パクリ！齢五十のおじさんが味はどうかと聞くと、オニエカチは満面の笑みで「美味しい」と答えた。

取材後、イッキ、アリカは氣を利かし、オニエカチ君に今まで取材したお店とその店員の人を紹介した。商店街の人たちは皆優しく、変な目付きもせず、オニエカチを普通の子供として扱った。更に二人は、本当は近寄ることすら禁じられているおどろ山までオニエカチを連れた。

公園から出るまでまだどこか引きずっていたが、今やすっかりそんな気持ちは消え去り。オニエカチはひたすらイッキ、アリカとの時間を楽しんだ。メダロツチの時計が五時を告げる。集合場所に帰り、解散しようとしたら、オニエカチがイッキの光太郎に会わせてくれとお願いした。

断る理由もなく。イツキは光太郎を転送した。

転送された光太郎に、オニエカチは一言「ありがとう」と呟いた。光太郎は無言でオニエカチに腰を曲げた。イツキ、アリカはこのやり取りを見てきよとした。

そうして、三人は互いに別れを交わした。自宅前で、イツキは光太郎にオニエカチのお礼の意味を問うたが、光太郎は「イツキやはええ子やでと言っただけや」と、上手くはぐらかした。唯一人、オニエカチとは別に事情を知るロクショウはメダロツチの中でほくそ笑んだ。

8・異国からの転校生（後書き）

いつもなら、「イツキはこれまでの間に 回ロボットとして、云勝^{うんしょう}云敗^{うんかい}した」で始まっていたましたが、今回はそれも含め、できる限りロボット関連で話を繋げないよう心掛けた。

同時に、前回は最終的にロクショウ、ヤナギなどに存在感を奪われた光太郎を目立たせようとも心掛けた。

…しかし、見返したら、今回メダロット側の主人公^{ロクショウ}の台詞が一言も無かったな。次回からはアルコも絡ませて上で、ちゃんとロクショウも喋らせます。

9 ・メダラクロス（前書き）

然るべき知識（国際事情）に詳しい方から見たら、おかしな点があるかもしれません。

9・メダラクロス

メダロットに関するスポーツといえば、ロボットが代表的。だが、自分の愛機が無用に傷付く姿を見たく無いという人も多い。そこで、数年前からメダロット版障害物競争のメダロードレースが誕生した。障害物がなくとも、一定の距離を走れる場所があるならば、メダロードレースはどこでもできる。メダロードレース誕生により、ロボットせずともメダロットは体を動かせる機会を得た。

五年前、社員の一人がロボット以外のメダロットのスポーツ拡大を夢見て、メダロットによる球技運動の企画書を提出した。

メダロット社社長の二毛作タイヒは理解がある野心溢れる人物で、この企画書にゴーサインを出した。

まず、最初にメダベースボールなるものを試みた。だが、メダロットによっては手が無かったり、足が無かったり、そこにメダロット用のグローブやボールにバットを作るとなれば、一チーム分作るだけでも莫大な費用がかかるので、メダベースボールは企画段階で終了した。

二つ目はメダサッカー。これもまた、上記と同じ理由により、企画段階で没。中々、メダロット向けの球技が見当たらない。

一年間の紆余曲折を経て、遂にメダラクロス案に他一つが通った。手や指が無いメダロットには、ゴムベルト製の物をラケットに付ければ問題は解消された。

早速、腕しかない飛行型と浮遊型メダロットに低空飛行でラクロスをさせたところ、五機ずつに分かれた試合は意外な白熱ぶり。十分間の試合の末、推進力がある飛行メダロットチームが勝利した。決して圧勝ではなく、飛行型チームも残るは一機だけだった。

メダロットによる球技、略してメダボールのルール制定などにあたり、二毛作タイヒがこんな意見を出した。

「メダロットらしい物も取り入れたらどうだ？ただのラクロスなど、

面白味に欠ける」

二毛作タイヒは単に腕を使うのではなく、メダロットのパーツを使って試合してもどうかと言った。しかし、二毛作社長の意見に反対する者は多かった。投げるだけなら、問題無い。だが、メダロットのパーツによる攻撃ルールを加えたらロボトルと何ら変わりなく、ラククロスの道具が持ち堪えれそうにないし、ルールも複雑化する。

「君たち、もう少し頭を捻ったらどうかね？それなら、耐えられる道具を作ればいいだけの話だ。そして、メダラクロス用の新ルールを作ればいい。メダボール用のボールを作り出せば、きつと利益になる」

細かなルール制定に、メダボール用のボール開発も同時に進められた。半年の歳月をかけてルールを作成し、そこから更に一年と三ヶ月も費やして、念願のメダラクロス専用ボールが完成した。

特性ラケットはメタルビートルのミサイル、ヘッドシザーズのソードを物ともせず、ボールはロールスターの頭部の強烈なレーザーに耐えた。

メダロット社はメダロポリスの名門小学校花園学園に、メダボール宣伝のための公開試合をしてくれないかと依頼した。一件目での返事は無いと思われていたが、学園長は一つ返事で良いと答えた。花園学園は二毛作社長の出身校であり、現学園長は社長の学友であったからだ。文部省の役人に沢山のマスコミの立会いの下、花園学園六年生所有のメダロットによる二種のメダボール球技が行われた。試合後日、全国からメダボールルールブックにメダボール専用用具の注文が殺到した。二毛作はすぐに発売はしなかった。文部省からの通達がないからだ。二週間後、文部省の通知が届いた。社長が皆の前で通知の手紙を開く。

ざつと文面を読むと、社長は重役の一人に尋ねた。

「注文件数は？」

「学校関連だけでも、既にボール二千個分以上の予約注文が来ております」

社長が不敵に微笑む。社員一同は文部省の通知を読まずとも、社長の表情だけで書かれていることを理解した。

「一ヶ月後の発売にも併せて、工場はフル稼働だ！これから忙しくなるぞ！」

社長と社員による一斉啖呵がメダロット社中から木霊する。こうして、メダロットの世界がまた一つ広がった。

ギンジョウ小学校ではメダロット関連の行事が二つある。一つは、四月中旬に行われる校内ロボット大会。そして、二つ目はメダロットの運動会だ。

メダロットによるスポーツといえば、メダロードレース、メダボール球技の二種のみ。ギンジョウ小学校にはメダドッジ用の道具にルールブックは無く、メダロットによる球技はメダラクロスしかできない。ラクロスは何かと細かいルールが細かいので、小学生たちにはメダドッジ用のが欲しかったというのが本音。だが、やってみると意外にも嵌まり、そんじやそこの大人よりラクロスの知識については詳しくなった。

どの学年がどのスポーツをやるかは、学校教員の会議で決まる。体力面を考慮し、一、二年生は六月末、三、四年生と五、六年生は七月の初旬に行われる。

真夏にスポーツ大会はどうかと思われるが、するのはあくまでメダロット。人間は応援役兼監視者。それに、ソーラーシステムを組み込まれたメダロットたちにとっては秋の曇り空よりも、日差しが強い真夏日のほうがかえって調子が良い。

今年の三年生はメダラクロスに決定した。原因はオトコヤマ先生と畠田先生の二人に起因する。

二人は昔、バスケ部に所属していた。バスケとラクロス、球技という点を除けばあまり接点は無いが、実は二人は中学校から高校に

かけて同級生だった。そのとき、女子ラクロス部には男子の憧れともいうべき高嶺の花が存在した。二人がその高嶺の花に告白した結果、相手は畠田先生を選んだ。理由は、爽やかスポーツ青年のほうがお好みだかららしい。どうでもいいが、二人は一年の交際を経て破局した。

いやいや、その憧れの人を取り合う前から、二人は何かと衝突しており、何の運命の悪戯であろうか、オトコヤマがギンジョウ小学校教員に任命されたら、畠田先生も同時期に教員として来たのであった。

表面的には素振りすら見せないが、二人の奥底には互いに負けず譲れぬ闘争心が今も燃えている。

その畠田先生クラスには、かの悪名高いスクリューズがいる。いつもなら、二人の闘争心に辟易するが、今年は事情が違う。

番格的存在で、特にメダロット関連で痛い目を見た三年生は、せめてメダスポーツぐらいでもスクリューズをぎやふんと言わせてやりたいと燃えている。そんな訳で、今年のメダロット運動会の三年生は一部を除き、担任に生徒も大いにやる気満々。

校内ロボット大会で辛酸を舐めさせられたイツキ、アリカ、ロクシヨウも雪辱を果たす絶好の機会がきたと浮き立った。

七月三日月曜日。三年生によるメダスポーツ大会。

校内ロボット大会と比べれば、いささか盛り上がりには欠けるが、幾人かの保護者の姿が見受けられる。

「ロクちゃん、頑張つてね」

応援するイツキママの右横には、オニエカチの母親スーシ婦人もいた。オニエカチは特別許可を貰い、カミキリムシ型メダロットのアルコをメンバーとして連れてきた。

一回戦の対戦相手はガリ勉イメージが強い三年二組。だが、メダ

ロッター自身の運動神経は大したことはないが、それとメダロットの扱いは別だ。二組の腕前は全くの未知数。

男子ラクロスを例に挙げれば、人数は一チーム十二人まで。メダラクロスでは、プラス五体で十五対十五で試合する。

メダラクロスのルールとして、各チームのメダロットは頭部、右腕、左腕パーツのどれか一つを一回限り使用可能。そして、出来る限り相手メダロットに当たらないよう注意しなければならない。相手を傷つけてしまった場合、故意と判断されなければその機体は試合続行が可能。

メダロットの扱いが上手いと見られたイツキは、ロクショウ、光太郎の二体を出場させることになった。イツキは光太郎の両腕をチャリリベア、脚部をヒパクリトに替えた。

「皆、ファイトね！」

補欠のオニエカチとアルコが声援を送る。

オトコヤマが審判として中央に立つ。

「スポーツマンシップに則り、まずは正々堂々挨拶からだ。メダロットとて、それは変わらない」

互いのメダロットが挨拶を交え、オトコヤマのホイッスルで試合開始。

ガリ勉というだけあって、きっとメダロットたちの操作は巧みだと予想していた一組であったが、そんなこともなかった。

蓋を開けてみたら、二六対一。二十五点差で圧勝した。ペットは主人と似るというが、二組のメダロットたちの動きはてんでばらばらで、気持ちいいくらいシユートが決まった。

メダロットたちに応援するメダロッターたちも、互いの手をタッチした。この分だと、四組スクリューズ相手にも勝てる。

イツキ以外はそう考えた。だが、四組対三組の試合を見て目を疑った。スクリューズはロボット以外でも強かった。セリーニャ、ブルースドッグ、鋼太夫。この三機が当然四組を牽引する形となり、三組の試合に挑む。

結果、三十対四と、二十六点差で勝利。ゴリーリーの鋼太夫がシュートを跳ね返し、ディフェンスのブルースドッグの守り、セリーニヤのすばしっこい動きに相手はタジタジ。

「……ロボット以外でも強えなあいつら。やっぱ、難しいかな」

「そんなこともあるまい」

耳ざとく聞きつけたロクシヨウが反論する。一組の生徒とメダロットがロクシヨウ、金衛門の周りに集う。

「そんなこともあるまいって……。根拠はあるのか？」

「お主ら、試合をよく見ていたか？」

「何って……スクリューズが中心となって活躍していたなって」

「確かにそうだ。だが、他のプレイヤーはどうであった？」

ロクシヨウの言うことがまだ分からない者もいたが、大体の者は気が付いた。

「……そういえば、セリーニヤ、鋼太夫、ブルースドッグ以外の奴は、あまり動きが良くなかった」

「そう言われれば、そうだな」

「あと、勝ったとき残っていた機体はあいつらの三機と、運良く残った感じのが二機ぐらいだったわ」

「んで、わいらは？」

光太郎の問いに、鈍い者もようやく悟った。イッキが応える。

「僕たちは連携が取れていた！」

「そのとおりだ、イッキ」

ロクシヨウが満足そうに頷く。

「いくら強くても、あやつら三機を一つとすれば。四組はただのワンマンチーム。しかも、四組はスクリューズに従っている感じであり、チームワーク自体は取れてない」

光太郎がロクシヨウの台詞を先取る。

「つまり、相手がどんなに強力なワンマンチームやろうと。こつちや普通にチームプレイすれば、勝てへんわけ無い！ちゅうこつちや」
「……それは、私の台詞だ」ロクシヨウがささやかに文句を言う。

試合前の敗色雰囲気を、ロクショウ、光太郎は掻き消した。一組一同のやる気が点火。その光景を見て、「青春だー!」と感涙でむせるオトコヤマ先生。

「応援してるよ、アルコ」

「任せてください」

この試合では、アルコをオフェンスとして出場させた。機体構造的にアルコのほうが交代選手より優れているせいもあるが、日本最後の想い出として、オニエカチたちを出場させて、優勝を飾ろうという一組の想いもある。

「あらあら、お高いメダロットなこと。傷付かないよう注意することだね」とキクヒメ。

「へっへ。俺らがロボットしかできない思いなら、そりゃ勘違いも甚だしいさ」とイワノイ。

「うんうん。洗濯ミスだね、ほんと」とカガミヤマ。

そのスクリーズの野次に対し、アルコは挑戦的に三人を睥睨する。四組と試合開始!

試合は初っ端から白熱した。一点を取られれば、お返しに一点入れ返す。二十五分まで双方七点。実力は同格。

試合が動いたのは、ハーフタイム残り時間六分の時。セリーニヤがボールを弾いた際、近接していたアルコが感電した。反則かどうか教員同士の協議結果、セリーニヤはルールに反してないと判断された。

腕や頭の隙間から煙が洩れるアルコ。そのアルコを見て、尋常ならざるショックを受けるオニエカチ。イツキや他のクラスメイトが慰めるが、オニエカチの震えはどうにもとまらない。仕方なく、アルコを選手交代、体調を崩したオニエカチはスージ夫人に連れられ保健室へ。

キクヒメの得意そうな笑み。これを見て、一組生徒、特にイツキ、ロクショウは燃え上がった。

そこから、一組、特にロクショウは反則すれすれの猛攻を仕掛け

てきた。あまりの気迫、そして、スクリーズの反則に怒った一組は益々一致団結を固め、残り時間一分、十対八となった。

このままでは終われない。ロクショウは、一矢報いる形でいいからこらしめてやりたいと考えていた。そこで、プラスや他のメダロツトに相談した。残り三十秒、ロクショウは他の者たちに迷惑をかけることを承知で、左腕パーツを使用した。

セリーニャ、ブルースドッグが固まり、ボールを取ろうとしたところを、ばっきーん！

二体はというと仰向けに倒れた。

「反則だ！」

キクヒメが高らかに抗議を申し出た。試合は一時中断。一組、四組の生徒は固唾を飲んで見守る。担任同士の協議の結果、ロクショウは退場。負傷したセリーニャ、ブルースドッグは交代。主力二人が抜けたことにより、四組はかえって肩の荷が降りたようだ。後二十秒にも関わらず、良いチームプレイをして、懸命にボールに食らいついたが、惜しくも一点差で敗北した。

試合は十対一で一組の勝利！反面、ロクショウはうなだれていた。『済まぬな、イツキ』。我ながら、大人げないことをしたと自覚している。しかし、私は耐えられなかった。前のおどろ山のコソ泥紛いの件といい、一度でいいから、あやつらの伸びた鼻の下をひっぱたいてやりたかったのだ」

「僕もだよ、ロクショウ。でも、次は正々堂々打ち負かしてやろうな」

「無論だ」

「辛気臭い話は終わりでつか？」

光太郎がさり気無い感じで間に入る。

「ほら、今は盛り上がりましょ！」

同三年生たちに、試合を観戦していた他の学年からも拍手喝采が贈られる。四組の生徒からも「あいつら齒軋りしていたよ。一度、あいつらをぎゃふんと言わせてやりたいと思っていたんだ」と言う

者が出る始末。応援席のメダロッターとメダロットたちがやんや、やんやと歓喜する。

一方、オトコヤマ先生と畠田先生。オトコヤマ先生は畠田先生を小馬鹿にするようなことは一言も言わず、黙って互いに握手を交わした。

「次の人間による運動会では負けませんぞ」

「こちらとて」

爽やかなスポーツマンシップに則った行動の裏では、互いに火花を散らしていた。

- - - *

* - - - - - - - - - - - - - - -

オニエカチ・ウチエボがギンジョウ小学校に転校してからはや二ヶ月。光太郎の計らい、イツキ、アリカとの触れ合いもあり、オニエカチは徐々にクラスや学校に馴染んできた。それはいいとして、一つ疑問がある。この前のメダスポーツ会するとき、損傷したアルコを見たオニエカチの態度だ。

自分の愛機が傷付きショックを受ける気持ちは理解できるが、あそこまで震えるとは尋常。探りを入れても、オニエカチ君が答えたがらないので、イツキもそれ以上の追及はよしした。

クラス一同のお別れ会の前に、オニエカチは少数の友人と最後に遊びたいと望んだ。夏休み二日前、移転三日前、タチャーナはイツキ、アリカの二人を自宅に來ないかと誘った。

「來てくれる…イツキ、アリカ」

イツキ、アリカはもちろんだと返事した。オニエカチはイツキと

同じ地味な部類に入る男子だと、短い付き合いながら分かった。どこかイッキと通じるところもあり、イッキとオニエカチはよく雑談した。二番目に、度々イッキと絡むアリカと仲が良かった。

オニエカチの家は赤煉瓦塀で囲まれた、右寄りに窪んだ箇所がある真四角な形の白い家だ。窪みの上は窓、区切るように小さな雨避けがあり、その下に表玄関がある。黒く塗られた鉄柱門越しから、様々な家庭菜園が育てられている。通路状に沿って向日葵も植えられていた。

アリカがインタホーンを押した。どなたですか？と、少々年配らしき女性が応じた。オニエカチの母親、スージだろう。

「ウチエボさんですか？ 私たち、オニエカチ君のお友達です。今日、オニエカチに誘われてきたのです」

「オニエカチのお友達！…オニエカチ！お友達が来たわよ」

インタホーンの向こうから、どたばたとオニエカチらしき足音が階下を降りる。ガチャリ、オニエカチが扉を開けて、勢いで段差も飛び越した。オニエカチはささっと門に寄り、門の鍵を開けた。

「来てくれてありがとう！イッキ、アリカゆっくり寛いでね」

二人を招き入れたら、オニエカチは門を施錠した。

「する必要あるの？」

「日本は安全だけど、ママやパパは用心に越したことはないからって」

「それにしても、見事に育ってるね」

イッキは庭を埋め尽くす家庭菜園を見て言った。夏の日差しと栄養たっぷりの葉土に根を張り育った野菜はどれも活きがよさそうで、ナスやトマトはぷりっぷりに丸く膨らんでいる。

「ママの趣味なんだ。…明日には、パパや業者の人と一緒に片付けなきゃいけないけど」

三人揃って玄関戸口に入ると、微笑むスージ夫人と渋い深緑の色の合いのカミクリムシ型メダロットのエイシリストことアルコがイツキ、アリカを歓迎してくれた。オニエカチが夫人とメダロットを紹介する。

「もう知っていると思うけど、こっちはママ。そして、この子の名前はアルコ」

「こんにちわ！どうぞ、寛いでください」

アルコというエイシリストはぺこりとお辞儀した。アルコの声もまた渋めで、声だけ聴けば、きつと三十路ぐらいの厳格な軍人を連想されていただろう。イツキ、アリカはスージ夫人とアルコに挨拶を交わした。

二人はオニエカチと共に二階に上がる。

既に準備は終わっているのだらう、オニエカチの部屋はダンボールで囲まれていた。

「何して遊ぶの？それとも、外でロボットする」

部屋を見回しながらアリカがオニエカチに聞く。オニエカチは嫌々と首を縦に振る。

「ちよつと…ロボットは…」

「あつ！親から許可ないと駄目何だっけ」

「それもあるけど……」

「オニエカチ君。オニエカチ君って、どうしてロボットとかを避けるの？ロボットがそんなに嫌いなのか？」

イツキは思い切って尋ねてみた。オニエカチが身を固くする。イツキはすぐに態度を改めた。

「ごめん、話したくないんだよね…」

「…いや、いいよ。これも何かの縁かもしれないし…。でも、心して聞いてね」

イツキ、アリカは思わず正座した。オニエカチはベッドや椅子に座るよう促すが、二人は断った。オニエカチも床の上で胡坐をかいた。

今日ほど、イツキは自分の迂闊な口を呪った日はない。

オニエカチはナイジェリアに居たとき、親がイスラムを信仰する友達がいいた。彼は貧乏、オニエカチは金持ち。だが、当人たちはそんなことを一向に気にせず、暇があれば遊んだ。ある日、オニエカチはいつも通り彼と表通りの目立つ場所で待ち合わせたが、彼はその日来なかった。次の日も、その次の日も来ない。おかしいと思ったオニエカチは、親に断りなく友達の家まで向かった。彼の家はオニエカチの家よりずっと小さく、次男の彼を含めて五人も兄弟がいた。

オニエカチの訪問に、一家は顔を不快感をあらわにした。オニエカチの親族はキリスト系を信仰する家柄、その為、彼の一家は彼とオニエカチが付き合うことを快く思っていなかった。

オニエカチが彼はどこに居ると尋ねると、十一歳になる長男がいきなりオニエカチの胸倉を掴んだ。

「お前のせいだ！お前が、仲良く付き合わなきゃ……！」

長男は母親に頬をはたかれた。焦るオニエカチに、彼の母親は忌々しげに口を開いた。

「もう、金輪際こないでおくれ！あんたが来ないだけで、うちらはまだ幸せに暮らせるもんだよ！」

彼の母親は凄まじい勢いでドアを閉めた。その母親の態度に、オニエカチはまるで自分が我が家から追い出された気分を味わった。

数日後、彼が帰還した。ただし、死体となつて。

オニエカチはこっそり家を抜け出し、彼の家を目指した。人だかりを掻き分けて見えた物は、血がべっとりついた白い一枚布が被せられた何かだった。立て続けに眩暈、吐き気をもよおした。

後に知ることだが。内臓が抜き取られていたので、恐らく、臓器売買の類を目的とした強盗殺人だろうと判断された。

そんなことより、父親を除き、彼の一家はオニエカチにも責任の一端があると思つていようだ。息子がキリスト信仰系の子供と付き合っている。そのせいで、息子が殺された。母親は今回の事件は

イスラム過激派と無関係なことは頭では理解していても、オニエカチを見るとどうしても憎しみをぶつけられず、周囲のまことしやかな会話と母親の態度を見て、他の兄弟はオニエカチに責任があると思ひ込んだ。

以来、オニエカチは両親から極力外出を控えるよう命じられた。そんな折、転勤の話が舞い込んだ。父親は息子の安全を考えて、妻と子と共に海外移転した。単に、多文化経験させる目的ではなかったのだ。

そうして、今に至る。

オニエカチは口を閉ざした。語り手、イツキ、アリカ、メダロット越しから会話を聞いていたメダロットたちも、皆一葉に口を閉ざした。

何となく知っていた程度のこと。自分たちとは関係ない事柄。ニユース、学校の授業で何気なく耳にするぐらい。今までそう思っていたことを、実際に経験した者から語られると何も言えない。

学校の授業では表面を繕った小奇麗な文章を読み上げればそれで済むが、いざ、その当事者を前にして、イツキ、アリカは言うべき言葉を思いつかない。

それでも、口を開かないと始まらない。イツキは、導火線に点火する思いで口を開いた。

「……ロボットが嫌なのは、何というか。その……」

「重なっちゃうんだ。違うとは分かっているけど、メダロットが傷付く様を見ると、……あの、あの血布から浮かび上がった彼の形を思い出してしまうんだ……自分でもよく分からないけど……」

オニエカチは嗚咽を漏らした。二人とメダロットたちは何も言えなかった。

つ……。イツキも涙を流した。何故かはわからない。同情ではなく、泣くしかなかった。

「えぐ……ごめんよ、オニエカチ君。話したくないこと話させちゃって……ごめんよ、うぐ」

何でか知らないけど、アリカも涙目になった。オニエカチも二人もまだ九歳。周囲に流されやすいのもあたり前かもしれない。

涙ぐむイツキを、オニエカチは逆に慰めた。

「泣かないで、イツキ。僕が勝手に話したただだから」

「…でも…」

「ううん…。それに、日本に来てこのことを話せるのは君とアリカが初めてなんだ」

「えっ？」

「最初に、次の学校でも、親しく話せる人はいなかったんだ。このまま、ジャパンでは誰とも友達にならなくていいやと思っていた…。そんなとき、君の光太郎のお陰で僕は君らと話し合えた…。こんな言い方は変かもしれないけど、話したくないこと話せるほど、僕はイツキ、アリカに君らのメダロットたちと親しくなれたんだと思う」

イツキとオニエカチが見つめ合う。言語、習慣、文化、経済、国、あまりにも違いすぎるし、世界全てと手を繋ぐなんて所詮夢。ただ、ここにいる二人はもう、それらの垣根を超えていた。

さて、ここは精神年齢が上の私がしっかりしなくちゃね。気を取り直して、アリカはぱんぱんと頬を張る。そのアリカを見て、二人は訝しんだ。

「さ、互いに腹を割ったようだし。とにかくにも気分を変えて、何して遊ぶ？」

三人は外へ出た。オニエカチが母親に許可を貰い、アルコも連れてきた。息子が言わずとも、スージは今日、オニエカチが友達と呼べる者たちいるのを知り、喜んだ。

イツキが隠れ鬼ごっこをしようと言った。

「隠れ鬼ごっこ？かくれんぼなら聞いたことあるけど、それ何？」

遊ぶ前に、アリカは隠れ鬼ごっこのルールを手早くオニエカチに説明した。

二人を気遣い、アリカが鬼役を買って出た。

「光太郎、大空飛んで隠れるのなしね」

「はは！ばれてもうたか！」

イツキは光太郎の脚部をヒパクリトの物に替えた。アリカが公園の樹に顔を伏せて、数を数え始めた。

ブラス、光太郎、ロクシヨウはばらばらに。イツキ、オニエカチは連れだつて隠れた。

アリカがひっぴと怪しく笑いながら忍び寄ってきた。

「…ひっぴひ。悪い子はいねがあ、悪い子はいねがあ」

アリカのなまはげ演技に、イツキ、オニエカチ、近くに隠れたロクシヨウは笑いを必死に殺した。

こうして、陽が暮れかかるまで、三人と四機は精一杯貴重な時間を遊びに注いだ。

帰り際、オニエカチはそれぞれの顔を見つめ、順番に握手した。

「短い間だったけど、僕、楽しかった…。イツキ、アリカ。…また、いつかどこで会えるといいね」

オニエカチはイツキ、光太郎とはがっちりと握手した。

夏休み前日のお別れ送別会の次の日、夏休み初日。ウチエボ一家は早朝、アメリカへ向かつてフライトする。

今まさに車で飛行場へ行こうとする一家に、数名の一組生徒が最後のお別れに来了。正真正銘、オニエカチは最後のお別れの挨拶を交わした。直前、イツキがオニエカチにアーマーパライディンの左腕を、アリカシアンドッグの脚部をオニエカチに渡した。

「エイシイストは高威力を得る代わりに装甲を犠牲にしているから、これがあれば少しはましになると思うよ」

「過分なお心遣い痛み入る」

社内からアルコが格式ばった礼を述べる。ロクシヨウと馬が合うかもしれない。

「ありがとう、イツキ、アリカ…。大切にするね。あと、イツキ」

「何だい？」

オニエカチはこうささやいた。

「アリカを大切にしろよ」

イツキはなんのことやらと首を捻り、アリカは一瞬赤面した。

車のブラインドから、オニエカチが手を振る。車が見えなくなり、他の者が帰っても、イツキ、アリカに、二人の愛機三機はしばらくそこに立ち尽くした。

ナイジェリア、日本。普通に暮らしている自分たちには考えられないような移動生活のオニエカチ。今後、彼がアメリカという人生を送るかは分らない。こんなことしかできないが、二人は考えられる限りの贈り物としてパーツをオニエカチにあげた。

アリカが、目と鼻の先まで顔面をイツキに近づけた。

「な…何だよ」

「じゃ、ラジオ体操でも行こ！」

「うん、いいよ」

イツキは淡泊な口調で返事した。

そんなイツキを、アリカは元気づけるように腕を引っ張りラジオ体操へ連れて行く。光太郎、プラスは相変わらずだと苦笑し、ロクシヨウは暖かな気持ちで二人の背を見た。

9・メダラクロス（後書き）

カプトでも述べたことですが、前半部の下りはおまけみたいなもの。後半が本編。

首を縦に振る動作は、確かアメリカではそれが「拒否」を意味するから。ぶっちゃけたら、ナイジェリアで拒否を意味する動作が分からなかったのも、とりあえず首を縦に振らせたのが真相。

*後で調べてみた結果、アメリカではなくブルガリアでした。色々間違えて済みません。

次回から、「メダロット島」編に突入します。二話続いてロボット描写が皆無だったから、メダロット島編からはふんだんにロボット（戦闘シーン）を盛り込むようにします。

10・メダロット島（初日）

彼はある人からの指令を請けて、メダロット島へ向かう。

常に微笑む白い仮面を付け、ばさりと漆黒のマントを翻し、彼は愛機と共にメダロット島へと出発した。

金魚鉢ヘルメットを被り、全身白いアンダースーツを着込んだいかにも変質者な風体の人物が、こそこそと下水道を移動する。見張りらしき者に合い言葉を伝え、下水内部の更に下、密会所があるマンホールに潜る。

ロボロボ、ロボロボ、ロボロボ！

わいわい、がやがやとは騒がず、金魚鉢集団は男も女もロボロボと騒いだ。そう、ここは悪の秘密結社ロボロボの秘密の集会所。上座の太いアホ毛を伸ばした男は団員が集めたのを見やり、立ち上がって簡単な挨拶を述べる。その男を含む上座に座る四人だけ、何故か全身を黒いアンダースーツで身を包み、頭には先が丸っこい二本の角を生やしていた。

四人の中でも一際大柄の男は傍目から見ても、明らかに気を落としていることが見て取れた。大柄の男は、おどろ山にてイツキたちと交戦した、ロボロボ団幹部シオカラであつた。おどろ山での失態を、シオカラはリーダーに同格の幹部たちから酷く糾弾されたのだ。おっほん！アホ毛の男が気取った咳払いをする。

「諸君も既に周知のとおりであろうが。今宵、我々ロボロボ団は例のマル秘大作戦を実行するときが来た。そして、今回の陣頭指揮はサラミが取る」

四人の中でも一番背の低い、おしゃぶりをつけたせいぜい五歳から七歳ぐらいの男の子が壇上に立つ。サラミと思しき男の子は、幼

い声ながらアホ毛の男以上に気取った喋り方をした。

「手筈は整っておる。後は、諸君らは工作員として乗り込むだけだ。目下のところ、私は諸君らの報告を受けるだけだ。だが、急を要するときは私自らが手を下す。それは即ち、幹部であるボクちゃ……私が自ら現場に赴かなければならないほどの非常事態である。できれば、諸君らの迅速かつ優秀な働きにより、私自らが手を下さなければならぬ事態が起きないことを願う。……では、散開！健闘を祈る！」

掛け声と共に、白い集団はゴキブリの如き速さで密会所から一斉に移動した。

オニエカチ君と別れて五日、うすら寂しく思うイツキに追い打ちをかけるように、夏休みのメダロット島旅行に行けそうにないとパパは言った。

「言い方が悪かった。正しくはメダロット島には一緒に行けないだけだ」

「どういうこと？」

「パパはちょうどイツキたちが行く前日には、仕事でメダロット島へ出張するんだ。毎日は無理だが、イツキがママと滞在している一週間のどこで暇を作るよう上司に頼んだことから、滞在期間の間に三日間ほどぐらいなら、一緒に遊んでやれるぞ」

食べている時に関わらず、イツキは嬉しさのあまり飛び跳ねて椅子からこけてしまい、チドリママに叱られた。

話を聞いていた光太郎がロクショウにこっそり尋ねる。

「ロクショウ、どうや？」

「どうとは？」

「わいな、一度は行ってみたいと思っていたんや。いやー、こうも早う実現するとは……。互いにマスターがイツキやんで良かったな！」

現金な奴めと、ロクショウは苦笑した。

メダロット島出港当日。イッキはお気に入りの漫画数冊、携帯ゲーム機、母親に読むように言われて無理矢理詰められたズッコケ三人組に十五少年漂流記などの児童文学小説二冊など暇つぶし用の荷物が入ったバッグは自分で担ぎ、着替えのバッグはロクショウに担がせた。ソルティは、ご近所の萩野さんに預かってくれた。

イッキは、チドリ、ロクショウの三人は、萩野おばさんが運転する車で送ってもらった。

メダロット島の夏休み一般便の出港時間は、朝の八時四五分、十時五十分、十三時二十分の三便に分けて出稿する。イッキたちは最終便の一三時二十分発に乗船する。

「萩野さんありがとね。お土産ちゃんと買ってくるわ」

チドリ、イッキ、ロクショウは萩野さんにぺこりとお辞儀をした。港に着いた大抵の人は船を見上げた。船の大きさもあるが、鮫をモデルとした青く奇抜な船型が珍しいからだ。メダロット島運航船、かのシャーク号とはこれのこと。チドリは思わず携帯のカメラで撮影してしまった。

今日はあいにくの曇天。天気予報では台風の恐れはないらしく、船は通常どおり運航。また、一週間の間は概ね晴れと予測された。

チドリはつきつきとする我が子の手をしっかりと握り、船員に乗船券を見せた。

「どうぞ、ごゆるりと船の旅をお楽しみください」

船員のマニュアルどおりの挨拶を受けて、三人は乗船した。

「イッキー！あんたもきたのね！あつ！おばさんもこんにちわ！」

船縁から身を乗り出して元気よく声をかけたのは、アリ力だった。そのアリ力を、背後から甘酒おばさんが注意した。

入船すると、イッキは、お前らは！と大声を上げそうになった。

それは、お前らと言われそうになった者たちも同じだ。

キクヒメ、イワノイ、カガミヤマ。あのスクリューズの三人も乗船していた。スクリューズに挟まれて、眼鏡をかけた気の弱そうなイワノイの父親がいた。イワノイの父親は天領親子の存在に気づき、挨拶をした。

保護者同士が穏やかに挨拶を交わす中、当の子供たちとそのメダロットの間では、一種の緊迫感が漂った。

そこへ、また懐かしい二人が乱入してきた。

「よう、イツキ。久しぶりだな」

「あら？皆さんお久しぶりです」

右側通路を見たら、カリンちゃんとコウジ、そして、見知らぬ男性と執事っぽい男性がカリンとコウジに付き添っていた。さらにさらに、アリカと甘酒おばさんも加入した。

保護者や一部の者を除き、子供たちの多くはメダロット島で一波乱起きることを予想した。

ただ一人、ロクショウは船先に佇んでいた。保護者の方々もいるので騒動は避けえたが、どうも嫌な予感がしてならない。メダロットを使用した犯罪を警戒して、セレクト隊もメダロット島警備に就くと、イツキの母上から聞かされた。

スクリューズ、高名な家柄の親族と思われる例の子供二人、セレクト隊。もしも……だが……これで、ロボ団に怪盗レトルトまで現れれば、役者が勢揃いすることになる。

考えすぎだな。単なる杞憂にしか過ぎんだろう。ロクショウが船先からとつくのとうに遠のいた御神籤町を見つめていたら、イツキ、光太郎もきた。

しばらく、じっと遠のく景色を眺めた。これから、一週間はメダロット島でバカンスを過ごす。イツキや子供たちは楽しみでしょうが

なかったのに、こうして町から離れると、何やら物寂しい感情も湧いた。

メダロット島バカンス初日は、曇天ながら快適な旅立ちだった。シヤーク号のけたたましい気的が鳴る。

10・メダロット島（初日）（後書き）

登場人物の視点がころころ変わりすぎたかもしれない。

11・メダロツ島（初日・二日目）（前書き）

遅れて申し訳ありません。

11・メダロット島（初日・二日目）

波にゆらゆら五時間、天領一家の居る部屋からでもメダロット島の島影が見えた。

メダロット島はシーズン毎に客を分けていて、天領家を選んだ夏休み第一シーズンでは、スタッフを含む総勢一二万人もの大衆が、最小二日から最長一週間メダロット島に滞在する。夏休みのシーズンでは、外国人のゲストを招いた大規模なメダロットの大会を開催するので、毎年、十万人超えは当たり前。

シャーク号が港に着くまで、子供たちはメダロットとともに甲冑や船内を探索し、親はのんびりと船室で寛いだ。一時間ほど前から小雨が振り出さしたので、イッキは携帯ゲーム機に興じ、光太郎は何となく漫画を手に持ち、ロクシヨウはイッキがママに持たされた十五少年漂流記を読書、チドリは小雨が降る四十分ぐらい前から仮眠していた。

そうして時間を潰していたら、船内アナウンスが後二十分で船は港に着くと放送した。

チドリはむつくりと起き上がり、船室内の洗面付きトイレで洗顔して目を覚ますと、イッキに下船の支度をするよう伝え、自身は身近な物をバッグにまとめた。

ぽー！ぽー！

シャーク号は二回汽笛を鳴らし、船内アナウンスが残り五分で港に着くことを告げる。

天領一家に甘酒親娘は下船口近くのカフェで荷物を置いて待機していた。

体感からして船が止まるのに気づく、イッキは何となく外を見やる。中世ヨーロッパの城下町城門を思わせる作りのメダロット島遊園地入場口が聳え立っていた。チドリは目覚めのコーヒー代金の支払いを手早く済ませ、天領一家は一拍遅れて甘酒親子の背を追う。船

上からでも、既に膨大な人間が港やメダロット島で動き回る姿が確認できる。

イッキたちが泊まる予定のホテルは、港から海沿いを歩いて二時間ほどのところにある。歩くには遠いので、各施設から送迎用バスが送られる。

混雑した中ではぐれぬよう、チドリとイッキは互いの手をしっかりと握り合った。移動の邪魔になるかもしれないので、ロクシヨウと光太郎はメダロットに収納、おかげでイッキはロクシヨウに割り当てた荷物を持つことになり、重いから早く送迎バスに乗れることを願った。

「メダロット島タカサゴホテルお泊りのお客様の方々はいらっしゃいませんか？タカサゴホテル送迎バスはこちらです！」

四十代の男性が人混みの中、ざわめきと各施設の添乗員に負けぬぐらい大声を張り上げていた。

二組の親子は群衆を掻き分けて、送迎バス停まで何とか行けた。急ぎ、大荷物だけをバスに詰め込み、イッキは肩が楽になれた。

二組の親子が乗ってから数分後、添乗員の男性が人数を確かめると、バスは発射した。移動の間、イッキは雑談を交わしつつ、シャーク号と港、そしてバスからの景色を眺めた。

十五分ぐらいで、バスはタカサゴホテルに到着した。タカサゴホテルは四階建ての和洋折衷な建築物。天井は屋根瓦、下は薄い水色と賑やかな点々模様が塗られた近代的なビル。

パパが四月頃から、ついでに甘酒母子の分も予約していたホテル書入れ時に合わせて、ホテルはシーズン対応の大サービス格安宿泊期間を設けた。本来、一週間の宿泊料は親子二人（メダロットは荷物扱い）で十一万二百円もするが、サービス期間に付き、家族学生割引で六万円である。パパは会社が用意したところで眠るから、ジヨウゾウパパの宿泊代については実質ただである。

その分、食事やお土産に宴会で元を取ろうという魂胆がある。

雨が本降りとなり、ホテル前の海辺で遊ぼうにも遊べず、ロボット

ルもできない。天領一家は三階の305号室、甘酒親子は一つ隔てた307号室。まずは荷物を置いた。外は予報どおりの雨。どうせ濡れるから、イツキはすぐにでも海水パンツを履いて海に行こうとしたが、チドリは波が荒れているので危険だと止めた。

部屋の窓から海を見ると、確かに波は荒れていた。が、船が転覆するほどのものでもない。イツキは波に揺られたかったが、母親とメダロッチ越しからロクシヨウにも止められてしまい、諦めた。

一室の広さは十四畳の広さがあり、二人と二機で過ごすには十分過ぎる空間だった。

テレビで刑事物ドラマの再放送を見ていたら、メダロッチから転送したプラスも連れて、アリカは天領家の部屋に訪れた。ママはアリカが部屋に入ること喜んで許した。

「イツキ、今暇でしょ？だからさあ、一緒に持ってきた宿題片付けない」

「あら、良いアイデアだね。アリカちゃん」

ママもアリカの言ったことに賛同した。他にすることが無いので、イツキはアリカと宿題をすることにした。ママは甘酒おばさんに用があると言って、部屋を出た。

イツキが持ってきた宿題は一番嫌いな算数の宿題、夏休みの宿題はこれの他に、社会、国語、日記、歴史などがある。イツキは算数、日記、社会の宿題を持ってきた。アリカは社会と歴史に日記。

アリカの場合、嫌いというより好きな部類の宿題を持ってきた。

ロクシヨウ、光太郎、プラスが教師役として時に助言を与え、二人の宿題を手伝った。イツキはてんで駄目で、完全にロクシヨウと光太郎が教師役となり、アリカに「どっちがマスターか分からないわね」と笑われてしまった。

二日目、昨日のうちにバケツをひっくり返した天気は日本晴れ。

九時には早速、メダロット島遊園地行きのバスに乗った。

イツキ、それとアリカは、この日のために受けられる限りの真剣ロボットを受けた。目的は実力向上とメダロット島での限定品を買う為である。

ゴールドンウィーク三日前、メダロット研究所に寄った時、ナエさんから一早く情報をもたらされた。メダロット島夏休み第一シーズンにて、ヴァルキュリア型メダロットのプリティプライン三十式、人魚型メダロット・ピュアマーメイドの後続機メイティン四十式がティンペットと抱合せて計百体が限定販売されるという情報だ。

両機体は今年の一月に新発売されたメダロット。値段は高く、プリティプラインは八万円、メイティンは七万円、それに四万円もする女性型ティンペットも買えば、実際は十二万円と十一万円のお値段が付く。

その両機体が、今年の夏休みメダロット島夏休み第一シーズンにて、七万円と六万円という破格の値段で売られる。

抽選予約は一万名、インターネットで受付中とのこと。自宅に帰るとイツキ、アリカは即行で抽選予約を済ませた。イツキはママとパパにこのことを話した。両親はイツキが二機目のメダロットを持つことを承諾した。ロクショウが一家の一員として馴染んでいたのも、両親が承諾した理由だろう。

そんなとき、ゴールドンウィークで光太郎を拾ってしまった。ママとパパは悩んだが、一万名の応募があるので当たる訳がないだろうと思った。

だが、両親の思惑は外れ、何という強運。イツキ、アリカはプリティプラインのセットを買う権利が当たった。今更捨てるというわけにもいかず、チドリとジョウゾウはイツキが買うこと許した。「……しょうがなわいね。でも、そろそろ人間の家族が増えてもいいなと思わない」

このとき、ママがパパに対して意味ありげな視線を送り、パパが赤面をして誤魔化すように新聞で顔を隠したのを今でも覚えている。

あれはどういう意味なのかな？

開園前だが、昨日以上に混雑を極めていた。今日の二時から開催する国外ゲストを招いたロボット大会の席取りを目的とした客が大半だ。イツキ、アリカは限定商品予約の際にこのロボット大会の参加申し込みを済ませていた。ゲストの権利として、一枚無料観戦チケットが進呈される。そのため、チドリと甘酒母親の表情は余裕だ。

イツキがチドリの顔を見上げる。

「ねえ、ママ。大会まで自由に動いていい？」

「そうねえ…。アリカちゃんと一緒なら構わないわ」

アリカもイツキと同じように母親の顔を見た。

「母さん、私も大会が始まるまでは自由に動いていいでしょ？」

「イツキ君と一緒にならね」

二人の親の承諾を得て、イツキとアリカは改札口はくぐると、まずは一直線に売店を目指した。人を掻い潜り、押しのけられながら、目的の売店に辿り着こうとしたそのとき、待てと何者かが二人を呼び止めた。

他の誰かを呼び止めたのだろうと思い、先を急ごうとしたが、またしても待てと叫んだ。

「一体誰なんだよ？姿を表したらどうなんだ」

イツキの要望に答え、颯爽と花垣を飛び越えた人影。

忍者のような着地姿勢を取るその人物は、黄土色のダブダブのパーカーと緑色のカーゴパンツを履いた、眼光鋭い辮髪頭の少年がイツキとアリカの前に立ち塞がった。

「そのオトコ！イケメンさすらいメダロットであるこのリョウ様と勝負しろい！」

「はっ！…何言っているの？今、急いでいるんだけど」

「オトコの日本語…もとい、勝負に二言はないっ！メダロット転送ー！」

リョウという少年はイツキとアリカに見せるように掲げたメダロ

ツチから、メダロットを転送した。リョウのメダロットチから転送されたメダロットは、見たことが無い。右手は小さなドリル、左手は大きなドリル、脚部はブリキ玩具のような形をした四つの車輪、頭はキノコの形をした赤い配色で染められたメダロットだ。

イツキが何か言おうとする前に、謎の少年リョウが先んじて二体のメダロットに指令を出した。

「行くぞ、ワサキック!!」

リョウが蹴るポーズを取ると、二体の謎のメダロットが右腕のミニドリルでイツキの足元の土を抉った。削られた土がぴしぴしと服や顔に跳ね返る。

「いったーい！危ないじゃないの！」

「女郎は黙れ！オトコの世界に顔を挟むな！」

この言葉がアリカを怒らせた。リョウに突っかかると思いきや、アリカはイツキの背中を押した。

「やつちやいなさいイツキ！」

「え……！そんなあ……」

「何をごちゃごちゃ話している！喰らえい、ワッサドリールッ！」

今度は左腕のでかいドリルが足元の土を抉り飛ばした。がなるドリルとリョウ少年の大声で周囲は騒ぎに気付き、危ないぞ、他所でやれと文句を言いつつ、暴れる血気盛んなリョウを止めようとする者はいなかった。

「何人たりとも我らの聖戦は止めさせんぞ！」

メダロットチからロクシヨウと光太郎が声を発した。

「イツキ、私と光太郎を転送しろ。話しが通じそうな相手ではない」「あないな相手には、ちよいともんだる必要があるさかい」

仕方なく、イツキはロクシヨウと光太郎を転送した。リョウが不気味に笑い出した。

「ふっふっふ。覚悟は出来たようだな……」

「……出来てないって……」

リヨウはさらりと受け流した。

「ふっふっふ……！受けてみよ、我が究極必殺奥義！ビューティ・キ
ィス！キラキラーン・ムチューー？」

「無茶苦茶だあー！」突っ込むイッキ。

突進するリヨウのメダロットたち。応戦の構えを取るロクシヨウ
と光太郎。

「こらー！やめなさい！！」

この騒動を仲介にきたセレクト隊員。全ては、同時に起こった
ことだった。リヨウが振り返り、二体のメダロットもマスターと同
じく行動をした。どうやら、リヨウのメダロットはリヨウと同じ行
動を取る、一心同体なのかもしれない。イッキも隊員を見た。だが、
ロクシヨウと光太郎はもう攻撃の手を止められなかった。

硬い金属同士が二回接触する音が響く。一体のメダロットはキノ
コ頭を切られ、一体は胸部が凹み、二体は同時に機能停止した。

全ては一瞬の出来事だったので、当事者たちには何がなんだか理
解不能だった。

たった一つ理解できるのは、形はどうあれ、イッキのメダロット
がリヨウのメダロット二体に打ち勝った一点だ。

「ほら、これ以上、面倒事に巻き込まれちゃかなわないわ」

アリカがイッキの腕を掴んで人混みに紛れた。リヨウ少年はシヨ
ックで立ち尽くしていた。現場に駆け付けたセレクト隊員がリヨウ
を羽交い締めにした。

「こら！こんな場所で騒ぎを起こすなどけしからん奴であります！
設営支部まで一時連行するであります」

そして、二体のセレクト隊御用達メダロット、アタックティラノ
が器用に二体の倒れたメダロットを回収した。と、リヨウ少年が悔
しげに叫んだ。

「クソー！次は負けんぞ！！」

「さっさとこい」

群集の隙間から、リヨウが羽交い締めのまま引き摺られていく姿

を見届けた。トラブルや余計な証言を避ける為、二人は二十分程度売店から離れた。売店近くのゲームセンターに入り、百円でゾンビを撃つシューティングをプレイ、それからゲームセンター内を適当にうろつき、売店へと向かった。

こちらは外ほどではないが、係員が客を整列させていた。二人は引換券を見せて、列に並んだ。どうやら、自分たちが最後尾らしかった。主に若者やファミリーを中心に、プリティプラインとメイティンのパーツが入った箱、ティンペットBOX、メダルの三点セットを持って店から出てくる。胸が高鳴ってきた。三人目にして、最後の仲間を迎えられる。

プリティプライン一式を買うために、戦利品であるパーツの多くを切り売りするのは惜しまれたが、その惜しさも目的を目前にして消えた。

前に並ぶアリカがパーツ、ティンペット、メダルの三点セットを先に購入。自分も引換券とお金を渡し、さあ、ご対面。そのはずだったが、世の中そうそうイッキの思い通りにはならなかった。

女性店員が非常に濟まなそうな顔で言った。

「誠に申し訳ございません。さきほどの方でメダルは品切れとなりました。次回までの入荷は未定となっております」

「そんなあ。パーツやティンペットも？メダルも一緒じゃないの」

「いえ、パーツやティンペットはお売りいたします。ですが、メダルは別売りとなっております」

「えー！普通、そういうのも一緒に渡す物じゃないの」

アリカがイッキの肩に手を添えた。言わずとも、今は無用なトラブルを避けると言いたいのが分かった。イッキは渋々、大人しくプリティプラインのパーツとティンペットだけを受け取った。

アリカは嬉しげにシノビをメダルを陽にかざしたが、イッキは溜め息をついた。折角入手しても、メダルが無ければただの人形。動いて会話できてこそ意味があり、そうでなければ意味が無い。かと言って、このまま手放すこともできない。

メダロツチの時計を見た。十時中頃を指していた。こうなれば、僕ができることは一つしかない。

「何がなんでも入賞しなきゃね。確か、三位はメダル、パーツ一式、ティンペットのどれか一つを貰えるんだよね」

アリカはイツキの思考を読み取った。イツキは一応、聞いてみた。「勝たせてくれるの？」

「まっさかー！前は負けてあげたけど、今度は手抜きなしよ。優勝はこの私とプラスと……えーっと、何て呼べばいいかな？」

「どこか落ち着ける場所で組み立てから、名前を決めましょ」とメダロツチからプラス。

「そうね。というわけでイツキ。大会の間は、ライバル同士よ」

そう言って、アリカは何処へと去っていった。残されたイツキはただ一人、途方に暮れた。…なんだかなあ…。まっ、愚痴を言ってももう手遅れか。こうなれば、やるだけってみるしかないよなあ…。やるのは、メダロツチたちのほうだけど。イツキは俯いまま言った。「ロクシヨウ、光太郎。頼んだよ」

メダロツチ関連の大会を行う場所は、外観は東京ドームそっくりだった。

受付で身分を証明して、選手控え室に入った。控え室内は、黄色人種、黒人、白色人種と、人種の坩堝るつぼと化していた。指定ロッカールームの鍵を開けて、買ったばかりの二点セットや財布などの貴重品を置き、中に敷かれたトーナメント表を見てびっくりした。出場選手の多さにもそうだが、一回戦第一試合の相手は何と、柔らかな金髪ツインテールが印象的な、美少女メダロツターカリンちゃんが相手だった。

反面、コウジやスクリューズのイワノイ、カガミヤマとは大分離れており、幸か不幸か、アリカの一回戦の対戦相手はコウジだった。

キクヒメとは、キクヒメが自分が勝てた場合の話だが、二回戦で当
たる。コウジとは、準決勝で相見えることになりそうだ。

ドームスピーカーが、天領イッキと純米カリンに出場を告げた。

11・メダロット島（初日・二日目）（後書き）

タカサゴホテルの由来は、日本酒の「高砂」から来ています。
リヨウの出現時期がゲームとは異なります。

12・メダロット島（二日目）

簡素なコンクリートで固められた選手入出用の道を抜けて、大会場闘技台へイツキは大観衆の視線にその身をさらした。観客席の照明は仄か、逆に舞台の照明は眩しかった。少し遅れて、カリンも闘技台反対方向へと回り、おしゃまなお辞儀をした。ふわりと、絹めいた髪とスカートが緩やかに翻る。カチコチに固まったイツキは、意外にも物怖じしないカリンちゃんの態度に、賞賛と軽い嫉妬のよなものを覚えた。

イツキも首と背を小さく曲げた。

「船以来のご対面になりますね。私、ロボットに自信はありませんが、精一杯頑張ります。よろしく願います、イツキさん」

イツキは返事に困り果てた。緊張していて、しかも、可愛いらしい女の子に一体どう接したものと迷った。ミスター・うるちが北の通路から姿を現し、観衆と選手に深々と腰を折り、お決まりの前口上を述べた。

と、カリンが何か思い付いたのか。ポンと右手で広げた左の手の平を叩き、ミスター・うるちに来るよう手招きした。カリンはうるちの耳元で何事かと囁き、観衆にイツキも少女と審判の動向に注目した。

「えー。ただ今、純米カリン選手からイツキ選手への提案で真剣ロボットが要望されました。イツキ選手が拒否する場合、直ちに試合は賭け無しの大会ルールに乗っ取った真剣ロボットが行われます。

イツキ選手、パーツを賭けた真剣ロボットを受諾しますか？」

「カ、カリンちゃん！どうして？」

「……実は私。コウジさんや仲の良い友達となら遊び程度のロボットをしたことならありますけど、まだ、一度も真剣ロボットをしたことが無いのです。……いえ……本当はパーツを取られることよりもナースちゃんたちが傷付く様を見たくないがために、これまで避け

てきたのです。ですが、この前の事件に、イツキさんやコウジさんの戦いぶりを見て、私も一度は全力を持ってロボットを経験してみたくなったのです。…手前勝手な頼みとは承知しておりますが、どうか私の挑戦を受けてくれませんか？イツキさん」

即断ろうとしたが、カリンちゃんの潤ませた真剣な眼を見たら、二の足を踏んでしまい。結局、ミスター・うるちに了承の意を伝えた。

「それでは、メダロット島ロボット大会第一回戦第一試合！ロボットファイトオー！！」

イツキはロクショウを転送、カリンはプリティプライン…それとも、プリティプラインのパーツを付けたセントナースと表せばいいのだろうか。

「……カリンちゃん…それは？」

「ナースちゃんです。本当はもう一体、シルビアという子がいるのですが。ナースちゃんと比べたら、まだ経験不足なので、シルビアのパーツをナースちゃんに装着したのです」

ともかく、二人と二機は試合を始めた。ナースの鞭のようにしなる電流を帯びたソード攻撃を、ロクショウは難なく回避。ナースは動きがなくてなく、真剣ロボット経験が無いのは本当のようだ。イツキは出来る限り手を抜くよう指示した。

ものの数分間、追って追われるの試合展開が続く。始めは応援していた観客も、真面目にやれという声がちらほら聞こえてきた。

仕方なく、イツキはチャンバラソードで適当に攻撃するよう言った。

かきん…！ロクショウの力無い一撃が、左腕の盾に僅かな跡をつける。

「お待ちください！」

カリンが祈る形で両手を握り、叫んだ。そして、薄らと涙目を浮かべた。なんだよ、なんだよ。あの子、びびっちゃったのかな？こりゃ、次の試合まで待つか。観客から不満な声が漏れ、闘技台の

選手たちの耳にもしかと届いた。

「…イツキ…手加減しようという気持ちは良いが。ここは、思い切って全力で攻撃しないか？」

ロクシヨウまでも不満を言ってきた。焦るイツキに観衆を物ともせず、カリンはイツキに訴えかけた。

「イツキさん！……私が最初に言ったことを覚えていますか？私は、真剣ロボットを要望し、あなたは確かに了承してくれました。…しかし、何なのですか。これは！？イツキさんほどの實力をお持ちの方からすれば、私が全力でお相手するには力不足だとは承知しています。ですが、それらを承知の上で、私のナースちゃんと戦ってください。あなたに承知してくれました……。短い時間とはいえ、私が前にコウジさんとのロボットで見せた、イツキさんとロクちゃんの実力はこんなものでは無いはずですよ。不承を承知でお願いします。イツキさん、どうか私と真剣にロボットをしてください！」

切々と、無垢で力強い可憐な少女の訴えかけに戸惑うイツキ。不満を漏らした観衆もざわめきながら、少女の声に耳を傾けていた。

イツキは二度頬を張り、深呼吸すると、決然とした表情を浮かべてミスター・うるちに一声かけた。

「審判員さん。試合中断してご免なさい。これから、戦闘開始します」

事態をどう収集したものかと本部と相談していたうるちは、先ほどとは一変したイツキの表情を見て、本部にはもう大丈夫ですと答え、高々と試合続行を告げた。

「細かな指示は僕に任せて。ロクシヨウは、自分が思ったとおりの全力アタックをしろ！」

ロクシヨウは意気揚々に「了解」と言った。

本気を出したロクシヨウの前に、ナースの攻撃など掠りもしなかった。ロクシヨウがぴたりと止まる。ナースが横様に切りかかる。「腰付きや振り方がなってない」

ロクシヨウは背を逸らした。電流ソードは空しく中を掻き切り、

ナースがバランスを大きく崩す。ロクシヨウは左の軸をちゃんと蹴る、ナースはすっ転ぶ。両足でナースの剣と盾を抑え、右腕で喉を締め、左腕の三本ボトルがついたメリケン、ピコペコハンマーをいつでも降り下ろせる態勢を構えた。

会場一帯は、少女がどう判断をくだすか注目していた。

カリンは拳手し、審判に降参の意を伝えた。ミスター・うるちがイツキとロクシヨウの勝利を告げた。

「やはりお強いですね。イツキさんとロクちゃんは。…では、約束通り」

カリンはメダロツチから予備用のセントナースの頭部を、につこりと微笑みながらイツキに渡した。こうして間近で見ると、やつぱりカリンちゃんは可愛かった。

イツキは赤らめた頬を掻き、躊躇いがちにパーツを受け取った。

会場から、青春な青臭い試合を見せてくれた二人に。ささやかな拍手が送られた。

一悶着あるかなと身構えたが、意外にもコウジはイツキを咎めたりしなかった。

「カリンがあんなに積極的にロボトルしようとするなんて初めて見るぜ。…でも…そのお前がお前だとはな……。まっ！準決勝で会おうぜ！」

キクヒメの一回戦対戦相手は、ショーチュー王国という聞いたこともないような小国の王族。キール王子が相手だった。

キール王子は中東風の顔立ちで、インドの貴族っぽい服を着ていた。まだ幼く、イツキより二つ年下だった。頭のコでできた冠が、見る者に彼を、王子様に見えないことも無いと思わせた。

対戦結果だが、試合は一分以内にキクヒメがキール王子の愛機の一機、マッドマッスルに勝利。そのまま次の試合へ……と、ミスタ

「うるちは進めたいところであつたが、キール王子は激しく喚いた。」

「!!!#\$?+KP…:★——(%GBI&…ギイ」

ショーチュー王国独特の言語でキール王子は喚き、泣き、怒った。通訳の日本人男性も同じく、「お…王子様落ち着いてください！トラトラ、ミハラヤマノボレ。ウンヌンカンヌン、パラポロピレ、カクカクシカジカ」と難解な言語で王子を懸命に慰めた。

ここでSPが登場し、通訳とSPが二人がかりでキール王子を連れていった。

一回戦に続いて二回戦もこの有様。観客に運営担当者たちは、先行きを心配した。だが、その後、第一試合と第二試合以外は滞りなく試合が進められた。

後半戦。アリカ対コウジ。イツキはできればアリカの勝利を願った。任せなさい！アリカは無い胸をどんと叩いた。二分後、アリカは笑顔で控え室に帰ってきた。イツキはアリカの琴線に触れぬよう聞いた。アリカは晴れ晴れとした顔で「完敗した」と即答。

「じゃ。私、応援席に居る母さんとチドリおばさんの所に行くわ」
二十分の休憩を挟み、二回戦第一試合。イツキ&ロクショウチームVSキクヒメ&セリーニヤの対戦。

今まで辛酸を舐めさせられたが、今度こそはキクヒメとセリーニヤに打ち勝つぞと、イツキとロクショウは燃えた。

右腕のパーツを残しておいたトイワールドの物に替えて、二人は試合に臨んだ。

「はっはーん！トイワールドのルアーであたいのセリーニヤの動きを封じようってわけね…。甘いわよ。痩せても枯れてもスクリューズのボス、このキクヒメ様がその程度の戦法を見抜けないと思っていたの？」

「うっ…」

見抜かれた。が、想定範囲内だ。ここはキクヒメでなくとも、イツキがやるうとしていることは誰もが見過した。イツキも、セ

リーニヤをそう簡単に捕らえられないのは承知の上。ただ、イツキとロクシヨウはキクヒメのくせ。というかセリーニヤのくせに勘づきつつあった。

ペッパーキャットのセリーニヤが、電流を爆ぜさせた両腕で殴りかかってきた。ロクシヨウはハンマーで応戦。一転、二転！セリーニヤの華麗なバック転。セリーニヤは勢いをつけて回転跳躍。そこを、間合いを詰めていたロクシヨウはセリーニヤの体に右腕のルアーを引っ掛けた。

ルアーを回転させ、そのまま地面に一回叩きつける。そして、ハンマーで頭を殴りつけた。セリーニヤの顔半分がひしゃげ、右耳がちぎれた。ピン！横向きに倒れたセリーニヤから、メダルがこぼれた。

キクヒメの多少の油断。トリツキーなセリーニヤの、数少ない隙ある行動パターン。以前記録していた戦闘パターン例と、予め起動しておいた索敵で、セリーニヤの動きをロクシヨウは分析していたのだ。

あんぐりと口を開いたキクヒメを残し、イツキとロクシヨウは控え室に戻った。戻るさながら、イツキは右手だけ小さくガッツポーズを決めた。遂に因縁の相手、スクリューズのキクヒメとセリーニヤに実力で勝てた。

三回戦前。相手選手のほうからイツキに会いに来た。

「ハアイ！ご機嫌いがが、リトルボーイ」

お腹回りと僅かに胸元が露出した白いタンクトップ、ハサミでちょんぎったかのような太腿の辺りまでしかない短いジーンズ、ボサボサの頭をポニーテールにまとめ、顔を覆うように横幅に広がった黒いアップ라운드의サングラスを付けた。ボン、キュッ、ボンという表現がよく似合う。グラマラスな黒人美女がイツキに話しかけ

た。

イツキは思わず視線を逸らしてしまった。相手と視線を合わせた
がない日本人特有の行動ではなく、目のやり場に困ったからだ。

「あら、緊張しているのアナタ？私、ブラジル生まれのシャンデー
ね。次のアナタのお相手よ」

イツキはお茶濁しな挨拶を返した。それにしても、色っぽくて野
性的だ。同じ大人のお姉さんでも、ナエが社交界の貴婦人だとすれ
ば、シャンデーは都会の荒波を豪快に乗り切る気丈な女性といった
感じ。

あらあら、この子も…。意味ありげに笑い、シャンデーは去ろう
とした。立ち去ろうとするシャンデーに、イツキは震えるも力の籠
もった声で言った。

「…あの…僕、負ける気はありませんから！」

イツキの発言に、シャンデーは怪しく艶な笑みを浮かべた。

あら…ふふ…どうやら、一回戦の女や二回戦のスケベ男と違っ
て、このリトルボーイとの対戦は楽しめそうね。

シャンデーより遅れてイツキも闘技台にきた。使用するメダロッ
トは光太郎。

重力系を苦手とするロクショウよりも、滑空する自分のほうが有
利に戦えるはずだと、光太郎自らがそう提案し。ロクショウも、こ
こは光太郎が良いと押した。

シャンデーの愛機は、サフィオと名付けられたスフィンクスをも
デルとしたメダロット、キングファラオ。

転送したドラゴンビートル光太郎の頭部だけを、ソニックタンク
の物に付け替えた。

「フフフ…。キュートなりトルボーイ、お・て・あ・わ・せプリー
ズ！」

キングファラオが両腕をぶんぶん振り回しながら、空中の光太郎に先制攻撃を仕掛けた。鈍くて重い戦車タイプの脚部のキングファラオの素早い攻撃に、イツキと光太郎は面食らったが冷静に対処し、空振りしたところを、左腕の重力波射撃で脚部を攻撃。が、僅かにへこんだだけだった。キングファラオの脚部装甲の厚さは、全メダロットでも指折りもの。如何に強力な攻撃でも、一発や二発じゃこの装甲は崩せない。

キングファラオのサフィオはもう一回同じ攻撃を仕掛け、光太郎は重力波射撃を浴びせてやった。

当たらないと判断したシャンデーとサフィオは動くの止めて、重たい脚部を砲台とし、接近行動から遠隔攻撃に切り替えた。

砲台としたキングファラオは、三百六十度回転可能な腕、首、胴体を光太郎の飛ぶ方向に合わせて重力波を撃ちまくった。

光太郎も反撃したいところだが、銃口が内よりにあるドラゴンビートルの腕では撃ちづらく、仮に撃てても、相手の重力波に打ち消されてしまう。

一分間、逃げの一手が続いた。イツキはどうしたものかと思わした。キングファラオ並みの威力がある頭のナパーム弾でめくらましをも考えたが、そんな手はあまり通用しそうにないし、一発でキングファラオを落とせる自信が無い。

「くっそ！あの分厚い脚を何とかせえへんとな！」

メダロットからの通信で、光太郎が愚痴を言った。いや、めくらまし事態が効かないわけではない。要は使いようだ。でも、その使い方はどうすればいいやら…。

光太郎の装甲では一発喰らうだけでも危ないから、無茶な特攻はできない。

悩むイツキに、光太郎が通信を送った。

「イツキやん。こんなときはもったいないと思わず、一発防がれでもナパームをぶち込むべきや！あの硬い装甲を一発じゃ落とせへんやろうけど、活路は開けるはずやで！！」

「一発に賭けるか、めくらましか……。よし！こうなったら、やってみるか」

光太郎は多少、重力波を喰らう覚悟で撃ち返した。そうして、相手の両腕が塞がり、キングファラオが頭部のナパームを撃つよりも早く、光太郎は二発のナパームを発射した。しかし、態勢が悪かったため、一発はキングファラオの手前。一発は、シャンデーとキングファラオ阻むように硝煙が立ち上った。

グイイイーン！会場の喚起装置が作動した。

「ノンノン。甘いわね。リトルボーイ。中々エキサイティングだったけど、切り札を無くした以上、アナタの勝ちはノーホープ。サファイオもアナタのトンボさんの動きをそろそろロックオンしたよ！」
グシャァン！

何かが硬い物に衝突した音。シャンデーは光太郎が墜落したと思い、口端を歪めた。だが、メダロツチから愛機であるサファイオの電波が途絶えた。

「WHY!？」

硝煙が晴れると、両腕が折れ曲がった光太郎がキングファラオの真上を旋回しており、キングファラオの背部のメダル挿入口が開いて、メダルは地面に転がっていた。

キングファラオの後頭部と顔面は潰されていた。

イツキと光太郎は必殺のナパーム二発を決めてとして使わず、大胆にも二発ともめくらましに使用した。シャンデーとキングファラオ・サファイオの視界を遮り、光太郎は一箇所に自身を砲台として固定したサファイオの頭部を、細い両腕が折れるのも構わず空中から勢いよく叩きつけた。

キングファラオの脚部を破壊するのは到底無理だが、頭部や腕なら別。頭部と腕の装甲は、脚部の半分にも満たない。

「第三回戦、ウィナーはイツキと光太郎選手！」

「イツツアグレート！二発ともめくらまし使うなんて、ワタシでも中々できない。グレイトな大和魂ね、アナタ！」

派手な試合ぶりに会場は大興奮。二人は速やかに控え室へ戻された。

控え室へ戻るとき、シャンデーはイツキの肩に手を置き、そつとほっぺにキスをした。大人の女性の、甘い吐息と情熱的なキス。

「素晴らしいファイトを見せてくれた。せめてものプレゼントよ。」

「じゃ、後半戦も頑張つてね…イツキボーイ！」

シャンデーのとびきりのご褒美に、イツキは控え室に戻ることも忘れて、通路でえへらえへらと有頂天になった。次の試合の選手が、流し目で崩れた顔のイツキを見た。

「…イツキやん。あかんわ、目が眩んでるやろな」

「落ち着くまで辛抱するしかないな」

メダロツチに居る二機は、うら若きマスターが早いところ正気に戻るのを苦笑混じりで待ちわびた。

13・メダロット島（三日目）

眠れない。視線が勝手に天井の木目調を追いかけていた。

夏休みをおもいつきり楽しむために来たメダロット島。僕に、ロクシヨウ、光太郎は今日の大会で今まで培ってきた力を存分に奮い、戦った。

満足したはず。なのに、この言葉では言い難い違和感は何んだらう？

確かにロボット大会は楽しくて燃えた。ただ、終わってみると、イッキは得も言われぬ焦燥感に襲われた。何をやっているのだろう、僕は……。楽しくて燃えたけど、メダロットたちはどうなのだろう？機械だから痛覚は無くても、何らかの衝撃やら変化は確実に感じるはず。そもそも、僕は何を思ってメダロットを欲したんだっけ。

家族？友人？親友？兄弟？ペット？相棒？

今日の大会も新たな仲間となりうるかもしれない。プリティブラインに似合うメダルの入手、それと、自分とメダロットたちの腕試しのために参加した。でも、そもそも、僕は何でプリティブラインを欲しいと思ったのかな？

現在、メダロット最大収容可能数のメダロットは三体。三体目のメダロットも迎え入れられれば、ロボット戦略の幅が広がり、さぞかし賑やかになるだろうなと想像した。

ひよっとしたら、あくまで建前上のことで。僕は、ただ単に収集意欲を満足させるために欲しがったのかもしれない。最初にメダロットを欲した理由も、周りが持っているから、何とか仲間外れになりたくないという思いが僅かにあった。

大会終了後、ヘベレケ博士という、メダロット博士よりもっとマッドサイエンティスト風情の格好をしたお爺さんが演説にきた。演説の中で、博士はこんなことを言った。最初は何でもなかった。

しかし、ヘベレケ博士の俺の言葉を聞けとでも言うかのような厳

しく問い掛ける語り口に。イッキは次第に吞まれてしまった。

「最後に一言添えたい。近頃、勘違いをされている方もおられるようだが、メダロットによるロボットはあくまでスポーツの一環の過ぎず、メダロットは決してロボットやメダスポーツの為だけのお遊び玩具ではありません。メダロットの真なる活用性はもつと別のところにあります。そこを誤解なされぬよう、私からお願い申し上げます」

博士の言葉に、胸をちくりと刺されたような気がした。

僕はロクシヨウ、光太郎と一緒にロボットやメダスポーツをした。それって、僕が満足するためだけにメダロットたちにやらせただけじゃないか？ロボトルの際、命令することにある種の優越感を持ってしまうときがある。その感情を抑えるようにはしているが。ふとして、そんな感情を抱いてしまう自分を屑野郎と罵った。

もう一度、考えてみた。僕にとつてのメダロットって何？

同じ言葉の羅列がイッキの頭を過ぎる。どの言葉にも当て嵌るが、どの言葉にも当て嵌らないようにも思えなかった。

安楽椅子に伏せる。きいきい……。揺れるがままに安楽椅子に身を任せた。

ロクシヨウ、光太郎に聞こうかな。

止めておこう。というより、今は聞く勇気が無い。二体とも僕より賢い、それ故にどんな答えが返ってくるか逆に不安。どうも眠れない。イッキは安楽椅子を離れ、片端の窓側に眠るチドリに寄った。じつと立つ我が子の気配に気付き、チドリは半目開いた。

「…イッキ…どうしたの？……明日、一杯遊びたかったら早く寝なさい」

「ママ…あの、一緒に寝ていい」

チドリは理由も聞かず、イッキを布団に招いた。

「一緒に寝るなんて、小学校一年生以来ね」

イッキは二年生の頃から、一人で寝るよう心がけた。これも、周囲に既に一人で寝ている子たちがいて、アリカもつくのとうに一

人で寝ていた。自分も負けてられない。突き詰めれば、結局は周囲に流されただけ。僕って、あんまり変わらないなあ…。

…そうじゃない。それもあるが、一人で寝ようと思い立ったのは訳がある。パパとママが、僕を甘ちゃん扱いするしかない子供だと思っていたからだ。

何より、認めてもらいたかった。僕は、もうそこまで子供扱いする必要が無いと分かってもらいたかった。だから、部屋を暗くして一人で寝るのは怖かったけど、もう大きくなったんだぞというのを見せたくて、一人で寝るように心がけたんだ。

僕の部屋に度々ソルティが入ってきたから実際は一人じゃなかったが、これは置いとく。最初は傍らにママやパパのどちらもないなくて寝付けなかったが、何時頃かぐっすりと安眠していた。

たまに寝付けないこともあるが、適当なことを考えていたら眠れた。今日は、適当なことを考えても眠れそうにない。それで母親の布団に潜るのも情けないが、今は無性にママの布団に潜りたかった。こういうの、単なる甘え？それとも、卑怯な逃げ方かな？

イツキはチドリに頭を撫でられ、ふんわりと包み込むあたかな布団の中で色々なことを考えているうちに、安らかな眠りについた。

目を開けたら、チドリがいたはずの布団の中はイツキ一人が眠りこけていた。イツキはチドリより一時間遅く、九時に目を覚ました。ちょうど、ルームサービスとして朝食がテーブルに配膳されて、イツキはその匂いを嗅ぎつけた。

和洋風のテーブルに置かれた物は、ご飯、納豆、アサリの味噌汁、焼き鯖と和風物が占めていた。一つ、お丸のような形をしたガラス製のお皿にヨーグルトが盛られていた。

洗顔を済ませ、朝食を二人で召し上がった。

和風にヨーグルトが混ざるのは違和感がありすぎたが、食べる段

階になるとさして気にならなくなった。

イッキは昨夜の悩みなど嘘のように、ヨーグルトを口にかっこみ、焼き鯖と納豆盛りご飯をぺろりと平らげ、最後は程々に熱くなったアサリの味噌汁を啜った。

ママはヨーグルト、焼き鯖、味噌汁を食べ終わり、ようやく納豆とご飯にかかるところだった。自分のベッドに座り、テレビをつける。しばし、ニュースを見て時間を潰す。

降水確率は10%

太陽がさんさんと海を照らし、今すぐ海に飛び込みたい気持ちにさせられた。赤いジャケットを着たライフガードの男性が、カップ型のカップパーロードを連れて浜辺を監視していた。

「イッキ、今日は海でのんびりしない？」

「うん、僕もそのつもりだよ」

イッキはバッグからくしゃくしゃに折り畳まれた浮き輪を取り出し、口で直接空気を吹き込んだ。

話す気はなさそうね。普段と変わらぬイッキを見て、チドリはそう思った。昨日、ヘベレケ博士という何とも言い表しにくい人物の演説を聞いた後、チドリはイッキの微妙な変化を感じていた。あえて聞かなかった。息子が話したいときに話してくれば良かった。イッキは何も言わなかったが、見た感じ、もう動揺はしてない様子だ。

十時に女中さんが部屋を訪れ、朝食セットを片付けた。

女中さんが出ていったら、浴室から海水パンツ姿のイッキが姿を現した。

「ロクシヨウたちと先に行つていい」

チドリが良いと頷くと、イッキは素早くひつたくるようにメダロツチを腕に巻き、浮き輪を担いでドアを開けた。

手を繋ぐカップル。砂のお城を作る祖父と孫娘。浜辺で寝そべるお姉さん。ヨットにボートを乗り回す人。そして、人々に挟まれて遊ぶメダロット。どこにでもある真夏の海水浴場の光景。

アリカとイツキ、メダロットたちはまずは遊泳を満喫した。ロクシヨウは静かに浜辺で海を見上げ、二脚パーツを付けた光太郎は砂に寝っ転がてのんびり日光浴。海で一緒に泳いだのは、スクール水着のアリカと潜水パーツを付けたブラスだけだった。海から、水着の上に服を着た甘酒あばさんと、肩にタオル羽織った柄にもなく水色のビキニを着たママがビーチパラソルの下で座っていた。

正直言つて、ビキニは止めてもらいたかったな。だが、たまに通る男性がちらとイツキママに視線を送るのを見て、何とも言えない喜びと恥ずかしさが湧いた。

お昼までたつぷり遊泳を楽しみ、次は昼食。海の家での焼きそば。普通に食べるならどうということない。こうして海を眺めての焼きそばは何割か美味しさが増している気がする。

お昼を済ましたあと、アリカは散策すると言い。カメラを持ってどこかへ行った。多分、記事のネタ探しが目的だろう。

イツキは一旦ホテルに戻り、ロクシヨウを交えて磯釣をした。昨夜、パパがホテルに訪れた際、職場に置けないからと言って釣り道具を置いてったのだ。

「…うむ、私には砂遊びよりかは釣りが向いているな」

と言い、ロクシヨウは静かに座禅した。アイカメラの光が消えているので、これでは機能しているのか起動しているのか判別に困る。その内、光太郎も加わった。静寂。なんとなくだが、イツキはお年寄りに挟まれたような気持ちになった。

言おうかな。今、僕がロクシヨウ、光太郎に対して思ったことを…。

いざ言おうとすると、急に周囲の音が聞こえなくなり、自分の心音や息遣いしか聞こえなくなった。

…一、…二、…三。イツキは口を開いた。

「ねえ、あのさ。一つ聞いて欲しいことがあるんだけど」

ロクシヨウのカメラアイに光が灯る。

辿たどしく、イツキは昨夜の心境を語った。ロクシヨウ、光太郎は最後まで口を挟まず。イツキが語り終えるまで待った。

イツキはそつと二体の顔を窺った。変わることがないその機械の表情からは、何をを考えているのか計り知れない。やがて、光太郎はしようもなとぼやいた。

「珍しく深刻な顔してるなと思いきや。あんさん、そげえなことで悩んどったん？」

「えっ？だつて…」

「ほな、聞くけど。イツキさんは普段から、わいらのことを單なる人形と考えとんのか？」

「そんなこと思つてないよ！ただ、常にじゃないけど、こんな風に考えてしまう俺はメダロットとしても人としてもどうかなくて…」

…」

「イツキさんがあからさまに見下した態度取るなら別やけど。そう考えてもしまふことがあるだけで、あんたはそうしたいわけじゃないやろ。なら、そんでええやん。わいの前の持主の家族なんて、機械が人間臭い行動取るのにめっちゃ不愉快を示すような人たちやつた。その点、イツキさんはメダロットによる理解がある人や。だから、そんなこととはいえ、イツキがわいらのことでそんなに真剣に悩んどつたことを知つて感激したで。ほんま」

「いや…でもさあ…」

「そう気に病むなイツキ」

ロクシヨウが竿を振るい、一匹のキスが釣れた。ロクシヨウはそれをバケツに入れてから、イツキを見た。

「光太郎が良いと言っている。ならば、今はそれで良いではないか。気持ちばかり焦り、何かを無理にしようとして何もできなかったり、却つて余計に悪化するようなら、何もしなくても良いではないか。お前にはまだ時間があり、それに、私や光太郎というメダロット以

外にも支えとなる存在がいる。だから、そう事を急くな。魚が逃げてしまうぞ」

「ロクヨン…じゃなくて、ロクやんの言う通りやで」

苦笑いするしかなかった。イツキが思っていたより、二体のメダロットは主人より大人びていた。

「メダロットーとしてはまだ半人前やけど、人としてはその考えは立派やと思うで」

光太郎は気軽に半人前と言った。その発言にイツキはこけそうなになり、益々顔を半笑いで歪めた。その顔のまま空を見上げる。小さな雲が所狭しに点在するが、太陽を遮るほどの規模は無かった。昨日、眠れないかもしれないほど悩んだが、二体はそれほど気に留めなかった。

何だか、だんだんどうでもよくなってきた。

元気が出た。イツキはロクシヨウに負けずと釣りに取り掛かろうとしたら、お昼時にネタ探しの散策に出張ったアリカが帰ってきた。「あら…イツキ。何か、お昼前の時と違って憑き物が落ちたような顔してるわね」

「憑き物が落ちたって何？」

「それはともかく。良い情報を入手したわよ」

アリカがシヨルダーバッグからこれ見よがしに手帳をチラ見させた。

「ふーん…。で」

「ふーん…。で…てつ。もう少し反応したらどうなの？」

気持ちが悪く落ち着いた今。イツキとしては今だけはロクシヨウ、光太郎と一緒に居たく、アリカに煩わされたくなかった。アリカが唇を尖らし、腕を組んでそっぽを向いた。

「あつそ。じゃあ、いいわ。あーあ、次の対戦相手を偶然取材出来たつてのに。イツキが要らないなら、コウジ君にでも教えちゃおうかな」

四回戦の相手は顔に僅かながら面皰があり、黒縁丸眼鏡をかけ、

その割りにはオタクっぽさを感じさせず、爽やかさと神秘性がある目鼻筋整った黒髪のネイティブアメリカンの青年。名はジョー・スィハン。一回戦はトイレに行っていて、三回戦はシャンデーさんの色気に惑わされ見逃してしまった。

確か二回戦ではティーピーを使っていたような気がする。試合は二十秒で片がついた。僕はよく分からなかったが、二体はジョー・スィハンの実力を見抜いていた。ロクショウは見えていて体が疼くと言い、光太郎は実力を出し切ってないと述べた。

「いやー、凄いなアリカは。ジャーナリストを目指しているだけあって、目の付け所が違うね。本当」

イツキはすわと態度を改め、へりくだった調子で遠回りを見せてと言った。だが、イツキの媚売りはあまりにも下手だった。アリカはますますそっぽを向いた。

「そんなんじや見せて上げない」

「……そんなんじやって。お願い！アリカ！さっき言ったこと反省するから！だから、どんな事でもいいから聞かせてちょうだい！」

アリカはイツキのほうを振り返り、口を大きく歪めた。本人は笑っているつもりだろうが、イツキには不気味に思えた。

「じゃあ、約束してくれる」

「何を……？」

「絶対に勝つこと。これが条件よ。ジャーナリストが骨身を削って得た情報を手する代金。と言うより、あんたに提示する条件としては安い物でしょ？」

「うん。確かに情報量としては安い物だ」

ロクショウが不敵に答えた。

よし！イツキは心の中で気合を発した。とにかくにも、大会でやれるとこまでやってみるしかないか。

だが、今は磯釣りに専念した。

13・メダロット島（三日目）（後書き）

ロクシヨウの台詞はメダロット4（漫画）での、とある人物（動物）が発した台詞を捻ったものです。

もう一つ付け加えれば、武士も「うん」とか言ったりします。

クワガタでアメリカ代表如何な物かなと思いましたが。漫画版での勝負、カブトでのロシアの女の子との関係を考慮し、クワガタの対戦相手はアメリカ代表にしました。

14・メダロツ島（四日目）（前書き）

ちよつと長めです。

14・メダロット島（四日目）

メダロット島ロボット大会。二日前の試合で人数は絞られたので、今日は四回戦から決勝戦まで執り行う。

また、四回戦からの追加ルールで最大三体まで使用可能となる。向こうが一体使用に対し、同意さえ得られれば、参戦最台数の三体まで使用できる。

イツキの相手、ジョー・スイハンは一回戦ではニンニンジャ。二回戦はティーピー。三回戦はサムライを使用したことがアリカの情報で分かった。ジョー・スイハンは、高速型の格闘タイプを好んで戦うスタイルのようだ。主力機がネイティブアメリカンをモデルとしたティーピーなのは納得できるが、他二機がニンニンジャとサムライとは、随分日本的に思えた。

取材したアリカによると、ジョー・スイハンは親日派らしい。

十年前、日本で開催された世界大会に参戦したのがきっかけで。

以来、日本文化に興味と憧れを抱くようになった。もう一つ、父親のジャー・スイハンと共に参戦した際、準決勝で戦ったとある日本人メダロッター、名は「ヒカル」という自分と同年の人物との再戦を果たす目的もあり、大学研究論文作成のついでにメダロット島の大会に参加した。

アリカが身近にいる同姓同名のヒカルのことを告げたら、ジョー・スイハンは一笑に付した。

まさか、ヒカルをそんな不真面目なコンビニ店員と一緒にしないほうがいい。

否定の理由に、イツキとアリカは妙に納得してしまった。あのおさぼりヒカル店員がとてもしゃないが、魔の十日間事件を解決した伝説的なメダロッターとは到底思ひ浮かばない。

ロクシヨウ、光太郎と相談した結果。装甲が薄いティーピー、ニンニンジャはロクシヨウが。装甲は厚いが、二機と比べたら幾分か

鈍間なサムライは光太郎が相手をすることにした。

しかし、相手が三体を使用してくる可能性は十分に有りうる。

「使わせればよい。相手が量を持って攻めるならば。こちらは、一瞬の決断と知恵で対処すればいい」

大胆にも、ロクシヨウはこう言った。

だが、アリカから聞いた感じ、ジョー・スイハンはそういった戦い方をあまりしなさそう。こちらが一对一を望めば、応じてくれそうだ。

選手控え室。初日は人種の坩堝と化していたロッカールームも今や残すところ十六人となり、賑わう外と打って変わって、静寂だった。

ジョー・スイハンは目を閉じ、十年前の記憶に遡っていた。

叔父がスポンサーとなり、私と父はメダロットの研究に専念できた。その叔父の工場が経営難に陥り、閉鎖されるかもしれない。叔父の経営する、メダロットを含む部品請負の工場により地元は潤っている。叔父の工場が潰れば、研究資金が乏しくなるだけではなく、地元のインディアンたちの就職先が失われることにほかならない。

私と父は叔父が経営するメダロット工場を救うため、日本のメダロット社に却下されたオリジナルメダロット・ティーピーを使い、世界大会に出場した。この大会で上位成績を収めれば、デザインがダサイという理由でメダロット社が却下したティーピーの実力が認められ、ひいては工場の宣伝にも繋がり、一定数の注文が入れば、工場と地元は救われる。

今だから明せるが、攻撃しかできない機体三機で勝ち抜くのは、正直辛かった。

だが、私と父であるジャー・スイハンはメダロットに一生を捧げ

ることにした馬鹿。今ここで、その知識を持て余した時間を有効利用しなくてどうする。

毎度苦戦を強いられるも、育て上げたメダルと完成された親子のコンビプレイで勝ち進んでいった。

…そして、運命の準決勝戦。父が体調を崩し、私一人で挑むことになった。相手は私と同じ年の日本人。しかも、たった一人で三機を操作してきた。昔のことで一番記憶に刻まれたことを挙げるなら、あの日のヒカルとの試合を挙げる。

父の二機と相手の二機は同時に倒れ、リーダー機である私のティーパーとヒカルのヘッドシザースを残すのみ。小細工無用の真正面からの壮絶な殴り合いの末、私は敗退してしまった。

負けたショックは大きく。私は父と叔父、故郷の同胞はいつからに合わせる顔がなかった。

だが、事態は好転した。

事情を知ったメディアがドラマチックに報道してくれたお陰もあり、叔父の工場にティーパーの注文が殺到。また、メダロットとメダロットの實力を加味しても、純正攻撃機体三機で準決勝まで勝ち抜けたのは賞賛に値する、と。メダロット社の評価と資金援助も受けて、地元の大手就職先である工場は救われた。

ジョー・スイハンは眼鏡をかけたガリ勉青年にしか過ぎないと思われているが、ロボットになると内なる闘志をたぎらせる。

今日の四回戦の相手。天領イッキ君だっけ？九歳という年齢ながら、強敵相手にドラマ的な試合展開で勝利し、おまけに愛機はヘッドシザースときた。運命のような物を感じずにはいられなかった。闘技台出入口まえで、赤い半袖シャツを着たちょんまげ頭の少年が、二機のメダロットと何やら真剣に話し合っていた。

少年が私に気付き、会釈した。

「やあ、どうも。君は天領イッキ君だね。私はジョー・スイハんと申します。以後お見知りおきを」

ジョーが手を差し出すと、しどろもどろにイッキはジョーの手を

握った。勤勉そうな優男な外見と反して、ジョー・スイハンの握力は意外と強かった。

「……あつ。どうも。よろしく願います」

「私と親戚一同で開発したメダロットの力、お見せしますよ」

黒縁眼鏡の奥の柔和な瞳が、一瞬キラリと光ったような気がした。

二日前同様、ミスター・うるちが開幕を宣言した。

「レディース&ジェントルメンの皆さん！大会を観戦するため、今回もご足労いただき感謝感激の極みでございます。それでは、後半第四回戦第一試合は若手注目度No.2の天領イツキ選手のお相手は……。メダロットの研究と開発を行われている若き天才、さらにと靡く黒髪と円かな瞳が神秘的、本国アメリカで通称”歩くメダロット図鑑”と呼ばれるジョー・スイハン選手！！

さて、好カード目白押しの後半戦。若きメダロッターたちは白日の下、如何な戦いぶりを見せてくれるか私も観客席の皆様方も期待しております。……では、両者位置について」

イツキとジョー・スイハンは闘技台前まで寄ると、腕に巻いたメダロットを掲げた。ジョーのメダロットから、ティーピーが転送された。イツキはロクシヨウを転送した。

「場外。時間内におけるダメージ量の合計。あるいは、どちらかのメダロットが機能停止したら試合終了です！それでは、ロボトルファイトオー！！」

ロクシヨウが舞い、ティーピーも舞う。ロクシヨウが切りかければ、ティーピーは緑のボクシンググローブの形をした腕で殴り返す。どちらも、紙一重のところで攻撃を避けられている。

ティーピーのグローブ型の両腕が上下角度八十度を開き、そこから、圧縮された幾つもの硫酸が砲丸となって闘技台に迸る。コンクリートの表面がじゅわじゅわと音を立てて溶け、強烈な臭いが会場

内に漂う。換気装置がフル作動して、懸命に臭気を浄化して外へ流す。

観客はもちろん。イツキは袖で鼻を覆い、ミスター・うるちはハンカチで鼻を抑えた。ティーピーのマスターであるジョー・スイハンは風邪防止用マスクを装着していた。

鼻という五感機能が無いメダロットたちは臭いなど気にせず。マスターの指示が無くても戦いの手を緩めなかった。

イツキもロクショウも、ティーピーから放たれる強力な硫酸砲には注意した。

試合は数秒経つごとに白熱した。ロクショウ、ティーピーは、互いに首の皮一枚のところを攻撃を当てるようになってきた。

グシャン！大口を開けたティーピーの右腕がロクショウの肩に付いた羽状の肩当てをもぎれば、ロクショウも仕返しにと、ティーピーの頭に付いたインディアンの羽飾りを模した物をハンマーでへし折った。

臭気で辟易していた観客も、いつの間にか、手に汗握る試合に見とれていた。

ミスター・うるちとジョー・スイハンは、既視感を感じた。三対三ではなく、一対一という違いはあるが、あの日あの時の試合展開と瓜二つではないか。

ジョーのメダロットに、ティーピーが通信を送った。

「あいつは新型だが、同機種であることには間違いない。どうだ、ジョー？あいつをあの日のあいつに見立てて、今度こそ勝利しないか？」

普段、こちらから求めなければ口を開くことが無いティーピーが自ら意思表示したことに、ジョーは驚いた。どうやら、私のメダロットには熊。あるいは、狼の魂が宿っているのかもしれない。

「存分にやれ」

声こそ聞こえなかったが、イツキとジョー・スイハンは同じ指示を出していた。

両機、攻撃の手を止めて、正視し合う。次の瞬間。両機は踊るようにくるくると動き回り出し、戦闘を再開した。戦略も糞もない。ヘッドシザースとティーピー、二体のメダロットは原始的。本能的とでも言うべきか、激しい殴り合いをした。

パーツの装甲が契れ飛び、金属が衝突する鈍い音が途切れることなくドーム内に響く。もしも人間なら、皮がめくれ、爪は剥がれ、折れた骨が体から飛び出すという、見るも耐え難い光景になっていただろう。

ロクショウの捻れたソードがティーピーの右足を挟れば、ティーピーも右腕でロクショウの右足を破壊した。ロクショウとティーピーは左足に全体重を載せて、渾身の重い左ストレートを顔面に食らわせた。両機体の顔が大きく歪む、どちらもまともに必殺の一撃が頭部に直撃した。

あわや、両方機能停止かと思われたとき。ロクショウの左膝が揺らぐ。イッキはあつ！と、叫びそうになった。だが、それよりも先にティーピーのほうがロクショウの足元に崩れ落ち、メダルが外れた。

また、負けてしまったか。九歳の自分なら、今頃号泣していただろうが。あの日と今では事情が違う。悔しい感情はあるが、どこか清々しくも思えた。重荷を背負わず、自分とメダロットがやりたいように戦ったからかな。イッキはロクショウを、ジョーはティーピーを回収しに闘技台に上がった。イッキとジョーは歩み寄る形となり、ジョーはイッキに謝辞を述べた。

「ありがとうございます。前途ある日本のメダロッターと全力で戦えて、光栄の至りです」

「いや…あの…それほどでも。それに、頑張ったのはメダロットですし。それにしても、日本語お上手ですね」

「日本は何かと思ひ出の多い国ですからね。この大会でのロボトルは、今後のメダロットの研究に活かしたいと思います」

この言葉に、イッキは「光栄です！！」と元気よく返答した。

人間の技師と回復機能を持つメダロットがロクシヨウの治療に当たる中、イツキは次の対戦相手を見て、溜め息をついた。

次の相手は、二日前、プリティプラインのパーツを買いに行く途中、突如としてイツキたちに突っかかってきた、あの中国人風の謎のメダロットが相手だからだ。実力は定かではないが、ここまで来たということは、決してまぐれや偶然だけでは来れない。あのハイテンションぶりとへんてこりんな雄叫びといい、イツキに意味不明な理由で勝負を申し込んだといい。あんなのと戦うかと思えば、別の意味で緊張してきた。

そこへ、耳障りな笑い声。嫌な予感がした。

横を向くと、謎のメダロットが仁王立ちしていた。

「……また……」

「ふっふっふ。遂にこのときが来たようだな。いざ、尋常に勝負」

「わあっ！早まった真似するなっば」

と、騒ぎを聞きつけて。出入口で選手にエールを送る係員の男性が二人の間に割って入った。

「こらー！何をしておる！闘技台意外でのロボットは原則禁止だ。やるんなら、次の試合まで待て」

意外にも少年は大人しく引き下がった。

「ふっ……。命拾いしたな」

そう言って、謎の少年はイツキの前から消えた。

試合前から、早くもこの展開。ここまできて試合放棄をするわけにはいかないが。できることなら、相手を変えて欲しかった。

五分前にはロクシヨウの修復が完了。光太郎の両腕パーツだけ付

け替え、試合に臨む。イツキはメダロットたちに聞いてみた。

「あの男の子。見たことないメダロット使ってきたけど、どういった戦い方してくるかな？」

光太郎が気の抜けた声で言った。

「分からんなあ、見た目は格闘系やけど。そもそも、何考えているから分かん」

「うむ。それに、前のジョー・スイハンという方はこちらが一对一の戦いを望めば、それに応えてくれたが。あの少年は、何を考えているのか理解できない。だが、一度戦って勝ったことには間違いなから、リベンジとして同じ二体を使用してくる可能性がある」

イツキもロクシヨウと同じことを考えていた。あの少年が何を考えているのか不明ではあるが、リベンジとして、あの二体のメダロットを使用してくることは十分有りうる話。

イツキたちが早く闘技台に着いた。イツキたちの予想通り、少年はあの二体のメダロットを連れて出場した。

「これより、第五回戦第一試合。天領イツキ君VS。イツキ君を何故かライバル呼ばわりする、毒貝型アンボイナを使用する謎の上海出身の中国人メダロッター・リヨウ少年との試合を行います」

ミスター・うるちの宣言で、初めて少年の名前と国籍、そしてメダロットの名称を知った。試合前だというのに、リヨウはイツキにつっかつた。

「正義の名の下に葬ってくれる。お前の名を聞いておこうか？名無しでは墓も作れまい？」

「だ・か・らあ……。どうして、そう僕に突っかつてるの？しかも、僕の名前なら審判の人が言っただけじゃないか」

「理由？そんなの無い！『侍を倒せ』。そうじいちゃんに言われただけだ！お前の髪型とお前の使っているメダロットは、どう見てもその類だ」

「えっ！？そんな理由で……」

「それでは、ロボットルファイトオー！！」

これ以上、無駄な会話で引き伸ばされてはたまらない。ミスター・うるちは強引に試合開始を告げた。

光太郎は限界まで体を縮め、右のナイトシールドで全身を隠し。ロクシヨウはソードを抜き、メリケン型のハンマーを構えた。

「む！そっちのクワガタは良いとして、そっちのトンボの態度はなんだ！もうお手上げという合図か？例え戦う意思を見せなくとも、俺は手を緩めんぞ。いつけーえ！！ビューティ・キッス！キラキラン・ムチュー？」

二体の毒貝は、ドリルという海洋生物らしからぬ武器を回転させて、ロクシヨウと光太郎に突進した。車輪タイプの脚部だけあつて、コンクリートなど整備された平坦な場所での移動は素早い。あの勢いでドリルでぶん殴られたら、如何に硬い装甲を持つメダロットでも無事では済まされない。

イツキから見ても、左はロクシヨウ、右は光太郎に向かった。

二メートル手前、ロクシヨウは高々と跳躍し、アンボイナの背後に回ったが、アンボイナも負けじと急旋回。ロクシヨウと向き合った。一方、光太郎は微動だにせず体を丸めたまま、アンボイナが来るのを待った。

「一体貰ったあ！」

リヨウが勝鬨を上げる。だが、それはすぐに何！？という驚愕の台詞に変わった。

ドリルで光太郎を殴る直前、アンボイナがピタリと静止した。アンボイナの左腕に、沢山の針が深々とアンボイナの腕に突き刺さっていた。アンボイナが右腕で殴り返そうとしたら、今度は右腕にどこからともなく針が突き刺さった。光太郎がひょっこりと盾から顔を上げて、戸惑うアンボイナに至近距離から頭部の重力波射撃を撃った。一体、機能停止。

盾から姿を現した光太郎の右腕を見ると、発射されるまで見えない針のトラップを自信の周囲に張り巡らす、トラップ系攻撃のシュートスパイダの腕を装着していた。気取られぬよう、イツキと光太

郎が案じた苦肉の策に、リヨウは見事に引つかかってくれた。

「己ー！卑怯千万許すまじ！正義の名の下に、絶対に負けんぞ」

ロクシヨウと相対していたリーダー機は、正に獅子奮迅の如き抵抗を見せた。ここまで来ただけの実力があり、残る一体はしぶとかった。だが、時間の問題であった。

光太郎が頭部の全エネルギーをアンボイナの足止め。動きが止まったアンボイナを、ロクシヨウが目にも止まらぬ早業で二回斬った。二体のアンボイナをメダロツチに収納したリヨウは、「さあ、煮るなり焼くなり好きにしろい！」と叫び、失笑を買った。自分が笑われたわけではないのに、イッキは赤面した。

「糞う！このまま退がっては、生き恥を晒すのもいいとこだ。おい、お前！これを受けとれい！」

リヨウはいきなりポンと、イッキの足元にアンボイナのパーツ一式を置いた。

そうして、何も喋らず疾風迅雷の勢いで会場から去った。結局、リヨウが具体的に何をしたかったのか最後まで分からずじまいだった。ともかく、イッキはありがたくこのアンボイナー式を頂戴した。

お昼休憩一時半間後に、準決勝。決勝前にも十分の休憩がある。

しかし、イッキと準決勝で相見えるコウジにとっては、準決勝こそ実質上決勝のようなものであった。

昼休み。ほぼ、全員集合した。ママ、パパ、アリカ、甘酒おばさん、プラス、アリカの新しい仲間であるプリティプラインのマリアンが。昼食を取りながら、イッキ、ロクシヨウ、光太郎の健闘を褒め称えた。

風で流れてジョウゾウの足元に転がってきたゴミを、モンキーゴングがひよいと背中の子バケツに捨てた。ちらほらと、数体のモ

ンキーゴングや後続機・ターンモンキーなどの猿型メダロットたちが、人間と共に施設の清掃やゴミ拾いを行っていた。

後続機であるターンモンキーが発売されて、あわや生産終了かと思われがちだが、清掃業務など細かな技量が要求される仕事ではまだまだ需要がある。

ロボトルでの活躍はもはや機体できないが、その身軽さ故に、メダスポーツでは現役バリバリのメダロットとして活躍している。

新しい物を求めがちな僕が偉そうなこと言えないけど。やっぱ、人もメダロットも使いようだな。

皆揃ってのお昼の時間はまたたく間に過ぎてしまい。イツキは手っ取り早く用を足した。控え室に行く前、ジョウゾウがイツキに一声かけた。

「イツキ。勝つ負けるかは置いといて、自分とイツキが育て上げたメダロットたちの力を信じて、全力でぶつかってこい。パパから言えるのは、これだけだ。…おっと、もう十分前か。お前のことだから、一人で落ち着く時間が欲しいだろう？ 邪魔をして悪かったな。んじゃ、パパは観客席で応援しているよ」

ジョウゾウは飄々と気の抜けた表情で、客席に向かった。

「イツキちゃんのおとんて。なんか、意外にも掴み所が無い感じやねんな」

光太郎が独り言を呟いた。

「この先に熱いバトルが待っている。準備は出来たかい？」
「はい」

準決勝でも、選手闘技台出入口前で立つ係員の男性はいつもと変わらぬことを言った。

いよいよ、コウジとそのメダロットたちのバトル。おどろ山のときは運で勝てたが。今度はもう、小手先の知恵や運だけでは勝てな

さそうだ。もつとも、それはこの大会で戦ってきた全ての相手に言えること。

事前にメダロットを転送するという真似もしない。ロクシヨウ、右腕にナイトシールドを着けた光太郎を初めから転送した状態で、闘技台に向かった。

「そうか。お前はまだ二体しかないもんな。なら、俺も正々堂々二体でやるぜ」

後ろから、コウジがぎざったらしい喋り方をした。コウジはウォーバニットのアーチェに、セキゾーの右腕を装着したアーマーパラデインを転送した。

コウジの言動に、イツキはちょっとむかついた。

「いいよ。別に三体使用してきても」

「ああ、そうだな。三体使えば楽勝かもな。だが、それじゃ意味がねえ。緊急時じゃない限り、俺は相手と対等といえる状況で戦い、そして勝つ！ましてや、まぐれとはいえ、お前は俺とアーチェを一度負かしたんだ。だからこそ、今度も俺はお前と対等の条件で戦いたんだ。俺にとっては、それこそ意味があるんだ」

「いいよ。でも、今回も負けるつもりはないから」

イツキが珍しく強気の口調で言った。

「俺もだ。イツキ、お前とは今日こそ決着をつけてやるぜ！」

人間だけではない。メダロット同士も相手を意識していた。戦う前から、二人と四機のメダロットは互いに火花を散らした。

「長らくお待たせいたしました。これより、準決勝第一試合を執り行いたいと思います。若手選手で注目されている選手二名が、よもやの準決勝進出！数々の勝負の審判をしてきた私ですが、柄にもなく鼓動が高鳴っております。では、合意と見てよろしいですか？」

イツキとコウジは頷いた。

「……さあ、それでは。ロボトルファイターー!!」

四機のメダロットは闘技台を周回した。ここまでくれば、メダロットは時折間違ひ修正の指示、あるいは状況をよく観察することだけを求められる。

ウォーバニットのアーチェが先制攻撃。ロクシヨウ回避…と思いきや、右腕上腕部に命中した。アーチェは前より更に射撃の熟練度が上昇していた。

アーマーパラディンが右腕のトマホークを発射！弾道は見事、飛び回る光太郎に命中。咄嗟に構えた盾で機能停止には至らなかったが、爆発による衝撃は大きい。そうこうしているうちに、アーチェはアーマーパラディンの影に隠れ、弾丸を雨霰の如く撃ち、その上、アーマーパラディンのトマホークというおまけ付き。

互いの長所を生かしあつた戦いに、イツキは舌を巻いた。こんな戦い方をされたら、大抵の相手はやられてしまう。かといって、同じ戦い方をすれば勝てるというわけではない。

光太郎も懸命に打ち返し、アーマーパラディンの装甲を地味に削った。イツキはウォーバニットのライフルがロクシヨウを狙っていることを素早く告げた。間一髪、ロクシヨウは脚部の破壊を避けえた。

光太郎の努力が実り、遂に鉄壁アーマーパラディンが崩れた。同時に、光太郎も場外に墜落した。

「あかん！頭以外もう動かへん」

光太郎が叫んだ。機能停止はしてないが、光太郎は場外アウトの判定をくだされた。

空を飛び回り、ただでさえ狙われやすい立場にいるのに。アーマーパラディンのトマホークを二発と、ウォーバニットの弾丸を無数に食らってしまった、頭以外のパーツが壊れて飛べなくなってしまったようだ。

だが、光太郎はしっかりと仕事をしていた。アーマーパラディン

の右腕パーツは完全に大破しており、分厚い装甲もあちこち凹み、片側の車輪が外れてバランスに欠けていた。

防御役は迅速に仲間を護衛することこそ本命。機動力を失い、あなほこだらけになったとあれば、防御役としての機能は失ったも当然。

実質、機能停止したも同然のアーマーパラディンの影から出てきたアーチェに、ロクシヨウが低姿勢で一気に詰め寄る。アーチェの弾丸が先か、ロクシヨウの刃が先か。と、ここでアーマーパラディンが最後の行動をみせた。右にもたれかかっている状態にも関わらず、左側の車輪が壊れるのも一向に構わずアーマーパラディンは左側に倒れて、ロクシヨウの進路を塞いだ。

衝突直前で跳躍。イッキは危ないと叫んだ。跳躍したことにより、無防備となったロクシヨウの胸に、アーチェの右腕のライフルが発射された。凄まじい勢いでロクシヨウは空中で一回転した。

しかし、機能停止状態にも関わらず。ロクシヨウはウォーバンニツトの右腕を縦に切断するという意地を見せて、機能停止した。

「準決勝第一試合は…辛口コウジ選手の勝利！しかし、素晴らしいファイトでした！私は、両名とそのメダロットたちに心からの祝杯を送らせてもらいます」

観衆に。観戦していた参加者たちに。そして、ミスター・うるちはナイスファイトを見せてくれた二名のメダロッターとメダロットたちに惜しめない声援と拍手を送った。

慣れた様子で手を振り返すコウジ。反面、イッキの耳には多少、耳障りに思えた。

……………。

…落ち着け…負けた経験はこれが初めてじゃない。大体、前は運で勝ったような相手だ。これが、今の実力差だろう。

「イツキやん」

光太郎がイツキを呼んだ。

「気持ちには分かるで。でも、とりあえずあんたの為に応援してくれた両親やら友人に観客の人たちに、せめて顔を上げたらどうや？」
「負けたばかりなのに、光太郎は観客に応えろと言った。メダロットのほうに僕より精神年齢で上だな。イツキは手を振り返さなかったが、顔だけは懸命に上げた。そうして、拍手喝采が鳴り止む頃に係員の人と一緒にロクシヨウと光太郎を選手控え室の治療室に連れていった。」

少し遅れて、コウジも治療室にきた。

「怒らずに聞いてくれるか？」

無言で首を縦に動かした。

「俺、今まで単純に勝つことだけ考えてきたけどさあ。イツキとの戦いって、何というか、他の奴よりもっと勝ちたいって気持ちにさせられるんだよな。俺も具体的には言い表せないけど、お前との戦いって何だかわくわくするんだよな」

「コウジさん、イツキさん。お疲れ様」

どこからともなくカリンがきて、コウジとイツキに労いの言葉をかけた。カリンに続くように、パパたちもきた。ジヨウゾウがコウジにお辞儀をし、コウジもお辞儀を返した。

「やあ、コウジくんだね。私はイツキの父親だよ。いやー、見るも熱いものを見せてもらったよ。二人とも」

「ありがとうございます」

アリカが座る二人を写真に収めた。

「いやあ、ロクシヨウも光太郎も善戦していたわね。二人とメダロットたちの戦いを記事の特集にしよっかな」

イツキ以外の人物は軽い雑談をした。準決勝第二試合で敗北した選手が治療室に来る頃には、コウジのウォーバニットとアーマーパラディンは完治していた。光太郎は後一分、ロクシヨウはもう少し時間がかかるようだ。

「俺たちはもうしばらくこの島に滞在する。機会があれば、また会おうぜ」

「さようなら、皆さん。イッキさん、ロクちゃんと光太郎さんによろしく言っといってください」

コウジとカリンが治療室を出ると、イッキは瞳から涙を滲ませた。涙なんて出ない。そう思っていたが、コウジとカリンちゃんが部屋を出たら、堰を切ったように流れ出した。負けた悔しさに、傷つき倒れたメダロットたち。悔しさと不甲斐なさで泣いてしまった。服の袖が鼻水と涙で濡れるのも気にせず拭いた。

静かに泣くイッキに、チドリはそっとハンカチを手渡した。

14・メダロット島（四日目）（後書き）

次回でイツキの新たな仲間となる、ヴァルキュリア型メダロット・プリティプラインの名前を募集したいと思います。

応募締切は、メダロット島（五日目）を掲載するまで。どなたか、新キャラクターに名前を与えてくれませんか？

*応募が無い場合、ジャンヌ・ダルクの名前を取って「ジャンヌ」となります。

15・メダロット島（五日目）

決勝戦。多くの日本人はコウジの優勝を期待したが、勝ったのは有名なレッドマタドール使い、スペイン出身の闘牛士シャモジールだった。シャモジールはコンビロボトル世界ランク十二位、タイムン真剣ロボトル三十一位の实力者。そのシャモジール相手にコウジは二対二で挑み、敗退した。

シャモジールは優勝賞品を断り、賞金とトロフィーだけを頂いた。コウジは賞品と賞金も断り、小さな銀のカップだけを受け取った。準決勝まで進められた選手には賞状、そして賞品か賞金のどちらかを得る権利がある。

当初の目的は、最低でも賞品を得られる順位まで勝ち抜くこと。イツキは気を取り直し、ずらりと並べられたメダルを前にして、悩んだ。

燦々と、金色こんじきにメダルは輝いていた。馴染みのあるクワガタ、クマもあれば、カブト、フェニックス、ヘ・ビー、クモ、マーメイド、ネコメダルという珍品まである。他に、発見されてまだまもなく、知名度も低いがそのうち市場を新たに席巻するであろうと予測されているウィッチ、ビークル、マシーン、フレイムなんてメダルまでケースに保管されていた。

この輝きにすっかり魅了されてしまい。イツキは全て我が物にしたい衝動に駆られた。一旦、光り輝く物体から視線を逸らし、気持ちを静めた。

手中の賞状を握り締め、メダルケース群に向き直り、イツキは品定めた。選ぶメダルは三種類。一つはそこそこ攻撃ができる、防御が得意なナイトメダル。一つは、そこそこ防御ができる、攻撃が得意なクイーンメダル。もう一つは、両者の中間ともいえるニンジャメダル。

どれにしようかな。三つに焦点を定めたが、その分、三つのメダ

ルは余計に輝いているように見えた。

運営委員の女性が焦れつたそうにしている。予定では、ナイトメダルを購入するはずだった。イッキは腹を決めて、迷いをかなぐり捨ててナイトメダルが入ったメダルケースを鷲掴みした。

夕方まで遊園地の乗り物で遊び回り、ホテルに戻った。帰ったら一風呂浴びて、すぐに夕食。

もう疲れたし、プリティプラインを組み立てるのは明日にした。ジヨウゾウはイッキが寝静まる頃に、職場が用意した寝所へと帰っていった。

日が顔を出し始めたとき、イッキは目覚めた。時計の針は六時十分辺りをさしていた。昨日、九時になる前には眠ってしまった。九時間以上も寝たことになる。ママが寝ている今のうちに、イッキはパーツを組み立てることにした。

起こしては悪いと思い、部屋のベランダに出て作業をした。海沿いに建っているためか、朝は寒い。部屋に戻り、上着を着てから開始した。

ロクシヨウのときもあり、パーツを一から組み立てティンペットに装着するのは慣れた。三十分ぐらいで、女性型ティンペットにはプリティプラインのパーツ一式が装着完了した。メダルを背中に挿入するのはまだにした。ナイトメダルは概ね、落ち着いた性格が多いが、このナイトメダルも必ずしもそうとは限らない。口煩い奴かもしれない。眠るチドリに対する気遣いに、チドリへの紹介もかねてイッキはメダルを挿入するのは後にした。

ベッドに戻り、もう一眠りした。八時近くにはチドリが目を覚ました。イッキはチドリが朝の用事を済ましたタイミングを狙い、メダルを着けた。

メダロットの目に光が宿った。無事にプリティプラインは起動し

た。

「ママ。見て、僕たちのパーティに新しく加わった子だよ」

「……あら、初めましてって言えばいいのかしら。私はイツキの母親で、チドリって名前よ。あなたの名前はなんていうの？」

ママの言葉に、イツキはこのメダロットに名前を付けていないことに気が付いた。

「そういえば、まだ名前をつけてやらなかったな」

「そうなの？じゃあ、イツキ。私が命名しても構わないかしら？ロクちゃんにソルティも、イツキが今まで名付けていたでしょう。だから、たまにはママが名付け親になってもいいでしょう？」

自分が付けたかったが、それだと一時間以上の時間を要するし、女の子っぽい名前はせいぜい幸子や清美とか普通な感じのものしか思い浮かばない。ママがどんな命名をするかも興味がある。

「……ん。じゃあ、いいよ。でも、変な名前にはしないでよ」

チドリは心配ご無用と応えた。

ママは少しの間黙りこくった。その間、名も無きメダロットはじつと、イツキやチドリの動向を観察していた。チドリは右手を下に添え、左手で軽くポンと叩いた。

「巴御前の名前を取って、カタカナでトモエと呼ぶのはどうかしら？昔の日本には、女性の武将だっていたんだし。ジャンヌって名前も良いかなと考えたけど、その名前だと先行きがちょっと不安だし。何より、イツキのメダロット君たちはみんな和風っぽい名前でしょう？西洋風より、ここは和風にしたほうが統一感があるわ」

「お前……君はこの名前がいいと思う？」

しかし、さつきから彼、あるいは彼女と呼ぶべきか。メダロットはずっと口を開かなかった。イツキに命名のことを聞かれて、メダロットはようやく重たそうに口を開いた。

「……トモエですか……。了承しました。それが、私の名称ですね」
「プリティプライン。もとい、トモエの声には凜とした響きがあり、意志の強さと喋ることを好まぬ寡黙さを感じられた。声音の年齢をこわね

人間でいえば、二十代ぐらいの女性であろうか。

イツキとチドリ。そして、メダロツチから転送されたロクシヨウ、光太郎はそれぞれトモエに自己紹介した。

誰彼の挨拶に対しても、トモエは平静な装いを崩さなかった。

武士道精神、浪花弁の陽気者、寡黙で頑固そうな女。結構、出揃ってきたような気がした。何が出揃ったかと問われれば、答えに窮するが。

チドリはイツキの手を離さぬよう、しっかりと握って歩いた。

何もなければ、自由行動も許可したが、昨夜、ジヨウゾウから知らされたことを聞き、そうもいかなかった。そのジヨウゾウは、今日は家族と水入らずの休暇を過ごすはずであったが取消となった。理由は以下にある。

二日前。メダロツ島ロボット大会の前半戦当日。一人の男の子が姿をくらました。小学六年生グループの子達で、その子達だけで島に来ていた。だが、もとよりその子は一人で勝手に行動する癖^{へき}があるらしく。グループの子達も、一応、見つけたら注意して連れ戻してくださいと、本気で心配してなかった。以前、その子は修学旅行中にもどこかへ行ったことがあるからだ。という訳で、このとき報告を受けたセレクト隊員は全く事態の重さを把握していなかった。翌日。今度は二人の兄妹が行方をくらました。これは保護者同伴の旅行であり、島内で放送をしてもらい、夜になっても姿を表さないことを不安に思い。保護者二名はセレクトに通報した。

更に翌日。メダロツ島ロボット大会後半戦。メダロツ島遊園地が最も混む日。この日には、何と六人もの子供が行方をくらました。これには、島内関係者とセレクト設営本部も事態の重さを憂慮し、セレクト隊指導の下、各スポンサーが雇った警備員も搜索に協力した。

ジョウゾウも、子供搜索の人員として駆り出された。

これとは別に、財布や携帯、メダロツチやメダルが盗難されたことも報告されていたが、その事件はさして重要視されていなかった。パパは急にお仕事が入ったの。チドリはこの一言以外、一切の事情をイツキに伝えなかった。しかし、何気ない素振りの中に、周囲を探るような目付きがあることをイツキは薄々勘づいていた。それよりも前におかしいと気づいたのは、娘の行動に口煩くないはずの甘酒おばさんが、いつになくアリカの行動を制限していたからだ。

日常を送っているうえで、もしもこの手合いの出来事がニュースで流れるどこそこの県を超えた事件の場合なら特にどうと思わない。が、その事件が現在自分たちが滞在している島で起きた出来事ならば、話は別。チドリと甘酒おばさんは、明日一番の出稿便で帰ることをイツキとアリカに告げた。二人は当然、不満の声を上げたが、チドリとアリカの母親は二人の言い分を一切合財無視した。

代わりに、今日は好きなだけ遊園地の乗り物を巡り、ロボット大会の次に目玉のパレード見物で満足しなさいと言った。

母親たちの変貌ぶりにイツキとアリカは混乱したが、反論できる材料もないので従った。六日目で予定してあった、遊園地の反対側にある、世界中の料理を集めたワールド・フード・シティに行けなかったのが残念極まりない。

初めに、ジェットコースターに乗った。三分間と、長めにスリルを味わえる。終着地点付近でストロボフラッシュがたかれた。当然、フラッシュを気に掛ける者はいなかった。

一体、誰が予想しえたであろうか。子供の誘拐疑惑、盗難事件、遊園地内に幾つか点在する監視カメラとストロボフラッシュ。一見繋がりが無いこれら三つが、実は全て一つに集約していたなどと。

今日が最後というので、二人の子供は遠慮なくあちこち歩き回り。

おかげで、お昼には二人の親はすっかりくたびれていた。休憩も兼ねて、レストランで食事をした。

「ママ。トイレ行ってくるね」

今居るレストランのトイレは外にある。昼間で、人目も多く、セレクト隊員の姿も目にとどまり、さしものチドリも気が緩んだ。余計な所には出歩かず、用を済ましたらすぐ戻ってきなさいとだけ言っておいた。

レストラン裏のトイレに回り、用を済まして戻ろうとしたその時……。誰かがグイと、イッキの袖を引っ張った。見ると、イッキより二歳か三歳年上で、純白のワンピースを着た、柔らかな金髪巻き毛の西洋人形のような美少女がイッキの傍にいた。

口で指をはみ、うるると見上げるような瞳と表情がいたましい。人目がなければ、抱きしめていたかもしれない。仮に人目がなくても、自分の度胸では抱きしめる勇氣なんて無いが……

「あ……あの……何か御用ですか？」

少女は可愛げにつぶやいた。

「……私、ミルシイというの。初対面の人にこんなことをいきなり言うのも何だけど。私と一緒に来てくれないかしら、イッキさん」
見も知らずの少女と一緒に来てくれと言われただけでも驚きなのに、自分の名前まで知っているのは仰天した。いや、待てよ。ひょっとしたら、ロボット大会を見に来ていたのかもしれないこの子はイッキは恐る恐る、期待を込めて聞いた。

「ひよっとして、大会を見ていたの？」

少女は白い歯をみせてほえんだ。天使という言葉が当てはまりそうだ。

「ええ、そうよ。あなたとあなたのメダロットさんたちの活躍は見て貰ったわ。もう一方の子も凄くかつこよかったけど、私はあなたのほうがずっとかつこよく見えたわ」

誰だって、可愛い子に褒められたら悪い気はしない。イッキはどこ吹く風な態度を取ったが、内心はにやにやしていた。

「それで、ミルシイさんは僕に何の用があつてきたの」

「最初に言つたでしょ？私と一緒に来てつて。小一時間ほどでいいから、私とデートして頂戴。日本の想い出として」

問題がなければ、イツキは小一時間どころか今日一日デートして良いと思つた。だが、ママの言つていたことに変貌ぶりが気になる。イツキがそのことを言うと、ミルシイは笑つてこう提案した。

「迷子の女の子の親を探していたといえ、一時間姿を消した理由としては苦しくないわ」

「イツキ……。人間の色事は分からねが、控えておけ」

ロクシヨウは忠告したが、イツキは聞く耳を持たなかつた。一時間程度なら、ちょっと叱られるだけで済むだろう。イツキはママとのお約束より、美少女ミルシイとのデートを選択した。

イツキはまず、魔女のお城ツアーに行つてみようかと言つた。ミルシイは喜んで賛成してくれた。アリカと違うタイプの女の子。どちらかという、カリンちゃんに近いかも。

ミルシイは両手をイツキの右腕に回した。イツキは恥ずかしかったが、まあ短い夏休みの想い出にでもと思い。気に留めないようにした。魔女のお城入場前、ミルシイはこっそりと後ろを振り返り、ぱつちりと係員にウィンクした。係員は密かにグッドサインをミルシイに送つた。

「そつえば、君つて見たことがあるような気がするんだよね」

「えっ？誰と似ているの？」

「うーん……。確か。あつ！ほら、お城ツアーのマスコットキャラの魔女『ミルキー』と似ているんだよ」

イツキは魔女のお城ツアーの張り紙を指して言つた。魔女のお城の案内人、魔女のミルキーとミルシイはよく似ていた。外見だけではなく、名前もミルキー、ミルシイと似通つていた。

イツキとミルシイが魔女のお城に入場直前、係りの男性の一人がイツキとミルシイを呼び止めた。

「君は天領イツキ君とミルシイちゃんだね。君らの親から連絡があ

ってね。ちよつと来てくれないかい？」

二人はぎくりとした。そして、互いに顔を見合わせた。ミルシイも、親に内緒で出歩いたんだ。

二人は園内の裏側に連れてこられた。裏側に事務所でもあるのだろうか。

「あの…それで、ママは何と言ってきたんですか？」

突如、係員の男性は意地悪そうに笑い出した。

「はっはっはっは！親に内緒でデートとは。中々、見所がありそうな奴ロボね！言っておくけど、今の俺の顔はこの世に存在しないロボよ」

「えっ！ロボ…！まさか」

気付いた時には既に遅し。ミルシイはくさむらから出現した金魚鉢頭のロボロボ団員とそのメダロットたちに捕えられてしまった。

イッキは口クシヨウ、光太郎で応戦しようとしたが、係員に扮装したロボロボ団に羽交い絞めにされてしまい、メダロットを強奪された。声を出したくとも、猿轡（さるめづつ）のように口にタオルをきつく巻かれ、頭に布を被された。

布を被される前、ミルシイの泣き顔が目にはらついた。抵抗しようにも、体と腕を縛られてはどうしようもない。

メダロットを奪われ、ロボロボ団にへまして捕まり、女の子一人も助けられなかった。大きなショックの連続に、イッキの心は停止してしまった。

15・メダロット島（五日目）（後書き）

新キャラクターの名前は選考の末、忌夜火さん提案の「トモエ」に決定しました。

後書きからお礼を申し上げさせてもらいます。

この度は、忌夜火さんと一般兵 高天原Aさんの募集ありがとうございました。

16・メダロット島（五日目・六日目）（前書き）

今回、両バージョンの話に違いはほとんどありません。

もう一方の主役であるメダロット（ロクシヨウなど）が出ないせい
であります。

16・メダロット島（五日目・六日目）

いつまで経っても帰ってこないイツキの身を案じ、チドリは店内に居る客とレストランの近辺を歩く者たちに話を伺った。何名か、その子なら金髪巻き毛の可愛らしい子と手を繋いでいたと答えた。目撃者に詳しくその時の様子を尋ねると、デートにも見えたが、迷子の子を送っているようにも見えた。

チドリとしては、我が子は困った可愛い子ちゃんを紳士に送っていることを願った。相手は同じ年の女の子のようなので、誘拐されたとはいえない。チドリは甘酒親子と二組に別れ、自らはプリティプラインのトモエを連れてイツキを探した。まずは外の世界に慣れさせたほうが良いとイツキは考え、ロクシヨウと光太郎は要所で出し入れたが、トモエだけは外へ出していた。

一四時になっても見つからなければ、園内放送をしてみようことにした。園内放送してから更に二時間後、一六時でも姿を現さないようなら、セレクト隊に相談しようとした。

チドリは携帯からパパへ連絡したが、繋がらない。仕方なく、メールを送信しておいた。

《イツキの姿が見えないの。お仕事のときに申し訳ないけど、それとなくイツキを探してくれないかしら？》

チドリはまず、イツキが好む乗り物の周囲を探った。コーヒーカップ、メリーゴーランド、空中回転ブランコ、乗り物の形はジェットコースターの形をしたメリーゴーランドの高速タイプ。足早に、しっかり目を光らせながら各アトラクションを巡ったが、イツキとその少女と思しき人物は影も形もない。

可能性は低い、イツキが女の子に見栄を張った場合を想定した。ジェットコースター系、各絶叫アトラクション、お化け屋敷、迷路、ジェットコースターと迷路はともかく、それ以外はイツキが苦手なアトラクションだ。

ヒーローショー会場も訪れたが、そこで甘酒親子と出くわし、二人はここにイツキ君はいないと告げた。

最後は魔女のお城へと出向いた。しかし、ここでも係員の男性はそんな二人は知らないと答えた。去り際、係員の男性が怪しくほくそえんだのが気に食わず、問い質した。

「私が息子を探すことのどこがおかしいのですか？」

「えっ？ いや、口……。済みません、僕は幼い頃からおかしくもないのになぜか笑ってしうまのです。ご気分を害して済みませんでした。以後、注意します。それと、息子さんもできる範囲で探しておきます」

「そうですか。すみませんねえ、歩きつ放しで苛立っていたものですから。つい、あなたに当たってしまいました」

係員は低姿勢を崩さず、お構いなくと言った。ここにいないとなれば、遊園地から離れて別の場所へ行っている可能性がある。ワールド・フード・シティに行きたがっていたが、そこへ女の子と一緒に向かった可能性は十分ありうる。

時計の針は二時を指していた。真夏の日差しの中を走り回り、チドリは額から玉のような汗を流していた。

このまま行くのはみつともない。公衆便所でハンカチを濡らし、顔や脇の汗を拭いてから、園内放送がある事務所へと向かった。

午後六時。通報を請けて、一人のセレクト隊員がメダロツ島テーマパーク内を探索していた。

四角い縁なし眼鏡をかけて、下顎がいやに尖っており、頭部も茶色にとんがっている目立ちやすい出で立ちの男性セレクト隊員が目を光らせていた。

彼の名は、トックリ。セレクト東京支部機動部隊二番隊所属の副隊長。それが彼の肩書き。因みに、ノンキャリアである。

セレクト隊は警察とは違う。メダロットを使用して国家犯罪対策や治安維持を担う、国連所属のメダロット使用防衛組織。であるはずだが、こうした公の場での警固任務にもあたったりする。

セレクト隊の日本支部は東京都の他、神奈川、大阪、京都、沖縄にも点在する。

権威としては、警視庁、警察庁近くに建てられた東京支部が一番である。その東京支部所属であり、起動部隊の副隊長ともなれば、彼はそれ相応の権威を持っているはず。その副隊長が、部下にやらせるべき現地捜査を自らの手でやっているのには訳がある。

この事情を語るには、文字数を要する。

二番隊を取り仕切るのはアワモリという男。トックリら隊員からすれば、本来は誘拐疑惑がある子供の捜査を最優先にすべきなのだが、アワモリ隊長の自論は違っていた。

「現在、パレードで島は渦中と化してある。そんな中で、子供の捜索を行ってみる。群集に余計な混乱を与え、混乱に乗じ、誘拐犯共に絶好の機会を与えてしまうことになる。だから、子供の捜索はメダロット島第一シーズンの客がある程度引いたのを見計らってから、本格的な捜査を行う」

とは言っていたが、アワモリ隊長は子供の捜査より、パレードで目立つことのほうが先決であるのは部下共々承知であった。十年前、魔の十日間事件にはセレクト隊内部の者及び、一部警察の者まで絡んでいた。このことは、当時世界の一大センセーショナルな話題であり、日本所属のセレクト隊と警察組織はしばらくの間、冷ややかな目で世間に注目された。

以来、警察。特に主犯格が内部に存在したセレクト隊はイメージアップに躍起した。そのツケは、当然のように現場に回ってくる。

アワモリ隊長は確かに取っ付きにくい人柄ではあるが、昔は真面目で正義感に燃える男だった。しかし、魔の十日間事件であらぬ疑いをかけられ、追い打ちをかけるような上層部のイメージアップに繋がる行動を求める催促。正義を掲げているが、アワモリも組織の

人間。初めこそ自分のやり方を押し通していたが、それでは組織では生き辛く、いつしか上層部に恭順するようになった。そうして、アワモリは徐々に卑屈な性格となり、燃える正義漢は愚鈍な男へと成り果てた。

今回のパレードには、セレクト隊の直接参加もある。アワモリ隊長はそこで目立ちやすい位置に立ち、パレード見物客にライトアップされた状態で手を振ることになっている。

混乱の渦中で探すのは不味いと言っていたが、端々に「パレード」という言葉が目立っているところから推測する限り、アワモリは子供搜索より、パレードでセレクト隊を人々に印象付けるほうが大事らしい。

そして、現状では、あたかも損な役回りかのようにトックリ副隊長に搜索が一任された。しかし、広いメダロット島を探すには人員があまりにも足りない。アワモリ隊長が、パレード参加とその警固と整備の大半に人員を尽くしているせいだ。

参加する以上、多少の警固と整備協力は致し方ない。だが、裂く人員があまりにも偏っていると言わざるをえない。

アワモリ隊長に提言しても、頑なに拒否された。アワモリ隊長は上層部とはまた別の繋がりがあり、意見することで自分の昇進や給与に影響するのではないかと思い、思い切って強く意見を述べられる者はいない。

という訳で、副隊長格であるトックリが人員困窮に対処するため、自らも現場に出向いた。嫌とは思わない。自分はデスクワークよりも現場のほうが向いていると思っているからだ。

午後四時。天領チドリという女性からの通報で、息子の天領イッキがいつまで経ってもトイレから行ったり戻ってこないと言った。目撃者の情報では、見知らぬ少女と腕を組んで歩いていたらしい。その少女も事件に巻き込まれた可能性を視野に入れている。

魔女のお城周辺で、それらしき二人を見かけたとのこと。魔女のお城担当係員に話を伺ったが、そんな二人は知らないと言われた。

それでも、念には念を入れて地道な聞き込みをしているうちに、気掛かりな証言を得た。魔女のお城に居る係員の一人が、二回ほど、語尾に「ロボ」を付けていた、と。

語尾にロボを付ける「ロボロボ団員」とは限らない。ロボロボ団員が悪戯集団だと思われていた時、ロボが流行語大賞第二位を受賞したことがある。現在でも、ふざけてロボを付ける輩がいる。つまり、その係員が二回ほど語尾にロボを付けただけでは、ロボロボ団の証拠としては薄い。

トツクリは、一つ賭けに出ることにした。Rと掘られた一つの銀色メダルがトツクリのポケットには入っている。近頃、ロボロボ団の活動がまた活発になってきていることを憂慮し、本部は極秘に各部隊の数名の隊員たちにロボロボ団の証である、偽造ロボロボメダルを持たせた。いざというときは、これで仲間のふりをしてその場で潜入捜査をしるということだ。

事前に情報が入っていれば、セレクト隊員ではなく一般人の変装をしてロボロボメダルを見せたが、一度顔を見せてしまったのでそうもゆかない。

そこで、近隣の隊員に協力を呼びかけた。すぐに一名、返答してきた。率先して子供捜索に名乗り上げた隊員だ。トツクリはトイレでその隊員と短い相談を済ませた後、一時間、ある作業に時間を割いた。

トツクリはセレクト隊員の恰好のまま魔女のお城に立ち寄った。

係りの男は、呆れ気味に嫌気が差した表情を隠さなかった。

「何ですか？話はさつきは済んだのじゃ」

「いえ。それとは別に、ちょっとお話が。重要な話なので、できれば裏の事務所をお願いできませんか？お時間は取らせません」

やれやれと、男は別の係員に持ち場を任せ、トツクリを事務所で案内した。

「……それで、話とは？」

「手筈は上手くいっているのか？」

頬がぴくりと動いた。男は平静さを崩さず、こう返した。

「手筈？ああ、パレードの準備ならご安心を。セレクト隊の方が沢山手伝ってくれてますから」

嫌味が籠もった口調も気にせず、トックリは話を続けた。

「そうじゃない。お前は勘違いしているロボ」

語尾のロボに、男は狼狽した。

「ロ……ロボって……セレクト隊さん。冗談きついですよ、そんなロボロボ団みたいな口調なんか」

食いついてきた。今がチャンス。トックリはそっとポケットに手をつ突っ込み、偽造ロボロボメダルを握った。偽造といっても、素材は本物と同質である。男は緊張して面持ちでトックリの握りしめられた拳を見つめた。トックリはそっと開き、ロボロボメダルを男に見せた。男はトックリの顔を窺った、トックリは小さく頷いた。男は震える手でメダルをつまみ、何度も裏表をひっくり返し、太陽に翳したりもした。偽ロボロボメダルの裏には、小さな×マークも彫られていた。

吉と出るか。凶と出るか。この男が本当に無関係ならば、男は隙をみて、自分をロボロボ団と勘違いして通報することになる。

確認が済んだのか。男はトックリの手にもダルを戻した。そして、男は笑顔でトックリにお茶を出した。

「はっははは！まさか、話には聞いていたけど、セレクト隊にもロボロボ団が潜り込んでいたロボね。さあ仲間よ。まずはお茶でも飲むロボよ」

上手くいったようだ。トックリは胸を撫で下ろした。ロボロボ団員と偽ロボロボ団員はしばらく話し込み、情報を交換しあった。トックリを部屋から送った後、ロボロボ団員はすぐに秘密の内線を使った。

「サラミ様。サラミ様の予想通り、セレクト隊が来たロボよ。しかも、偽ロボロボメダルの手口まで明かしてくれたロボ！」

「よくやったでちゅ！お前の褒賞は何か考えておくでちゅ。それに

しても、偽ロボロボメダルとはセレクト隊もやるでちゅね。で、そのセレクト隊と偽ロボロボメダルの特徴は？」

下っ端ロボロボ団は、詳細を幼児幹部・サラミに伝えた。

「なるほど、なるほど……。裏に×マークでしゅか。ふふふ、迂闊な奴でしゅね。やっぱ、馬鹿のまま大人にはなりたくないものでちゅね。よし、お前は引き続き監視任務に就きなさいロボ」

下っ端団員は元気よくラジャロボと応えた。

と、セレクト隊の極秘手口がばれたにも関わらず、トツクリは至って呑気そうだ。最初から最後まで状況をつぶさに観察していたある傍観者は、そのトツクリを褒めた。

「ほう、中々やるじゃないかあのセレクト隊員」

七時半。パレードの時間帯。一人の男が再び魔女のお城に訪れ、ロボロボメダルを見せた。彼のロボロボメダルには傷一つなく、ロボロボ団は安心して彼を城へと招き入れた。二度目にロボロボメダルを見せた男は濃い無精髭を剃った跡が目立つ、四十代と思しき男性だ。

イツキはフローリングの床に敷かれた座布団に座り、肘を机に置いて読書していた。テレビもあるが、見る気は起きない。かといって、このままじっとしているのも退屈だから、読書した。気晴らしに外に出たくても、出られない。何故なら、鉄格子で阻まれているからだ。

布を被され、猿轡を嵌められ、連れてこられたのがこの牢獄だ。

監房には、自分以外に二人ぐらいの男の子がいた。一人は小学六年生の男子で、イツキから見ても男前な顔立ちをしていた。一人は小学四年生の男の子で、女の子と見間違っほど可愛い顔だった。

向かいの房には、四人の少女が入られている。三人とも、小学生のようだ。捕えられた七名の中に、イツキをデートに誘ったミル

シイの姿は見当たらない。

今思い出しても腹が立つ。ミルシイは、何とロボロボ団の協力者であったのだ。同房内の男子に聞くとところによれば、二人ともミルシイに連れられて、魔女のお城以外の場所で捕まった。

ミルシイは去り際、これが私の正体と言い、どこからともなく取り出した杖を振るった。イツキは目を剥いた。そこには、どう見ても魔女のお城ツアー案内人であるミルキーその人が立っていたからだ。

「なんでこんなことをするんだよっ！あなたはここの従業員じゃないの！？」

「勘違いしないでね、ノーマルフェイス坊や。私はミルキーじゃなくて、ミルシイよ。ミルキーとはまた違う存在よ！特別に答えてあげるわ。私はね、ロボロボ団と協力して可愛い子供たちを集め、その子達を愛でて、ロボロボ団として教育するのが目的なの。でも、私にとってロボロボ団に教育するのはどうでもいいの。私はキュートでハンサムな子たちと貴重なひと時を過ごせればそれで満足なの」

「じゃ…じゃあなんで僕なんか」

「当然の疑問よね。そこまで可愛くもなければ、イケメンフェイスでもないあなたが選ばれたのは疑問よね。あなたが選ばれた理由はただ一つ。それは、あなたがメダロット島ロボトル大会上位入賞するほどの腕前であり、同時に、レアメダルを託された一人でもあるからよ」

ミルシイの言葉にイラつかされたが、堪えて疑問をぶつけた。

「レ…レアメダル？前半はともかく、託されたってなんだよ！」

「知らない。私はただ、言われただけのことをやっただけだから本当はもう一人の、準優勝したあのハンサムな男の子を加えたかったけど。ガードが堅い上に、おまけに結構私好みの可愛い女の子と一緒にいたから声をかけそびれてしまったの。じゃ、話はここまで」
あとはイツキがどう足掻いて叫んでも、魔女の恰好をしたミルシイとロボロボ団は耳を貸さなかった。

怒りをぶつける対象がいなくなったイツキは、鉄格子を蹴った。だが、それは自分の足を痛めただけだった。見るに見かねて、六年生の男の子、キクスイという男の子がイツキを諷めた。

「無駄だよ。ヘビー級プロレスラーが蹴ったとしても、この鉄格子はビクともしないよ」

鉄格子は太さ五センチもある真鍮製。並の体力しかない小学生のイツキが十年蹴り続けたとしても折れそうにない。

短い人生の中で、どれが一番悔しくて愚かかと問われれば、間違いなく今と即答する。

大会に準決勝まで進出し、すっかり鼻を伸ばしてしまった。その慢心を突かれてしまい、ママから勝手に離れ、見知らぬ女の子の誘いにデレデレと鼻を伸ばし、挙句の果てに命より大事な口クシヨウと光太郎二体のメダロットを収納したメダロットチを奪われ、こんな牢獄に監禁された。

後悔し、罵倒されて、暴力を振るわれることによって外へ出され、メダロットたちを返して貰えるのならいくらでもそうするつもりだ。現実、そうしたところで外へ出されるわけないし、メダロットたちを返して貰えるわけがない。七時を過ぎた頃、頭を冷やしたイツキは、一先ず本でも読んで脱出を模索することにした。

八時。ミルシイがロボ団にペッパーキャットを背負わせて戻ってきた。そのペッパーキャットを見て、イツキは思わず鉄格子を掴んだ。見間違えるわけない。頭部の雷模様の下にある、赤くキとペイントされた文字。キクヒメのペッパーキャットだ。

「セリーニャ！セリーニャじゃないか！どうしてこんなところに？なんで、キクヒメのところにはいないんだ」

イツキがいくら呼びかけても、セリーニャは反応しなかった。セリーニャの瞳孔から、光がない。セリーニャは無傷であるが、どうやら機能停止状態のようだ。

「お知り合い？でも、声をかけても無駄よ。この子、今はメダルをはめ込んでないもの」

「どうしてセリーニヤまで」

「この子ね。一人でその辺をほつつきあるいていたの。猫型メダロットだからといって、必ずしもニヤーとか鳴かないわよ。でも、この子ったらごくごく自然に猫っぽい喋り方をするし。意外にも人懐っこいから、連れてきちゃったの。本当、なんであのマスターにこんな可愛らしい性格の子がいるか不思議だわ」

そういえば、キクヒメはペッパーカーットの散歩を許していた。

まさか、本人は善意がこんな形で裏目に出るとは思っても寄らないだろう。メダロット島内でメダロット関連の盗難もあったが、これもロボ団の仕業と考えるべきだろう。

「じゃあ、島のメダロット関連の盗難も……」

ミルシイは親指でクイと後ろの金魚鉢頭を指した。

「私は知らないけど、彼らはそっち方面にご執心のような」

「お前なあ。魔法使いだか何だか知らないが、ペラペラと余計なことを喋りすぎロボよ」

ここで、イツキ以外の捕えられの身の子供たちも騒ぎ出した。

「一体、どういう事情があって僕たちをさらったんだ！」

「そうよ、そうよ！理不尽よ！こんなの」

「うるさい奴らロボ。そんなに騒がなくても、今夜にでも我らの幹部様が事情を説明するロボ。それまで、待つロボよ」

夜十時。その例の幹部を見て啞然とした。てつきり、どんなヤクザな者が来るかと身構えたが、大の大人を従えた幼稚園児ぐらいの男の子が訪れた。

誰かがくつくと笑いを漏らすと、サラミと名乗った幹部は一喝した。

「黙りなさい！人を見かけで判断するんじゃないでしゅよ。あたいはこうみえて、あなたたちよりずっと強くて賢いんでしゅからね。では、心して拝聴しなさい。あなたたちは、ロボロボ団の未来を担うべき連れてこられてのでしゅ！」

サラミのこの発言に、ブーイングが送られた。

「いくら吠えても無駄でしゅ。お前たちはもう、我らの手中にある。黙って、自分の定められた運命を受け入れて、いずれ世界をわが物にできるお手伝いができることを光栄に思いなちゃいっ！以上、演説終わり！後、もう二人メンバー追加でしゅ」

三名のロボロボ団員は、二人の少年と少女を羽交い絞めにしたままそれぞれの監房に収監した。

時間が刻々と過ぎていく。消灯の時間になっても誰も寝付けなかった。時計の針は十二時を越えた。これで、メダロット島滞在六日目となる。

イツキはじつと、暗い天井を見上げた。

*

*

この島にいるある人物は、ひたすら傍観者に徹していた。どうやら、そろそろそ傍観者の役目は一旦忘れ、世間に本業と思われていることをやらねばならないときがきた。悪事は防がねばいかん。例え、それが蛇の道だとしても。この救出の真の目的は、セレクト隊よりも早く少年と出会い、おめおめとメダロットを奪われた少年の力量と真意を問う為でもある。

漆黒の宵闇と同じ色に染まった彼のマントがばさりと翻る。

17・メダロット島（六日目）（前書き）

誤字脱字が目立つかも。

17・メダロット島（六日目）

コン。フローリングの床に何かが投げ込まれた。イツキは自分の近くに投げられたそれを、布団に入ったまま掴んだ。硬い石のような物に包まれた紙だ。イツキは人目を避け、起きてトイレに入った。ロボロボが誘拐した子供を入れるために作ったこの監房。風呂こそないが、トイレ、浄水器付きの水、テレビ、本など外出以外の不自由はなかった。数日前に捕まった子の話によれば、目隠しされてシヤワー室へ何度か連れていかれたりした、と。

トイレに入り、早速、石にくるまれた紙を解いた。

今宵。真夜中の二時、君らを迎えに参る。

誰だ？ロボロボ団？いや、いくらロボロボ団が犯罪悪戯集団とはいえ、こんな悪戯をして一体何になる。だからといって、正体不明の手紙の送り主をどう信頼できたものか。何故なら、つい数時間前に騙されたばかりなのだから。さりとて、閉じ込められたイツキに脱出の手立てはなかった。

せつかく、眠りかけていたところであつたが、イツキはもう一度騙されてみることにした。真夜中の二時、今から一時間ちよつとつてところか。

それまでの間、布団で大人しくふりをするしかない。

魔女のお城の地下にある秘密の監房に石が放り込まれるより遡ること、三十分。

港の倉庫では、ロボロボ団の団員たちが盗んだメダルやメダロット収納状態のメダロットを一般客の荷物に偽装し、運ぶ準備をしていた。

団員七名。影がなく、視界が聞くとところから監視する運搬陣頭指

揮に当たる者が一名と回りを固めるメダロットが二体、他六名はそれぞれのメダロットを一体ずつ転送して運搬の手伝いをさせていた。恐らく、敵メダロット総数は二十から二一というところだろう。

三号は別の仕事に向かわせたので、二体で相手することになる。倒せない数ではないが、迂闊に正面からやれば手間取る。この暗闇を利用し、ミサイルやナパームで一氣に片付けるのが得策。

彼は転送済みの二体に命じた。

「一号。闇を利用して移動しながら敵を屠れ。二号。ロボロボ共がメダロットを全面に出したら、一氣に畳め。……それでは、解！」

韋駄天の如き速度で、一号と呼ばれた機体は影から影へと移動し、ロボロボ団のメダロットたちを一刀両断！突如として倒れたメダロットを見て、団員たちに混乱が生じた。

「な！なんだ！？」

「て…敵襲ロボ！」

「セレクト隊に情報が漏れたかロボ？」

陣頭指揮に当たる上級団員が下級団員を一括した。

「慌てるなロボ！まずはここに集まって、メダロットたちを転送しろ。また、姿を現したところを一斉にかかって抑えるんだロボ」

団員たちは一つに集い、全メダロットを転送した。辺りを探るロボロボ団に、一号が物陰から影をのぞかせた。

「いたよ。じゃ、前後左右からこっそりと…」

ロボロボ団のメダロットが塊、更に注意が上から逸れた。ここだ！二号が全ての砲門を開いた。数え切れないほど大量のミサイルがロボロボ団のメダロットに降り注ぐ。

どおーん……！！

真夜中の爆発音に、港警備の者たちとセレクト隊員もようやく異常を察した。セレクト隊が来る前に片を付ける。難を逃れた敵に一号の容赦なき刃が降り下ろされる。そして、一号は上級団員の背後にソードを突きつけた。そうせずとも、人間のロボロボ団はメダロットたちを失い既に戦意を喪失していた。

一号と呼ばれたメダロットは全身を黒マントで被って正体が掴めない。ソードの形状からして、K W G・クワガタ型メダロットとは推測される。

マントを跳ね除け、倉庫の天井から怪盗レトルトその人が立ち上がった。

「か……怪盗……！」

叫ぼうとした団員は、一号に背中をソードでちよんとつつかれて押し黙った。

怪盗レトルトは一切語らず。一号と同じく黒マントで身を包む二号を従え、手に握った何かでしきりに運搬するはずであったメダル・メダロットが収納された荷物を探った。

ピー……ピー……。微かな受信音。上級団員の隣にある、高そうなトランクから反応が示す。

「悪いがそれをこちらに横してもらおう。他には興味がない。私があるのはそのトランクだけだ。後、出来ればトランクをこちらに転がしてくれば助かる」

ロボロボ団は文句を言いたげだったが、メダロットたちが全て機能停止した今、反抗する術はない。上級団員は大人しく怪盗レトルトの要求どおり、トランクを怪盗レトルトに向かって滑らした。

「ご苦労！ ああ、それと。今の爆発音を聞いて、多分、そろそろ警備員やセレクト隊が駆け付けてくるだろうから。メダルやメダロットが入ったそのお荷物の回収は諦めることだな。……では、さらばだ！」

上級団員の動きを封じていたメダロットはメダロットに戻り、二号機のマントから翼と飛行タイプのエンジンが飛び出し、怪盗レトルトは二号にさっと飛び乗り夜空へと消えた。

ロボロボ団が撤収する頃に、セレクト隊と港の関係者は現場に到着した。

真夜中、突然ロボロボ団が騒ぎ出した。何事かと、子供たちは布団から聞き耳を立てた。

「港……ロボ。…盗………トが………で、運搬………駄目になっ………ロボ！」

残念ながらあまり聞き取れなかったが、港と運搬という単語が何回か使用された。港から船で何か運びだそうとして、何かに妨害されて失敗したのか？

急遽、一名のロボロボ団と二体の浮遊型脚部を付けたメダロットが監房前の見張りに立った。

隣に横たわる、小学六年生のキクスイはイツキに小声で話しかけてきた。

「誰かが牢番に立つなんて初めてだ。ちょっとだけ話をロボロボから聞いたんだけど、見張りは監房外の入口にしか置くのが決まりだつて言っていた。絶対、見張りをつける必要があるトラブルが起きたんだな。こりゃ、上手くいけばこっから出られるかしんねえぞ」

「あんま関係ないけどさあ。キクスイのメダロットは？」

「…笑わないって約束するか？」

「うん、する」

「俺……くの一型のゲットレディが相棒なんだ。同学年に忍者型を持つているのが三人いて、被るのが嫌なのも合ったけど。単純に、ゲットレディのほうがカッコイイと思ったから相棒にしたんだ。一言多い性格だけど、結構気配り上手な面もあるんだ。…それが、ここに来たときメダロットを奪われちゃって…」

「僕も、最近。というより、つい昨日新しく三体目を迎え入れたんだ。そいつは女性型だよ。相性が合うなら、別に性別はなんだっていいじゃないか」

「静かにするロボ！」

頭部と脚部がチャリーベアのロボロボメダロットが、イツキとキクスイの会話を妨げた。二人は更に声を潜めた。

「あのさあ。最後に一言付け加えていい」

イッキはキクスイに紙のことを伝えた。キクスイは対して驚いた素振りを見せなかった。

「何か投げ込まれた音はしたけど、ロボロボの悪戯かなんかかなと思つて無視したんだ。そうか、夜の二時にお迎えか……」

二人はちらりと時計のほうを見やった。時刻は一時五十分。時間厳守なら、残り九分でお迎えとやらが来ることになる。

午前二時。見張り役の団員に通信が入り、メダロットには前後を、自身は左右の監房を見張った。

バッキーン！突如、入口の扉が無理矢理こじ開けられ、球体状の物体が二つ放り込まれた。

「目鼻口を塞げ……」

有無を言わせぬ強い口調に、子供たちは布団を被った状態で目鼻口を塞いだ。ぼぼん！と、二つの球体は破裂し、厚い煙が発生した。そして、切断音と破砕音が同時に鳴り響き、見張り役のロボロボが気絶していた。監房の施錠が外れる音がした。

「早く出る。薄目を開けて、俺に付いてこい」

言われるがまま、子供たちは監房内から出た。一瞥すると、一体は上下半身を切り分けられ、チャーチーベアの頭を付けた奴は顔半分がひしゃげていた。真上から、硬い物が降りおろされた形跡がある。

子供たちに命じる者は、黒マントで体を被っていた。そうして、チャカチャカとメダロットらしき足音をわざとらしく立てながら、子供たちを秘密の地下牢から外へと先導した。

「もう塞がなくてもよい」

真四角に区切られた地下の出入口から外へ出た際、閉じ込められていた場所がどこか把握した。秘密の地下牢は、魔女のお城の内壁と外壁の間にある敷地に通じていたのだ。ここなら、外からも内からも見えず、安心して入手した物を保管できる。内壁と外壁の間から出るには、内側にある一箇所の鉄製の扉しかない。

黒マントで被われたメダロットは右に曲がった。鉄製扉付近に、
気絶したロボロボ団一名と機能停止した三体のメダロットが壁にも
たれかかっていた。

鉄製の扉を出たとき、イツキは他の子より先んじて謎のメダロッ
トに聞いた。

「君は誰だい？どうして、僕らを助け出したの」

黒マントを羽織るメダロットは答えない。と、上空から笑い声が
轟く。子供たちはさっと身構えたが、謎のメダロットは至って警戒
している様子はなかった。肩を僅かに動かす動作は、何やら呆れて
いるようにさえ見えた。

「ふはははは！彩りましよう食卓を。皆で防ごうつまみぐい。常
温保存で愛を包み込むカレーなるメダロッター！怪盗レトルトただ
いま参上！悪事あるところ怪盗レトルト有りだ！」

塔の先端に、ゆらゆらと風であらゆる方向に歪めく存在、半笑い
の笑みを浮かべた白面の仮面を付けた怪盗レトルトがそこにいた。
巷で噂の大泥棒。神出鬼没の怪人・怪盗レトルト。想像を越えた
人物の登場に、子供たちはショックで言葉を失った。

怪盗レトルトの右手には、一つのメダロッチが握られていた。レ
トルト本人の者ではなさそうだ。怪盗レトルトは、下を指してこう
言った。

「君らの救出料として、そのちょんまげ頭君の、特別なメダルが
入ったこの特別仕様のメダロッチを戴くことにしよう」

この場でちょんまげ頭といえば唯一人。イツキしかない。イツ
キは慌てて叫んだ。

「ちょ、ちょっと待て！助けてくれたことは感謝するよ。けど、そ
れがなんで僕のメダロットたちを取る理由になるんだよ！！その特
別仕様だつていうメダロッチが欲しいなら上げるよ。でも、二人を
…メダロットたちは返してくれよ！」

「ふっ…おめおめと色香に惑わされて大事な物を取られた奴が言う
科^{せりふ}白とは思えんな」

怪盗レトルトは見下したように笑った。

「た……確かに鼻を伸ばして、命と同じくらい大事な二人を盗られたのは失敗だ。…でも、もうそんなことはしない。今度はどんなことがあっても、メダロットを。いや、メダロットたちは手放さい！お願いだから、返してくれ」

「そうだそうだ！なーにが怪盗だ！ただのイカした変態コスプレマントマンじゃないか！」

「そうよ！こんな私より小さい子から奪おうなんてするなんて、最低の変態仮面じゃない」

子供たちはイツキの味方をし、怪盗レトルトに向かって口々に罵倒した。

「言葉だけでは足りない。どうしても言うのなら、行動で示すがない」

怪盗レトルトが塔の先端から消えた。追いかけようとするイツキの前に、ロボロボ団と黒いタイツスーツを着た、グラサンをかけた幼児が立ちはだかる。

「全く！大人は駄目でしゅね。肝心なときは役に立たないでちゅ。今からでも遅くない、早く牢に戻りなさい」

そこへ、黒マントを被るメダロットと、どこからともなく色んな射撃型パーツと隠蔽パーツをつけたメダロットが飛び降り、子供たちとロボロボ団の間に割って入った。

「何ですかお前らは！？逆らう者は、どんな奴でも容赦しませんよ！」

行けということだろうか？イツキは訳が分からなかった。この二体は、どう見ても怪盗レトルトの愛機。その二機が、どうして僕らを手助けしてくれるのだろう。今の主人の行動が目に残るものだからなのか？事情を聞いても話してくれそうにないし、話を聞く余裕もない。イツキと子供たちは反対方向へと回り込んだ。何駄か、ロボロボの物と思わしきメダロットが転がっている。それらを見もし、イツキは空を飛ぶレトルトの陰影を追いかける。

「…か…返せー！あつ！」

イツキは石に蹴つつまいずいて素っ転んだ。鼻血が流れ、膝が擦りむけても、イツキは痛みを堪えてレトルトを追いかけた。閉じられた園内の出口に着いた。怪盗レトルトは安安と門を乗り越えた。間に合いそうにない。

「ち…畜生」

キクスイが背後で舌打ちした。もう駄目だ。怪盗レトルトは、夜闇へと紛れてしまった。もう追いかけられない。ぜえぜえと、子供たちは汗だくで、肩を息をしていた。…ここまで来て…せつかく牢から出られたのに…いけない方法で手に入れたつてのは、骨の随に染みるほど理解している。それでも、手離せと言われたら嫌だと答える。

メダロットや人間の関係がどうたらとか、難しいことは分からない。けど、これだけは言える。僕は…ロクショウと光太郎、それと、新たに仲間となったトモエと別れたくない、と。

「頼むから…二人を返せー！！」

イツキは鼻血が口に入るのも気にせず、天に慟哭した。分かっている。こんな風に叫んでも、もう手遅れだつてことぐらい。口に入つた血を吐き出した。

だが、イツキの叫びがレトルトに通じたのか。夜闇へと消えたはずの怪盗レトルトが、門の向こうからひょっこり顔を出した。

白面の仮面から、レトルトのその表情は伺い知れない。そうして、レトルトはぽいとメダロットを放り投げた。落としになるのを、キクスイがキャッチしてくれた。

「はつきりと答えを聞いたわけでもないが。言葉にせずとも、君のその風体を見れば、君のメダロットに対する想いは通じた。…だが、忘れるな少年よ。今度こんなことがあれば、その時はまた君の前に現れるであろうことが。その前に、メダロットたちが君に愛想を尽かすかもしれん」

「さつきから何をこちゃこちゃと…。セレクト隊呼ぶぞ！」

キクスイが怪盗レトルトに食ってかかった。

「それは困る。まだ、捕まる訳にはいかん。…少年よ。今一度、最後に私の言葉を聞くのだ。」

真実を見抜く目を養え。見えている物だけが本当の悪とは限らないぞ。灰汁とは煮込むほどに出てくるのだ。また君とは会うかもしれない。それでは、アデュー！」

怪盗レトルトは再び、夜闇へと紛れてしまった。

「何だっただんだ一体。…おっと！ほら、これ。お前のだろう」

キクスイが丁寧に、イツキの腕にメダロッチを付けてくれた。メダロッチを見ると、何と作動状態だった。どう話しかけたか迷っていると、ロクショウが一声を発した。

「イツキ。メダロッチからではどうなっているかは見えんが、怪我は大丈夫か」

平素な。それでいて、労わる口調。ロクショウの声にはイツキを責めるようなところ wasn't なかった。

「ほんま。あんた厄介事によっ首つつこみなさんな。そういう産まれかいな。…まあ、今はまた一つに集えたことを喜ぼうか」

光太郎が憎まれ口叩いた。ロクショウと同じく、怒ったり、落胆しているように見えなかった。イツキは泣き出してしまった。

「なんだ、また泣くのかイツキ？傷が痛いのか？」

傷が痛くてしょうがないのもある。ただ、それ以上に嬉しい気持ち溢れ、涙が止まらない。キクスイが貰い泣きしていた。

「行こうか」キクスイがイツキの肩を担いだ。

肩を担がれ歩いているその途中、イツキたちを挟むように二組の存在が現れた。

北からは、黒タイツスーツを先頭に来たロボロボ団。ロボロボ団に混じり、魔法使いの格好したミルシイの姿も見受けられた。南東、

ジェットコースター側からきたのはスクリーンズだった。イワノイ、カガミヤマはブルースドッグ、キースタートルを転送済み。

「お前らなんでここにいるんだ!？」

「イツキ、それはあたいらのセリフだよ。私は夜通しでセリーニヤを探しにきたのさ。で、その金魚鉢集団と黒タイツのガキンチョ誰だい？」

「ガ…ガキンチョだと！無礼者！我こそはロボロボ団幹部サラミ様だぞ。お前ら普通の子供とは、強さもおつむのでも違うでしゅ！」

ぷつ！と、キクヒメに従うイワノイとカガミヤマが吹き出した。

「でしゅだつて…。ぷぷつ！こんなのが幹部だなんて、ロボロボ団も底が知れているぜ」

「うん、ほんと。洗濯し直さなきゃ」

カガミヤマが意味不明な同意をした。

「キクヒメ。そのロボロボ団とミルシイがお前のペッパーカーヤットを攫った張本人だ」

「へえ。あたいのセリーニヤに手出しするなんて。随分と命知らずなやつらもいたもんだ」

キクヒメはヤクザのようにドスの利いた声で、ロボロボ団をがんばった。普段は快く思っていないスクリーンズだが、今はありがたい救援者であった。ミルシイが杖を持つ手に力を込めて、睨み返した。「ふうん。あーんな可愛らしい子が、あんたみたいな可愛くない子のメダロットだなんて驚きだわ」

「ちよつと、あんた。こんなこととして良いと思っているの？大人しくツアー案内してりゃいい物を」

「うん、いいの。私は可愛い子たちと可愛いメダロットたちに囲まれば幸せなの。後、よく間違えられるけど。私はミルキーとは全く違う存在よ。逃げる前に、ムカツクあなたを畳んでから行かせてもらうわ」

キクヒメとミルシイの目に、炎が宿っていた。女同士の熾烈な争いに、スクリーンズの子分もロボロボ団もたじろいでいた。

「キクスイ。皆を連れて行ってくれないか」

「お前はいいのか」

「うん、大丈夫。それに、気に食わないけどロボトルの腕前は頼れる奴らがいるから」

語らずとも、ロクシヨウと光太郎は自らの役割を理解した。

「イツキ、俺たちを早く転送しろ。体がウズウズする。怪盗レトルト以上に奴らが気に食わん」

ロクシヨウが俺と呼称した。どうやら、相当暴れたいようだ。キクスイたちの背中を見送り、イツキは転送装置を押した。

「メダロット転送ー！」

ロクシヨウ、光太郎の二体が眼前に出現した。

「ところでキクヒメ。セリーニヤがいなくて戦えるのか？」

「あんたに心配される筋合いはないよ。新しく、スクリューズに加えた三体がいるさ。あたいらよりもあんたは自分の傷を心配なさい。」

キクヒメのメダロットから雪達磨のような形をしたメダロット、フラップが転送された。

イワノイはカマキリのようなヒパクリト。カガミヤマのは頭部はロールスター、右はゴーフバレット、左はカップパード、脚部はランドローター。一見、珍妙極まりない組み合わせであるが、案外理に適っている組み方だ。

「イワノイ、あんたは私の援護。カガミヤマは本意だろうが、イツキと協力してやりな」

よもや。こんな場所、こんな機会でスクリューズと共同戦線を張るとは思わなかった。子供だけなら力づくで押しのけれいが、メダロットを持っているのならば話は別。まず、メダロットを片付ける必要があると判断したロボボ団六名はそれぞれメダロットを転送した。

ミルシイの杖型メダロットからは、魔女型のサンウィッチーが一体と、協力なビーム攻撃を持つ花型のチャージドシーズ二体が転送

された。

幹部と名乗るサラミのメダロットは、神話に出てくる巨人をモチーフにしたジェントルハーツ三台。重量級の外見に反し、キャタピラによる速い稼働を可能とし、両腕のごつい扁平長方形のハンマーを武器とする。

「ユミル、行きな！」

キクヒメにユミルと名付けられたフラッペがサンウィッチーに向かう。そのユミルを援護すべく、ブルースドッグがライフルで左のドシーズを攻撃、ヒパクリトは右のドシーズに獲物を向けた。

カガミヤマはキースタートルの鋼太夫を集団から一定の距離を保ち、レーザーを発射させた。そのキースタートルへの進路を阻むように。光太郎は空中から、ロクショウとロールスターはロボロボ団の周囲を回転するように動き、攪乱しながら攻撃した。

数だけでいえば、圧倒的なこの不利な状況をイツキとスクリューズは不承不承ながら応戦した。

攪乱戦法が功を奏し、ロボロボメダロットの半数は戦闘不能に陥った。しかし、こちらも全くの無傷で済まされなかった。ロクショウは右肩に被弾し、攪乱戦法に当たる三機の中で一番遅いロールスターは既にロボロボの状態だった。

キクヒメ&イワノイチームは、ミルシイと一進一退の攻防を繰り広げていた。ミルシイは意外にもロボトルが出来るようだ。

ロクショウが一台のジェントルハーツに切りかかる。ロールスターのビームと鋼太夫のレーザーが火を吹く。ロクショウに気を取られた隙に、一台のジェントルハーツは二体の光学攻撃が直撃してしまい、全身に稲光が走り、近くにいた一体も巻き添えを食らった。二体、仕留めた。

敵討ちにと。一台のジェントルハーツが輪から離れ、ロールスターを地面に叩きつけた。

「ああっ！」

カガミヤマのロールスターも機能が停止した。

「昨日の敵は今日の友！それでも食らいや！」

光太郎はエネルギーが尽きるといわんばかりに、大量の重力波を放った。防御役二体が倒れ、逃げ遅れたオヤカタエクセルは脚部と腕が使い物にならなくなった。

そして、光太郎はゆっくりとイツキとカガミヤマの背後に着地した。

「すまん。もう、地面すれすれに浮くぐらいのエネルギーしか残ってらん」

言われなくても、メダロツチの光太郎のエネルギー残量を見れば一目瞭然。キクヒメとイワノイの戦況を見ると、ミルシイは徐々に押されていた。

「ふふ。攪乱戦法はこれでしまいでしゅ。一気に始末するわよ」

ジェントルハーツ二台に続き、残る部下二体も鋼太夫に接近。鋼太夫は大量のエネルギーを放出したばかりで、動けない。そこを狙われてしまい、袋叩きにあった。カガミヤマがまた、「ああっ！」と悲痛な声を出した。

ロクシヨウも黙ってはいなかった。オケ・ドグーのパーツを中心に組まれた機体に何度も斬り付け、鋼太夫が倒れて直ぐにオケ・ドグーも倒れた。

一方、キクヒメ&イワノイコンビは遂にミルシイを撃破した。左のチャージドシーズを片付けたブルースドッグが新米ヒパクリトの援護に迫り、もう一体のチャージドシーズを早々に潰し。ヒパクリトはミルシイとサンウィッチーの背後に回り、ブルースドッグは射撃、ニツチもサッチもゆかなくなったサンウィッチーをユミルは一気に畳み掛けた。

「うつそーん！私の自慢の子達が！」ミルシイは驚きを隠せなかった。

「さあ、年貢の収めどきよ。大人しくお縄に頂戴しな」

キクヒメが時代劇風な口調で決めゼリフを吐いた。

「うつん。そうもゆかない。ここで捕まる訳にはいかないわ。じゃ

あ、さよなら。ロボロボ団の皆さん。そして、さようなら。思った以上に手強かった生意気な子供達よ」

ミルシイは杖を振るうと、足元から湯気のような煙が立ち上った。ユミルが煙に突っ込んだが、危うくヒパクリトに衝突しそうになった。煙が晴れると、ミルシイは忽然と魔法のように姿をくらましていた。ミルシイのメダロットたちもいつの間にかいなくなっていた。

「メダロットのほうは遠くから転送したとして、本人はどこに消えちまったんだい!？」

これで五対三。形成逆転。しかし、相手の主力機であるジェントルハーツ二台は今だ無傷なのに対し、ユミル、ブルースドッグ、ヒパクリトの損傷は思ったより酷く、光太郎はエネルギー残量が幾許かの状態。無傷なのはロクシヨウだけだ。サラミが甲高く笑う。

「わっはははは！数字的にはお前たちのほうが有利であるが。戦闘力において、そのヘッドシザース以外の奴らは実質戦力外に等しい。そのドラゴンビートルに至っては、エネルギーが切れかけてるではないか」

このピンチに、イツキとスクリューズは冷静だ。こういう時こそ、落ち着かなければならない。ロクシヨウがロボロボ団に聞こえない程度で味方に語った。

「黙って聞いてくれ。今の私は、この前のおどろ山ほどではないが。あの時の力を発揮できる」

キクヒメがロクシヨウを見下ろす。

「その力は気になるが、あいつら倒せるかい？」

「無理だ。捕まったときに本体から僅かにエネルギーを抜かれたようだ。この前ほどの威力はない。が、あの主力二体の戦闘力は奪えるはず」

イツキとロクシヨウは見つめ合い、頷きあった。

「キクヒメ、イワノイ、カガミヤマ。目を閉じたほうがいいかもしれないぞ。眩しいから」

「おい！何の話だよ！」

「ええい！何をこちゃこちゃと…。一号、二号。あんな奴らを押しつぶしちゃえ」

二台のジェントルハーツが押し寄せてくる。優に一メートルを超える、横に幅広のメダロットが迫ってくるのは威圧感がある。ロクシヨウは身構えたまま、前面に出た。

「お前ごときコクワガタが止められるものでしゅか」

「この私を……俺を舐めるなー！！」

ロクシヨウの全身から。特に、背後のメダル装着部から強い光が漏れ出した。

「しまった。左右に散…」

遅かった。ロクシヨウのソードから一本の細い光の筋が広がる。

二台のジェントルハーツは両腕で防御したが、ジェントルハーツの両腕はあえなくティンペットごと切断された。サラミは驚愕した。

同時に、ロクシヨウのパーツが僅かに溶けた。

「何という威力！シオカラから聞いたほどではないが、あの二台の腕をティンペットごと切り裂いてしまうとは」

「サラミ様ー！一体、我々はどうすればいいロボ」

二台のジェントルハーツは戦闘能力を失い、残る一体は今のを見て、怯えて仕掛けるのを躊躇っていた。と、沢山の声とライトがこちらに近づいてきた。

「不味い！撤退でしゅ！メダロットは離れたところから特殊電波で回収！貴重なデータを撮れて、メダルに戦闘経験させただけでも儲けものでちゅ」

「データ!？」

イッキの呟きを無視し、ロボロボ団と幼児幹部サラミはゴキブリの如き勢いで逃げ去った。ロボロボが逃げ去った後も、ロクシヨウは仁王立ちしていた。僅かに溶けたその全身から、鬼気迫る物を感じた。イッキは。静かに、そっと呼んだ。

「ロクシヨウ。もついいよ。ロボロボの奴らは逃げ去った。動けそ

うか？」

返事がない。セレクト隊が周りを取り囲んだとき、ようやくロクシヨウは気だるそうに「うむ」と返事した。

三人の子供は無傷のようだが、ちょんまげ頭の水色のシャツを着た子は怪我をしていた。ティッシュを詰めた鼻は鼻血で真っ赤に染まり、服は土埃で汚れ、擦りむいた右膝には血と泥が混じり合い、見るも痛々しい。

一人のセレクト隊員が平静な面持ちでイッキに近寄った。ヘルメットを被っているので顔は見えないが。

「よく頑張った。あとのことは我々に任せるであります」

その一言で緊張の糸が切れたのだろうか。イッキはそのセレクト隊員にもたれるように崩れた。セレクト隊員は、強く、優しく少年を抱擁した。慎重に言葉を選び、感情が溢れぬよう自制した。

「よくぞ無事で……。必ずや、君の勇気は無駄にしない」

人間とメダロットの救護班たちは、負傷した少年と数体のメダロットを運んだ。

17・メダロット島（六日目）（後書き）

キクヒメのフラップ・ユミルのネームは、高天原Aさんの新キャラクター募集のネームを使わせてもらいました。

思えば、この最近（二話分）戦闘が無かったので、今回は気合を込めてスムーズに書けました。

次回で長かったメダロット島は終了します。

18・メダロツ島（帰航日）（前書き）

何度か視点変更があるので、仕切りました。

18・メダロット島（帰航日）

メダロット島にある、とあるホテルの静謐な一室での通信器を使用した密談。

無事、任務完了しました。ええ、彼が転んで怪我をするという想定外のアクシデントが発生しましたが。その点は、深く反省しております。しかし、彼があんな怪我を負ってまで懸命に追いかけてきたのは、こちらとしても嬉しい誤算でしたよ。他の子供たちが追いかけてきたことも。他の子供たちを動かしたのは、彼と親しくしていたリーダーシップを取っていた男の子が追いかけたことも関係しているでしょうが、その男の子を動かしたのも元はといえば彼ですからね。

多少、他の子より浮き沈みが激しく、流されやすい一面もありますが、意外にも大した器の持ち主でしたよ。

……。
彼が追いかけてこなかったらどうしたって？……もちろん、それでも返しましたよ。ですが、分かりますでしょうか？その場合、近いうち、自らの意思でメダロットたちは彼から離れたでしょうね。

……。
今回。ロボロボのここで犯した悪事といえば、すり、誘拐、不法侵入、建築物の違法建造、器物破損。どれも罪といえば罪ですが、どうも本筋とはあんまり関係なさそうな行動ですね。

……。
そうですか。了解。では、今後も私は彼女と共に奴らの妨害工作。捜査。及び、暇なら彼らの観察を続けければ良いのですね。……では、グッジョブ！

報告も終わった。これで、一息つける。今日は自分と相棒たちの褒美として、ビアガーデンに行ってみるか。

それにしても……。彼の力量を測るためにしたこととはいえ、子

供から罵倒されるのが酷く心を決るとは、この歳になって初めて気が付いた。それ以上に、自身では最上級にカッコイイと考えたこの格好が、あんなにボロカス言われたことが普通の悪口より堪えた。何だか、別の意味で泣けてきた。

*

*

・ある記者に送られたセレクト隊員Aさんの告白を元にした文章
私が今回、このような告解を貴方に送ったのは。私が不当な移転処置を受けたところに所以する。

理由は本文に記載。

本当なら、怪盗レトルトよりも一足先に口ボロボ団の潜伏地に突入できるはずだった。だが、機動二番隊のA隊長は、余計な混乱を招く恐れがあるかもしれないし、確定できる証拠までは掴めてないというので、捜査は延期。しかし、T副隊長に協力して潜入捜査を行なった隊員の証言を伺う限り、その隊員の有力な証言だけでも魔女のお城という場所への捜査を行えるに足る確かな証拠であった。もし、もっと早い突入を行えていれば。怪盗レトルトによって罪もない子供が傷付くということは無かったはずだし。上級団員二名以下、サラミという、有力な情報を握っているはずの子供幹部の容疑者も捕縛できたはず。

下っ端団員の大半は捕らえたが、どれも大した情報を持っておらず。ゲーム感覚で危険を味わえる仕事をしたかったという馬鹿者もいれば、金がなく、悪事と理解していても食うために手を貸してしまったという者もいた。なお、子供幹部の名前が判明したのは、捕らえた下っ端団員の中に二名ほど正規雇用の者がいたからである。

ロボロボのメダロットたちからも情報を得ようとしたが、残念ながらそれは不可能であった。何故なら、メダロットにメダルが存在しなかったからだ。

捕らえた団員たちの証言だと、間違いなくメダロットに入っていたとのこと。我々がロボロボを追いかけていた時、ごく短時間、電波障害が発生した。一人の少年の証言を信じれば、特殊な電波とやらを使った回収であろう。当然、団員たちに問い質したが、そのような物があるとした聞いてないと答えた。厳しく追求していくが、あまり良い返答は聞けそうにない。

私にも全く責任は無いとは言わない。それでも、私は二番隊A隊長以下、今回の事件で上層部のA隊長に対する責任追求が軽いことに不満を覚えた私は、A隊長と上層部を批判する旨をしたためた文を送り付けた。その結果、私は大阪支部の小さな事務に移転された。警察。検察。そして、セレクト隊。魔の十日間事件以降、国の治安を守るはずのこれら三つの組織はどこか捻れてしまったように思える。

ロボロボ団のようにメダロットを使った犯罪集団が増えるのも懸念だが、国を守る組織は腐敗してないか。これも、今の私が抱える懸念の一つである。

P・S・

余談であるが、私のもう一つの懸念はメダロット排泄主義運動の高まりである。私の大阪にいる知人で、彼は現在、親族とは縁を切り、一家共有の財産として一台のメダロットを所有している。

彼の祖父は蜻蛉型のメダロットを所有していた。その祖父の方が亡くなられた際、あるうことか、彼の親類はその蜻蛉型を含む数台のメダロットを仕事の際に立ち寄ったどこかに、エネルギーを抜いて不法投棄した。どうやら、彼の親類は排泄運動に関わるついでにメダロットなど然るべき手続きを踏んで処分する必要がある物を危険物を投棄する行為にも関わっていたらしい。

人間同様な意思を持ち、人間のような行動を可能とする存在。それらの存在に人間が不条理な嫌悪感や嫉妬を抱くのは致し方ないこととはいえ、彼らを見つけ、彼らに体を与えたのは、その人間であるということも忘れていけない。

エネルギーを抜かれても、メダロットたちは僅かながら意識下の行動ができることは最近立証された。そんなメダロットたちが再び動けるようになった時、人間に危害を加えないという保障はない。私個人の意見では、セレクト隊はメダロットを使用して人間を守るだけでなく、このような、不当な扱いを受ける人間に近い意思を持った「彼ら」も守るべきだと提言したい。

*

*

予定では、朝一番の便の乗るはずだったが、帰航は夕方の便に変更となった。

六日目は丸一日病室で寝泊り。次の日の昼ごろ、保護者同伴可でのセレクト隊による事情聴取を受けた。といっても、救出されて間もなく、子供だから心身による疲弊は大きいだろうと配慮され、簡単な受け答えで終了した。

保護者の方から、少しずつでもいいから子様から聞いて下さいませんか？と、病室の向こう側から聞こえてきた。

今日、救護施設から退院し、今は船室内のベッドに座った状態で外を眺めている。パパとも一緒に帰れたかったが、パパは一仕事あるというので帰りは後日となる。ただ、見送りには来てくれた。イツキはもう大丈夫だよと言ったが、チドリとジヨウゾウは聞く耳は持たず。安静しなさいと厳しく言った。

短くも長く感じたメダロット島での滞在。人生の波乱万丈を一つに

凝縮したような目に遭ってしまった。正直、陸の孤島から離れられて、ある程度陸続きな身近な地へと戻れるのをイツキは喜んでいた。ゆらり…。ゆらり…。波に揺れる海面は夕陽を反射し、一瞬の閃光が幾重にも重なりシャーク号とその船室に届く。船内放送が出港まで後十分だと告げた。

考えたいことは山程あるけど、今はこうして、ママとメダロットたちと一緒に静かに夕陽と揺れる海面を眺めていたかった。

「外からだと更に良い眺めかもな」

ロクシヨウがぼそりと呟いた。

18・メダロット島（帰航日）（後書き）

予定していた話数や文字数よりも長くなってしまったメダロット島編、遂に完結！

今回、新たな仲間となったメダロットの活躍の場がありませんでしたので、次回は会話だけでもいいから目立てる場面を提供したい。

一、二話ほど閑話休題的な話を挟んでから、また本編に突入したいと考えています。

19・気ままに過ごす者達（前書き）

「3・一人の日常」に出てきた人物が再登場。

19・気ままに過ごす者達

メダロット島事件から十日。現在、イッキは自室で大人しく、電子ノートに算数の解答をタッチペンで書き込んでいた。ゲームもしていいし、漫画も読んでいい。今はそのどちらもやる気が起きない。だから、今のうちに少しでも宿題の中でも嫌いな物を科目を片付けようとしていた。メダロット島滞在時からちよつとずつやってきたお陰で、算数の宿題は残すところ四分の一である。

外は曇り空だが、雨は降りそうにないので、遊びに行けそうにもない。仮にかんかん照りだとしても、イッキは外へ出ることは無かっただろう。何故なら、時刻はもう十六時を過ぎているからだ

この前のメダロット島で起きた事には、いつもは甘いパパもさすがに厳しい態度に出た。そして、イッキを自宅軟禁に……。とまではいかないが、外出時間が朝の十時から夕方四時まで制限された。おどろ山の時は外出規制に不満を持ったが、今回は自分の落ち度が大きいと理解しているので、イッキは素直に承諾した。ただ、夏休み終わりまでは可哀想だと、夏休み残り一週間の期間は外出規制は無しにすると言われた。

反面、メダロットの待遇はそれほどでもなく。むしろ、チドリとジョウゾウはそれとなく監視してほしいとさえ頼んでいた。メダロットたちは普通に行動するだけなら、イッキほどの制約は無かった。

光太郎はアンボイナの「トッコー」という脚部を着けて、ソルティとのんびり散歩を満喫していた。飛行タイプだと安定が利きにくく、ソルティの首を宙吊りにする恐れがあるので、脚部をイッキに変えてもらった。

ソルティは熱い日の散歩を避けたがり（大抵の生物に当て嵌まる

が)、こうした曇りがちの日や、早朝や夕方の涼しい時間帯での散歩を好む。エネルギー補充方の一つにソーラーシステムを採用したメダロットにとっては、熱い日の散歩のほうが調子は良いが、それならソルティの散歩の日意外に動けば良い話。こんな良い暮らしを送ることができているのに、これ以上の贅沢は望ましくない。

イツキがこんな状態なので、ママやメダロットたちが交代でソルティの散歩をしていた。光太郎は散歩好きだ。前のご主人の趣味の一つが散策だった。

同じ自然は一つとしてない。同じようできて、毎秒、目に見えないぐらい変化している。散歩による、そうした日々の緩やかな動きを見るのが楽しみだった。

曇り空を見上げる。

わしはあの世を有るとも思っていないが、無いとも思っていない。あの世とは、暗闇を恐れる臆病な人間の逃げ道という者もいる。しかし、漫画やゲームの世界に出てくる超人ならまだしも、実際の世界において恐怖を持たない人間なんておるわけない。

もしも、そんな人間がいるとしたら。それはきっと、戦争などで生死の感覚が麻痺した人間か。あるいは、年老いて達観の境地に至った者だろう。メダロットにも寿命はある。ただ、それがいつになるかは想像し難い。一つ言えることは、途方もない歳月を要するであろう。今の主人は若い。けど、いつしか年老い、別れる。

このことを言う気はない。子供で何かと迷いやすい時期にいるあなたの子に、余計な重荷を背負わしたくない。それに、自分は死なない時間は無限大にある、と思いがちな時に言ってもあまり効果はないやろな。

二、三度かぶりを振った。楽しい散歩のはずが、余計なこと考えすぎてしもつた。あの人にも、そのことで度々笑われた。

「ソルティ。家までひとつ走りするで！」

鬱々とした気持ちを追っ払うように、光太郎は車輪の速度を上げた。後ろを振り返るのも悪かねえ。でもな、こういうときは余計な

考えなど捨てて、正しいと決めた答えに向かって思い切った行動に出るもんだ。九十六歳まで生きたあの人は、いつもそういつて伏し目がちな若者たちより活発に動いていた。

楽しむときは楽しむもんや。じゃなきゃ、人生（？）損損。

アリカはセーラーマルチのブラスとプリティプラインのマリアン。それと、マリアンと同種のイッキのプリティプラインのトモエを連れて、今日もネタがないかと御神籤町内をさまよっていた。

「外出制限で自由に動き回れないし、外に出る時間も限られている。だからさあ、僕の代わりにトモエを連れて行ってくれない？僕だとして動く範囲なんて決まっているし、意外としっかりしているけど、それでもまだ色々と分からないことが多いトモエ一人で外を歩かせるのは不安だから」

「何でそんなことを私に頼むの？」

「人生経験はさせといたほうがいい。こんなことを誰かが言っていた気がするから。ああ、でも。変なことは吹き込まないでくれよ」

いかのやり取りがあり、アリカはトモエ取材に同行させていた。一行は河原に沿って歩いていった。

トモエにとって、アリカと他者の持ち物であるメダロットたちとの行動はもちろんのこと。外の世界を見聞きするのは驚きと発見の連続だった。トモエはそのことでアリカに感謝しているが、古風な性格の為、口数が少なく、いつも遠回しな表現で礼をのべているたのでアリカにいまいち伝わっていない。

「えーと。じゃあ、このまま真っ直ぐ河原を下って。何も起こらなければもう帰りましょうか」

アリカより一回り小さい男の子が虫取り網で樹を叩く。目測が外れ、樹に止まっていたアブラゼミは何処へと飛翔した。雲行きが、先ほどより一段と怪しくなっていた。

「アリカちゃん。天気予報だと、二十分後ぐらいには一雨降るらしいわ」

ブラスが脳内に受信した天気予報の情報をアリカに教えた。

「…そう。じゃ、帰りましょ。勘だけど、多分、今日はこの町内では何も起きないと思うし。傘も持ってないから」

そう言っ、アリカは河原の対岸を見た。対岸に行けば、メダロポリスという都市がある。対岸付近には変わり映えない住宅街しかないが、少し遠く見やれば、折り重なるように聳え立つ高層ビル群が建つ。御神籤町では精々軽犯罪だが、メダロポリスほどの高層ビル群が立ち並ぶ街ともなれば、犯罪や都市部特有の問題が多々ある。

アリカも不謹慎だと理解はしているが、それでも、メダロポリスに足繁く通ってスクープを物にしたい。アリカのジャーナリストを目指す志は本物だが、経済・犯罪・地元密着と、一つに絞らず取材をかけるのは何故だろうという疑問が湧く。

そこで、トモエは失礼を承知でアリカの真意を尋ねた。

「アリカのジャーナリストを目指す気持ちは分かりました。ですが、そのスクープに対する拘りは何ですか？」

言葉使いに気を付けたつもり。しかし、今の言い方とイツキから冷たそうと指摘された口調ではまるで咎めているようだ。若干、ブラスとマリアンの目付きが不穏だ。

アリカは決まり悪げに空を見やり、そして半笑いの表情をアリエルに向けた。

「…そうか。私、あなたにそう思われていたんだ」

「い、いや。済まぬ。私の言い方が悪かった。私のこの口調は生まれつきの物でな。アリカを咎めている訳ではない。単に興味が湧いたから尋ねただけだ。気分を害させて真に申し訳ない」

「うーん…。でも、このままじゃ私の気分が晴れない。じゃ、私がジャーナリストを目指した訳を聞いてくれない？興味を持ったってことは、私という人間を知りたいからでしょ」

トモエは無言で頷いた。プラスとマリ안의目から不穏な物が消えた。アリカのこの返しに、トモエは称賛した。いやはや、何とも大人びた対応する少女だ。私もまだまだ見習わなければ。

アリカはポツポツと過去を語った。

「私が小学一年生ぐらいの時かな。友達と一緒にね、電車に乗ってメダロポリスに行ったことがあるの。因みにその友達はイツキじゃないわよ。理由とかは特にないの。ただ、一人で行っちゃ駄目という場所に行きたかったから、だから、気の合う子と一緒にメダロポリスに行ったの。お母さん、『一人では』行っちゃ駄目と行っただけね。」

で、飽きて、駅に隣接したメダロツターズを目印にして帰ろうとした。それで、大勢の人に揉まれながら懸命に改札口へ向かったとき、記念として一枚撮っていこうと友達が言っただの。私がカメラを取り出そうとしたら、男の人がその子にどんとぶつかって、私とその子は互いに頭突きしあった拍子に思わずシャツターを押しちゃった。その子がおかしいと言って、背中のポケットを探したら財布が無くなってた。背中が膨れていたし、誰から見ても財布が入っていることが一目瞭然だったからね。多分、それで目を付けられたのかもしれない。

幸いというべきかな。それ、お父さんのポロライドカメラだったの。そこですぐに現像された写真が出てきて、ばっちりと抜く瞬間を捉えていた。女の駅員さんにその写真を見せたら、親切に対応してくれた。それから、十分か二十分ぐらい経って駅員さんに連れられてその男の人がきた。そして、ハナちゃんの財布が戻ってきたの。男の人が悔しそうにこっち睨んでハナちゃんは怯えたけど、私は逆に睨み返してこう言っちゃったの。『いくらお金が欲しいからってこんな小さい子を睨んで怖がらせたり、しかもお金まで奪って何が楽しいの！』そうしたら、その人、憑き物が落ちたようにハツとした顔になって、決まり悪そうに私たちから視線を逸らした。

で、一時間としないうちに両親が迎えにきて、私たちは家へ帰っ

た。帰り際、私たちの話に耳を傾けてくれた駅員さんが、よく勇気を持って言えたね。君のおかげでその子のお財布は戻ってきて、あの男性も自分の仕出かしたことに気が付けた。ご協力ありがとうございます！そう、感謝されたの。

でも、これからはちゃんとお父さんやお母さんにどこへ行くぐらいかは言うんだよ。こう注意もされたけどね。

そっからかな。事あるごとにシャッターチャンスとか言って撮ったり、ジャーナリストという仕事を知ったのは。事あることに写真を撮りたがるから、お父さんがお古のカメラをくれたの。だから、世間からどんなに非難されようとも、時間がある今だからこそ色々なジャンルを取材対象にしてジャーナリストとしての地力をつけたい。……といっても、栄誉を掴んでみたいという気持ちもあるにはあるけどね」

「そして、現在はプラスとマリアンと共に取材の日々を……」

最後の言葉はトモエが継いだ。

アリカという少女の一面を知れた。したたかで油断ならぬ一面もあるが、思いやりのある正義の心も持ち合わせていた。良き話を聞けた。イツキと似合いかも。なんて余計なことまで考えてしまい、心の中で一笑に付した。

「お聞かせ下さりありがとうございます」

トモエは両手を添えて、心からお辞儀した。トモエに突然お礼の意を述べられて、アリカは慌ててカメラを持ってない左手を振った。「えっ！…そ、そんなお礼言われるほどのことをした訳じゃないし！腰まで曲げなくていいわよ」

その二人の様子を、プラスとマリアンは愉快そうに見ていた。

公園で一体のクワガタ型メダロットと二人の少女が遊んでいた。「曇天が厚くなったな。そろそろお暇しないか？」

「えー！そな雲ないし、遊べるよー。ところで、糸目って何ロクちゃん？」

ロクシヨウの提言を幼い少女はあやふやな言葉使いで否定した。ロクシヨウはどうした物かと迷った。ロクシヨウに話しかけているのは、天領家の近所に住まう萩野家長女・萩野香織。

大分前、ソルティの散歩の帰りに公園でカメレオン型メダロットと遊んでいた少女だ。あの時、ロクシヨウはまた遊ぶと約束していた。だが、小学生の持ち物であるロクシヨウと幼稚園児である香織では時間が食い違い、挨拶はできても遊べるほどの時間がなかった。ロクシヨウはもちろん、香織もしっかりと約束を覚えており、今日一人で散歩していたらばったりと少女と出会い、ロクシヨウは三月ぶりに萩野香織の遊び相手をしてあげた。

「糸目ではなく暇だ。そろそろ、さようならしましょとでも言え方がいいか」

「何でそんな難しい言い方したの？」

「癖だ」

「じゃあさあ、最後に目隠し鬼しない」

目隠し鬼をしようと言うのは、萩野と同じ幼稚園に通う富玲ふれいという少女。

目隠し鬼か。鬼は誰？と分かりきったことを聞くと、香織と富玲は声を合わせてロクシヨウと名指した。やはり。鬼ごっこも、かくれんぼも。鬼役は皆私。かくれんぼはメダロットの感知機能をもつてすれば簡単。下げても変わらない。よって、ロクシヨウが鬼役をやっても意味はない。鬼ごっこも、子供と自分の速度では圧倒的な差がある。

目隠し鬼なら、視覚機能を切り、聴覚機能の感度も下げればいけないこともないかも。

ロクシヨウは視覚機能を切り、聴覚機能を半減。これなら、この子らとやっと同格だろう。

そして、ロクシヨウと香織と富玲は楽しく追いかけて。こうい

う時、自分がメダロットで良かったと思う。自分が人間の大人なら、下手すれば警察に通報されていたかもしれないからだ。今の自分の追いかけている姿はさぞかし滑稽だろう。内心、諦めついたような苦笑を漏らした。

十分ぐらいいして、ロクシヨウは二人の少女にタッチした。さあ、これで仕舞だよとNHKのお兄さん風に言ってみたものの、駄々こねられたので、ロクシヨウはもう一回だけ変態見たいな鬼役をする羽目になった。

空を見上げると、曇天が更に広がっていた。

「ほら、本当に一雨降りそうだ。香織、富玲。遊びはここまでだ」

ロクシヨウと香織は富玲にさようならを告げた。富玲は公園の近くに住んでいる。

「ロクちゃん。帰ろう」

ロクシヨウより小さい女の子は、体温とはまた違う温かみを帯びたか細い腕をロクシヨウの左腕にギュツとしがみつくように巻いた。ロクシヨウは帰りの道中、今日のソルティ散歩係の光太郎と遭遇。更に、アリカのジャーナリスト一行と歩くトモエとも会った。大集団の帰宅に、香織は嬉しそうに浮き足立っていた。

時刻は五時を下回っていた。ママは週に二日のパートの稼ぎで六時になるまで帰らない。迎えに行くか。二問の算数の問題を残す電子ノートを一旦閉じ、イツキは玄関口に置いてある傘立てから一本抜き取り、メタビーたちがいないかと外に出た。

家を出て右側の方向を見ると、主にメダロットたちで占められた集団がきた。

「イツキちゃん！おかに五時以降は家を出ちゃダメだって言われてただろ！」

光太郎が冗談で大声で喋った。イツキは慌てた様子で後ろを振り

返った。そうすぐには帰ってこないと分かっている、地獄耳という言葉があるし、聞かれてしないやかと焦った。

トモエはきちんと甘酒家の門前でアリ力達に別れの挨拶を述べて、ロクショウは六軒先にある萩野家まで香織を送った。

イツキ、トモエ、光太郎にソルティ、遅れてロクショウは家に入った。見計らったように、雨が降り出してきた。

「危うかったな」とロクショウ。

六時にママが帰ってくるまでの間、イツキはメダロットたちから休日の感想を聞いた。自分の感想では、一行で済んでしまいそうだから、メダロットたちの話を聞くことによって少しでも絵日記の行を埋めようと心掛けた。

六時、パートからママが帰宅。食事前に日記を済ましておこうと、イツキは紙でできた絵日記帳を開いた。どれだけ技術が進んでも、手で文字を書くことは必要。その為、現代でも学校は国語や絵日記など一部に限り、手書きによる提出物を求めている。

今日の夕食は豚カツ。作りすぎて余った豚カツは、明日の昼食であるインスタントカレーに添えられる。それが楽しみすぎて、日記は適当な物に仕上がった。もっとも、鉱物のカツカレーで集中を乱されなくても、イツキは絵日記を適当に仕上げただろうが。

《光太郎はソルティとの散歩で季節を感じとり、人生観について考えた。トモエはアリ力たちとの取材でとにかくいろんなことを学び、ロクショウは、近所の幼稚園児の子たちと楽しく遊んだ。僕は、頑張って算数の宿題とこの絵日記に取り組んだ。いじょう！》

文章は適当だが、仕上げの上手いとはいえない絵だけは色鉛筆で熱中して描いた。

19・気ままに過ごす者達（後書き）

カプトとは展開が一部異なります。

20・ナエからの頼み

博士に頼まれて、主にロクシヨウのメダル成長とロボトルの記録を詳細に記した報告書を入れたランドセルを背負い。アリカも伴い、久しぶりにメダロット研究所を訪れた。

メダロットを始めてから既に三ヶ月。「ロクシヨウ」と名付けられたクワガタメダルの成長は著しく、蛹化から成虫へと脱皮しそうだ。

おどろ山にカンちゃんというおばあさんと暮らすメダロットの一体、ヤナギに背中の中のメダルを特別に見せて貰ったことはあるが、ヤナギのメダルは初期の絵柄のまま成長が止まっていた。ロボトル経験が無きに等しいので致し方ないとして、そのヤナギよりもロボトル経験が豊富なプラスと名付けられたカブトメダルすら蛹化段階の途中だというのに、目覚めてからたった三ヶ月のロクシヨウの成長具合は異常だ。

博士からも電話でその事は指摘された。

外出規制は解禁されてないが、メダロット博士がチドリを説得したおかげで、今日だけイッキは六時までは外出していいことになった。

メダロット島でのゴタゴタ以来、ろくに電話すらしていなかった。昨日、思い出したように電話をしたら、メダロット博士は待つてましたとばかりに電話に出て、直接来てくれて欲しいと言われた。

憧れの人物から頼みとあっては行かざるおえない。最後に、博士はこう付け加えた。

君の友達のアリカという子も連れてきてくれないか。ナエが、例の開発中の物について伝えたいことがある、と。

ナエさんが関わる例の開発中の物といえば、エレメンタルシリーズしか思い浮かばない。四体とも女性型で、パーツを他のメダロットに変換して戦う珍しい変化系メダロットだったと記憶している。

完成したのだろうか。博士とメダロットの談義、ロクショウから発せられた謎の光と力の考察、ナエさんが携わるエレメンタルシリズの開発がどの程度進んだのかも気になる。

二人は、期待に胸を膨らませてメダロット研究所に向かった。

メダロット研究所の白い建物が見えてきた。門をくぐり、受付嬢のアポ確認を済ませ、二人は客室まで案内された。

五分経ち、メダロット博士とナエが直接出迎えにきた。

「お忙しい中、お時間を取っていただきありがとうございます」

二人して、声を揃えてぎこちなく硬い挨拶をした。

「イツキくん、アリカさん。こちらこそ来ていただいきありがとうございます」
ナエは丁寧に戻した。

「よう、久方ぶりじゃな二人とも。まあ、そう硬くならんでもええで。来てくれてと頼んだのはこちらのほうじゃな」

博士は相も変わらず砕けた調子だ。

「そうですか……。じゃあ、お言葉に甘えて」

アリカは合わせた腿と腿の間隔を開いた。イツキは躊躇いがちにコンマ三ミリほど開いた。

「さて、来て早々お茶も出せず悪いが。ナエ、アリカ君はお前の研究室へ。イツキ君はわしの個人研究室へ来てくれんか？」

「えっ!？」

てつきり、二人してメダロット博士の研究所か書斎へ行き、その後ナエさんの研究室へ行くという順番だとばかり思っていたので。

アリカは驚きを口にし、イツキは多少面食らった。

「どうして別れる必要があるのですか？」

「イツキ君とは個人で話し合いたい事があるのでな。アリカ君はまた今度の機会ということ……。代わりに、好きなだけナエに取材をかけてもよいぞ」

「…お爺様…」

ナエは祖父の言葉に困った風に首を傾げてみせた。先にアリカがナエの個人研究室へ案内されて、続いてメダロット博士がイツキを自分の研究室へと連れた。

研究室の椅子に腰を落ち着けて博士と向かい合つと、イツキはロクシヨウを転送した。博士はじかにロクシヨウとも会話してがつていたからだ。転送されたロクシヨウに博士は「ちよこつとメダルを見せてくれんかの。悪いようにせんから」と掌を合わせた。

ロクシヨウは不承不承ながら、ソードをちらつかせて「妙な真似をしたら許しませんぞ！」という脅し文句もつけてメダルを博士に見せた。博士は片手にカメラを持って、一分間、ロクシヨウのメダルを撮影した。

「もうよいぞ」

ロクシヨウは細工でもされてないかと背中の中のメダルをさすり、無事だと判断すると、安心したようにメダルハッチを閉じた。

イツキは博士に資料を手渡すと、本題に入った。イツキ、ロクシヨウ、メダロット博士、更にメダロットチから光太郎とトモエまで議論に口を挟んだので、博士の個人研究室はいつもより賑やかだった。

炎を身に纏ったような灼熱のフレイムティサラ。重厚と重圧感溢れる深緑色のアースクロノー。軽やかに大空へ羽ばたきそうな青空のウインドセル。そして、海の妖精を連想させるような美しさと可憐さを備えたアクアクラウン。透明度が高い高価そうな四つのカプセル内部に、四体の精霊は静かに鎮座していた。

「…綺麗…！」

見惚れたアリカは思わず本音を呟いてしまった。

メダロットを見て可愛いとか、かっこいいとか、酷いときはダサいとか思ったりするが、「綺麗」という感想を抱いたのは初めてか

もしれない。

前来たときは何とも思わなかった。そのときは、あちこちピースが欠けた状態のパズルみたいな不格好な姿だった。今は違う。四体はピースがしっかりとめ込まれ、防腐用の淡いライトの反射のせいで、四体の精霊は芸術品の域へまで達していた。

「どうぞ寛いでください」

ナエはソファに座るよう勧めた。ナエに声をかけられて、アリカはエレメンタルシリーズから視線を外し、ひたとナエに目線を定めた。

「さっそく質問していいですか？まとめて」

「私の知識で答えられる範囲ならば」

「どうしてイツキと私を分けたんですか？私はまだしも、イツキは二度手間なんじゃ。それと、エレメンタルシリーズの開発はどの程度進んでいるのですか？」

ナエは直ぐ様回答した。

「アリカさんの一つ目の質問ですが……すみませんが、私からはお答えできません。というより、私も詳しい事情は知りません」

「どうして!？」

「……さあ、祖父は男と男の秘密じゃからなとしか言いませんでした。イツキくんのメダロッターとしての成長と、彼の相棒の『ロクシウ』と名付けられたメダルの成長を聞くのが楽しみでしょうがない。以前、こう語っていましたわね」

「ナエさんはそれについてどう思っているんですか」

「それもちよつと……。関係あるかどうかわかりませんが。特殊な事情からメダロッターを手に入れたケースだから、と」

……特殊な事情。確かに、言われてみればそうだ。光太郎も特殊な例だが、カンちゃんのように、野良メダロッターを拾って更生させるケースは全くない訳ではない。トモエに至っては、安売りで入手するといったいて珍しくもない方法だ。

しかし、ロクシウは違う。光太郎のように新たな主人の代わり

になるわけでもなければ、トモエのように普通に購入して手に入れたでもない。イッキから聞いた怪盗レトルトの言葉を借りれば、特殊な仕様のメダロッチに入った特殊なメダルを、イッキのお父さんが帰り道で謎の人物から貰うという奇っ怪極まりない方法で入手したのだ。

ヘッドシザース購入記念二千人目にイッキがなったから、二つの品物を無償で送った。謎の人物はこう語っていた。

後で調べたところによると、そういうキャンペーンは有るには有った。だが、そのキャンペーンは急遽仕組まれた物であり、後でメダロット社に、千人目の購入者である中年メダロットマニアから自分にも寄せという抗議の電話がきたらしい。

ロクショウのあの謎の光が特殊なメダルの正体の一つであることには間違いないが、それが何なのかまでは分らない。また、特殊な仕様メダロットも気になる。アリカや一般のメダロッターが身につけるメダロッチは、メダロットのメダルを最大三つまで収容できる。だが、イッキのメダロッチは驚いたことに、最大四つまでのメダルを収容可能としていた。つまり、ロボットで仮定すれば、一体を補欠要因として使えるのである。

イッキも自分の入手法に関しては疑問を感じていたが、今更、返せと言われても絶対に返さないと断言していた。

この事に関して意地悪な質問を一度してみた。ロクショウから離れたいと抜かしたらどうするのと。するとイッキは真面目な表情で説得は試みるけど、どうしても折れないときは悲しいけど、所有者の責任者としてロクショウの新たな門出を祝うと答えた。他人に流されがちなイッキにしては、珍しく強い口調であった。

推理の論点がずれてきた。ともかく、他二体はいいとして、どうしてロクショウとメダロッチは前例がない方法で入手したのか。また、メダロット博士のイッキに対するこだわりは何故なのか。

そして、イッキに二つの貴重な品物を贈った謎の人物の正体は？アリカのジャーナリスト魂をくすぐるには十分過ぎる材料が揃っ

ていた。

目下の所、メダロット博士を問い詰めるのが手っ取り早い。でも、あの人って意外にも食えない感じがするのよね。突っ込んだ質問しても、上手いことはぐらかされちゃいそう。

「あのー、アリカさん？」

どっぷりと思考に浸るアリカに、ナエが顔を覗き込んで一声かけた。

「……ん？ああ、すみません。私、ふとしたら考え過ぎちゃうものですから」

ナエの呼び掛けで現実に戻ったアリカは、一言ナエに詫びた。そして、二つ目の質問であるエレメンタルシリーズの開発状況を尋ねた。聞きたくて考えたいことは山程あるけど、ナエさんは事情を知らなさそうだし。何より、せっかくなのにこのまま長々とした思考に浸るだけではここに來た意味がない。

本題の話題がきて、ナエは安堵の表情を浮かべた。

「エレメンタルシリーズはほぼ完成しております。二百種類の耐性実験をパスし、試験的機動も終了しました。ですが、後一つ足りない物があります」

「足りない物？」

「実際に使用する方達の感想です。研究員だけの声だけではなく、メダロット社と我々開発者一同は一般の方達がこの子たちを使用して、どういった感想を抱くのか気になります。例えば、パーツの変化するパターンが乏しいとか。私たちが見落とした欠点や優良点を聞きたいのです」

「要は、テストプレイってことですね」

その通りだと、ナエは微笑んだ。笑みばかり浮かべる人は信用ならないが、ナエのごく自然に身についたような笑みには嫌気や怖気などは感じられず、こちらもつい微笑み返してしまう。

「はい。そして、そのテストプレイヤーの一人としてお願いできませんか？アリカさん」

耳を疑った。また推論にのめりそうになる自分を抑え、ナエに聞き返した。

「えーっと……。私がエレメンタルシリーズのテストプレイヤー？それなら、イツキに頼めばいいんじゃない。メダロットに対する愛情というか、想いはイツキのほうが上だと思うし」

「ええ、そうかもしれません。しかし、私や数名の研究者はアリカさんの方が適切だと考えています。九歳の年齢にしては中々物事を筋立てて考えられて、大人の私たちは気が付けない子供ならではの視点で意外な発見をしてくれると期待して、あなたにテストプレイヤーをお願いしたいのです。無理にとは申しません。あなたが断った場合、第二候補のイツキくんがテストプレイヤーとなります」

イツキに譲ろうと思ったが、アリカは踏みとどまった。

ここんところ、イツキばかり美味しい汁を吸っているような気がする。本人にその気はないだろうが、少なくとも、アリカはそう感じてしまった。ほんとは、美味しい汁を吸っているというよりかは、いつの間にかロボットの経験やメダロットの数に置いて差を付けたイツキに嫉妬を感じているだけなのかも。それでも、素直に権利を譲るのはイツキに自分の運を大人しく譲渡するようで癪だ。

アリカは僅かに考えたのち、エレメンタルシリーズのテストプレイヤーになることを受諾した。

「ありがとうございます。では、アクアカウンを除く三台から選んでください」

「えっ？その青色のアクアカウンとかいうのはまだ未完成なのですか」

「あ！先に申しておくべきでした。エレメンタルシリーズは一台につき、三名の方にテストプレイをもらうことになっているのです。そのカプセルに入っているアクアカウンは、今週の土曜日に試験者の一人が引き取りに来ることになっています。アクアカウンは既に先週中に三名の方の予約を済ませたので、申し訳ありませんが、アクアカウン以外の三台から選んでくれませんか。」

パーツに装着しているティンペットはあげます」

ナエは申し訳なさそうに説明して、再び謝罪した。

一台選べなくなったのは残念であるが、まだ、三台もいる。事前に見聞きした情報では、フレイムは攻撃。アースは防御。ウインドは妨害や特殊行動。アクアは回復。

アリカは即決した。宙に浮かぶ、あるいは飛べたりする機体がいい。

「それにします」

アリカが指した方向には、フレイムティサラがいた。

「フレイムティサラですか」

「はい。ウインドで現場へ急行もありかと思いましたが、情報とは即ち組み立てる物。フレイムティサラで宙に浮いて、上空でゆつくりと現場を観察するのも手の一つだと考えました」

「なるほど。アリカさんらしいですわね」

「じゃ、プラスとマリアン。どっちに着けるか考えなきゃね」

「その必要はありません」

アリカは眉を顰め、何ですかと問いかけた。

「いいえ、パーツを上げないという意味ではありません。私から一つ、変化系パーツを得意とするメダルをお貸しします」

この申し出に、アリカは小さく叫んだ。テストプレイ用のフレイムティサラ一式とティンペット、それに、メダルまで付いてくるなんて。イッキ並みの前代未聞の入手法だ。

「付け加えれば、試験帰還終了後、もしそのメダロットとあなたの間に一定の信頼関係があるようならば。その場合、完成品のエレメンタルシリーズのパーツと一緒にティンペットとメダルもあなたに差し上げます」

「よかったわね、アリカちゃん」

メダロットからプラスが音声を発した。

当のアリカは呆然としていてプラスの呼び掛けが耳に届かなかった。上手くいきすぎる。何か裏でもあるのだろうか。試しに頬をつ

ねってみた。痛かった。棚から牡丹餅ならぬ、棚から金のインゴットが転がり落ちてきたようだ。

アリカは嬉しさのあまり、大声で飛び上がりそうになった。

ナエの助手を務めるセントナースとは別タイプの看護師メダロット・ナインテンガールが四つのメダルケースを載せたカーゴを押してきた。エイリアン、西と刻まれたウエストメダル、鏡模様のミラージュ、竜巻が渦巻くウインド。装着するメダルは既に決めてあった。

「フレイムじゃ相性悪いし……ここは……同じ自然現象をモチーフにしたウインドメダルを！」

アリカがケースの中のメダルを手にした瞬間、イッキがロクシヨウを連れてナエの研究室前まできた。

「パーツだけじゃなくて、メダルとティンペットまで……いいなあ」
アリカは早速起きたことを話し、イッキから羨ましがられた。イッキが甘い汁を吸っているとか思っちゃったけど、イッキは一度私のせいで何かと悲惨な目に遭ってるし、むしろ私のほうが美味しい汁を吸っているわね。アリカは自嘲気味に口端を歪めた。イッキやナエがどうしたと聞いても、興奮して口が引きつっただけだと誤魔化した。

話題を替えて、アリカは、イッキとメダロット博士がどう会話したのか根ほり葉ほり問いただしたが、期待していた返答は得られなかった。

「だって、メダロット博士でも分からないことが僕なんか理解できるわけないじゃん。それよりも、アリカ」

「何」

「日月水曜日は暇？」

「うーん。まあ、特に予定はないわね。で、あんた何が言いたいのか」

「メダロット博士がね。メダルの生態記録をつけたいから協力してくれと言って、日月水曜日なら、研究所のロボット試験場を自由に使っていいってさ！そのついでに、パーツの性能を確かめたいからエレメンタルシリーズのパーツを貰うはずのアリカも誘ってくれて」

「え！嘘！」

二人は生態記録という単語に引っかけたが、間断なき興奮と喜びの連続で、細かいところまで思考が及ばなかった。

「二人とも、お茶でもいかがですか」

「はい」とイツキ。

「…あの、えつと…」

三点セットを譲ってもらい、その上お茶まで出してもらうことにアリカは気が引けた。ナエは遠慮しないでと笑いかけた。その笑いに誘われるように、アリカは俯きがちに「戴かせて貰います」と言った。

イツキとアリカはココアとクッキーをほおばり、雑談し、改めてエレメンタルシリーズを見学したのち、メダロット博士とナエの二人に心から礼を述べて、午後五時頃に帰宅した。

「今や希少種となった純和風日本美人やな。ナエさんは」

光太郎のこの発言が口火となり、帰りは時間をかけて歩みながらじつくりとお喋りした。

20・ナエからの頼み（後書き）

ナエからエレメンタルシリーズとメダルを受け取るのは原作ではイッキでしたが、アリカに変更しました。因みに、カブトでは別の機体を受け取っています。

ナインテングールは「メダロットR」に登場するメダロット。ウインドメダルはメダロット2以降に登場するメダルです。

2作目以降のメダルを出してしまったので、機会があれば、どこかでメダロット3に登場するメダロットも出してみようと思います。

次回から、本編（原作）のストーリーに戻ります。

21・暴走（前書き）

旧作（一作目）から三名がモブとして登場

21・暴走

夏季はありとあらゆる生物が最も活発な時期。犯罪に限り、季節は当て嵌らない。

おどろ山での行為を皮切りに、十年ぶりにロボロボ団が活動を再開したのは全国規模で知られた。どんなに防犯技術が発達しても、嘲笑うかのように悪事は絶えなかった。

都市部はただでさえ人の出入りが激しく、交通整理や治安維持を行う警察とセレクト隊はロボロボ団の台頭に頭を悩ませていた。

壁の落書き。子供にデコピンをしてキャンディを奪う。焼イカの耳だけを食べて他は捨てる。ピンポンダッシュなどはまだ可愛らしい物。

悪質な物を挙げれば、高級レストランでの無銭飲食。コンビニやデパートのメダロット強奪。

メダロットの生産工程は機械で二割、人の手による工程は八割を占めている。仕入れ側にとっても安い買い物ではないので、メダロット関連の盗品は懐が非常に痛い。また、近頃東日本を中心に起きる子供の消失も、先月起きたメダロット島騒動と繋がってロボロボ団の手の者による犯行ではないかと疑われている。

他、夜中の清掃活動。ロボロボ印のシールが貼られた植林活動など、稀に良いことをしているのも謎である。

昨日、遂に長い制約生活期間が終了し、イツキは晴れて自由の身になった。そして、アリカのメダロボリス行きの取材に付き合われることになった。嫌とは思わない。むしろ、久々に親に気兼ねなく遠出できるのは楽しみだった。

ガタン。ゴトン。

電車はウエストシティを通り、メダロッターズがあるノースシティへ向かう。

メダロポリスは日本国外からも注目されている都市。単にでかいからではなく、四都市にそれぞれの特徴があるからだ。

メダロポリスはノース、ウエスト、イースト、サウスシティの東西南北四都市に分けられており。この四都市全てを総称したのが「メダロポリス」である。

ウエストシティは平均的な住宅街と雑居ビル群で分け隔てられ、ノース駅近くのウエスト区域にはセレクト隊東京第二支部が門を構えている。イーストシティには閑静な高級住宅街と、名門である小中高一貫の花園学園に花園大学と花園総合体育大学の二つが聳え立ち。サウスシティは広々とした公園とアパートと繁華街が隣接し、かの有名なメダロット本社がある。そして、イッキたちが目指すノースシティはメダロッターズなどの娯楽施設が建ち並ぶ。また、メダロポリスはメダロットに関することは開放的であり、日常茶飯事にメダロットに関する行事が要所で開催されている。

尚、四都市中央にはメダロポリス市役所が建立。

市役所はどうでもいいとして、電車に乗る小学生二名とメダロットチから出ている彼らの愛機三体は車内外の光景を満喫していた。

ヘッドシザースとプリティプランは主人より幾分落ち着いていたが、興味津々な気持ちは隠せずやはり興味津々な気持ちは隠せず、視線が流すように彷徨っていた。隣のセーラーマルチの体を着た者も同様だ。今日、初めて電車に乗るから致し方ないことも。

電子広告と揺れる紙媒体の広告を見たあとは、座っている人たちを見た。

携帯を熱心に操作する女子高生三人。頭頂がバーコードのように禿げた五十代のサラリーマン。そのサラリーマンより更に老けている割には、綺麗に髪を七三分にした渋柿スーツを着たお爺さん。目も当てられぬほどニキビがあり、太って眼鏡をかけたお兄さん。金髪に染めてギターを背負ったイカした人。髪を団子状に纏めてキリ

リと目鼻筋が通った都会派なOL。中国語で真面目そうに会話する二人。シアンドッグ、イエロータートル、マゼンタキャットのメダロットを従え、談笑する大学生ぐらいの男二人と女。半笑いの表情でモゴモゴと何かを呟く、知能障がいのあると思しき女性。

電車に乗り慣れたアリカにとっては何でもない光景だが、あまり乗ったことがないイツキに、初めて乗車したロクシヨウとトモエには新鮮だった。

こうやって電車に乗ると、世の中、色んな世界と人間がいることを改めて気付かされる。などと、知ったかぶりに考えていたら、乗務員が「えー！間もなく、ノースステイ。ノースステイに到着。荷物をお忘れなきよう、お降りください」と放送したので、急ぎ、ポケットの中の乗車券を確認した。

乗車券はきちんとポケットにあった。ホッとしたが、電車から降りるまでは用心して、券を握ったまま改札口まで向かった。

「あんだ、心配し過ぎよ」

と、アリカに自身の小心を笑われた。構うもんか。無くして、無駄金払うよりかはましだと心の中で叫んだ。

改札口を抜けて、事件の現場となった駅前付近のメダロッターズに立ち寄った。

三日前、大雨の中、白昼堂々メダロッターズ店内で強盗事件が発生した。格好からして明らかにロボロボ団の犯行によるものであり、しかも、背丈からして子供かと思われる。身長は120cm程度、手が異様に長くて妙な機械音がし、体を赤から青く染め上げた三体のホッピーンスターを使用。と、ニュースでおおまかな情報は入手している。

噂の子供団員ミニロボロボの犯した行為は、犯罪低年齢化問題でマスコミを騒がせた。

現場で聞き込みすれば、何か掴めるかもしれないアリカに誘われてきたが。イツキたちとしては、本当は事件捜査よりウインドシヨッピングを洒落こみたい。そのついでに、ロボトルやメダスポーツ

を相手してくれる誰かがいれば言う事はない。

ジャーナリスト魂を揺さぶられたからだが、アリカにも楽しみたい気持ちは少しあり、聞き込みのついでならと素直ではない言い方をした。

駅構内を出てすぐ、二つのタワー登上部に挟まれるように直径七メートルもあるMの文字が彫られたメダルの彫像が飾られた、近未来的なツインタワー・メダロットズの全容が視界に入った。全長200M超え、階数30超えの巨大タワーは地上を見下ろしているかのような。設計者は当初、ティンペットの形をしたビルを建築したかったようだが、当然却下され、泣く泣く一から設計図を書き直したとかなんとか。

右側のタワーはデパート。メダロット以外にも様々な商品を扱っている。左側の下から三分の一はロボットとメダスポーツ施設で占めており、その上からは総合商社ビルとして様々な企業や会社の支那が置かれている。

200M超えで30階建てなのは、利用者に窮屈さを感じさせよう、天井を高く設計してあるからだ。

アリカが一枚撮った後、正面口へ向かう。イッキも携帯の写メでもあれば撮りたかったが、生憎、まだ携帯は持っていない。家の方針で、携帯は中学生からという決まりだ。

まずは右のデパートから。一階から十三階までは吹き抜けのロビーであり、その裏は駐車場である。一階と二階の半分は食料品店である。

子供だからという理由で話を聞く前に追い払われることが多々あるので、警察は避けて、警備員や店員から話を伺うことにした。

まずは一、二階の食品店で働くおばちゃん二人に話を伺ったが、ニュースで見聞きしたのと大体同じような内容だった。次に、被害の現場であるメダロットパーク専門店にエスカレーターで向かった。十五階ではあからさまに警備員やそれらしき私服監視員が警戒に当たっていた。エスカレーターの反対側を真っ直ぐ行った先に、現

場がある。エスカレーターの反対側に回ると、遠目からでも、刑事ドラマとかでよく見られるお馴染みのあの黄色いテープがまだ貼られていた。

ここで、イッキはアリカと一旦別行動となった。

「私が取材している間、好きに回っていいわよ」

「でも、僕携帯持っていないよ。はぐれたら、どう合流するの？」

「じゃあ、この階で待つといてくれない。どうせ、あんたのことだからパーツを眺めているだけで時間を潰せるでしょ」

反論できない。プリティプラインことトモエのセット一式を購入した際のお金は余っているが、今日の子供電車料金（90円）を差し引き、2170円ぐらいしかないので、メダロット関連はとてもしゃないが手が出せない。

それでも、この宝庫にいて、色んなメダロットたちを眺められるだけでも満足だ。アリカはイッキの無言を了解と受け取り、別れた。ケースが割れ、中に置かれていたはずの珍品メダロット・アンノーンエッグの姿が消えていた。

エレメンタルシリーズのフレイムティサラことフレイヤやマリアンでは目立ちすぎるので、プラスが隠れたところからメモを取ることにした。

「あのー、私は甘酒アリカと申します。犯人は小人症か、あるいは小学生による犯行路線が濃厚とニュースで見ましたが、私と同じ学校の生徒は疑われていませんか。私、不安なんです。自分の同じ学校の人が悪いことした考えると怖くて」

嘘だ。と、イッキは言いそうになった。アリカのことだから、自分の学校の生徒が犯人だとしても、嘆くどころか遠出する手間が省けたと嬉々として取材するだろう。こんなしおらしい素振りをするのは、自分を可愛らしく見せて、警官の態度を和らげようという魂胆があるに違いない。

事実。警官の人はアリカに気を許してしまい、「君の学校は」と尋ねた。

「ギンジョウ小学校です」

「ギンジョウ小学校か。気休めかもしれないけど、テレビや新聞の情報はあまり鵜呑みにしないほうがいいよ。それに、犯人はまだ小学生と断定したわけではないし。何より、僕：私としては、出身校から悪人が出たなんて信じたくないからね」

まさか、同校出身者の警官。いわば、先輩が相手だったとは、チヤンスね。アリカはしおらしい態度を崩さず、慎重に、何となく思ったこと口走った感じに「えーと。まさか、この近くの小学校とか」

「まあ、その疑いがあるにはある。花園学園とか…」

ハッと喋りすぎたことに気付き、警官は急に口を閉ざした。アリカはニツコリと子供らしく微笑み、両手をお腹の上に重ねて「お忙しい中、ありがとうございます」と綺麗に腰を曲げた。

去るついで、アリカはカメラを向けた。

「一つ、記念に。後輩の頼みとして！」

警官はアリカの本性を疑い始めたが、仕方なしに、二枚ほど撮らせてやった。

こうして、アリカは警官の口から直接情報を聞き出し、現場写真まで撮影できた。

早歩きで二階を駆け回り、三人組を見つけた。

「ペットは主人と似るか」

イッキとロクシヨウは、パーツが入った箱を骨董品のように大事に持って眺めては、ふむふむと頷いていた。トモエは興味なさそうだったが、自分と同種のパーツが入った箱にはちらちらと視線を投げかけていた。

ボーツとしている三人を連れて、三階にはエレベーターで登った。十六階はメダスポーツ用具、ペイント、メダロットにつけるアクセサリーのお洒落道具を販売している。十七階では、メダルとティンペット、高級オーダーメイドを承っている。

同じメダロット商品売り場なので、一階の食料品店より情報は得

られるかもしれないと期待したが、ニュースで見聞きした情報とさして変わらなかった。

「もう、用はないわね。後は…そうだ。一度、オークション会場に寄ってみない」

「オークション会場とは、物を競るところだな？」

ロクシヨウはアリカに聞いた。

「そうよ。ところで、何で知ってんの？」

「さる小説に詳しくそのシステムが書かれていた」

親がいたら、きっと大人の世界に首を突っ込むのはまだ早いと言うに決まっている。二人と三機は遠慮なしにオークション会場がある29階に寄ってみたものの、どうしたことが、受付の女性に入室を断られた。

「申し訳ないね。今日は特別で、予約がないと一般やお子様の入場は断っているんだ。ところで、チラシ見なかったの」

「はあ、見落としてしまいました…。ところで、どうして今日に限って」とイッキ。

「琥珀に入ったメダルとか、何百万する代物が競りに賭けられるの。済まないわね。また今度来て」

ああ、だからか。いつもより警備が嚴重なのは、そういう事情もあったからなのか。それにしても、チラシを見落としたのはかなりの落ち度であった。

「じゃあ、次は僕の行きたい場所……」

「みなまで言わなくていい。ロボットとメダスポーツ施設がある隣のビルに行きたいんでしょ」

一行は、次の目的地を定めた。

実践ロボット場は一階。シミュレーションロボット・メダリンクは二階（高さでいえば実質は五階）。三階はメダスポーツのメダリ

ンクバージョンが設置。このビルの外にはグラウンドがあり、メダスピードはもちろん、人間が運動できるようにも設計されている。

実践ロボット場でロボットしたかったが、平日にもかかわらず人が並んでおり、更にフィールド使用料が八百円と、今のイッキには痛い出費額なので、諦めて二階のメダリンクに行くことにした。

その二階で意外な人物二名と出会ってしまった。

「へべレケ博士！…と、あの時の高校生」

白衣を赤く染めて、電球のような帽子を被り、機械仕掛けの片目眼鏡を着けたマッドサイエンティストのような白髪の老人　へべレケ博士。そのへべレケ博士の傍にるのは、イッキがメダロットを初めて日が浅い頃に真剣ロボットで戦い、イッキたちのロボットにおける主力パーツであるソニックタンの頭部をくれた茶髪リーゼントの高校生だ。左右にいる不良めいた格好の二人は、彼の“ダチ”だろう。

「あつ！お前は…」

その高校生はイッキの存在に気が付いた。

「その隣のいるヘッドシザースは…そうか、いつぞやの小学生か」

ロクショウがズイと前に出た。

「おい、ロクショウ」

まさか、こんなところでリアルファイトだけは避けたい。人目につかない場所でもしたくないが。彼は学ランの右袖をたくし上げて、手首に巻いた燃え上がる炎のような絵が塗られたメダロットを見せた。

「へ！安心しろ！お前のような小学生をよってたかってボコるほど落ちぶれちゃあいない。ここは平和的に、また真剣ロボットといこうじゃねえか！」

おほんと、へべレケはわざとらしく咳払いした。

「では、この勝負。わしと彼女が見届け人となろう。よいか？」

へべレケはさつと子供たちを見回した。アリ力は小さく頷いた。

「お願いします！」イッキと彼は同時に答えた。

アリカは高校生三人とヘベレケ博士を見比べて、一つ質問した。

「あのー。ヘベレケ博士はこの人たちと知り合いなのですか？」

「ん？違うぞい。わしがここにいたら、数分前、こやつらもここにきた。それだけの関係じゃ。まあ、一言アドバイスを送ってやりたirimしたがな」

始める前、ヘベレケに登録を済ませたのか聞かれ、イッキとアリカは受付嬢にメダロット使用許可証とメダロットチを見せて、使用パスカードを受け取った。

このカードをメダリンク機会の隣にある挿入口に差し込み、百円入れて、メダルとパーツを収納したメダロットチを3Dリアル画面の下にある、台の上に固定してプラグを付ける。パーツやメダルの選択は、画面横に置かれたノートPCからする。そこからメダロットチから伝道されて、画面にメダロットが立体的に映し出される。

フィールドは、メダロット同士の話し合いで決められる。

勝負は互いのメダロット（主にリーダー機）を機能停止に追い込むか。タッチパネルの隅っこにある「降参」と書かれたボタンを相手が押せば、決着。

高校生たちはサイバーを選んだ。水中以外ならどこでも良いので、同意した。博士に言われてアリカとプラスのパーツを着たフレイヤが反対の高校生側、ヘベレケはイッキの背後から二メートルほど離れた。「アキハバラの奴と同じく、わしが目にかけている子供の内一人にお前さんが含まれている。じっくり、その成長ぶりを見物させてもらっぞい」

メダロット博士とナエさん、ヘベレケ博士。ヘベレケ博士はメダロット博士ほどじゃないけど、メダロット界の権威の一人。こんな身近にいる凄い人たち三名から注目されるとは。自分の調子良い一面が出てきた半面、怖いような疑うような気持ちもわいてきた。

「はい！ご期待添えるにわかりませんが、やれるだけやってみます」

インターネットで他の三台と繋がり、いよいよシミュレートロボ
トル開始。

画面で立体的にメダロットたちが再現される。手を伸ばせば触れ
ることができそうだ。

こちらはいつもの面子が三体。光太郎の頭部をソニック坦克の
に替えた。相手はリーダー機がソニック坦克純正。二番手は、キ
ースタートルの両腕、カッパーロードの脚部と頭部をパーツを着け
た機体。三番手は、キン・タローの右腕、クルクルマンの左腕と脚
部、ハニワゴーレムの頭部を着けた機体だった。

四名のメダロットはスタートボタンを押し、戦闘開始。

血気盛んな三人と三名に反し、イッキとロクシヨウたちは冷静そ
のものだ。

勝負は意外なほど呆気なく片付いた。光太郎が先制のナパーム弾
をカッパードロードにぶち込み、ロクシヨウがハンマーで顔面を強打。
切りかかってきた三番手の右斧をトモエは盾でしかと受け止めて、
ロクシヨウが目にも留まらぬ速さでV字に切断。

一定の轟音をシャットダウンする仕組みになっており、強化ガラ
ス越しから間近に観戦しているようだ。

リーダー機のソニック坦克はしつこかった。

「ファイトだあ！！ロクシヨウ！！」高校生が叫ぶ。

イッキとロクシヨウは驚いた。相手のソニック坦克も伝説のメ
ダロットと同じ名前だったとは。

「出来ることなら、私が止めを刺してやりたいものだ」

機械仕掛けの体の内側から燃える闘魂が見て取れた。

降り掛かるミニ焼夷弾を、重力波で誘爆させる光太郎。そこを、
ロクシヨウがソードで脚部を一撃。「油断するな。ソニック坦克
の装甲は固い。前と同様、もう一撃だロクシヨウ」

ロクシヨウは追撃のハンマーを振るう。手元にあるデータ画面か
ら、ソニック坦克の起動を表示する部分が暗くなった。

” Weiner・天領イッキチーム”と双方のスピーカーから洩れた。ナエさんとアリカ。たまに暇を持て余した研究員と一カ月の間、定期的にロボットをしたことにより、メダルが相当に成長したのがこれで実感できた。

画面の中でロクショウが小さく手を握りしめ、光太郎はトモエにハイタッチしていた。

メダリンク装置からメダロッチを取り出した三人組がイッキを囲む。リアルファイト！？そう警戒したが、茶髪リーゼントの彼が神妙な顔つきでイッキの肩に手を置いた。

「まいったぜ。手抜きなしの真剣勝負で俺達と俺のメタビーを打ち負かすとは……。大した奴だぜ」

他の二人も綺麗さっぱり負けて満足げだ。それほどではと頭を掻くイッキに「ただし、ゲームもそうだがロボットばかりに嵌まるなよ。薬にかかったように熱中しすぎて、メダロットから縁を切られた奴もいるからな」と、彼は一言添えた。

「じゃあ、ちよつと待ってろよ坊主」

そう言うのと、三人は突然じゃんけんを始めた。四回目のあいこで鼻に小さく濃い髭を生やした一人がチョコキを出して独り負けした。やられすぎだと、髭面は二人に小突かれた。

「ちえ！よし、じゃあ、俺の相棒の頭をやるよ」

彼はメダロッチからカッパードの頭部をイッキに渡した。やられすぎとは、そういう意味か。

「ハイ！みんなこつち向いて！」

アリカにカメラを向けられ、三人は子供のように勢いよくピースを向けた。格好こそ不良っぽいが、根は悪人ではないようだ。メダロッチを取り出したら、ヘベレケ博士がイッキに挑戦を申した。

「のう、お前さん。次はわしと一勝負せんか？」

「どうする？」イッキはメダロッチの三体に聞いてみた。

「ええで」と光太郎。「うむ」とロクショウ。「後一度なら」とトモエ。

イツキはヘベレケ博士の目を見て、「お願いします」と言った。
「そうか。では、お前さんの料金はわしが受け持とう。遠慮するでない。…おっと！」

ヘベレケ博士の腰のポーチからコールが鳴った。

「しばし待たれい。すぐ戻る」

メダロット博士は階段に行き、ここそと何か話し始めた。イツキがサラカラビームを収納しようとしたら、ロクシヨウが呟いた。

「…聞こえる…」

「何が？」

「イツキ。私をメダロットチから出してくれ。そのほうが、より明澄になりそうだ」

言われるがまま、イツキはロクシヨウをメダロットチから出した。

「それで、何が聞こえるんだよメタビー」

「……分からぬ……。雑音のような物が混じり…どうやら、苦しんでいるような気が…」

ロクシヨウが訳のわからないことを口走っているその時、受付のほうから女性の悲鳴と破壊音が上がった。アリカとフレイヤ、イツキとロクシヨウ、その他数名が受付に向かった。ヘベレケ博士はまだ通話中だった。

便宜上。二人の受付嬢はAとBと呼ぶことにする。

後輩のAはいつも通り、パソコンの画面を操作していた。メダリンクシステムはロボットル以外にも、日本国外からパーツを転送することも可能。

「あら？」とAは呟いた。普通なら、パーツ、稀にメダルやティンペットを送る者はあるが、セotto一式丸々送り付けてくる者は滅多にいない。誕生日のプレゼント。それとも、上にあるメダロット支社宛の荷物かしら？

画面を見ると、エラーを表示していた。どうやら、配送ミスのようだ。一旦受け取り、電話して、送り返せば済む。いつものように冷静に対応すれば、問題なし。そのはずであった。だがしかし、隣のB先輩がパーツ名称を見て眉を顰めた。

「どつかで、これを見たことがある気がする」

「私メダロットは詳しくありませんけど、別に危険な物ではありませんよね？」

後輩Aの質問に、Bは首を傾げた。すると、ピー！ピー！とPCが警告音を発した。急ぎ画面を覗くと、ファイアウォールやウイルスシステムが突如として破壊されていた。そして、異常な速度でメダロットセットが向かってきた。

「あ！」Bは声を抑え、そして、Aに命じた。

「あなたは上のメダロット支社の人を呼んできなさい。メダリンク開発担当の人がいるはずだから。私は警備員と警備メダロットを呼ぶ……！」

どがあん！メダリンク転送内部をぶち破り、ガラスが飛び散り、イレギュラーな配送物が正体を表した。

「きゃあああ……！」

招かれざる客の乱暴な登場で飛び散ったガラス破片を浴びたAは悲鳴を上げた。

メダリンクが警告音を発し、シミュレートロボトルの回線を強制切断及び、メダロットまで強制排除した。カチャカチャカチャカヤ……！何十個ものメダロットが床に落ちて響いた。

受付に、騒ぎを聞きつけた客と、文句を陳情しにきた客の人集りができた。

文句の一つでも言っただろうとした客は、ガラス破片が降りかかった受付嬢を見て、口を閉ざした。

「大丈夫！？どこも痛くない」

別の受付嬢が掛かったガラス破片を振り払っていた。

「はい。どこも痛くありません」

Bがホツとしたのも束の間、後ろを見て口を大きく開いた。白い物が天井近くまで飛び上がり、音を立てて受付の台に着地した。

見たことがないメダロットだ。配色は全体的に白で、関節部や真四角な形をしたスタンプのような腕先は黒い。頭は、映画エイリアンで人の体から歯を剥き出しにしたエイリアンの子供が飛び出すシーンがあるが、そのメダロットの頭部は、そのエイリアンの子供が前後左右から飛び出しているようであり、ウネウネと動き、蛇みたいな形の口から覗く赤く点滅するカメラアイは見る者をゾッとさせた。市販されているメダロットより一回りでかいのも、周囲の人間に不安をもたらした。

しばらく意味もなく動いていた四つの蛇頭は、ピタリとある一点にカメラを向けた。客たちも蛇頭と同じ方を見た。そこには、少年とヘッドシザース。正確には、イッキとロクショウがいた。

謎の来訪物と幾人かの視線が二人に注がれる。イッキはいたたまれなくなり、どうしたものかと迷った。

集団心理。日本人には特に強い傾向。そのせいで、誰も動こうとしなかった。その中で、茶髪リーゼントの高校生やアリカなど、一部の人間はそのメダロットに対し、明らかに恐怖を抱いていた。

ヘベレケ博士がいつの間にか背後に立ち、「また次の機会に」と言って通話を切った。それが合図かのように、謎のメダロットが声を出した。

「……ロウ……クウ……ショウ……」

耳を疑った。今度ははつきりと「ロクショウ……」と雄叫びを上げて襲いかかってきた。一斉に散開。床が砕け散る。震災対策で頑丈に造られた床を、謎のメダロットはいとも容易く破壊した。

「何をしておる。奴はストンミラーという対人兵器として造られたメダロットじゃ！早う、逃げる！殺されるぞい……」

ヘベレケ博士が階全体に聞こえるほど大声を出した。ヘベレケ博士の呼び掛けで集団心理の糸が切れて、客や受付嬢はそろそろと逃げ出した。謎のメダロットはまたロクシヨウと叫び、メダリンク装置を腕のひと振りで叩き潰した。電流と爆発音が進む。ここで、何人かが悲鳴を上げた。

完全に糸が切れた。人々はこぞつて、我先にと階段を降り始めた。謎のメダロット。もとい、ストンミラーはメダリンクのコードが変に絡まってしまい、一時的に身動きが取れなくなっていた。ぷすぷすと、ストンミラーの体から煙が漏れていた。いや、煙だけではない。弱々しいが、ロクシヨウと同じ謎の光が体の内側から発せられていた。

「あれは！」

「何してんの！とつとと逃げるわよ」

イツキの疑問をよそに、アリカはイツキとフレイヤの腕を掴んで走り出した。一足遅れて、ロクシヨウも後を追った。

そのロクシヨウの頭にまた声が聞こえた。今度は、明確に。

…苦しい…熱い…熱い…誰か…ここから…この体から出してくれ。

「お主か？私を呼んだのは」

ロクシヨウはストンミラーを見ずに言った。ロクシヨウの問いかけに答えるように、ストンミラーはまたしても体の内側から謎の光を発して、絡まったコードごとメダリンクの台を引っっこ抜き、左腕でそれらを木っ端微塵にした。鉄とアルミとコードの破片が飛散する。

「ウガガガアアアア！」

再び、猛獣の雄叫びが二階と上階に轟く。

一階の実践ロボット場では、待ち人や接客の係が何事かと逃げ惑う人々を眺めていた。受付嬢の一人、後輩に庇われたBが素早くベテランの勤務係に事態を告げた。

「お客様の方々、当ビル内で火災が発生しました。係員の誘導の下、

落ち着いて避難してください」

ベテラン勤務係は嘘をついた。だが、事実よりこの嘘のほうが効果があつたらしく、見物人を含む階下の客を速やかにビル内から避難できて、余計な混乱を生まずにすんだ。ベテラン勤務員のファインプレーであつた。

イツキはアリカとフレイヤに先に行くよう促し、自身はロクシヨウの説得に当たった。イツキはロクシヨウの腕を掴んで外へ行こうとしたが、ロクシヨウは拒んだ。

「何してんだよメタビー！あいつの相手はセレクト隊にでも任せて、早く逃げよう」

「駄目だ！……あやつは私を求めている。何故かは知らぬが、今一度、会わなければ」

揉めているメダロットとメダロットに受付嬢が早く行きなさいと一喝した。

ウガア！またもや猛獣のような声を上げて、ストンミラーが階下に来た。その姿を見て、ビル関係者たちとイツキは固唾を飲んだ。

「と……溶けている」

イツキが生唾を飲み込んで言葉にした。ストンミラーは全身のパーツやティンペットがドロドロに溶けており、そこから熱を帯びた薄い光が漏れだし、陽炎が生じていた。溶けたパーツの下のティンペットを見る限り、ストンミラーが女性型であることが判明した。

「ロウ！ロウク……。ロウク……シヨオオオ！」

音声装置が故障したのか、ストンミラーの発音は先ほどより聞き取りづらくなっていた。

ロクシヨウの脳内に声が届く。

ああああ！熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い！もう、嫌だ！早く、全てから開放してくれ！……死にたい。

最後の死にたいは、やや二の足を踏んでいた。

ロクシヨウはゆっくりとストンミラーに歩み寄った。イツキも、誰も。メタビーを止める者はいない。

ストンミラーは腕を振り上げ、ロクシヨウがいるロボトル実践場の床を叩いた。ビームにすら耐える特殊な素材を用いた床に亀裂が走り、ストンミラーの右腕は砕け、左膝が溶け折れた。

ロクシヨウはじつとストンミラーを見つめた。何を考えているのか、イツキには計り知れなかった。

ロクシヨウはストンミラーから視線を外さなかった。

「お主は良いのか？ 介錯をどこの馬の骨とも知れぬ奴に任すとは」
ストンミラーは何も言わない。音声装置が完全に壊れたのだ。ストンミラーはドロドロに溶けたティンペットの腕で胸をこじ開けた。
……いい…… やつてくれ。どうせ、私は助からないようになって
いる。恨みはしない。

ロクシヨウはソードを抜いた。瞬間、イツキが一直線にロクシヨウに向かった。

「やめるロクシヨウ」

ドシュ！ 斬撃が無音の空間に木霊する。チャンバラソードの一刺しでストンミラーの体はバラバラに引き千切れ、溶けたパーツとティンペットが散らばった。…そして、メダロットの命ともいうべきメダルも同様に…。

イツキは立ち尽くした。ロクシヨウは何も喋らない。すたすたと勤務員のおじさんが近寄り、有無を言わせぬ口調で言う。

「一度外に出なさい。ただし、あの女の人に付いていくように」

「あのパーツ…あのパーツがあれば奴を…… どうして」 呆然自失に独り言イツキ。ロクシヨウはそつと、イツキを見上げた。

ロクシヨウが「イツキ」と名を呼び、手を差し出した。イツキはその手に触れぬよう、腕を素早く引いてしまった。汚い物をうつかり触りそうになり、本能的に手を引く。イツキの動作は正にそれで、当人は今の自分の動作が信じられないようだ。ロクシヨウの手が空を掴む。

見かねた勤務員がロクシヨウを、受付嬢がイツキを外に連れ出した。

密かにこの光景を窺っていたアリカとフレイヤは言葉を失っていた。外に出た俯きがちの二人に声をかけようとしたが、言葉が出ない。

よくわからない。何でこんなことが起きたのかわからない。ただ、二つ判ることがある。正体不明の悪意のせいで一体のメダロットが命を落とし、あるメダロッターとメダロットの間に微かな溝が出来てしまったのが。

「アリカさん。こんな状況でなんだけど、元氣を出して」

フレイヤがアリカを励ました。アリカはうつすらと微笑み、セフイスの手を握った。

「そういえば」

アリカは辺りを見回した。

「ヘベレケ博士はどこに」

そのヘベレケ博士は受付嬢に連れて行かれるイツキの隣にいた。アリカとフレイヤは頷き合い、彼らの背をつけた。ここでようやくパトカーのサイレンが鳴り、セレクト隊も到着した。

21・暴走（後書き）

*与太話

久美沙織「MOTHERシリーズ、ドラゴンクエスト」

高屋敷英彦「ドラゴンクエスト」

宮部みゆき「ICO」

他、世界樹の迷宮と風来のシレン。このゲーム原作を書く際、文体はこれらの作品を参考に行っている。

特に、高屋敷先生の説明的文章と、久美先生の短くあっさりした戦闘シーンの描写。両名の作品は幼い頃から読んでいたので影響が強いのかも。

22・絆（前書き）

今年最後の投稿。

ヘベレケ博士とほか数名が証言したくれたおかげで、イッキとロクシヨウは正当防衛を理由にお咎めなく済んだ。それよりも、イッキは自分がロクシヨウに対してしたあの行動にシヨックを受けていた。

あの時、ロクシヨウは僕に手を伸ばした。なのに、僕はその手を振り払ってしまった。何故！？

誰かが無理矢理使わした力のせいで命を落とした、あの可哀想なメダロット。そのメダロットにロクシヨウが行った行為。外出規制期間が終了し、いつもどおりにアリカの取材に付き合い、楽しく都会を歩き回る。そんな変わらない日常のはずだったのに、どうしてこんな…。

ロクシヨウは必要なこと以外は語らず、弁解しにくい。外出規制されるかもしれない。鬱鬱とした心で更に深く余計な物まで考えてしまい、気落ちした。幾ら考えても答えが出ず、疲れてきた。イッキは、一旦物思いをやめた。

帰りの電車、アリカはヘベレケ博士から聞いたことをイッキに語った。イッキとロクシヨウが何も言わないので、アリカが一方的に喋った。

「あんたたちが連れて行かれた後、すぐにセレクト隊や警察が駆け付けたでしょ？……それで、現場の暴走メダロットの破片とかを回収しようとしたけど、パーツやティンペットの殆どが泥々に溶けていて、回収や後片付けに手間取ったようだね。…で…………メダルも…溶けていたようよ」

「溶けていた？」

家に着くまで黙りの腹積もりだったが、反応を隠せなかった。ロクシヨウも、メダルが溶けていたことには反応を示した。

「そう…パーツほどじゃないけど、砕けたメダルもあちこち溶けて

いて……………」

アリカは最後の言葉を呑み。ゆつくりと、遠回しに表現した。
「何もしなくても、どの道助からなかったらしいわ」

イツキも、アリカも無意識にロクシヨウに視線を注いだ。ロクシヨウはその視線に答えるように、臆さず、重々しく口を開いた。その響きには、死者をいとおしむものが感じられた。

「奴が来る前はただのこうるさいノイズにしか感じなかったが、奴が姿を現してから、はっきりと奴の声が私の頭に響いた。…熱いか…苦しいとか…地獄だとか…死にたいだとか。そんな思念が何度も、そう、例えば、炎で焼かれて真っ赤に熱が籠もった槍が突き刺さるように。私の頭に届いた。」

奴のイメージから伝わった。メダロットの頭脳であり、心臓であり、魂であるメダル。そのメダルが少しずつ溶けていき、意識が遠のき、自分の命が蝕まれるイメージ。明確な死への恐怖。想像してくれ。自分が狭い通風口しかない鉄条の物に閉じ込められて、外側から火で炙られる場面を。窒息死しようにも、通風口があり、耐え切れずにそこから息を吸ってしまい、生きたまま自分の皮膚や肉が焼かれていく様を。…地獄だろう。私を奴を介錯した。いや、介錯しざるをえなかった」

そうして、ロクシヨウは口を閉ざした。アリカが目を逸らし、耳を閉じたがっていた。ロクシヨウのその顔に口はない。仮にあっても、今はバールを使ってもこじ開けられないそうにない。

頭の中では幾らでも言葉が紡ぎだされる。ただ、いざ声に出そうとしたら、どう言えばいいかわからず困惑してしまう。あの光景と、その光景の中で自分がした行為がちらつき、何も言えなかった。

一分一秒でも早く、御神籤町に着くのを願った。

駅前で、チドリが日産エルシオで迎えに来た。

「お帰りなさい。へべレケ博士や警察の人たちから話は伺ったわ。とりあえず、五体満足でイッキとアリカちゃん、ロクちゃんが帰ってきてくれただけで満足よ。ほら、乗りなさい」

信号に阻まれなかったので、車はスムーズに進み。三分程度で家に着いた。アリカが礼を言っただけで別れた。

どう、言い訳したものか。また、外出時間が規制されるのか。イッキの考えていることはお見通しなのか。玄関のドアを潜ると、チドリはイッキを見下ろした。

「まっ、しょうがないわね。この前と違って、今回は向こうからトラブルが舞い込んだようだし。あんまり縛るのもためにならないし」「え？じゃあ、外出規制とかは…」

「もちろんなしよ。一カ月の間、ちゃんと約束を守っていたしね。ただし、むやみやたらと変なお誘いは受けないでよ。同年代ぐらいの、金髪で可愛い女の子からの誘いだとしても」

チドリはイッキの鼻を人差し指でちゃんと突くと、玄関から歩幅四歩ほどにある右側のリビングに入った。イッキも続いて靴を脱ぎ、まずは二階上がった。ロクシヨウは：二階に上がると、イッキの部屋に入らず、二階玄関口の上に位置する窓側に立った。

イッキはロクシヨウの背に声をかけず、部屋に入るなり、俯せでベッドに横たわった。

目を覚ます。部屋は暗い、時計のLEDは夜の八時を表示していた。俯せから仰向けに向いていて、体に毛布がかけられていた。ママが気を利かしてくれたのだろう。

闇の中、目を凝らしてみた。自分のパートナーがそこにいないか。淡い月の光が差し込んでいるから、この闇でもあの白いボディは目立つ。しかし、部屋には自分以外の影は存在しなかった。まだ窓際か、もしくは、階下に居ることを期待して部屋を出た。さすがにも

う、窓際には立っていない。次に、階下を降りた。玄関に父・ジョウゾウの革靴はない。今日は定例会議があるので、真夜中過ぎに帰宅すると、そうママから伝えられた。

リビングに居座るママに一言おはようと告げ、リビングとリビングに繋がる台所をざっと見渡した。ソルティはテレビ台の傍にいたが、二本の立派な角を生やした白いボディの者はいなかった。

「ママ。ロクショウの奴は」

「ロクちゃんならね、ついさっき外へ出たわよ。深刻な表情と声音で。一日の間に事が目まぐるしく起こって、頭の整理が追いつかない。しばし、夜の外出で一度、熱を冷ましたいって。まあ、メダロットだから、何を考えているのか表情からじゃわからないけど」

「ママ！なんで止めなかったの。もしかたら、ロクショウの奴……」

「イツキ。落ち着きなさい。まずは、座って私の話を聞きなさい。おおかたの事情はロクちゃんとアリカちゃんから聞いた」

チドリはイツキを見据えた。イツキは小さく顎を動かし、ソファに腰を落ち着けた。ソルティがくうんと鳴き、慰めるように足元に寄り添った。イツキはソルティの顎を軽く撫でてやった。

チドリは静かに。そつと、語りかけた。

「その人には仲の良い友達がいたんだけど、ある日、その友達が勝手にその子のお弁当の好物を食べちゃったの。ほんの些細なこと。けど、その人は神経質で、おまけにその時は虫の居所が非情に悪くて、大喧嘩した。以来、二人は謝りもせず。互いを無視し合うようになった。いない人の批判をするのは気が引けるけど、その二人の性格が普通の人より問題があつたのは間違いない。

でもね。お弁当の好物を一つ取った。軽い言い間違いをした。人はね、大袈裟な理由がなくても、たつてこれだけのことで仲違いの原因となるの。ロクちゃんから事情は聞いているわ、イツキ。そのメダロットはさぞかし辛く苦しかったでしょうね……。ロクちゃんのこと、白か黒かは問わない。それはきつと、ロクちゃん自身にしか見つけられない。けれども、イツキ、あなたはどうかの？

あなたにとってのロクちゃんは何？家族。友達。相棒。ペット。個人の所有物。願望を満足させる物。それとも、まさか恋人？」

「ママにとってメダロットは何？」

「ん？そうねえ。あなたが家族の一員なら家族。ペットならペットね。三体合わせて一割電気代増しちゃったけど」

「すんまへん」光太郎がメダロットチからしょんげりと声を出すと、チドリは笑顔で気にする必要はないと言った。

イッキはチドリから顔を逸らした。

「僕は……」

手を所在なげに動かす。イッキの手に合わすように、ソルティも顔をぐらぐらと揺らす。

「僕は」イッキは意を決したようにソファから立ち上がった。

「ママ、行ってくる」

部屋から出ようとするイッキを、チドリは呼び止めた。

「待ちなさい。行くんなら、ソルティを連れていきなさい。面倒臭がりのソルティが散歩するには良い時間帯だと思うし、大人や警察に見つかっても言い訳になるわね」

外出しようとするイッキに、チドリはもう一回、手短に語った。

「イッキ。人と仲違いするのは簡単なきっかけがあれば十分だけど、人と仲良くするのも簡単なきっかけがあれば良いのよ。それとね、その二人はもう仲良くなったのよ」

「それってまさか」

チドリは答えず、につこりと笑顔でいつてらっしゃいと手を振りリビングに戻った。

ソルティの首輪に散歩用の綱を着けると、イッキは月と星空がきらめく外へ飛び出した。

都市部だと怖いが、この近辺の住宅街なら、夜でもそう危ない目

に遭う確立は滅多にない。空は月と星が輝き、ソルティもいて、メダロットには頼もしいのが二体もいるので、怖さはなかった。三丁目の公園、コンビ二、少し遠回りして学校にも向かったが、それらしきものはいなかった。

とすれば、川原の土手。最悪、おどろ山に行った可能性がある。

学校から土手方面へ足を向けた。学校帰りの寄り道、ソルティの散歩、別の遊び場へ行くときなど、度々通るあの土手。多分、あそこにいる。というより、あの土手以外に他に居る場所は考えられない。わざわざ遠回りな探索を選んだのは、ロクショウと同じく、自分も気持ちを整理してから会いたかったのかもしれない。

広々とした土手がみえた。川の存在で辺りは住宅街より放射冷却が進んでおり、風も吹き抜けているので涼しかった。

月と星で自室よりはるかに明るいから、すぐに見つけられるはず。土手の半ばまで降りて、もう一度見渡す。この夜であの白いボディは目立つ。そしていた。橋の柱のたもと、背が高い草を背に、白いボディの者が立ったまま川を見つめていた。

「気づいているぞ」

ロクショウが先んじて開口した。

「いつから」

「お前が土手に少し来る前からだ。メダロットの感覚機能は人間より優れている。特に、私やプラスには索敵用のレーダーがあるから、それでな」

そうして、ぷつぷつと言葉を切った。イッキは土手から降りて二、三歩近寄った。そのまま二分ほど、ソルティの足音と息以外の音は途絶えた。と、上流辺りで小さな打ち上げ花火が上がった。夏休み最後の想い出として、花火をしているのか。イッキはロクショウから、ロクショウは一瞬上を向いた。

イッキは向き直ると、たどたどしく話し出した。

「やっぱり。怒っているの」

「何を、だ？」

「あのメダロットにあんな細工をした奴と……僕がお前にしたこと」

「ああ、そうだな。あの名無しの権兵衛と化した奴が、何故、あんな目に遭ったのか。いや、遭わされたのか。気掛かりでもあり、思いついただけでも怒りがわいてくる。だが、お前がしたことについては」

ロクショウは僅かに首を左右に動かした。

「全くショックを受けなかったといえば嘘になるが、怒ってはおらん。身近な存在があのような行為をすれば、驚くのは当然の反応だろう」

ちくりと胸が痛む。違う。僕はあの時、救いを求めるように手を伸ばしたメダロットの手を振り払ったのは、衝撃以上に、恐ろしさとも得も言われぬ汚らしさを感じてしまったからだ。絶対自分の物にする決めて、懂れていたヘッドシザーズだったのに。イツキは震える声で、吐露した。

ロクショウはその言葉に動じなかった。しばしの沈黙ののち、ロクショウはぽつりと言った。落ち着いた物腰はいつもどおりだが、単に根暗な奴が語っているような言い方だ。

「私は未熟者だ。それなのに、ここ最近の勝利と特訓で少々浮かれてしまったようだ。いや、違うな。臆病者だ」

「そんなことはない！」

イツキは思わず大声で否定した。

「そんなわけないよ。だって、お前は僕より強くて。賢くて。しっかり者じゃないか」

「私がイツキが思っているような奴ではない。今日の一件でそれがよく理解できた。」

私が奴を介錯した。情けもあるが、それとは別に。私は奴の苦痛の叫びを疎ましく感じた。言っただろう。熱した槍が直接突き刺さってくるようだ、と。初めは同情したが、段々とその騒音以上にうるさい叫びが嫌になり、黙れと返してしまった。そう、つまり、私

は奴を心の底から情けを持って介錯したのではない。人間だと鼓膜がとうに破れているレベルのやかましい心の叫びから逃れたい一心で、介錯したのだ」

ここで、ロクシヨウの言動が震えだした。

「奴を介錯する前。彼、あるいは彼女かな。奴は、そんな本音を漏らした私を許すといい、そんな気持ちを持って介錯する私を恨みはしないと受け入れた……。つくづく自分の弱さを呪いたいものだ。

私は奴を救えず。心持からして、そもそも奴を介錯するような権利はないというのに。私は、一生罪の十字架を背負うのだ」

話を聞いているうちに、イツキはあることに思い至った。そうだ。いくらロクシヨウが僕より頼りになるからといっても、ロクシヨウは人間でいえば、まだ一歳にも達してない。とはいえ、九歳かそこらの僕じゃどう言えいいのか。重たい沈黙が降りてきた。

「イツキ。華美装飾をした綺麗事で慰める必要はない。今のロクシヨウには、あなたの気持ちに素直に従った言葉で語りかけたほうがよい」

三分ぐらい経ってからだろうか。何を言つか迷うイツキに、トモエが小声でメダロツチから後押しした。イツキはありがとうと返し、面を上げた。

「ロクシヨウ。僕はお前の気持ちははつきり言っただけ。お前のしたことが正しいかどうか知らない。ただ、ただ……これからも、僕と一緒にいてくれないか？人の伸ばした手を振り払った奴のどの口が言いかと思うかもしれない。だとしても、僕と一緒にいてくれ。それで、答えを考える時間をくれないか。見つけられるかどうか自身は無いけど」

イツキは率直に、論理性も合理性もないことを言った。だが、その目は真剣であった。ロクシヨウはおもむろにイツキと目線を合わせると、「何を言っておる？」と首を傾げた。

「え？だから、これからも僕と一緒に……」

「何を言っておる？私はお前の所有物だろう。探せばいくらでもあ

るかもしれないが、目下の所、私が帰るところはお前の家だろう。抛り所がない野良メダロットになっても何の得にもならんし。それとも、お前は私を捨てるのか？」

「しないよそんなこと！」

「そうであろう。そんなことをしたら、子供と言えど犯罪行為をした咎で周囲から冷たい目でみられるだろうし。第一、あのアリカがこんな美味しい物を見逃すはずない。きっと、スクープとして取り上げるであろうな」

「…ロクシヨウも、何を言っているの」

「イツキは間抜けな感じで口をぽけつと開いた。

「お前こそだ。恐らく、イツキの口ぶりから察するに、私が手を振り払われたシヨックで家を出るとでも考えたのだろう。違うか？」

「イツキはうんと頷いた。そのイツキを見て、ロクシヨウは一笑に付した。別の意味で肩を落とした。僕が追いかけた意味は一体。重たい空気が薄れたのを感じたのか、ソルティがさつきより盛んに尻尾を振った。

「ロクシヨウはくつくと笑うのを止めて、河原の方を向いた。

「やはりか。案ずるな、私はどこにも行かん。しかし、お前が出て行って欲しいと願うなら出るし。今日このことで何かよからぬことが起こるようならば、どこかへと身を隠す」

「行かなくていい」イツキはきっぱりと言い放つ。

「お前にはまだ出てほしくないし。これから先、また変な事が起きたとしても、家にいていい。第一、お前は僕の物なんだぞ。いけない方法で買ったけど、誰がなんといおうがお前は僕のメダロットだ」そうかと、ロクシヨウは河原を見たまま呟いた。やがて、またイツキの顔を見た。

「帰宅しよう。今日、私とイツキの身に起きたことは、一日や二日で答えが出るような問題でもないしな。何より、チドリ殿が心配されているだろう」

「ロクシヨウはちらりと土手の上を見やった。イツキもつられて同

じほうを見た。

「どうしたの？」

「……ふつ。気にするな。それと、イツキ。母上は決して鬼ではないぞ」

「鬼って……。まあ、そりゃ。厳しくて、叱られるとうつとうしく思うけどさあ。二人とも好きだよ」

いくら安全でも。子一人で、夜の町中を行かせる訳はないということか。もしも、ジョウゾウ殿もいれば喜んだであろうな、今の科^せ白^{りふ}。

「あんじょうよう整ったな。ほな、帰りましょ」

光太郎が嬉しげに喋った。

「光太郎。なんで黙っていたの？」

「いやなに。ここは、若いもん同士が腹を割ったほうがええと考えたんや。あんまりにもこじれるような口出ししたかな」

「そうは言っていますが。本当は、止める自身が無かったただけではありませんか光太郎さん」と、トモエが突っ込んだ。

「酷いなあ。わて、あんさんらより長生きしとるさかい。止めるコツは一応、心得ておる」

イツキとロクシヨウは笑った。事が事だけに、さすがに心の底から笑えはしないが、沈んでいた気持ちが僅かに軽くなった。

ほんの数分。二人はソルティの散歩をしたら、帰宅した。帰って早々、チドリにいきなり、もうお買い物のお金を勝手に使わないでよときつく言われた。ロクシヨウの思った通り、チドリはイツキとソルティを見守っていたのだ。

22・絆（後書き）

ことを急いた。いくらなんでも、起きたその日で仲直りは早かったかもしれない。せめて、最低でも一日経ってからでも良かった。他にも、取り調べがこんな簡単に済むのか？など、投稿する今になつて疑問が尽きない。

ご指摘がある場合、できる限り改善するよう努めます。

23・花園学園（前書き）

アニメ版（世界大会編）のキャラクターが生徒役として登場。

23・花園学園

とある山奥の小屋。男が一人、通信器を使つて各地に指令を飛ばしていた。

「決行は八月二八日。午後の特別な勉強会をする時間帯を狙う。これは、我らの脅威を世間に知らしめると同時に。お前たちの意志と強さをにつくき大人共に知らしめるチャンスでもある。放送終了」

見えなくても見える。餓鬼共が悦に浸り、自分たちは他の無知の奴らでは到底できないことをして、凄く偉くなつたと勘違いしている様が。自分たちもその無知な奴らとも気付かず、呑気なものよ。

男は、最初の電波とはまた違う電波で通信した。

「諸君。時はきた。明日、馬鹿な餓鬼共が盛大に騒ぎを起こしてくれる。君らはその隙に乗り、きちんと仕事を果たしてくれたまえ。

尚、嗅ぎつかれると厄介なので、電波による通信はしばらく控える。では、健闘を祈る」

男は背筋を伸ばし、椅子から立ち上がった。小屋の中には、男以外に七名が控えていた。みな、どこかの王様に対する敬意を示すような姿勢で座っていた。

「我々は餓鬼共を信頼させる証として、俺様の他、お前たち三名にも同行してもらう」

男は七名の中でも一番大会の良い者。体付きからして女性と思しき者。腕に小さな腕章を巻いている点を除けば、彼らにとっては下つ端でしかない格好をした者を一名選んだ。不満げに唸る者がいた。体格の一番良い者だ。

「餓鬼共の世話とはな」

男は体格の良い者を、抑揚のない、静かな声で宥めた。

「世間様からすれば、大事。だが、我らにとっては小事。全ては真の作戦を成功させる為の然るべき行動。そう、愚痴をこぼすな。…

…それに、くつくつく。今回はメダロット社のメダロットをわざわざお披露目させてやるのだしな。メダロット社の連中には感謝して貰わねば」

天気予報では雨は降らないと報道していたが、見事に外れ。この調子だと、明日は傘を持っていく必要があるそうだ。傘は…要らないな。あの服はそこらの雨合羽よりよっぽど防水仕様が優れているからな。

前日の夜。緊張と武者震いで眠れない。違う。これは、武者震いだけではない。この震えには、恐怖も混じっていた。

何日も前に、自分はしてはならぬ悪事を犯した。もう、後戻りはできない。どこまで直進して、自分がお金持ち様様だけの輩ではないことを、知らしめてやるんだ。きっと、自らの力に怯えひれ伏し、恐れをもって自分を認めるだろう。友達なんていらぬ。僕はとてつもなく強いのだ。うるさい奴は、札束で横っ面を引っぱたけばいい。

肌寒く感じた。冷房を切り、羽毛布団で体を巻いた。しかし、緊張と溢れる恐怖から一向に寝付けなかった。小一時間後、午前四時には自然と眠りにつけた。

「…パパ。…ママ。早く帰ってきてよ」
むにやむにやと、寝言を呟く。

*

*

事件から翌日。イツキはメダロット研究所のアキハバラ博士の書斎に居た。自宅に、メダロット博士が電話で来るよう頼まれたからだ。博士に会うと、イツキは昨日のことを語った。博士は鎮痛な面持ちで「事件は報道で知ったよ。まっこと酷い話じゃて」メダロット博士は名もわからぬメダロットの為に、哀悼の意を述べた。イツキも博士に倣い、しばし、黙祷した。

黙祷してから一分過ぎ、イツキはそつと、用は何ですかと催促した。

「おお、そうだな。本題を言おう。お前さんのメダロットであるロクシヨウ、並びに昨日の暴走メダロットが発していた”謎の光”。あるいは、”謎の光の力”とても呼べばよかるうか。実は、メダロットのそういう事例は僅かながら、以前にもあつたんじゃ。最初の事例は確か十年前ぐらいかのう……。当時、九歳になる男の子の格闘メダロットが、光の刃を飛ばすという、本来そのメダロットに備わっていない機能を発動させたのが最初の事例かのう」

「あのー…それで。そのことが、僕を呼んだこととどう関係しているんですか？」

「せっかちな奴じゃ。この事は、世間ではまだ公にされておらん。何故かといえば、今はまだ、この力は人の手には有り余る代物だからだ」

人の手に有り余るか。そうかもしれない。メダロットの魂である小さな魂である”メダル”から、あんな莫大なエネルギーが生み出されることが知れたら、良からぬ事を企む人間がこぞって、益々メダロットを悪用するだろう。

それよりも、博士は本題に入ろうと言っておきながら、ちつとも本題に入っていないよう気がする。

「博士え。一体何を言いたいのですか」

「うん？いや、まだどうこうできる段階には入っておらん。…あつ！こりゃ失礼！またもや、本題からずれたな。いちいち、謎の光と

か謎の力と称するのは面倒だし。何より、飽きないか？じゃから、わしとナエでぴったりなネーミングをつけた。…その名も…メダルの力、^{フォース}略して”メダフォース”！どうじゃ、かっこいいじゃろ」

どや顔で聞く博士に、イッキは呆れた。

「僕が呼ばれた理由って。ひよつとして、メダルから発する謎の光る現象の名称を聞く為だけですか？」

「そうだ。それだけじゃ。もう帰っても良いぞ」

がつくりときた。てつきり、事件について細かな詳細を聞けるか。謎の現象について新たなことを窺い知れると期待していたのに。

「はははは！そう肩を落とすな。学会にも発表していないことを知れたのだぞ。もっと、喜べ」

そう言つて、メダロット博士はイッキの気持ちなどお構いなしに笑つた。こういう身勝手な一面もあるからこそ、学者として成功したんだらうなど、子供ながら悟つた。それでも、憎めないのは本人の人徳のなせる賜物だらう。

博士は笑いを止めて、イッキに向き直つた。

「もう一つ。いや、二つじゃな。まず、一つ目。メダフォースの名称は決して口外しないこと」

がらりと^{いいいちゃ}好好爺の調子から一変。妥協を許さぬ研究者の口調で言つた。イッキは、無言の威圧から、ただ黙つて首を縦に動かした。

博士はそれを見ると満足げに頷き、再び、好好爺の雰囲気に戻つた。

「二つ目はな。昨日のような強制的に発動させられる事態も考慮し、お前さんに例のパーツをやるう」

メダロット博士は、イッキが上の空で呟いた「あのパーツ」を机の上に置いた。それは、ハーピー。あの、上半身は美しい女性で、下半身は鳥の姿をしたギリシャ神話に登場する怪物である。

このメダロットの名称は、S L N型ランキュリイ。由来はトランキリテ、フランス語で静けさを表す単語をもじつた名前である。

このメダロットは一般発売の予定はない。何故なら、このメダロットはメダフォースの^{コントロール}制御実験をするためだけに開発された。アリ

力と一カ月の間、ロボット試験場で訓練していた期間。イツキとロクショウは二回、アリカに内緒でメダフォースの実験に付き合った。一度目の実験は、自然発生のメダフォースの制御。ロクショウがメダフォースを発動するのに気の遠くなるような時間が要したが、メタビーが謎の光。もとい、メダフォースを発動する直前で、メダフォースの抑制制御に成功した。

二度目は、メダフォースの強制発生実験。メダフォースを発生させるのは、十分程度で済んだ。その時、世にも恐ろしいことが発生した。メダフォースが暴走したのだ。

暴走したメダフォースは、戦車用ライフルの弾丸にも耐えうる強化ガラスもぶち破った。事態はそれだけでは留まらなかった。メタビーのメダフォースが暴走した際、研究所にいたクワガタメダル着用のメダロットたちが自我を失い、狂暴化した。

幸い、トランキュリイ三体がフルパワーでメダフォースを抑制したおかげで、被害は早い内に沈静化した。が、ロクショウの傷が酷かった。ロクショウはティンペットとメダルを残し、パーツが全てどろどろに溶けており、惨たらしい容姿をさらしていた。

こんなことがあったので、実験は即中止。イツキとしても、ロクショウが無意味に無残になる様は見たくなかったし、ロクショウも勘弁してくれと語気を荒げた。

メダロット博士とナエは平謝りに平謝り、お詫びとして、その場で新品の改良型ヘッドシザースのパーツ一式とティンペットを二人に譲った。その二品は遠慮なく頂戴したが、イツキとロクショウはそれ以上の謝罪と品を拒んだ。酷い目に遭ったが、一つ返事で気軽に実験に付き合った自分たちにも非があると思い、二人は博士とナエを責めなかった。

イツキが言ったあのパーツ。このトランキュリイのパーツを使えば、無理矢理メダフォースを使わされて、苦しみのうちに亡くなつたあのストンミラーを救えた可能性がある。

「いいんですか。これって、一般販売を想定してないパーツですよ

ね。僕が持つのは不味いんじや」

「イッキ君。このパーツを譲るのは、君のメダロットを守る為だけではない。メダル所有者たる資格があると判断された、君への信頼の証でもある。わしはとナエは、君なら、このパーツの使用法を道を誤らずに使えると信じている。だから、頼む。このパーツを受け取ってくれ、イッキ君」

メダロット博士は真剣な眼差しで、イッキの側にトランキュリイのパーツを押して、頭まで下げた。尊敬する人物にここまでされては、受け取るしかない。実をいうと、ここに来たもう一つの目的は、このトランキュリイのパーツを譲って貰う為でもあった。

博士のほうから直接、受け取って欲しいと頭まで下げられたのは予期せぬ事だったが、イッキはトランキュリイのパーツ一式を譲り受けた。

イッキとアリカ。いつもの二人は今日、メダロポリスのイーストシティにいた。時刻は午前十時。

イーストシティは三つの名門校が隣接し、閑静な高級住宅街が並ぶ街でもある。メダロット島滞在中の時、コウジとカリンから、メダロポリスのイーストシティに住んでいることを知った。どこに通っているかまでは言わなかったが、近くの花園学園に通っていると考えるのが妥当だろう。

荷物は財布、水筒、メダロット、ママに雨が降るから持って行けともたされた折り畳み傘。

アリカはこの前のうっかり屋さんの警官を頼りに花園へと取材をしにきたが、イッキは、一ヶ月ぶりにコウジとカリンちゃんに再会するのが楽しみだった。花園学園は駅から徒歩一五分ぐらいで着く。「良い建築物だ。ただ外装とでかさだけを求めたばかりではない、生徒の生活面にも心を配っているな」

ロクシヨウの素直な感心に、イツキとアリカは肯定するほかなかった。

その辺によくある感じのギンジョウ小学校とは異なり、花園学園は外観からして規格外だった。清潔感はその言葉どおり、学校周囲と門の隙間から見える限り、ちり一つ見当たらない。また、とてつもなく広大だ。学校の左右にはギンジョウ小学校のより大きなグラウンドが整備され、プールも二つも有り、海外など遠方からきた学生の為の、学生寮とお風呂まである。防犯対策も完備、二四時間態勢で拳銃所持の警備員が待機。

いくらなんでも、馬車が過ぎたり、門が純金の造りだったり、遊園地まではないが。とかく、花園学園は全てにおいてギンジョウ小学校とは別世界であつた。

今日を取材日に選んだのは、一般開放の日だからだ。この日を逃せば、次の一般開放は平日。夏休みの後となる。アリカは何としても、今日中に事件解明のネタをプロのマスコミよりも一足先に掴みたいと望んでいた。

警備員にギンジョウ小学校の生徒手帳を見せて、入門した。

その名は聞き及んでいるが、入るのはこれが初めてだった。警備員に聞けば場所は教えてくれるだろうが、案内まではしてくれそうにない。そこで、アリカは適当に歩き回っている一人に声をかけた。アリカは意図してだろうか、声をかけられた人物は二人よりやや年上で、白金色の美しいショートヘアに、深いサファイアな眼の美少年だった。単調な水色のシャツと紺色のジーンズと、服装は小ざっぱりしていた。一目で海外出身、正確には北欧辺りの出身だと判る。アリカに声をかけられた人物は嫌気も見せず、爽やかな笑顔で呼び掛けに応じた。甘いマスクとは、彼のような人を指すのだろう。「何かご用ですか？」

彼が流暢な日本語で喋ったことに、二人は内心安堵の溜め息をついた。最悪、ハローやデスイスアペンなど滅茶苦茶な英語で誤魔化そうと考えていた。

「えーっと、私はギンジョウ小学校新聞部所属の三年生で、甘酒アリカっています。で、こっちのちゃんまげは私の助手で天領イッキという名前です。よろしくお願いします」

「そう、こちらこそよろしくね。甘酒さん、天領さん」

「あつ！いえ、名前で呼んでくださって結構ですよ」

「じゃあ、改めて。よろしく、アリカさん、イッキさん。僕はアイスランド出身で、性はブレンニヴィン、名はベルモット。花園学園メダロット部所属の五年生です。それで、君たちはどうゆう用事があつてここにきたんだい？」

本当のことを言うのは不味いので、アリカはお金持ち学生の実態を調査しに来たと告げた。そう言う、ベルモットは可笑しくて堪らない様子で笑った。

「はははは！金持ち生徒の実態調査か！ユニークな取材目的だね。ところで、イッキさん。君は、辛口コウジって知っているかい？」

いきなり話を振られて、イッキはしどろもどろに答えた。

「…えっ？まあ、何度か戦ったことはありますけど」

「やっぱりそうか！」と言って、ベルモットの目が輝いた。

「コウジもこのメダロット部に所属しているんだ。僕より年下だけど、コウジは強いよ。僕も十回ぐらい手合わせしたことあるけど、結果は三勝七敗と散々なものだ。そのコウジから、最近面白い奴がいるって聞かされて、外見的特徴や使っているメダロットからしてもしかと思っただけ。どうやら、ビンゴらしいね。イッキさん、今日時間はあるかい？」

「一応、あるといえはありますけど」

「そうか。では、僕が君らをエスコートするよ。…その代わりに、アリカさん。エスコートした後、君の助手君とロボットさせてくれないか。時間は取らせないから」

この申し出にアリカは一つ返事でオーケーした。

「はいはい！どうぞ煮るなり焼くなり好きに使ってやってください！イッキとメタビーはロボットが大好きですから！私はその間、適

当に人を捕まえて取材しています」

早速、ベルモットの案内でイツキとアリカ、ロクシヨウと転送されたブラスは学園の隅々を案内された。

ベルモットの滑舌ははきはきとしており、時折ジョークも交え、彼のエスコートは一行を退屈させなかった。施設紹介から、学校の関係者しか知らなさそうなちよつとした裏事情まで教えてくれた。彼は心得ているところもあり、生徒一人一人の情報まで話すような無作法な言動は慎んでいた。

ベルモットと共に歩いている時、年齢や国籍に関係なく、彼が会う人から声をかけられているのを見ても、彼が開放的で人から好かれやすいタイプの人間だというのが知れる。金持ち学校だから、嫌味な奴が多いと勝手に思っていたが、意外とそうでもなかった。

無駄に広い造りなので、全てを見て回るのに三十分も要したが、不思議と有意義に過ごせたと思えた。

「そら、最後に案内する箇所はあそこさ」

ベルモットの指す方角は小中校用の体育館の右隣にある建造物「あそこが花園学園のロボット館さ」

ここで、アリカたちと別れた。

「何も起きないと思うけど、皆を困らせるようなことはしないでくれよ」

ベルモットの注意にアリカは強気に「失礼ですね。私をイエロージャーナリズムと一緒にしないで」と返した。

アリカが背を向けると、ベルモットはイツキに両手を広げて驚きを示した。

「彼女、中々強気な大和女子だね」

ベルモットの言葉に、イツキは苦笑いを浮かべた。

すっかり警官の言動を頼りに花園に来たものの、ここに居るとい

う確証はない。いないことだって十分有りうる。それでも、今は今日というチャンスを生かし、聞き込みするしか手立てはない。

小中校のグラウンドでは、多くの部活動が行われていた。ランニング、素振り、筋力トレーニングしかしてないからだろう。さり気なく話を聞こうとしたら、アリカの方から声をかけられて、ロボットする破目になった。

「やってやるうじゃないの！頼むわよ、ブラス、マリアン」

ロボットが始まると否や、大半の者が練習の手を止めて見学にきた。

相手は帰宅部の六年生。午後の勉強会前の気晴らしを理由に真剣ロボットを仕掛けた。使用メダロットはクルクルマンの両腕をつけたチャーリーベアと、サーキュリスの右腕とペッパークャットの左腕をつけたボトムフラッシュ。チャーリーベアで身を守りつつ重力攻撃をし、ボトムフラッシュはその援護と接近する相手の撃退役とあったところかな。

相手が口でカーン！と叫び、ロボットファイト！

ブラスがパリティバルカンでボトムフラッシュを攻撃。チャーリーベアが味方を救出するべく、見えない衝撃波を打ち出すが、プリティプライン・マリアンの厚いシールドに阻まれた。

ガトリング系で身動きが取れなくなったボトムフラッシュへ、左腕のライフルを一発！「ゲッチュウ！」とブラスの可愛らしい叫びがグラウンドに響く。ボトムフラッシュのメダルが外れる。

チャーリーベアが仇を取るべく、出力を上げて重力波を放つ。マリアンの盾が凹みをみせた。ブラスが右腕のガトリングでチャーリーベアを牽制。にっちもさっちもゆかなくなったチャーリーベアは、マリアンの鞭のようにしなる電流を帯びたソードを胸部に叩きつけられて、機能停止。

ブラス&マリアンチームが勝利した。

「ギンジョウ小学校の生徒も結構やるわね。ちょっと待ってね。予備の綺麗なパーツを上げるわ」

アリカ達は戦利品として、サーキュリスのパーツを貰った。殴る攻撃の代用品としても使え、魔女型サンウィッチーのように怪電波で相手を妨害するパーツだ。違う点が幾つか。サンウィッチーは数秒ほど相手を混乱させるのに対し、こちらは電気指令系統を狂わせる。鈍らせるという表現が正しいかもしれない。

取材をするはずが思わぬ戦利品を手に入れられて、アリカは顔がほころんだ。

そのアリカを、じつと軽蔑をもって見つめる人物がいた。

アリカが人混みから離れると、その人物はアリカを呼び止めた。

「君もメダロッターかい？」

振り返ると、アリカより背が低い男の子がいた。アリカを見上げるその目付きは、どこか見下しているところがあつた。アリカはその目付きを気にせず、男の子に聞き返した。

「そうよ、それで君は私に何か用なの？」

「ん？別に。ただね、あんな弱い奴と戦って君がお得意そうにしている顔を見たら、吹き出すのを堪えるのに必死だっただけさ」

この言動に、アリカは当然切れた。

「ちよつと、なにあんた！初対面の相手にいきなりその言葉はないでしょ！親の教育がなつてないのね」

「なつていないのは君だろう。やれやれ、警備員さんもこんな庶民の子をほいほいと入れてもらいたくないもんだ。我が校の品位が疑われるよ」

カーツと頭に血が激流する。自分が何かをしでかして非難されるのならまだしも、ロボットで勝利してちよつと喜んだけでこの言われよう。

「初対面の相手をよくもまあ……そこまで足蹴に。いいわ、グラウンドに来なさい。相手をしてあげる」

「ふっ……。知らないのかい？ここには、ロボット館という場所があるんだよ。もつとも、君のように、ロボット挑戦されたいいつでも受け立つ輩には縁遠いな」

「御託はいいから、さつさとロボット館に行くわよ。ところで、あなたの名前は？」

少年は居丈高に「名乗る義理は無い」と答えた。予想はしていたが、やはり腹が立つ。相手が名乗らない以上、アリカもこの少年に名乗らなかつた。

館に入ると、ベルモットとイツキの他四名がそこにいた。それはいいとして、ベルモットの全身がびしょ濡れているのは何故？

メタビーは嬉しげにロボット館へと乗り込んだ。中では、既に四名の先客が練習ロボットを繰り広げていた。どうやら、一人はベルモットの同級生であり、後の三人は後輩に当たるようだ。彼らは練習を終えると、気軽にベルモットとイツキに場所を貸した。

「見ててご覧」

ベルモットが入口にあるスイッチの一つを押すと、床が割れ、直径20mの円形プールが出現した。二つ、足場として小さな円盤と大きな円盤があった。

「潜水タイプ用のロボットフィールドさ。僕の相棒はスターフィッシュのスタファイ。でも、君が望むなら、陸用パーツに替えて戦ってもいいよ」

この挑発に、イツキとロクショウは乗った。二人が出会って間もない頃、一度、水中タイプのメダロットに負けた経験がある。その時はアリカに男性型のアンチシーを貸してもらい、リターンマッチを果たせた。今度は、アンチシーパーツ無しでどれほど戦える、メダロット研究所での一カ月に及ぶロボットでどれほど成長したか、このロボットで証明することにした。

一体の相手に対し三体使用するのとは別に構わないが、正々堂々の戦いにそれは無粋。当然、相手をするのはメタビー。陸でも意外とすばしこく、水中だと恐ろしい速さを誇るマリンキラー対策として、

アンボイナの両腕を着けた。

一人がレフェリーを務め、ロボット開始！

メタビーが大きな円盤の中央に飛び乗る。スターフィッシュことスタフィは水中で高速回転。水飛沫が進る、ロクシヨウが待ってましたと言わんばかりに両のドリルを向けたが、スタフィはいなかった。反対方向から突如として水飛沫が上がり、スタフィはロクシヨウに高速体当たりを食らわすと、飛び出た勢いに任せて水中へ戻った。

ざばーっと、水飛沫が上がる。すぐに後ろからも水飛沫が出現。ロクシヨウは背後にドリルを構えたが……。またしても、次は横から水飛沫が上がり、そこからスタフィは飛び跳ねた。

「飛沫の柱が一つだけとは限らないよ」

ロクシヨウは索敵機能をフル作動させたが、相手が早すぎて、捕捉に時間がかかりそうだった。

手強い。だが、コウジはこのベルモットに七勝もしたのだ。この人が弱いと言いたいのではないが、ここで負けるようなら、自分とロクシヨウはまだコウジには勝てない。

スタフィがまたしても水の柱を出現させた。瞬間的に出現した四つの柱にロクシヨウはたじろいだ。その隙を逃すはずもなく、スタフィは北よりの水柱から突進してきた。

じわじわと装甲が削られ、どこから来るか皆目見当がつかない。

「うーぬ。腰を落ち着けない不安定な場所だな」

ロクシヨウが愚痴をこぼした。ロクシヨウのこの愚痴がイッキにヒントを与えた。

そういえば、マーリンは一直線にしか突進してない。それに、床が揺れるということは……。

「ロクシヨウ。スタフィが上がってきたら、反対方向の端にドリルを叩きつける」

ロクシヨウはイッキの作戦を理解した。

「相談は終わったかい」反対側のベルモットが声を上げた。

「でもね。マーリンは水柱以外も出せるよ」

言うが早いか、左から円盤を覆うほどの波が出現した。この波にイツキは動揺したが、ロクシヨウは意外なほど冷静だった。そして己の勘で左へと避けた。勘は的中、スタファイは波とは違う方角から出現したが、避けられた。スタファイの突進を避けると同時にロクシヨウは動いていた、円盤の端を両のドリルで力一杯叩きつけ、瞬時に真ん中の取っ掛けに引き返した。円盤の端が跳ね上がり、波を防ぎ、勢いよく飛んだスタファイを弾き飛す。

スタファイはメタビーが向いているほうに素っ飛ばされて、浮いた。強い衝撃で痙攣かヒスでも起こしたのかもしれない。

「今だ！」イツキが叫ぶ。

「悪いな」ロクシヨウは一言謝ると、目を覚ましたスタファイを左のドリルパンチで一撃！スタファイのメダルが外れた。と、ベルモットが水中へと飛び込み、自分の相棒のメダルをすくった。

プールからあがり、水も滴る良い男になったベルモットはイツキに手を指し延ばした。

「参った。この戦法は短期決戦型だから、時間がかかれば相手に気付かれてしまうのが欠点だな。……いや、言い訳はよそう。完敗だよ、君と君の相棒には」

イツキは濡れたベルモットの手を握り返した。ベルモットの後輩に当たる男子生徒がベルモットにタオルを持ってきて、ベルモットはサンキュと言って、タオルを受け取った。

「…ふうー。話には聞いていたけど、あのコウジと渡り合えるだけあつて、やっぱり強いね君ら」

後輩が同調する。

「そつすね。コウジの奴も含めれば、内で十指に入るメダロッターといえば、ベルモットさん。コウジ、部長、ある意味ではカリンちゃん。それと…」

後輩男子は口をつぐみ、ロボット館の新たな来訪者を見た。一人はアリカ。一人は蝶ネクタイをした、綺麗に切り揃えられた髪型や

外見、何よりその顔付きからして、いかにも、嫌なボンボンの一人といった雰囲気だ。

あの子は？とイツキはベルモットに聞いた。

「…彼はハチロウ…。今、内田が言おうとしていた我が校の十指に入るメダロツターの一人」

陽気なベルモットの口調が一変、どこか苦々しく、刺々しくさえあった。

23・花園学園（後書き）

アニメでは苗字はありませんが、一応つけた。
因みにブランニヴィンとは、アイスランドの地酒です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5680v/>

メダロット2 ～クワガタversion～

2012年1月10日10時54分発行